令和３年度　老人保健事業推進費等補助金　老人保健健康増進等事業

新型コロナウイルス影響下における 生活支援体制整備事業の推進に向けた

人材育成に関する調査研究事業

報告書

令和４（２０２２）年３月

一般社団法人　全国食支援活動協力会

目次

目次 …… 1

第１章　調査研究事業の概要 …… 3

１　事業の目的 …… 3

２　事業の内容 …… 4

第２章　事例収集（ヒアリング調査） …… １５

１　調査の概要 …… １５

２　調査の結果 …… １５

事例１　大阪府大阪市　「こうせい親子"（おやじ）食堂」 …… １６

事例２　東京都稲城市　「カフェいしださんち」 …… ２３

事例３　大阪府泉南郡岬町　「喫茶わくわく」 …… ２９

事例４　東京都稲城市　「すまいる向陽台」 …… ３６

事例５　香川県高松市　「まんでサロン香南」 …… ４１

事例６　愛知県知多市　「やまもりいこいの家」 …… ４９

事例７　東京都板橋区　「ゆずり葉」 …… ５５

事例８　鳥取県鳥取市　「ふれあい食堂」 …… ６２

事例９　奈良県葛城市　畑活プロジェクト「はっぴぃ農園」 …… ６９

事例１０　岩手県花巻市　高松第三行政区ふるさと地域協議会 …… ７７

第３章　研修会「生活支援コーディネーターによる地域の居場所づくり・つながりづくり研修
～アセット発見で居場所の「やりたい!」をかなえるワークショップ～」の開催
1　研修会の目的……８４
2　開催概要……８４
3　プログラム……８５
4　参加者アンケートの結果……８７

第４章「事例でわかる　地域アセット活用ガイドブック
生活支援コーディネーターの居場所づくり・つながりづくりを応援」
1　作成の目的……９９
2　内容……１０１

【資料集】
1　研修会チラシ（香川会場）……資料-１
2　研修会チラシ（鳥取会場）……資料-３
3　研修会チラシ（東京会場）……資料-５
4　研修会チラシ（全国会場）……資料-７
5　研修会テキスト（香川会場）……資料-９
6　研修会テキスト（鳥取会場）……資料-２８
7　研修会テキスト（東京会場）……資料-４７
8　研修会テキスト（全国会場）……資料-６２

第１章　調査研究事業の概要

１　事業の目的

当会が2020年4・5月に食支援活動を実施する団体を対象に実施したWEBによるアンケート調査からは、新型コロナウイルスの影響下においても多世代・地域食堂、コミュニティカフェ、配食活動（高齢者）の半数以上において、活動頻度を下げることなく活動を維持していることが分かった。

また、令和2年度研究事業「地域特性を踏まえた生活支援ニーズへの対応及び地域活動の継続に係る調査研究事業」においては、都市部から中山間地域まで、地域構造（地域特性）に合わせた、居場所をプラットホームにした住民参加による生活支援の広がりと地域連携の事例を収集し分類した。この調査では、住民主体の居場所が高齢者や地域住民の孤立防止や生きがいつくりに大きく寄与している事例が多数報告された。

さらに、自治体、社協、地域包括支援センター、生活支援コーディネーター、中間支援NPO等といった居場所の支援者が「人」「モノ・資金」「場」「情報・ネットワーク」といった地域資源（＝アセット）を把握し結び付けることで、住民の自発性を尊重しながら、取り組みをサポートしていることが分かった。新型コロナウイルスの影響下における安全な居場所の維持においては、居場所の支援者との協力や連携の重要性がさらに高まっている。

そこで、本事業では、地域住民による支え合い活動のきっかけとなるであろう「食」を中心とした住民主体の居場所活動開発を行う市町村職員や生活支援コーディネーター等の支援者育成を目的とし、研修会で活用できるガイドブック等研修プログラムを提案する。今般の新型コロナウイルスの影響下で交流や外出機会が減っている在宅高齢者の状況に対応したものとする。

このためにまず、地域の居場所支援者に対して研修を実施している団体（自治体、社協等）や、地域の居場所支援を行う人を育てる機能をもつような居場所、あるいは支援者との連携が効果的になされている居場所に対して、ヒアリング調査を実施する。次に、この調査結果をもとに、自治体や社協が地域の居場所支援者を対象とした研修で活用することを想定したガイドブック等研修ツールを作成する。加えて居場所の支援者を対象として、研修事業を複数回実施するなかで研修プログラムのブラッシュアップを図る。最後の研修会では、作成したガイドブック等研修ツールを試験的に使用しフィードバックを受けることで、ツールの改善を実施する。

2　事業の内容

1）研究委員会、ワーキング部会の開催

自治体、協議体関係機関、有識者、食を媒体とした生活支援サービス提供団体からなる研究委員会を設置した。研究事業全体の方針・計画の確定、調査の企画・方針の策定、収集資料の検討とモデル形成、および報告書内容について5回の会議を行った。

また、ワーキング部会を設置し、5回の会議を通して調査項目内容の検討・実施・分析、事例収集や研修会の検討、ガイドブック『事例でわかる　地域アセット活用ガイドブック　生活支援コーディネーターの居場所づくり・つながりづくりを応援』の開発を行った。

（1）研究委員会・委員

第1回：研究委員会
日時：7月13日（火）17：30～19：00
場所：NATULUCK飯田橋東口店　4階大会議室B（東京都千代田区）、Zoom
内容：・事業のねらい・概要・全体スケジュール
・事業の背景
・鳥取市における地域食堂の取組について
（鳥取市役所総務部人権政策局 鳥取市中央人権福祉センター所長　川口寿弘氏）
・各地の状況
・SC養成研修について

第2回：研究委員会
日時：8月23日（月）17：00～19：00
場所：NATULUCK飯田橋東口店　4階大会議室B（東京都千代田区）、Zoom
内容：・事業全体の進捗状況
・各地の取組事例と研修会の開催状況について
（特定非営利活動法人全国コミュニティライフサポートセンター理事長　池田昌弘氏）
・訪問事例の報告
・成果物（ハンドブック）の概案について

第3回：研究委員会
日時：9月29日（水）17：00～19：00
場所：NATULUCK飯田橋東口店　4階大会議室B（東京都千代田区）、Zoom
内容：・事業全体の進捗状況
・訪問事例の報告
・研修会企画について

第 4 回：研究委員会
日時：12 月 1 日（水）17：00～19：00
場所：NATULUCK 飯田橋東口店　4 階大会議室 B（東京都千代田区）
内容：・事業全体の進捗状況
・訪問事例の報告
・研修会の報告
・ガイドブック構成案について

第 5 回：研究委員会
日時：3 月 16 日（水）14：00～16：00
場所：NATULUCK 飯田橋東口店　4 階大会議室 B（東京都千代田区）、Zoom
内容：・研修会の報告
・ガイドブック構成案について
・報告書構成案について

＜研究委員会委員＞

◎委員長	内藤 佳津雄	日本大学文理学部 教授（法人理事）
委　員	秋山 由美子	特定非営利活動法人日本地域福祉研究所 理事（外部委員）
委　員	荒井 崇宏	稲城市福祉部高齢福祉課高齢福祉係 係長（外部委員）
委　員	石田 惇子	一般社団法人全国食支援活動協力会 代表理事
委　員	石橋 智昭	公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団 主席研究員（外部委員）
委　員	日下 直和	社会福祉法人香川県社会福祉協議会 事務局長（外部委員）
委　員	清水 洋行	千葉大学大学院人文科学研究院 教授（法人理事）
委　員	祐成 保志	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授（外部委員）
委　員	隅田 耕史	特定非営利活動法人フェリスモンテ 事務局長（法人理事）
委　員	高橋 良太	社会福祉法人全国社会福祉協議会地域福祉部 部長（外部委員）
委　員	中島 智人	産業能率大学経営学部　教授（法人監事）
委　員	原田 晃樹	立教大学コミュニティ福祉学部 教授（外部委員）
委　員	室田 信一	東京都立大学人文社会学部 准教授（外部委員）
委　員	目﨑 智恵子	高崎市第１層生活支援コーディネーター（外部委員） 主管課：高崎市福祉部長寿社会課
委　員	平野 覚治	一般社団法人全国食支援活動協力会 専務理事

（2）ワーキング部会・ワーキング部会委員

第 1 回：ワーキング部会
日時：6 月 30 日（水）16：00～17：30
場所：Zoom
内容：・事業の概要について

・生活支援コーディネーターの研修について

第 2 回：ワーキング部会
日時：8 月 3 日（火）15：00～16：30
場所：Zoom
内容：・訪問事例の報告
・ヒアリング項目の検討
・ヒアリング候補地について
・研修会内容の検討

第 3 回：ワーキング部会
日時：9 月 17 日（金）16：00～17：30
場所：Zoom
内容：・訪問事例の報告
・ヒアリング地の選定状況について
・研修会内容の検討
・報告書の章立てについて

第 4 回：ワーキング部会
日時：1 月 18 日（金）11：00～12：30
場所：Zoom
内容：・ガイドブック構成案について

第 5 回：ワーキング部会
日時：3 月 10 日（木）14：30～16：00
場所：Zoom
内容：・ガイドブック構成案について

＜ワーキング部会委員＞

○部会長	平野 覚治	一般社団法人全国食支援活動協力会 専務理事
委　員	荒井 崇宏	稲城市福祉部高齢福祉課高齢福祉係 係長（外部委員）
委　員	清水 洋行	千葉大学大学院人文科学研究院 教授（法人理事）
委　員	祐成 保志	東京大学大学院人文社会系研究科 准教授（外部委員）
委　員	中島 智人	産業能率大学経営学部 教授（法人監事）
委　員	原田 晃樹	立教大学コミュニティ福祉学部 教授（外部委員）
委　員	目﨑 智恵子	高崎市第１層生活支援コーディネーター（外部委員）
		主管課：高崎市福祉部長寿社会課

2）事例収集（ヒアリング調査）（第２章）

（1）訪問事例の選定

「食」を中心とした住民主体の居場所と、その居場所を支援する生活支援コーディネーター、生活支援コーディネーターの所属する組織や自治体を対象としたヒアリングを実施した。10 事例 26 団体（活動団体、その団体に関わっている生活支援コーディネーター、自治体等）にヒアリングをおこなった。

（2）ヒアリングの概要

自治体や社協が地域の生活支援コーディネーター等の居場所支援者を対象とした研修で活用することを想定したガイドブックを作成するため、地域住民による支え合い活動の活動内容、活動を構成する地域資源、生活支援コーディネーターとの関り等について聞き取り調査を行った。調査結果は第２章に記載した。

①調査実施地域

大阪府大阪市港区、東京都稲城市平尾、東京都稲城市向陽台、大阪府泉南郡岬町、香川県高松市、愛知県知多市、東京都板橋区、鳥取県鳥取市、奈良県葛城市、岩手県花巻市

②調査対象

・住民主体の居場所を運営する団体
・生活支援コーディネーター
・自治体、社会福祉協議会の職員等

③調査項目

・居場所の活動内容、居場所を構成する地域資源、生活支援コーディネーターとの関わり、コロナ状況下での活動状況等
・居場所への支援内容、生活支援コーディネーター活動における課題、研修受講状況、受けたい研修等
・生活支援コーディネーターとの関わり・教育、研修の実施状況等

④訪問調査地・日時・応対者等

［1］大阪府大阪市港区

日時	団体	応対者	調査担当
2021 年 7 月 31 日	こうせい親子"食堂（こうせいおやじしょくどう）	黒川 寿清氏、 杣友 謙氏、 信野 房代氏、 河本 桂子氏	平野・隅田・伊藤 小泉
2021 年 7 月 31 日	大阪市港区社会福祉協議会	久保 祐一郎氏	平野・伊藤・小泉 岩嵜・宮地
2021 年 8 月 16 日 （Zoom）	大阪府福祉部高齢介護室介護支援課 地域支援グループ	寺井氏 中江氏	平野・伊藤・小泉
2021 年 7 月 29 日 （Zoom）	サービスグラント関西事務局	河井 靖子氏	平野・隅田・伊藤 小泉

［2］東京都稲城市平尾

日時	団体	応対者	調査担当
2021 年 9 月 5 日	ささえあう会みのり （カフェ　いしださんち）	石田 惇子氏	祐成・伊藤・小泉 岩嵜・宮地
2021 年 9 月 5 日	稲城市地域包括支援センターひらお	白井 和美氏	祐成・伊藤・小泉 岩嵜・宮地
2021 年 10 月 11 日	稲城市福祉部高齢福祉課	荒井 崇宏氏、 冨貴塚 三千代氏	伊藤・小泉・岩嵜 宮地

［3］大阪府泉南郡岬町

日時	団体	応対者	調査担当
2021 年 9 月 6 日	わくわく会	吉田 文代氏	平野・隅田・伊藤 小泉・岩嵜
2021 年 9 月 6 日	岬町社会福祉協議会	中家 裕美氏	平野・隅田・伊藤 小泉・岩嵜
2021 年 9 月 6 日	岬町社会福祉協議、 岬町しあわせ創造部福祉課	嶋坂 元希氏、 橋野 圭司氏	平野・伊藤・小泉 岩嵜

［4］東京都稲城市向陽台

日時	団体	応対者	調査担当
2021 年 9 月 21 日 （Zoom）	支え合いネットワーク向陽台	平田 冨美子氏、 江口 浩子氏、 岩崎 建男氏、 藤井 雅史氏	伊藤・小泉・岩嵜 宮地
2021 年 9 月 21 日 （Zoom）	地域包括支援センターこうようだい	谷地中 恵子氏	伊藤・小泉・岩嵜 宮地

［5］香川県高松市

日時	団体	応対者	調査担当
2021 年 9 月 15 日 （Zoom）	まんでサロン香南	松下 桂子氏、 長尾 寿子氏、 岡原 美智代氏	平野・日下・伊藤 小泉・岩嵜・宮地 小野
2021 年 9 月 15 日 （Zoom）	高松市社会福祉協議会　地域福祉課地域共生社会推進室	山口 由美氏、 野崎 文氏、 兵頭 大祐氏、 久保 典子氏	平野・日下・伊藤 小泉・宮地・小野
2021 年 9 月 15 日 （Zoom）	高松市社会福祉協議会　地域福祉課地域共生社会推進室	中條 恵助氏、 森谷 正伸氏	平野・日下・伊藤 小泉・宮地・小野

［6］愛知県知多市

日時	団体	応対者	調査担当
2021 年 10 月 7 日	やまもりいこいの家	山本氏、平野氏、 石川氏、富田氏、 橋本氏、加藤氏	平野・伊藤・小泉 岩嵜・宮地
2021 年 10 月 7 日	NPO 法人あゆみ	市川 美千代氏	平野・伊藤・小泉 岩嵜・宮地
2021 年 10 月 7 日	知多市福祉部長寿課	江端 秀和氏	平野・伊藤・小泉 岩嵜・宮地

［7］東京都板橋区

日時	団体	応対者	調査担当
2021 年 10 月 14 日	NPO 法人ゆずり葉	齋藤 敦子氏	祐成・中島・伊藤 小泉・宮地
2021 年 10 月 14 日	板橋区社会福祉協議会経営企画推進課　地域包括ケアシステム推進係	深町 聰子氏、 今津 紘一氏、 山田 けい子氏	伊藤・小泉・宮地
2021 年 10 月 14 日	板橋区社会福祉協議会経営企画推進課　地域包括ケアシステム推進係	小林 霧華氏、 太田 美津子氏	伊藤・小泉・宮地

［8］鳥取県鳥取市

日時	団体	応対者	調査担当
2021 年 10 月 23 日	河原共助会 ふれあい食堂	大門 康裕氏	平野・伊藤・小泉 岩嵜
2021 年 10 月 23 日	鳥取市社会福祉協議会地域福祉課地域支え合い係	西尾 宏美氏	平野・伊藤・小泉 岩嵜
2021 年 10 月 23 日	鳥取市総務部人権政策局中央人権福祉センター 鳥取市社会福祉協議会地域福祉課	川口 寿弘氏、 宮崎 和義氏	平野・伊藤・小泉 岩嵜

［9］奈良県葛城市

日時	団体	応対者	調査担当
2021 年 10 月 29 日	新庄セブンつながりレンジャー 畑活プロジェクト	田村 登志子氏、 高原 郁子氏、 米田 恵子氏、 安川 頼子氏	清水・伊藤・小泉 小野
2021 年 10 月 28 日	葛城市社会福祉協議会	田口 研一郎氏、 大山 洋治氏	清水・伊藤・小泉 小野
2021 年 10 月 29 日	葛城市長寿福祉課	中井 智恵氏	清水・伊藤・小泉 小野

［１０］岩手県花巻市

日時	団体	応対者	調査担当
2021 年 10 月 25 日 （Zoom）	高松第三行政区ふるさと地域協議会	熊谷 哲周氏	原田・伊藤・小泉 宮地・小野
2021 年 11 月 2 日 （Zoom）	花巻市健康福祉部長寿福祉課	久保田 和子氏	原田・伊藤・小泉 宮地・小野

3）研修会「生活支援コーディネーターによる地域の居場所づくり・つながりづくり研修～アセット発見で居場所の「やりたい!」をかなえるワークショップ～」の開催　（第３章）

生活支援コーディネーター、コミュニティソーシャルワーカー、自治体、社協・ボランティアセンター等の生活支援サービス提供団体を支援している組織・機関の職員と協議体メンバー、住民等を対象に、「アセット重視」の考え方に基づいた社会資源発見力の向上と活動開発をねらいとした研修を開催した。結果は第３章に記載した。

（１）開催地・日時

■香　川

日時：2021年11月26日　13:00～17:00

会場：香川県薬剤師会朝日町会館2階／Zoomと併用

参加者：66名

■鳥　取

日時：2021年12月10日　10:30～15:45

会場：鳥取県立福祉人材研修センター1階ホール／Zoomと併用

参加者：51名

■東　京（会場のみの開催）

日時：2022年1月21日　13時～17時開催

会場：アットビジネスセンターサテライト新宿南口駅前

参加者：19名

■全　国（オンラインのみの開催）

日時：2022年1月26日　13:00～17:00

開催方法：Zoomを利用

参加者：79名

（２）対象

生活支援コーディネーター、コミュニティソーシャルワーカー、自治体、社協・ボランティアセンター等の生活支援サービス提供団体を支援している組織・機関の職員やコーディネーターと協議体メンバー、住民　等　各回２０～８０人程度

（3）プログラム

以下の 3 部構成とした。

【講義】「居場所を支える地域のアセット」

「アセット重視」の考え方に基づいた社会資源発見と活動開発について

【事例】「今あるアセットを活かした居場所の取組み」

実践事例の共有　2事例

事例の解説

【演習】「居場所の『やりたい！』をかなえる」

地域の居場所活動において今後実現したいことについてどうアプローチしていくかをグループ内のブレインストーミングで考えるワークショップ

11 月 26 日　香川会場

12 月 10 日　鳥取会場

1 月 21 日　東京会場

1 月 21 日　東京会場

４）『事例でわかる　地域アセット活用ガイドブック
生活支援コーディネーターの居場所づくり・つながりづくりを応援』の作成（第４章）

ヒアリング結果から居場所支援のための事例やノウハウを整理し、自治体や社協が、生活支援コーディネーター、地域福祉コーディネーター等に研修を行う際に活用することを想定したガイドブックを作成した。アフターコロナを見据えた運営のノウハウについても提案。

作成したガイドブックは関係者、研修会参加者、希望者に配布するとともに、当会ホームページにて電子版で公表する。カラー冊子は第４章に収載した。

第２章　事例収集（ヒアリング調査）

１　調査の概要

１）目的

地域住民による支え合い活動のきっかけとなるであろう「食」を中心とした住民主体の居場所活動開発を行う市町村職員や生活支援コーディネーター等の支援者育成を目的とし、研修会で研修ツールとして活用できるガイドブックを作成するため、10事例に対し調査を行った。

２）調査内容

活動団体に対して：
調査地の概要、居場所の活動内容、居場所を構成するアセット（地域資源)、コロナ状況下の活動等
生活支援コーディネーターに対して：
（上記に加え）活動団体に対する支援、生活支援コーディネーターとしての経験や課題、研修受講状況について等
自治体に対して：
生活支援コーディネーターの配置状況、研修会の実施状況等

２　調査の結果

10事例26団体に聞き取り調査を行った結果をまとめ、次項より掲載する。

事例１	大阪府大阪市港晴地区	「こうせい親子"（おやじ）食堂」
事例２	東京都稲城市平尾地区	NPO法人支え合う会みのり「カフェいしださんち」
事例３	大阪府泉南郡岬町淡輪６区	わくわく会「喫茶わくわく」
事例４	東京都稲城市向陽台地区	支え合いネットワーク向陽台「すまいる向陽台」
事例５	香川県高松市香南地区	まんでサロン香南「かふぇまんでサロン」
事例６	愛知県知多市岡田地区	「やまもりいこいの家」
事例７	東京都板橋区高島平地区	NPO法人ゆずり葉「ゆずり葉」
事例８	鳥取県鳥取市河原地区	河原共助会「ふれあい食堂」
事例９	奈良県葛城市新庄中学校区	畑活プロジェクト「はっぴぃ農園」
事例１０	岩手県花巻市高松第三行政区	高松第三行政区ふるさと地域協議会

事例１：大阪府大阪市港区港晴地区

１．訪問概要

居場所名	こうせい親子゛（おやじ）食堂
訪問日	2021 年 7 月 31 日（土）
訪問場所	「こうせい親子゛（おやじ）食堂」 （大阪市港区港晴１丁目５－１８ 港晴会館 老人憩の家）
ヒアリング対象	(居場所) 『こうせい親子゛食堂』運営・代表者　黒川寿清氏、副代表　杣友謙氏 民生児童委員・地域活動協議会副会長　信野房代氏 見守りコーディネーター 河本桂子氏 (第１層ＳＣ) 大阪市港区社会福祉協議会　久保祐一郎氏 (行政側担当者) 大阪府福祉部高齢介護室 介護支援課地域支援グループ　寺井氏・中江氏

２．地域の概要

■基本情報

＜大阪市港区＞

人口(人)	80,948
総世帯数（世帯）	42,612
面積（㎢）	7.86
人口密度（人/㎢）	10,298.7
高齢化率（%）	27.8

（※2020 年国勢調査　総務省統計局 都道府県・市区町村別の主な結果より）

＜大阪市港区港晴地区＞

人口	4,512
総世帯数（世帯）	2,469
面積（㎢）	0.41
人口密度（人/㎢）	11,004.8
高齢化率（%）	30.3

(※2021 年 9 月 大阪市各区町丁目別男女別・各歳別人口及び世帯数統計各区町丁目別男女別・各歳別人口及び世帯数統計　港区より)

■地域の特徴

＜大阪市港区＞

港区は大阪市西部に位置する東西に細長い形をした区で、安治川と尻無川にはさまれ、大阪港を擁する海の玄関口に位置している。港区の面積は 7.86 ㎢で、人口はおよそ 8 万人、そのうち 65 歳以上が約 30％を占めている。区内に小学校は 11 校である。新しい街の賑わいがある一方で、港区は住民同士の交流が盛んな下町情緒あふれる住宅地でもある。

港区社会福祉協議会では地域福祉サポート事業として以前から区内 11 地域各々の老人憩の家に「地域見守りコーディネーター」をそれぞれ 1 人ずつ、月～金の 12～16 時に常駐配置してきた。「地域見守りコーディネーター」は地域住民でありながら必要な知識やノウハウをもつ支援者という位置付けであり、地域ネットワーク委員会等と連携しながら地域の生活課題を抱える人を見つけ、個別相談、地域住民同士での助け合いを支援している。(人件費は港区から区社会福祉協議会が受託している「港区地域福祉サポート事業」から拠出)

＜大阪市港区港晴地区＞

今回取材した「こうせい親子゛食堂」がある港晴地区は港区の西部に位置し、地域の神社などで行われる祭りにも多くの人が参加し、地域と学校との繋がりも強く、子ども達の安全を守るための活動に地域全体で取り組んでいる。こうした地域イベントを通しての住民同士の絆もあり、地活協（地域活動協議会）の活動も大変盛んである。

＜生活支援体制整備の状況＞

港区全域においてはその全地域担当を専任として第 1 層生活支援コーディネーターを 1 名配置している。また、港区内はさらに 11 地域に分けられており、

① 6 地域（港区包括圏域）

② 5 地域（港区南部包括圏域）

として、①・②にそれぞれ 1 名ずつ第 2 層生活支援コーディネーターが配置されている。この第 2 層ＳＣは 2 名とも社会福祉協議会職員である。

３．居場所の活動内容

■活動概要

『こうせい親子゛食堂』の開催日時は毎月第 2 土曜日　11:00～14:00

参加費：こども 100 円（就学前児童 0 円）、大人 200 円

参加対象を「どなたでも OK」とし、ハードルを低くして参加しやすい環境を作っており、子ども食堂・多世代交流・地域課題の把握といった視点で重層的な活動が行われている全世代対応型のコミュニティ食堂である。

地域の親父たちが腕を振るって安価で美味しい食事を提供。1 階の会場スペースで食事をした後、子どもたちは 2 階の和室でボードゲームなどの遊びや、お絵かきをして自由に過ごすこともできる。参加者への広報は主に口コミ、地域の掲示板で行われており、食事は毎回約 100 食を用意。大人 40 人、子ども 30 人程が都度、楽しみに参加している。

■立ち上げの経緯・背景

コロナの感染が拡大傾向にあった 2020 年 3 月から居場所づくり構想を練り、同年 7 月に活動を開始。コロナ禍であるからこそ立ち上げよう！という行動のきっかけとなったのは、地区の民生児童委員（地活協副会長兼務）の信野氏から「こんな時だからこそ地域で何かできないだろうか？」「誰でも来られる活動になれば世代をこえて繋がりができるのでは！」「地域で“孤食”が増えていることで子どもの孤立化、高齢者の引きこもり、栄養不足なども心配。是非、子ども食堂を立ち上げたい」という声が上がったことである。

港晴地区は人口の 30%以上を高齢者が占め、港区内でも高齢化率が高い地域である。地域に昔から住んでいる方も多く親戚同士の関係性はかなりあるが、高齢者は戸建てに住んでいるケースが多いためどうしても孤立しがちで、人の目が届かないということが想定された。

また、港晴地区では少子化が進行中であり小学校は各学年 1 クラスしかなく、統廃合の可能性も挙げられている。港区内にこども/地域食堂は 8 ヶ所程あって現時点では特に欠食児童が多いというわけではないが、この地域でのこども/地域食堂の存在意義は貧困対策というより、会食会を通しての居場所づくり、地域課題の把握手段の 1 つであるという意識を持って運営されているという点が重要なポイントである。

特にひとり親世帯については、『こうせい親子゛食堂』では未就学児の料金を無料にして親（ひとり親）も一緒に来やすい体制を整えている。

新たに居場所を開設するには、コロナ禍ということで非常に困難な時期ではあった。けれども信野氏たちは「だからこそ高齢者がひきこもりがちになることから生まれる問題」や「子どもたちがさらに孤食を強いられるのではないか…」という強い危機感を抱き、こうした現実を港晴地区の多くの人たちに認識してもらうことで、今こそ多くの人たちともっとつながりを持ってほしいという思いが募り、困難を承知の上でこのタイミングで居場所を立ち上げたとのこと。

利用者は現在 100 人ほどで、大人 6：子ども 4 という比率である。高齢者食事サービスは別途存在していたがコロナ禍で活動は休止しており、そこに参加していた人たちが現在は親子゛食堂に参加しているというのが状況である。

居場所の担い手は、代表者の黒川氏をはじめ主に 40 代・50 代・70 代（代表、副代表）のボランティアの男性達 11 人。一般的に地域活動に携わるのは女性の方が多いが、この『親子゛食堂』では男性が楽しく主体的に運営に関われるような形を模索した結果、現在は積極的に参加してくれる男性多数の活発な居場所活動になっている。こどもから高齢者まで多世代で参加できる「つながりの場」であり、食堂開催日にはＳＣや見守りコーディネーター、地域包括支援センターも必ず参加しアウトリーチの場にもつながっている。

加えて、この居場所で皿洗いなどをしながら子どもに声かけをするなど、積極的な働きかけをして食堂の裏方として一緒に活動してくれている信野氏は親子゛食堂にとって大変大きい存在と言える。さらに「地域見守りコーディネーター」の河本氏のもとには、地区内で新聞が溜まっている家を見つけた人から連絡が来るなど、地域情報を詳しく把握できるネットワークが出来上がっており、きめ細かい見守りが行われていることも居場所と繋がる利用者の安心感になっている。

■コロナ禍影響下での活動について

コロナ禍の 2020 年 7 月に活動を開始した当初は、どれくらいの利用があるのか全く予測できなかったが、始めてみると思ったより参加者は多く、「本当にやって良かった」という気持ちが大きいとのこと。コロナで学校が休みになってしまうと「家で一人ぼっちの子どもがいるのでは？」という心配もあり、コロナ禍だからこそ誰かとつながりを持ってほしいという思いで現在も活動を続けている。

コロナで外出を控える人が増え、高齢者はずっと家にいるようになったことで地域包括支援センターには「引きこもりがちになった」「認知症が進んだ」という相談が増えており、現在は配食など工夫をしながら現状把握にも努めている。コロナ自体より「閉じこもり」で体調を崩してしまうのでは、という心配もあり、閉じこもりにならないように外に出て交流する機会を作ることはとても大事だと考えている。

現時点で活動を休止・停止している活動団体もあるようだが、コロナを理由に「やらない」という選択をしたことも否めないのではないか、と思うと残念でならない。「今は離れていても、ずっとつ

ながっている！と感じてもらえるよう、常に考えながら活動しています」との居場所の方の熱い言葉が非常に印象的だった。

最近は久保ＳＣ宛に「喫茶をやりたいけど大丈夫かな？」という相談を受けることが多くなったため、久保氏自身が保健師から感染対策ポイントも含めた直接講習を受け、そのアドバイスを現場に伝えて参考にしてもらっているとのこと。こうした専門職からのアドバイスを居場所に届けることもとても重要なＳＣの役割と言える。

2021 年にはコロナ禍でもスムーズに状況把握、意見交換ができるよう港晴会館に Wi - fi の整備を完了したので、今後は zoom を利用したリモート会議など皆が参加できるような会議開催へのサポートをしていこうと久保ＳＣはさらに活動を活発化させている。

■居場所からみた「カギとなるアセット」

【組織】

・地元のカッターレース参加メンバー
・大阪府が昭和 30 年代から全国に先駆けて校区ごとに設置し、地域の地盤づくりの土台となった「地区福祉委員会」
・地域活動協議会とその人脈
・港晴小学校（PTA→校長）
・港区社会福祉協議会（助成金の申請に関すること）
・大阪市社会福祉協議会/地域子ども支援ネットワーク（食品提供）
・一般社団法人こどもの居場所サポートおおさか（企業等からの食品提供）

【個人】

・カッターレースのチームリーダー、黒川氏(元地域活動協議会会長)
・民生児童委員：信野氏（地活副会長）
・見守りコーディネーター：河本氏

【地域のモノ・コト、行事、活動】

・お弁当配食=地域の見守り活動
・要援護者のマップ（民生児童委員や地域見守りネットワーク委員らがマッピングを行い作成・更新し共有）
・港区社会福祉協議会「見守り相談室」
・港晴会館 老人憩の家
・神社／祭り
・港晴フェスタ（港晴小学校に近くクラブ活動帰りの子どもたちが沢山参加）
・港湾局によるイベント（黒川代表と副代表が大阪港カッターレースにシルバーチームで出場-2019 年）。この時、関わった人をボランティアに引き込んだ。
・公園掃除（年数回）
・ふれあい喫茶

４．居場所に関わる生活支援コーディネーターの活動について

■担当生活支援コーディネーター名：久保祐一郎氏(30 代)
■所属組織：大阪市港区社会福祉協議会　第 1 層生活支援コーディネーター
　　港区 11 地域　全地域担当　専任
■プロフィール：
大阪市港区社会福祉協議会所属 5 年目、ＳＣ活動歴：3 年目。
居場所活動開始：令和 2 年～
前職は設計事務所にて測量士補として勤務。
御祖父介護の際、ケアマネジャーの手厚いサポートに接し、人とのつながりのある仕事に興味を持ち、5 年前に港区社会福祉協議会に転職し地域福祉に携わる。
ＳＣ職になる以前は地域支援担当として行事や防災などに参加してはいたが、当時はあまり地域に関わってはいなかった。

■居場所への関わり方
　居場所『こうせい親子゛（おやじ）食堂』は久保ＳＣが大阪市港区社会福祉協議会職員だった時（居場所の立上げ以前）から関わりがあり、居場所立上げ時には補助金申請の手伝いをして、今回は居場所立ち上げ支援として上限 50 万円の補助金を得ることが出来、こうせい親子゛食堂で使用する棚を購入することができた。現在、月 1 回は居場所に出向き、月 5 回は信野氏と電話で連絡をとっている。
　居場所からは下駄箱購入について、助成金についてなど細かい点まで逐一問合せがあり、またコロナ禍においての子どもへの配食相談を受け、他の居場所活動での情報状況を伝えることもあり、双方向でのコミュニケーションが充実してきている。
　こうせい親子゛食堂での 1 番のキーパーソンは民生児童委員の信野氏であり、その信野氏がさらにキーパーソンを教えてくれたことで様々な人の動きを把握することができたことは大変ＳＣ活動に役立っている。
　港区「地域における要援護者の見守りネットワーク強化事業」により区社会福祉協議会に「見守り相談室」が設置されたことで、8050 問題など見守りが必要な世帯についての情報も迅速に把握できるようになり、対象者をこうせい親子゛食堂につなぐことも可能になった。

■地域との関わり方
　民生児童委員から『こうせい親子゛（おやじ）食堂』を「コミュニティ食堂」として多世代交流を目的にしたいとの声があがった。コロナ禍で子どもの親、PTA、学校からは会食開催には様々な意見もあったが、黒川代表たちの決断や多くの方の支援で実施の運びとなった。
　大阪市の地域子ども食堂支援ネットワークからコロナ対策物資の支援も届き、食材についてのバックアップが増えたことは心強い。
　当初は「こうせい親子゛食堂」に見守りコーディネーターの配置は考えていなかったが、キーパーソンである河本氏（見守りコーディネーター）が運営者と一緒に皿洗いなどしつつ居場所にいてくれ

ることで高齢者からの相談事も増え、その場で相談に答えてくれることが高齢者の安心感につながっている。さらに子どもたちにも声掛けをしてくれることで世代間交流も生まれ、居場所が重層的な見守りの場になってきている。

最近は高齢者同士が複数で連れ立って訪れる機会も増え、介護予防にも一役買うなど、小さな起点から副産物的に多くの動きが芽生え始めたのが何より嬉しいことである。

昨今の多世代の繋がりの希薄化を改善するため、こうした居場所は「繋がりの場」として大きな価値があると考えている。

居場所に来ている子どもが、道でボランティアの男性達と出会った際、楽しそうに「カレーのおっちゃん！」と気軽に声掛けし合えるような機会が増えたことがとても嬉しく誇らしい。

高齢者にとってのこの居場所の価値が「子どもと接することができる」「歩いて来ること自体が介護予防になっている」など他では得難いものになっていることを実感している。「スピード感を持って多くの人々と連携できたことで、コロナ禍にあっても新たな居場所を作ることができたことに何より感謝したい」と話してくださった久保氏の言葉が強く心に響いた。

■ＳＣとしての経験や課題

久保ＳＣは今後、様々な方面からの取材を受けることでこの居場所の魅力を広く発信したいと考えており、多くの人に知ってほしいという思いを強く持っている。

食堂２階の部屋を学習支援や多世代の居場所（遊び場）として利用したい、という居場所スタッフの意向を汲んで、コロナ禍でより慎重に実施する必要があると心得ながら、学生などにボランティア層を広げ『こうせい親子゛（おやじ）食堂』２階スペースでの子どもたちの遊びや学習支援実施、という構想の実現に向けて活動を加速したいと考えているとのこと。

高齢者×子どもの活発な交流によって高齢者の介護予防につながると良いし、今後、公園の広場で畑を作り食堂用に野菜を育てる、という構想も練っている。そのために必要な準備など、今後も居場所の方々、関係各所と相談しながら着実に進めることを目指している。

大阪の方針としてＳＣと地域包括支援センターの連携が重視されている中、現時点ではＳＣとして地域包括支援センターなど他部署との連携がまだまだできていないことが課題だと考えている。協議体と第１層ＳＣとの会議が「ただの報告会」になっているとも感じており、「その一歩先へ…」がまだできていない点を早く改善したいと思っているとのこと。

第２層の協議体は 2021 年 9 月から立ち上がる予定である。

久保ＳＣは港晴地区の他地域（波除地域）でも、新たに居場所を立ち上げられそうなスペースを発見。『こうせい親子゛（おやじ）食堂』での経験を踏まえ、このスペースにサロン的居場所の立ち上げを予定しており、さらにこうした活動を広げていきたいと考えている久保ＳＣの今後の活動に注目したい。

事例２：東京都稲城市平尾地区

１．訪問概要

居場所名	カフェ いしださんち
訪問日	2021 年 9 月 5 日（日）
訪問場所	「カフェ いしださんち」（東京都稲城市平尾２－３４）
ヒアリング対象	(居場所) ＮＰＯ法人支え合う会みのり理事「カフェいしださんち」運営者　石田惇子氏 (第１層ＳＣ) 稲城市役所 高齢福祉課高齢福祉係　冨貴塚三千代氏 (第２層ＳＣ) 稲城市地域包括支援センターひらお　白井知美氏 (行政側担当者) 稲城市役所 高齢福祉課地域支援係係長　荒井崇宏氏

２．地域の概要

■基本情報

＜東京都稲城市＞

人口（人）	93,003
総世帯数（世帯）	41,935
面積（㎢）	17.97
人口密度（人/㎢）	5,175.4
高齢化率（%）	21.9

(※2022 年 2 月 1 日現在　稲城市 HP 住民基本台帳より)

＜稲城市平尾地区＞

人口（人）	12,182
総世帯数（世帯）	6,001
面積（㎢）	1.5
人口密度（人/㎢）	8,121.3
高齢化率（%）	30.9

(※2022 年 2 月 1 日現在　稲城市 HP 住民基本台帳より)

■地域の特徴

稲城市は多摩地域南部に位置し、１970 年代以降の多摩ニュータウン建設や沿線開発に伴い人口が急増した。古くから梨やブドウの産地でもある。

平尾地区は新宿副都心から南西へ約 20km、多摩ニュータウンの入口に当たり、早い時期から計画的に市街地整備が進んだ。丘陵地帯を切り開いて作られた地域は眺望が良いが、バスや車の足がない高齢者にとっては移動困難地域もある。また近年は高齢者の一人暮らし世帯が多いことも特徴として挙げられる。自治会の活動も盛んで、防災訓練や神社の祭り、桜祭り、盆踊りなどのイベントも多く開催されている。

■生活支援体制整備の状況（生活支援コーディネーターの配置状況）

＜稲城市＞

第１層ＳＣ1 名、第２層ＳＣ4 名

第２層ＳＣは 4 圏域の地域包括支援センターに１名ずつ配置されている。（地域包括業務と兼任）

第１地区（平尾・坂浜）は「地域包括支援センターひらお」（運営：社会福祉法人平尾会）

＜第１層協議体構成員＞

生活支援コーディネーター・地域包括支援センター・市社会福祉協議会(コミュニティソーシャルワーカー)・自治会・みどりクラブ・居宅介護支援事業者等・シルバー人材センター・市民活動サポートセンターいなぎ・ＮＰＯ法人（配食サービス事 業者・ホームヘルプサービス事業者)・民生児童委員（高齢者部会・介護予防自主グループ)・その他生活支援サービス提供事業者等の代表者

＜第２層協議体構成員＞

第１層協議体の構成団体・ふれあいセンター・駐在所等地域で活動している人たち（圏域や地区により異なっている）

３．居場所の活動内容

■活動概要

活動日は毎月 第１日曜日・第３土曜日　13:00～15:30

高齢者の居場所・カフェ・会食・音楽、健康講座、ゲームサロン

■立ち上げの経緯・背景

「カフェ いしださんち」を運営する石田惇子氏は、１983 年発足の在宅福祉サービス団体「ＮＰＯ法人みのり」の理事でもある。東日本大震災で近所同士のつながりや近くに居場所があることの必要性をさらに実感し、自宅がある平尾地域に高齢者が集まれる居場所がなかったため、石田氏自ら自宅を開放してカフェを開催するようになった。

手作りデザートとお茶で参加者がお喋りするお茶会だけでなく、歌を歌ったり、カードゲーム、落語、日本舞踊などのイベントや勉強会など、毎回、工夫を凝らしたプログラムが開催され、最近は zoom を使ってのセミナー視聴なども行っている。日曜日は講師等を招くプログラム、土曜日は参加者同士でおしゃべりや歌・ゲームを楽しむ日としている。一人暮らし世帯が多いこのエリアでは、時に担当の白井ＳＣによる健康管理講座も開催され、参加者の皆さんはとても熱心に聞き入り、コロナ禍において健康維持の意識を持つことや注意喚起にもなっているという。

また最近は「おひとり様夕食会」という会食会も開催。（夕飯時に石田氏宅にて「ＮＰＯ法人支え合う会みのり」のお弁当を利用しての会食会で、参加者は現在 7 名ほど）ゆったり和やかに流れる時間は、孤食になりがちな高齢者にとって楽しみな時間の１つになっている。

■コロナ禍影響下での活動について

会場のなる石田氏宅のリビングルームは 2 方向に向く大きな窓があり十分な換気ができる。食品衛生の知識がある「支え合う会みのり」会食会ボランティアの参加で食器の洗浄や手指・テーブルの消毒などを徹底することでコロナ禍でも活動を休まず継続することができている。

コロナの影響で休んでいる人もあり、利用者はコロナ前の半分程になっている。参加しなくなった人に対しては無理に来させようとするのではなく電話や挨拶を継続することで様子を見ながらゆるやかに繋がっている。高齢者が家に閉じこもることで精神的、体力的両面でのマイナスの影響がとても大きいと実感している。

公的な補助金を受領していない個人宅での居場所開催であるため、活動を継続しやすい環境にあることは大きなアドバンテージであり、様々な手段を試みて高齢者が“孤独”な状況にならないよう、注意を払いながら活動を続けている。

■居場所からみた「カギとなるアセット」

【組織】

・美望会（平尾地区にある住民自治組織）

・地域包括支援センターとの密接な繋がり

・高齢者等の異変を発見するためのフロー図の周知

【個人】

・石田氏宅

・石田氏の開放性（外国で暮らしたときのホームパーティーなどの経験）

・石田氏の人脈（支え合う会みのりの会食会の人脈）

・民生児童委員

・働き者の参加者（食べ物の準備や片付け）

・親しみやすい人が多い・おせっかいな人がいること

・根を張るパワー、誰も取り残さないという思い

【地域のモノ・コト・行事・活動】

・神社の祭り

・豆まき、どんど焼き、盆踊りなど地域行事あり

・平尾小学校内にふれあいセンター平尾がある

・各マンションの集会場

・i（あい）バス（稲城市循環バス）平成１４年～

路線バスを補完するコミュニティバス。交通弱者の社会参加や、交通不便地域の解消等が主な目的

市立病院・市役所・総合体育館などの公共施設や駅を結ぶ日常の足

４．居場所に関わる生活支援コーディネーターの活動について

■担当生活支援コーディネーター名：白井知美氏（50 代）

■所属組織（支援整備体制に係る居場所担当部署）：

稲城市地域包括支援センターひらお　第２層生活支援コーディネーター

■プロフィール：

地域包括支援センター所属：１５年（平成１８年～）

＊平成１４年から４年間、在宅介護支援センター勤務

ＳＣ活動歴：5 年 5 か月

・看護師資格（病院、老人ホーム）（ＳＣ業務に看護師としての知識を生かしている）

・介護支援専門員

担当エリア：平尾・坂浜地区

■居場所への関わり方

・第２層会議で状況報告をしてもらう他、講座の依頼を受けた時など年 1〜2 回は活動中に居場所を訪問している。
・白井ＳＣは地域包括支援センター職員として、石田氏と面識があった。
・健康教室など介護や福祉に関する情報提供での関わりが中心である。

■地域との関わり方

白井ＳＣとしてはこれまで地域に「何か新しいものを作らなければ…」と思っていたそうだが、活動している中で地域住民にまだ知られていない交流の場や繋がりが実はたくさんあることに気付いたとのこと。現在は今あるものの価値を再認識してもらうことも大切だと感じている。

居場所で交流している人同士が顔見知りになることで、居場所に来ていないときでも挨拶や声掛け、さりげない見守り、困ったときに助け合いが出来るといった行動につながってきているということは、とても喜ばしい成果である。独居や高齢者のみ世帯が多くなっている現状で、それぞれが孤立しないように自宅近くで気軽に参加できる居場所をもっと紹介していきたいとも考えているとのこと。

社会福祉協議会の地区担当とは緊密に連絡を取り合っており、社会福祉協議会が立ち上げた居場所に一緒に立ち寄ることもあるそうで、良い連携が取れているといえる。さらに他の専門家ともすぐに連絡の取れる関係を築いている。

現在活動している団体の代表者や自治会の方＝キーマンは地域の中の状況をよく把握しているので近況を確認しながら、もし困りごとがあれば助言するなどの支援もしている。

今までは多くの人を集めて「繋がりが大切」と伝える機会を作ってきたが、コロナ禍では集まろうという声がなかなか掛けられない。今後はパソコンやスマートフォンを活用しての集まらなくても繋がれる方法を見つける必要があると考えている。

■ＳＣとしての経験や課題

今後は若い世代ともつながれるような工夫を積極的にして行きたいと考えている。一方、地域の人が地域課題を「身近な問題」だと感じられるような啓発活動がなかなか進まないのが悩ましいところでもある。

第２層会議の中で「世代間交流の行事を育成会に働きかけて実現しよう！」という提案をし、これに対して実際に地域の各種団体が協力して実現できたことについてはとても達成感があり、こうした活動をもっと増やせると良いと思っている。実施に至った具体例としては、白井ＳＣが「育成会」に声を掛けて昔遊びのイベントを企画して開催。およそ１00 人が参加する大きなイベントになった。このイベントを開催し多世代が参画してくれたことで地域の人が互いに顔見知りになり、挨拶ができる関係づくりにつながったのである。その後、第２層会議で提案のあった「見守り活動」を開始することが出来、これまで平尾地区 5 つの自治会それぞれで取り組んでいたものを地域全体の取り組みにすることができたことは大きな一歩である。

現場で感じているのは未だＳＣの役割が明確でないと言うことである。実際のところ、ＳＣは第２層協議体をまとめることで精一杯なのではないかと思う。各居場所団体が抱える課題を第２層ＳＣが横連携で共有し、それぞれの担当地域の居場所へのアドバイスに活かせるようになると良いのではないか、と思いながら活動している。

コロナ禍により今まで通りの活動ができなくても、居場所の方が活動を止めずに継続できる方法を探すための協力を今後も継続していくつもりである。

全国の取り組み事例等を紹介して参考にしてもらうことも重要だと考えている。こうした活動には今まで以上に助け合いが必要になってくるはずであり、日ごろからのつながりが大切だと居場所の皆さんには伝えている。

「昔はよかった」という声をよく聞くが、それは地域のつながりが昔より薄くなってしまった、という実感が住民にあるからであり、子どもも含めて行事だけでなく日常においても繋がりが持てるような活動を今後もしていきたいと思っている。

５．生活支援コーディネーターの人材育成について

稲城市役所　高齢福祉課 地域支援係係長　荒井崇宏氏
稲城市役所　高齢福祉課 高齢福祉係　第１層ＳＣ　冨貴塚三千代氏

■ＳＣの役割・ＳＣへの期待

稲城市は 2016 年から各地域包括支援センターに生活支援コーディネーターを配置しており、第２層会議の中で支え合いや交流の場の必要性を説明してきた。

居場所の立ち上げは自治会やＮＰＯなどが中心になる他、社会福祉協議会が支援する場合もある。

稲城市では第２層ＳＣとして 4 名を配置しているが、ＳＣとしての委託要件の中では資格を問うていない。

ＳＣ主導で居場所などを立ち上げるというよりは、今あるものをうまくつなぐ、アセットを発掘する、という活動を期待している。地域のやりたい気持ちを後押しする役割を担って欲しいと考えている。今後は高齢者にとどまらず、多世代を対象に地域全体に対しての活躍を期待している

第１層ＳＣは市に置くべきだと考えている。その意義は、直接的に市との意思疎通や連携がタイムリーにとれて同じ方向を見ることができるからである。

第２層協議体会議はオンライン開催ができている。先行して始めた地区を参考に、オンライン会議が開始できたことが大きな成功体験になっている。

■人材育成（研修実施内容等）・研修への要望

稲城市としてのＳＣの育成研修は設けておらず東京都の初任者研修を受講してもらっている。一方、今後新しく迎え入れるＳＣの交代等については前任・後任（第２層の先輩後輩）が 1 年間にわたる同行により、丁寧な引継ぎとすることを形にしたいと考えている。

事例３：大阪府泉南郡岬町淡輪６区

１．訪問概要

居場所名	わくわく会 喫茶わくわく
訪問日	2021 年 9 月 6 日（月）
訪問場所	「喫茶 わくわく」（大阪府泉南郡岬町淡輪 4326-1）
ヒアリング対象	(居場所) 『喫茶わくわく』運営責任者・淡輪地区福祉委員会副委員長・岬町民生児童委員協議会副会長及び淡輪地区会長　吉田文代氏 (第１層ＳＣ（第２層兼任）) 岬町社会福祉協議会　中家裕美氏 (所属先管理者) 岬町社会福祉協議 主幹 嶋坂元希氏 (行政側担当者) 岬町役場担当者：岬町役場 しあわせ創造部福祉課課長代理 橋野圭司氏

２．地域の概要

■基本情報

＜大阪府泉南郡岬町＞

人口（人）	15,035
総世帯数（世帯）	7,436
面積（㎢）	49.18
人口密度（人/㎢）	305.7
高齢化率（%）	39.2

(※岬町発行広報岬だより 2022 年 2 月号より 2022 年 1 月現在)

＜岬町淡輪地区＞

人口（人）	9,357
総世帯数（世帯）	4,151
面積（㎢）	9.05
人口密度（人/㎢）	1,034
高齢化率（%）	34.0

(※淡輪地区福祉委員会報告書より　2018 年 10 月現在)

■地域の特徴

岬町は大阪府の最南端に位置し、地形は東西 10km、南北 6km、面積 49.18 ㎢。東南部は和泉山脈で和歌山県と接しており全体の約 80％が山地である。また、西北部は大阪湾に臨んで淡路島と相対し、大阪府下でも珍しい自然海岸が形成され気候は四季を通じて温和で雨量の少ない瀬戸内気候区に属した豊かな自然に恵まれた住み良い地域である。

今回取材をした淡輪地域は宅地開発が進み、現在では岬町人口の約半数を占めるに至っているが、町全体としては人口の減少や高齢化などが進行している。岬町内は【淡輪（たんのわ）・深日（ふけ）・多奈川（たながわ）・孝子（きょうし）】という 4 エリア（4 小学校区）で構成されており、さらに全部で 20 区に細かく区分されている。岬町内には小さな集会所や居場所が多数あり、特に淡輪地区は福祉施設が多くデイケア利用者も多い。

岬町の人口のおよそ半分が淡輪地区に居住しており、旧村地区：新興地区に分けられているが、近年新興地区には 30～40 代世帯の移住が増えているためいろいろな活動へのマンパワーが確保されて旧村地区と新興地区の交流も進んでいる。

高齢者の居場所だけではなく、コミュニティカフェも岬町(30 ヵ所)で広がっており、現在は小学校で開催しているサロンもある。

旧村地区では小・中学校が同窓でほとんどの人と顔見知りということもあり人間関係の繋がりが強く、他地区とも大変良好な関係を保っている。

今回取材をさせていただいた「喫茶わくわく」や早朝に行われているラジオ体操への参加者には男性も多く、空いている時間を使って居場所周りの草刈りを積極的に手伝ってくれたり、写真好きな人が店内にギャラリーを設けたりして活気が生まれている。

■生活支援体制整備の状況（生活支援コーディネーターの配置状況）

＜岬町全域＞

第 1 層ＳＣ（第 2 層兼任）　1 名

岬町社会福祉協議会 所属（50 代・ＳＣ歴 6 年目）　中家裕美氏

＜第 1 層協議体（町全域）＞

メンバー：町内の関係団体 24 名(令和 3 年度現在)

地域包括支援センター・社会福祉協議会・ボランティア住民活動支援センター・生活支援コーディネーター・民生児童委員協議会・自治区長連合会・商工会・シルバー人材センター・人権協会・地域おこし協力隊・介護者(家族)の会・長生会連合会・リハビリクリニック・地区福祉委員会・ケアマネジャー連絡会・地域密着型サービス事業所・福祉施設・福祉課

＊事務局・岬町しあわせ創造部福祉課・岬町社会福祉協議会

３．居場所の活動内容

■活動概要

『喫茶わくわく』毎週月曜日 開催　　9:30～15:00

参加対象者：どなたでも歓迎

活動場所：淡輪６区にある「旧ニコニコ鍼灸整骨院」

主催者：わくわく会（淡輪６区　有志ボランティア）

モーニング喫茶料金：

300 円（パン・ゆで卵・バナナ・お菓子・コーヒー）　＊コーヒーのみは 100 円（お菓子付き）

活動内容：高齢者の居場所・会食・ラジオ体操・買い物支援・移動支援・見守り支援

■立ち上げの経緯・背景

2018 年 3 月、岬町多奈川地区で開催された「赤提灯」、同 6 月に淡輪 10・11 区で開催された第 1 回「地域を知る“BAR”」（協議体の活動）に参加した淡輪６区旧村地区の住民であり、民生児童委員副会長の吉田文代氏。「自分の居住する自治区でも住民主体の“支え合いのある地域づくり”に取り組んで、「地域を知る“BAR”」のような皆でワイワイ楽しみながら地域について考える機会を作りたい！」との相談を岬町社会福祉協議会に自ら持ち込んだことから、第 1 層生活支援コーディネーター、コミュニティワーカーらと吉田氏をはじめとする地域住民とのコミュニケーションが生まれ、住民主体の地域づくりがスタートした。

高齢者の健康維持のために何かできないかと考え始めた吉田氏が岬町第 1 層生活支援コーディネーターである中家氏に相談を持ち掛けたところ、中家氏が「駐車場を利用して早朝ラジオ体操を始めてみては？」とアドバイスした。適度な広さが確保できる吉田氏のご子息が運営していた旧鍼灸整骨院前の広場（駐車場スペース）を開放し、2019 年 4 月から毎週 1 回、月曜日の朝 7 時 30 分からラジオ体操の開催が始まった。当初の参加者はわずか 6 名だったが、現在はその 2 倍以上を超える参加者になっている。

さらに最初は健康増進を目的として始めた早朝ラジオ体操は、ちょうどラジオ体操終了時間が小学生の登校時間帯と重なっていることもあり、今では子ども達の登校見守りも行うことができ思いがけず素敵な世代交流が生まれる機会となっている。

駐車場で開催のラジオ体操が地域住民に浸透してきた頃、鍼灸整骨院（駐車場隣接地）が空き店舗になったことをきっかけに多くの高齢者から「ラジオ体操後に皆が集える居場所が欲しい」との要望が

挙がり、吉田氏と中家ＳＣは相手に寄り添う心遣いが温かい居場所を目指し、コミュニティカフェ『喫茶わくわく』をオープンすることに。まずはモーニングサービスの提供からスタートした。

『喫茶わくわく』には様々な「得技」を持つ方が集い、カフェを盛り上げるための活動に参画している。体操で体を動かし、子ども達の登校見守りと交流をした後にカフェに集っての楽しい語らいは参加者にとって格別な時間となっているようである。

「買い物支援　一緒に行こう会」(週１回/木曜日「道の駅　みさき」まで車で送迎する買い物支援)「わくわく会」みまわり隊の活動などから、地区内で買い物や外出することに困難を感じている方からの要望を聞き取り、「道の駅」に新鮮な魚を買いに行こう！という企画がスタート。ドライバー候補6名が「道の駅　みさき」を見学し、その後「ドライバー育成福祉有償運送講習会」を受講し講習を無事修了。こうして買い物支援事業が、有償活動として2021年7月から開始された。現在、利用者数は増加の一途であり「一緒に行こう会」リーダーの個人所有車両の提供もあって、今後は何でも揃う大型スーパーへの買い物支援も検討中とのこと。この活動は淡輪6区だけにとどまらず、現在淡輪10区・11区でも開始、連携に向けた動きが生まれている。

淡輪6区旧村地区『喫茶わくわく』を参考として現在、同じ淡輪6区の新興住宅地区でも新たな動きが始まっている。2020年2月に『グリーンピース』が発足。いつでも集まれる居場所として集会所の有効活用をめざし、コミュニティカフェ「くつろぎ喫茶」がオープン。淡輪地区全体として更なる展開が期待される。

「わくわく会」発足当初は全く資金がなかったが、吉田氏の工夫と中家ＳＣのアドバイスにより岬町からの経費助成を受けられたことは、今後の活動展開の大きな支えとなっている。

■コロナ禍影響下での活動について

コロナ感染拡大における緊急事態宣言発令時の2020年4月～5月に活動を自粛した時期、利用者のお一人が“孤独死”したことに吉田氏は大変ショックを受け、この出来事をきっかけに「コロナ禍でも『喫茶わくわく』はみんなの居場所なのだから絶対に開け続ける！」と決意。その後は食器の煮沸消毒（以前より実施）は勿論、コロナ対策を徹底的に行い、担い手も来客者も自己責任で参加するという大前提で活動は現在、休まず継続している。コロナ禍においても個人所有場所での開催ということで、継続しやすいということも大きなメリットであったと言える。

但し、これまで提供してきたモーニングは中止し現在は飲み物のみ。持ち帰り用のパンやデザート

などを提供している。

■居場所からみた「カギとなるアセット」
・岬町そのもの
（行政に頼らず自分たちでという住民の意識・自由度が大変高い。常に住民主体である）
・大阪のベッドタウンとしての住民スキルの多様性。大阪・難波まで電車で 50 分。これまでいろいろな業種に就いて通勤していた人達がリタイアし地元岬町でそのスキルを発揮してくれる可能性あり
・若い世代（30，40 代）の移住の増加
・高齢者の居場所だけでなく多世代コミュニティカフェが岬町(30 ヵ所)で広まったこと
・小学校で開催しているサロン
・地区内に集会所や居場所が多い
・多奈川地区福祉委員会主催「赤提灯」
・吉田文代氏の人望・繋がっている人たち（近所・いとこ・親族・同窓生など）
・吉田氏の駐車場および御子息所有のかつて鍼灸整骨院だった建物
・淡輪 6 区 旧村地区の人たちの強いつながり
・各人の「得意なこと」を最大限発揮して居場所を運営できること
例）料理が得意な中塩路ヨシ子氏がおやつなどを作る
例）店の看板、コロナ感染防止対策用飛沫防止シートを男性たちが素早く室内に設営
・気づいた人が黙ってさっさと動く「協働の精神」
・盆踊りはじめ地域の多彩な伝統的イベント
・長い付き合いの中での共助の精神
・ＯＰＥＮから 5 年になる「道の駅 みさき」が町のランドマーク的存在として様々な交流の場になっていること
・有志による移動支援の広がり

４．居場所に関わる生活支援コーディネーターの活動について

■担当生活支援コーディネーター名：中家裕美氏（50代）
■所属組織：大阪府社会福祉法人 岬町社会福祉協議会　第 1 層生活支援コーディネーター
■プロフィール：
岬町社会福祉協議会所属：9 年
ＳＣ活動歴：6 年目
居場所活動開始：2019 年 12 月～
関西エリアで宝石デザイナー・販売、岬町役場を経て、社会福祉協議会へ。ヘルパー2 級。

■居場所への関わり方
中家ＳＣは 2018 年～、岬町多奈川地区「赤提灯の会」に参加しながら地域のニーズ把握に努めてい

た。その後、淡輪６区で吉田文代氏（淡輪地区福祉委員会副会長・岬町民生児童委員協議会副会長及び淡輪地区会長）と出会い、「赤提灯」や淡輪 10 区・11 区「地域を知る“BAR”」（協議体の活動）にも参加していた吉田氏と「新たな居場所」について構想を練り始めた。

当初は高齢者の健康維持のために「ラジオ体操を始めてみたら？」と吉田氏に提案。それを起点に「わくわく会」の活動を後押しした。さらにラジオ体操後に集える場として歩いていける身近な所に居場所が欲しい、との参加者の声を聞き、さりげなく吉田氏に居場所の構想を話した。そこから模索、検討を重ねた結果、実現にこぎつけた。

中家ＳＣのモットーとして「こちらから何かを！」ではなく、常に地域の人に「どうしましょう？何が必要ですか？」と「訊く」ことを大事にしている。「それは難しいのでは…」など否定的なことは言わずに、住民自身が本当にやりたいことは何か、を見つけ出す姿勢を心掛けている。

これまで長年にわたり社会福祉協議会が培ってきた人物ストックともいうべき「人」財産。カリスマ住民を見つけることで何かが動きだすと実感している。新人ＳＣの時には「何をどうしたらいいのか？」全く分からず思い悩んだこともあったそうだが、分からないことは「教えて下さい！」と吉田氏のようなカリスマ住民の方、いろいろな方に「訊く」ことで道筋が見えてくると確信した。

■地域との関わり方

ＳＣとしての受け持ちのエリアは岬町全域。

現在７か所の居場所を担当し随時回っている（土・日含む）。

ネットワークづくりとして地元スーパー・商工会議所・医療機関への働きかけを行っているが、なかなか協力を得られていないのが現状である。

■ＳＣとしての経験や課題

岬町の皆さん全員に助けられ今ここにいられることを含め、心から感謝している。

住民がどこかで誰かから褒められたという話を聞いたり、住民皆がいつでもニコニコしていられる、ということがＳＣにとっての達成感や喜びにつながっている。

かつて岬町内の古くから経済的に豊かな地域において、「無人喫茶」をやろうとかなり話が進んでいた企画が頓挫してしまった経験がある。実際にはその必要性を感じていない人が多かったのではないかとの反省もあり、必要のない所に押しかけるやり方はＮＧだと実感している。

高齢化が進む地域の生活支援体制整備事業に関しては待ったなし、時間がないということは常に意識している。ただ、焦る必要はないし、いろいろなサービス展開があって良いという思いも持っている。しっかりと自分が担当するエリアの現実を見て方策を見極める必要性があると考えている。

ＳＣは住民から「必要」とされる存在でありたいと思う。特に「喫茶わくわく」においては今後、防災・減災の拠点、避難所としての機能も持つ居場所にしていきたいと考えており、「喫茶わくわく」に行けば、安心・安全・楽しい！という居場所になることを目標にしている。

現在、住民から買い物支援について拡充してほしいという声が出ており、この事業についての支援体制整備はできるだけ早く整える必要があると考えている。住民からのニーズと課題を整理し、的確な支援が行えるよう進めていきたい。

５．生活支援コーディネーターの人材育成について

岬町役場担当者：
岬町役場　しあわせ創造部福祉課 課長代理　橋野圭司氏
岬町社会福祉協議 主幹　嶋坂元希氏

■ＳＣの役割・ＳＣへの期待

岬町社会福祉協議会の動きは活発で、その中で中家ＳＣは地域に上手にメッセージを発信していると認識している。ＳＣに対してはこのまま燃え尽きないようにという気持ちでいる。細く長く頑張ってもらえるように町としてもバックアップをしていきたいと考えており、共生型の視点でコミュニティワークをして主体形成を大事に、丁寧にやってもらいたいと思っている。(橋野氏)

第１層ＳＣの委託については社会福祉協議会側自からアプローチをした経緯がある。岬町社会福祉協議としては職員全員がコミュニティワーカーであり、全員がＳＣであるという意識を持っており、ＳＣが一人だけで孤立してしまうということがないようにと考えている。また「福祉共育（ともいく)」という考え方を、ＳＣとＣＷが共有することが大事だと考えている。(嶋坂氏)

■人材育成（研修実施内容等)・研修への要望

ＳＣとしての研修は岬町、岬町社会福祉協議会としては実施していないのが現状である。これまでＯＪＴ研修はなく、コミュニティワーカーとしての研修や教育を行ってきた。経験の浅いＳＣには積極的に全ての活動に参加してもらい各々のタイミングで現場担当者等を紹介したり、住民とできるだけ話す機会を設けて関係づくりを構築している。社会福祉協議会としては社会資源開発（＝住民主体の開発）について、形だけでなく主体的活動を開発する力や開発プロセスの発表、内容を聞く場があってほしいと思う。

吉田氏のようなキーパーソン的住民が活動報告するような研修や、主体形成（住民に楽しく活動してもらう）の方法を学ぶ研修、現場の生の声をきける研修に参加したいと考えている。

ＳＣだけがやる気を持っても、環境が整わないとなかなか先に進まないケースがある。ＳＣ向けだけでなく協議体（委員長)、行政に対する研修も必要なのではないか。

ＳＣ研修については誰でも参加できるように平易な言葉（専門用語ではなくわかりやすい言葉）で実施することが望ましい。同地域（居場所）からのＳＣ、行政、住民（協議体メンバー、地域のキーパーソン）セット参加型で、ペアまたは３人程度で参加できる研修があれば研修時に本音や意見交換が自然にでき、より効果的な研修になるのではないかと思っている。

事例４：東京都稲城市向陽台地区

１．訪問概要

居場所名	すまいる向陽台　喫茶 陽だまり
訪問日	2021 年 9 月 21 日（火）
訪問場所(オンライン)	「すまいる向陽台　喫茶 陽だまり」 （東京都稲城市向陽台 6 丁目 7 城山文化センター 1 階）
ヒアリング対象	(居場所) 支え合いネットワーク向陽台代表 平田冨美子氏、事務長 江口浩子氏 (第２層ＳＣ) 地域包括支援センターこうようだい　谷地中恵子氏 (行政側担当者) 稲城市 高齢福祉課高齢福祉係 係長　荒井崇宏氏

２．地域の概要

■基本情報

＜東京都稲城市＞

人口（人）	93,003
総世帯数（世帯）	41,935
面積（㎢）	17.97
人口密度（人/㎢）	5,175.4
高齢化率（%）	21.9

(※2022 年 2 月 1 日現在　稲城市 HP 住民基本台帳より)

＜稲城市向陽台地区＞

人口（人）	8,869
総世帯数（世帯）	3,655
面積（㎢）	0.94
人口密度（人/㎢）	9,435.1
高齢化率（%）	27.5

(※2022 年 2 月 1 日現在　稲城市 HP 住民基本台帳より)

■地域の特徴

稲城市は東京都多摩地域南部に位置し、1970 年代以降の多摩ニュータウン建設や沿線開発に伴い、人口が急増した。古くから梨やブドウの産地でもある。

稲城市の北部に位置する向陽台は多摩ニュータウン稲城エリアの中で 1988 年、最初に街開きをした街で、丘陵に沿って高・中・低層の住宅地が造成された。街並みは美しく、1995 年度の「都市景観大賞」を受賞している。街開き当初に転入した世代は現在退職し、その子ども世代が転出する中で急速に高齢化が進んでいる状況であり、2040 年には稲城市内最高の高齢化率 50.6%が推計されている。

■生活支援体制整備の状況（生活支援コーディネーターの配置状況）

稲城市：

第１層ＳＣ １名、第２層ＳＣ ４名

第２層ＳＣは４圏域の地域包括支援センターに１名ずつ配置されている。

（地域包括支援センター業務と兼任）

第４地区（向陽台・長峰・若葉台）は「地域包括支援センターこうようだい」

（運営：株式会社アースサポート）

３．居場所の活動内容

■活動概要

名称：「すまいる向陽台」

運営主体：支え合いネットワーク向陽台

開所日：2017 年 2 月

開催日時：毎月第 2・第 4 火曜日　 15：00～17：00

場所：城山文化センター1 階　「喫茶 陽だまり」

＜活動＞

城山文化センター１階ロビーにある就労継続Ｂ型事業所「喫茶 陽だまり」で、地域の集いの場としての居場所を運営している。参加者は「陽だまり」のメニューから好きな飲み物などを注文して、それぞれ自由に過ごす。テーブルを囲んでカードゲームを楽しんだり、視聴覚室や調理室で地元稲城ゆかりの映画を観る会や、食事を作ってみんなで食べるといった活動も行っている。

■立ち上げの経緯・背景

2015 年(平成 27 年)、第 2 層協議体の結成に向けて住民会議が開催された。「稲城市における地域支え合い推進について」の説明があり、地域課題の共有、地域にある活動把握のためのマップ作りワークショップ、地域包括ケアシステムの取組み、協議体の位置づけや役割、2050 年問題（超高齢化問題）等について質疑応答、意見交換が行われた。

この「地域支え合い推進会議」（のちの「支え合いネットワーク向陽台」）は当初 3 か月に 1 回開催されていたが、向陽台地区はそれでは間に合わないとのことで 2016 年(平成 28 年）から月 1 回「支え合いネットワーク向陽台」として開催している。その後の会議で「向陽台地区に 10 年後も住み続けるために何が必要か、元気でいるために地域に必要なもの」についての意見交換が活発に継続して行われた。

その場で、向陽台地区には核家族が多く、地域の助け合い活動を行うためにはまず住民が顔見知りになる機会が必要だという意見が出た。2016 年 11 月から「喫茶 陽だまり」の利用について関係各所との調整がはじまり、集いの場の名称を「すまいる向陽台」として 2017 年 2 月から本格スタートとなった。活動日には「支え合いネットワーク向陽台」メンバーが二人ずつ当番で常駐している。

コアメンバーである岩崎建男氏は 2006 年から向陽台に移り住み、企業退職後にマンションの理事や団地の会報誌作成に携わってきた。さらに妻の勧めで配食サービスの配達ボランティアにも参加。その後支え合いネットワークに参加したという経歴の持ち主である。もう一人のコアメンバー、藤井雅史氏は向陽台体育振興会の初代会長を務め、現在は向陽台 2 丁目代表として連合会の役員を務めている。

「すまいるネット」について

さらに、継続的な支え合いの仕組みづくりに向けて、ちょっとした暮らしの困りごとを助け合う活動「すまいるネット」を 2019 年に発足。気兼ねなく助け合うため有償（250 円/15 分）で活動している。

■コロナ禍影響下での活動について

城山文化センター1 階にある喫茶は営業を続けていたが「すまいる向陽台」の活動は休止した。休止理由は「喫茶は飲食が発生するので緊急事態宣言中は休止しよう」という自主判断によるものである。喫茶自体は営業しているため「すまいる向陽台」も活動していると思って来てしまう人もあり、休止中も当番担当者は開催時間に喫茶に足を運んで休止の案内をしていた。現在、すまいる向陽台の利用者

は以前の半分になっている。

一方、コロナ禍で集まれなくなったことから、会員をつなぐ継続的支援手段を考えようと 2021 年 1 月から zoom を活用して協議体会議を開催。SNS を活用した地域活動の継続を様々に試みている。

■居場所からみた「カギとなるアセット」

・第 2 層協議体「支え合いネットワーク向陽台」（構成員約 25 名）
・社会福祉協議会、ＳＣ、自治会、連合会、ＮＰＯ（支え合う会みのり・ＮＰＯふれあい広場ポーポーの木)、民生児童委員、向寿会（老人会)、市民活動サポートセンターいなぎ、FF ネットワーク（中高生の居場所）
・地域包括支援センターこうようだい
・稲城市地域介護予防活動支援事業「通いの場支援補助金」制度（2016 年～）
（講師料、会場費、コーディネーター費、広報費、感染予防対策費などを助成）
・地域包括センターこうようだい
・城山文化センター視聴覚室、調理室
・「すまいるネット」
・すまいる通信
・ＮＰＯふれあい広場ポーポーの木(支え合いネットワーク向陽台代表の平田氏が設立したＮＰＯ）
・向陽台薬局（事務長の江口氏が経営する薬局）
・退職後の住民（特に男性）
・市民祭り→協議体発足より前からある祭りで、この祭りに参加している男性のつながりがあったため、その後の協議体への男性参加につながった。
・各マンションでの体操など自主的な活動

４．居場所に関わる生活支援コーディネーターの活動について

■担当生活支援コーディネーター名：谷地中恵子氏（第 2 層ＳＣ）
■所属組織：地域包括支援センターこうようだい
■プロフィール：
地域包括支援センター歴：3 年（2019 年～）
第 2 層ＳＣ歴：2021 年～
居場所活動歴：2021 年～
20 代はアパレル関係で百貨店に 10 年間勤務。
30 代半ばから介護関連職でケアマネジャー資格を取得し、2019 年から地域包括支援センターに所属。2021 年に前任者からＳＣとして担当を引継いだ（コロナ禍で多くの活動が休止中の中での引継ぎだった)。連合会、第 2 層の協議体会議には 2020 年から参加。
現在は稲城市向陽台、長峰、若葉台エリアを担当。包括支援センターの仕事：ＳＣの仕事は 5：5 の割合である

■居場所への関わり方

すまいる向陽台の参加者名簿は地域包括支援センターが管理しているので、開催時には必ず誰かが顔を出す。谷地中氏自身は月１回位で参加している。

地域包括支援センター業務で、居場所利用の紹介をしている。すまいる向陽台の利用者から「すまいるネットでお手伝いがしたい」と前向きな声が聞けることもあり、有用な場所になっていると感じている。

■地域との関わり方

コロナ禍で対面での協議体会議開催が出来なくなってからは、居場所関係者が集まり、zoom を使用しての開催を開始。こうしたツールを有効に、日常に活用できるよう住民と共に考えている。

住民同士の「お互い様」の意識が強くあることが助け合いにつながっていると感じている。こうした現状について他市町村からインタビューを受けることもあり、意識がさらに高まるという嬉しい現象が生まれている。

「人が街をつくる」と考え、住民の意見は実際に会いに行き対面で話を聞くことを重視しており、住民の声の「瞬間」をつかむことがポイントだと考えている。

■ＳＣとしての経験や課題

ＳＣ初任者研修を受けた際「コロナ禍での会議等をこれからどうすればよいか困っている」と日野市の第１層ＳＣに相談したことがきっかけとなり、ソフトバンクの講習会「zoom の使い方講座」を実施することが出来た。2020 年 1 月以降は zoom で協議体を開催。第 2 層協議体は、市町村、民生児童委員、自主グループ、リハビリ専門職、郵便局、三和スーパー、コンビニ、図書館等も参加しており、zoom 会議を定期開催することで繋がりが途切れず連携できるようになったことが本当に大きな進歩である。

コロナ禍で活動休止中に「筋力が落ちてきた」という意見が寄せられ、「何か集まってできる場所はないか？」と“集まれる場所探し”を開始。エリア的に集える場所が少なく、なかなか難しいが健康維持のために活動場所を見つけたい。

会議の中で話し合った企画が立ち上がっていくことは大変嬉しく、提案に応えてくれる人がいることが有難い。

「すまいるネット」活動は、今後高齢者だけでなく子どもを持つ親向けなどにも伸びしろのある活動だと考えている。「何か地域貢献したいが、何をすればよいか分からない」という人にすまいるネットを紹介することもありこの活動が今後広がる可能性を感じている。

ＳＣにとって調整力は必要不可欠であり、場所と人をつなげる力がとても大事だと痛感している。

事例４：香川県高松市香南地区

１．訪問概要

居場所名	まんでサロン香南
訪問日	2021 年 9 月 6 日（月）
訪問場所(オンライン)	「まんでサロン香南」(高松市香南町横井 1028　香南地域保健活動センター)
ヒアリング対象	(居場所) 『まんでサロン香南』 運営・代表者 松下桂子氏、副会長 岡原美智代氏、事務局 長尾寿子氏 (第２層ＳＣ) 高松市社会福祉協議会 山口由美氏 / 野崎文氏 / 兵頭大祐氏 (所属先管理者) 高松市社会福祉協議会地域福祉課地域共生社会推進室 室長：久保典子氏 (行政側担当者) 高松市社会福祉協議会地域福祉課 課長　中條恵助氏　　課長補佐　森谷正伸氏

２．地域の概要

■基本情報

＜香川県高松市＞

人口（人）	424,530
総世帯数（世帯）	201,232
面積（㎢）	375
人口密度（人/㎢）	1,132
高齢化率（%）	28.7

（※2021 年 10 月 1 日現在　高松市統計書「高松市の人口」より）

＜高松市香南地区＞

人口（人）	7,083
総世帯数（世帯）	3,121
面積（㎢）	14.72

人口密度（人/㎢）	481.1
高齢化率（%）	29.5

（※2021 年 10 月 1 日現在　高松市統計書「高松市の人口」より）

■地域の特徴

<高松市全域>

H17～H18 年に高松市に 6 町が合併して、今は人口 42 万人弱。海、山両方があり、香川県の半分の人口を占める大きな都市になった。44 の小学校区に地区社会福祉協議会もコミュニティ協議会もあり活発な福祉活動を行っている。

<高松市香南地区>

高松市のなかでは南部に位置し、農地が 5 割以上の面積を占める。高松空港もあり、子ども園、小中学校がそれぞれひとつずつ。市中心部に通勤する人のベッドタウンにもなっているが、高齢化率は高松の中で高い方である。

香南町の人口は 7000 人強である。地域住民は顔の見える関係性があり、隣人がどんな人かわかっているような地域なので、コミュニティ協議会を中心に保健師、民生児童委員などの繋がりも濃い。活動場所の保健活動センターは香南町の中心にあり地域の中ではアクセスが良い場所で、市の出張所とも至近距離である。

■生活支援体制整備の状況（生活支援コーディネーターの配置状況）

配置先（配置組織）：高松市社会福祉協議会

第 2 層ＳＣ　15 名

・44 の小学校区に担当 2 名ずつを、15 人のメンバーで重複して担当している。

・生活支援体制整備事業としては平成 27 年度に 6～7 人のＳＣでスタート。44 の地域は 7 つの総合センターの管轄エリアに分かれ、現在はＳＣ、まるごと福祉相談員と兼務し活動している。ＳＣの年齢構成は 20 代～60 代までと幅広く、40 代がボリュームゾーン。事業開始当初はケアマネジャーが多かったが、社会福祉士などの有資格者も増えた。また、人員拡大に伴って新人が増えているので年齢にも経験にも幅がある。

３．居場所の活動内容

■活動概要

「まんでサロン香南」は女性の力を結集させて、子どもからお年寄りまでの居場所をつくってきた。現在の運営メンバーは女性のみで 34 名。元町議会議員の代表を筆頭に、さまざまな活動を行ってきた 60 代～80 代までが口コミで集まった。

平成 29 年から「高齢者居場所づくり事業」を第 1 水曜日と第 4 土曜日に、こども食堂を第 2・第 4 土曜日の 10 時～13 時まで開催。第 4 土曜日は高齢者と子どもたちが同時に集い、多世代交流ができ

る食堂にしたのが特色だ。

令和元年には、さらに気軽に立ち寄れる居場所が必要だとして、「かふぇ まんでサロン」を毎週水曜日の 9 時半～13 時まで開催するようになった。この事例集では特に、現在団体が力を入れており、頻度の高い居場所となっている「かふぇ まんでサロン」（以下、かふぇ）の活動に焦点を当てる。

かふぇのメニューは、コーヒーセット（300 円）とコーヒー（200 円）。100 円でコーヒー、60 円でパンを追加注文できる。提供するものは「せっかくならとびきりおいしいものを出したい（松下代表）」の言葉の通りのこだわりを発揮。コーヒーについて学んだこともある松下代表お気に入りの渋皮を取ったコーヒー豆を挽いて丁寧に入れ、パンは高級トースターで焼いている。パンとコーヒーのセットに加えて、ゆで卵と野菜、おまけのおやつと果物がついて、さながら喫茶店のモーニングメニューといったところだ。

かふぇの運営は各回約 4 名ずつの当番制で、担当者には毎回 400 円が支給される。「スマイル、スマイル」、「笑顔で明るく楽しく」が合言葉で、かふぇの始まりもいつもコーヒーの乾杯から。運営するボランティアメンバーにとっても、やりがいを感じられる居場所として機能している。

利用者は毎回 20 名くらいで、第 1 水曜日には居場所活動を終えてやってくる人もいる。気軽におしゃべりを楽しむ場ではあるが、その場に毎回ではないが「まるごと福祉相談員」の役割も持つＳＣがいて、支援につながるような相談も可能になっている。また、居場所利用者やかふぇによく来る人がしばらく顔を見せなかった場合は、電話番号がわかれば運営メンバーが電話してみるなど、見守りの機能も果たしている。

運営側としては、利用者が登録や予約をする手間が不要で、身構えずに来られる場所であることにこだわったそうだ。「週に一度会える人がいる喜び」は利用者の声としてあり、孤立になりがちな高齢

者にとって居場所が生きがいになり得るのだと実感している。

そのほか、「これまでお茶をする場所がなかったので精一杯おしゃれしてでかける場所ができた」という声、普段は歩くのもやっとの人が「杖が邪魔だから置いてきた」と元気にやってくる姿、夫の介護で疲れきっていた人がほっと一息つきに足を運んでくれている様子などから、活動の意義を感じるとヒアリングした女性メンバーたちが話して下さった。

■立ち上げの経緯・背景

松下代表によると、これまでも個々の福祉活動はあったが、せっかくの活動も横のつながりがないのはもったいないと感じていたそうだ。そこで、「同世代の高齢者の学び合い、未来の子どもたちのために行動したい」という共通する課題意識を持った人たちが集まるように個別に知り合いに声をかけた。

平成 29 年の「まんでサロン香南」立ち上げ時に、各団体の会長に協力を仰ぐなど人脈が豊かだったのは、合併前の町時代からの付き合いが残る地域である地の利もある。PTA なども含め、各種団体に声かけできる関係性があり、「メンバー1 人が 1 人を誘うくらいのクチコミの力」が発揮された。「地域愛が強い元気な女性が多く、『よっしゃ、一緒にやろう』という精神で集まってくれた（代表松下氏）」。現在、活動メンバーは LINE グループで繋がり、情報を密に共有できるのも強みだ。

居場所活動を始めたのが、ちょうど旧保健センターが空き、行政が運営する地域保健活動センターができた時期。この場所を使うことをＳＣが提案してくれたことで、家賃の心配なく活動場所を確保できたのも、活動を始めるに当たって大きな利点だった。

かふぇ立ち上げについては、そもそも高齢者が気軽に集まれる喫茶店やカフェのような場所がないことが気になっており、居場所としてそのような場所ができないかと考えたのが大きな動機だった。施設の使用に関しての手続きはＳＣが担当。ＳＣは他にも、社会福祉協議会の地域福祉活動促進事業の助成金、高齢者居場所づくり事業の補助金を見つけて申請をサポートした。補助をもらえたことで、のれんやエプロンを制作するなどの財源を確保することができたそうだ。

■コロナ禍影響下の活動について

コロナ禍では、原則的に「地域福祉ネットワーク会議」は中止。団体の運営方針以前に、市の施設利用の方針で開催を中止せざるをえない状況もあった。団体としても、政府の要請や地域内の情勢を鑑み、居場所の活動を行っていたので、かふぇ、居場所、こども食堂いずれも、緊急事態宣言下などでの開催中止を余儀なくされた時期もあった。

そんななかでも運営メンバーは居場所の必要性を感じていた。かふぇがあることで外に出たり、おしゃれをしたりする意欲が湧いている人たちを目の当たりにしているので、工夫しながら出かける場所、人と会話できる場所を確保しておきたい想いがあったのだ。そこで、かふぇ開催時には要望を受けてテイクアウトを実施。「これなら安心できる」とテイクアウトの形態で複数回利用する常連からも喜ばれた。

かふぇの話からは逸れるが、こども食堂では室内で多世代交流しながら調理することが難しくなったので、野外に活動の場を移した。香川大学の学生とも協力して「ひまわりプロジェクト」に参加。月 2 回の活動日に「出張こども食堂 in ひまわり畑」として、畑の観察などを行い、食育につなげること

ができたことは成果といえるだろう。

しかし、かふぇの存在意義でもある「集まっての飲食」自体が制限され、運営メンバーが集まるのも難しくなったので、こういった居場所の活動の存続には危機を感じている。運営のためのコミュニケーションも希薄になってしまう状況下で、これまで役員だけだったLINEグループだが、運営メンバー全員で共有するグループを作成。会えない分、密に情報共有するようにした。

高松市内全域の居場所活動についてはＳＣが教えてくれた。ひとつには、屋内から野外に活動場所を移して行ったサロンがあった。施設利用ができないために休止していたら、利用者のフレイルが悪化。「なんとしても開かなくてはいけない」という使命感によって、可能になったことだ。マイナスの影響としては、居場所運営のボランティアが半分くらいになってしまった活動もある。こうなるとコロナ禍明けの再開が厳しくなってしまうので、今後のことを心配しているそうだ。

■居場所からみた「カギとなるアセット」

組織運営に欠かせないといわれる「ヒト・モノ・カネ」の要素について、ＳＣへのヒアリング時にも言及されていた。したがって、この3つの要素に分けてカギとなるアセットについて挙げる。

まずヒトについて。先にも述べたが、小規模な地区内であることで、議員、社会福祉活動をしてきた人、ＳＣ、役場勤務とさまざまな役割を担ってきた人の情報共有ができている状況がある。元町議会議員の松下代表の人脈の広さもあり、要職についていた女性たちが自発的に参加してくれる素地があったのだ。さらに、第2層協議体の香南地区福祉ネットワーク会議の構成メンバー約20人は各種団体の地域リーダーから構成されており、顔を合わせる機会があったこともプラスに働いた。

上記のように密な人脈により構成された団体なので、LINEなどカジュアルな手段での連絡が取りやすいことは、特にコロナ禍ではコミュニケーション不足を補っている。運営メンバー＝香南地区のキーパーソンになるので、さまざまな情報が集まる場、発信ができる場になっている状況も、居場所を超えた地域づくりの観点からもカギだといえる。オンラインでヒアリングしていても、運営メンバーのパワフルさが伝わってくる。「70歳前後の人たちで合併前にいろんなネットワークが広がっており、地域愛が深い人が多い」とはＳＣメンバーの談である。

立ち上げ当初のＳＣが現在は居場所の運営メンバーになっていることもあり、現在もＳＣと居場所の関係は密だ。活動のほか、地域ケア会議などでも松下代表とＳＣは同席するので、月に3回くらい直に顔を見られる距離感である。

モノについて。これはなんといっても活動場所の地域保健活動センターの存在が大きい。
アクセスのしやすい地区の中心地に、家賃などの心配がなく自由度高く使える場所があったことで、居場所やこども食堂の活動、さらにかふぇの活動にまで展開できた。また、この場所は社会福祉協議会支所のすぐ隣にあって連携しやすい。

カネについては、家賃がいらないこと、立ち上げ時にＳＣの紹介で補助金などを利用できたことが大きい。現在もボランティアに継続性を持たせようと、カフェの運営には1回400円を支給。野菜などの食材は近所から寄付されるものも多く、経費を抑えられている。

４．居場所に関わる生活支援コーディネーターの活動について

■担当生活支援コーディネーター名：
ヒアリングに同席してくれたのは 4 人で、直接香南地区を担当していない方もいたが、全員が状況を把握した上で話してくれた。
・久保典子氏（室長・61 歳）、社会福祉協議会歴：5 ヶ月、資格など：保健師、助産師、ケアマネジャー
・山口由美氏（主任・52 歳）、社会福祉協議会歴：17 年、資格など：看護師、ケアマネジャー
・野崎文氏（副主任・44 歳）、社会福祉協議会歴：17 年、資格など：ケアマネジャー、歯科衛生士
・兵頭大祐（42 歳）、社会福祉協議会歴：7 年、資格など：社会福祉士、ケアマネジャー

■所属組織：高松市社会福祉協議会
高松市社会福祉協議会がＳＣ業務を委託された理由は、日頃から、地区社会福祉協議会や民協などの地域組織等と連携した活動をしていたことより、既につながりがあったため比較的相談、連携が円滑にすすめられていたことが大きい。また総合事業導入時期と重なっていたこともあり、第２層ＳＣに適切な資質と判断された。委託を受ける約 4 年前、2011 年頃から全社会福祉協議会からの要請で社会福祉協議会支援活動強化方針があり、地域のワークショップを開催するなどしていた実績も評価された。

■居場所への関わり方
居場所立ち上げ時には、定期開催している地域福祉ネットワーク会議で、担当ＳＣが地域アセスメントシート「わが町こんなとこシート」を活用し「ええとこ・いかんとこ・こんなんあったらいいな」を考えるワークショップを行った。実際の立ち上げ業務では、当時の担当ＳＣが女性だったこともあり団体から細かな相談をしてもらえるようになったが、ＳＣとしては「黒子」に徹することを意識している。情報提供や聞かれたことはきちんと調べて答えることには手を抜かないが、あくまで住民主導の原則は守る。
黒子としてサポートする部分としては、居場所開催時の記録や発信、補助金申請の手伝い、コロナ禍での対策のあり方、対策の周知方法などの情報提供、消毒などコロナ対策周知方法などが挙げられる。

■地域との関わり方
地域にＳＣが初めて入ったときはすべての地域ではないものの、「地域のことを知っているのか」「地域に押し付けるのか」など、活動が理解されず反発を招くことも多かったと当時のことを振り返る。そこからどうやって信頼を勝ち取っていくか。具体的な行動としては、地域のイベントに参加し続けて情報収集すること、ことあるごとに地域に足を運ぶことの大切さを重ねて強調された。今では、住民たちとスムーズなやりとりができるようになったＳＣも、活動をいかに理解してもらえるかに苦心しながら続けてきたという。
そうやって築いた信頼も、担当が変わる度に一から積み上げるのでは無駄が多すぎる。ＳＣが共有する社会資源を調査したアセスメントシート「わが町こんなとこシート」をもとにレクチャーを受けながら地域のことを引き継げるのは良い方法のようだ。また、前任者と一緒に 2 ヶ月くらいは現場に

行き、引き継ぎをするようにしているという。「相対する人たちの距離感を、実際に見せてもらいながら把握することができていい」と現場のＳＣは語る。

引っ張るのではなく「寄り添っていく支援」を意識しているので、ＳＣの関与の度合いは地域によってばらつきがある。住民が積極的につながって活動していこうとする香南地区のような地域では、既にある活動や関係性を元にしたネットワークの支援を行っている。

■ＳＣとしての経験や課題

まんでサロン香南の活動との関わりにおいては、顔を出してない人がいたらＳＣやまるごと福祉相談員につなげてもらう一方、孤立しがちな人がいたら居場所を案内するといった相互にサポートし合える状況をつくりだせている。さらに、居場所開催時にはＳＣが立ち会うこともあるので、利用者に認知症など心配な状態が見られたときには、行政につなげて支援が受けられるようにする循環も生まれている。

香南に限らず地域を俯瞰してみると、高松市は、自治会加入率 57%で、地域へコミットする割合が多くない前提がある。こういう地域では初動の難しさがあるようだ。高松市に限らず、ＳＣは地域に根差すことが第一の前提になるので、自治体加入率は活躍の難易度の指標のひとつになり得るとは高松市社会福祉協議会からの指摘だ。

活動を理解してもらう事に苦慮しながらも、現在は 7 年かけて 44 のコミュニティのうち 43 で活動ができるようになった。「それくらい関係性を作るのは時間がかかる」と事務局を努める社会福祉協議会の 2 人は口々に言う。

地域ごとに担当ＳＣを配置する上で、「42 万人に 15 名が適正か？」という問いも生まれる。ＳＣを統括する高松市社会福祉協議会の実感を伴った結論は、「求められることが多岐に渡っていることを考えると少ない」とのことだった。さらに制度上財源が限られていること、地域で活動してくれるキーパーソンを探すのが難しいこと、空き物件はあっても活動に使うとなると制約があることなどを課題として挙げていた。

社会福祉協議会にとって、ＳＣの配置は委託事業。ＳＣの仕事の役割を行政と現場が共通認識を持って進んでいくことが大切だというのは、現場のＳＣ、事務局共に感じていることのようだ。また、事務局としては「委託事業の範疇でできることに限りがあるので、社会福祉協議会自体で活動をどのようにフォローアップしていくかを考える必要がある」と話す。

５．生活支援コーディネーターの人材育成について

■ＳＣへの期待・人材育成について

現場からの声としては、「あらゆる相談を断らない」が基本理念としてある。表立ったキーマンにはならず、「地域のお節介氏」、「困ったときのＳＣ」として、いつでも後方支援できる存在になるのが理想と考えている。ヒアリング中も後方支援、黒子といった言葉がそれぞれのＳＣの口から幾度となく発せられていて、高松市社会福祉協議会の人たちにはかなり浸透した意識のようだ。

では、そのような組織では、現在までどのような研修が行われてきたのだろうか。行政や外部の研修

会には積極的に参加するようにしているのと同時に、社会福祉協議会内部の研修も行っている。外部研修の例としては、年に１回は香川県社会福祉協議会開催のＳＣ養成研修に参加、これまでにはさわやか福祉財団から案内される研修にも参加したことがある。また全社会福祉協議会開催の「住民主体の生活支援を考えるフォーラム」などにも積極的に参加し資質向上を目指している。

高松市社会福祉協議会の方達に研修について聞いた。研修を主催する場合には、「異なる立場の人に来てもらう」ことを意識しているそうだ。具体的には、行政、ＮＰＯ団体など異なる仕組みのもとで活動している人を講師に招く。また、現場で働くＳＣ自身がどのような研修が必要と考えているかを把握し、ニーズを満たす研修を設定することも大切にしている。

ＳＣの希望を聞いて研修を組み立てるのは、ＳＣ自身に「自分たちに必要なこと、足りていないことは何か？」と考えさせるためでもあるという。

ＳＣを統括する社会福祉協議会からみると、ＳＣが身に付けなくてはいけないスキルは多岐に渡るので、研修をうまく活用していきたい考えだ。必要だと思われるスキルを端的に挙げてもらうと、まちづくり、福祉教育など地域を活性化していくような素地などのキーワードが出てきた。災害時にボランティアセンターを立ち上げるのもＳＣを含めた社会福祉協議会の仕事であり、有事に備えた研修もしている。

そのほか、研修のアイデアとして、第二次アクションプランの勉強、特に経験の浅いＳＣには個別事例、行政との連携がうまくいった事例などから学ぶことが有効ではないかと提案してくれた。また、福祉活動を実践している地域住民とＳＣが共に個別事例について意見を交わすワークショップも有効なのではないかと考えているそうだ。

事例６：愛知県知多市岡田地区

１．訪問概要

居場所名	やまもりいこいの家
訪問日	2021 年 10 月 7 日（木）
訪問場所	「やまもりいこいの家」（愛知県知多市岡田字上中田 65-2）
ヒアリング対象	(居場所) やまもりいこいの家 山本氏/平野氏（元酒屋オーナー）/石川氏/富田氏/橋本氏/平野氏/加藤氏 (第２層ＳＣ) 特定非営利法人あゆみ　市川美千代 (行政側担当者) 知多市福祉部長寿課　江端秀和氏

２．地域の概要

■基本情報

＜愛知県知多市＞

人口（人）	85,061
総世帯数（世帯）	36,428
面積（㎢）	45.9
人口密度（人/㎢）	1,853.1
高齢化率（%）	28.0

(※知多市 HP 2021 年 11 月現在)

＜知多市岡田地区＞

人口（人）	7,931
総世帯数（世帯）	3,146
面積（㎢）	4.06
人口密度（人/㎢）	1,953.4
高齢化率（%）	26.4

(※知多市 HP 2021 年 11 月現在)

■地域の特徴

知多市は愛知県、知多半島の北西部に位置する。昭和 50 年代から発展してきた臨海部工業地帯と、名古屋市のベッドタウンとして発展してきた。

岡田地区は知多市の中部にあり、交通の便も良好な住宅地としての環境を持っている。かつて隆盛を極めた知多木綿産業の様子が色濃く残る古い町並みが残されており観光資源となっている。

■生活支援体制整備の状況（生活支援コーディネーターの配置状況）

知多市：

第１層　知多市福祉部長寿課　１名

第２層　5 中学校区（ブロック）ごとに１名+補助を配置。

配置先は知多市社会福祉協議会が２ブロックと、ＮＰＯ法人あゆみ、ＮＰＯ法人ゆいの会、ＮＰＯ法人だいこんの花。

３．居場所の活動内容

■活動概要

開催日：毎週月曜日～金曜日　開催　　9:30～15:00（常設のサロン）

　　プログラムは健康体操「スマイル体操」、音楽鑑賞会、DVD 鑑賞会、脳トレ、工作、誕生会など

参加費：100 円／人

※開催時間内は、いつ来てもいつ帰ってもいい。飲み物とおしゃべりを楽しみ、昼食を持ち寄り会食も可能。随時イベントも企画。

■立ち上げの経緯・背景

　知多市岡田で長年酒屋を営んでいた平野氏が高齢となり、店を閉じることになった。平野夫妻は閉

店後の店舗の有効活用について、同地区で「岡田なごやかサロン」を運営している勝﨑氏（同年会*で交流あり）に相談。さらに勝﨑氏があゆみＳＣに相談したことで、建物の存続と居場所開設への機運が一気に盛り上がった。

平野氏ご夫妻の酒屋は屋号の“やまもり”の名で地域の人に昔から良く知られており、街道沿いでバス停からすぐの好立地。高低差も少ないため歩きやすく、通いやすい場所にある。またこれまで近くには喫茶店もなく、高齢者が集える場所がなかったこともあり、あゆみＳＣは「このまたとない場所を空き店舗にしてしまうのは勿体ない」と考え、平野氏ご夫妻とも相談してサロン居場所設立のために動き出した。住民に向けて別地域のサロン見学会や勉強会を実施して協力者を募り、知多市介護予防日常生活支援推進事業補助金を申請し、店舗を居場所用に一部改装するための費用 100 万円獲得、常設サロンを立ち上げるに至った。

岡田地区は高齢化率が高いが元気な高齢者が多く「自分達で何かできないか」と考える人が多い。この「やまもりが長年地域に根ざした酒屋だったこともあり、常設サロンに生まれ変わったことを地域住民はとても喜んで、多くの参加が得られている。現在、1 日 15 人ほどが参加しており、90 代も複数いる。

運営のスタッフ 5 人は高齢者の接遇について研修を受け、利用者の方が楽しい時間を過ごせるよう日々、工夫を凝らしている。毎月 1 回のスタッフ会議では随時、問題点等について情報共有している。

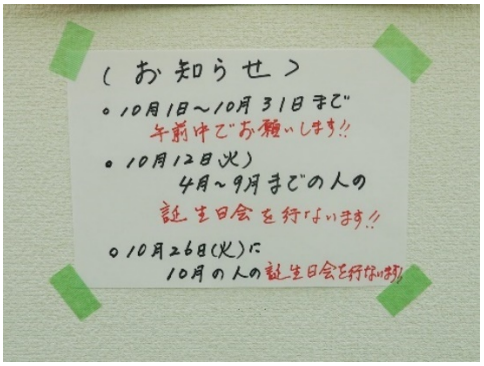
*同年会＝同じ年に生まれた人でつくる地域の親睦の会。厄払いや還暦会などを行う。

■コロナ禍影響下での活動について

コロナ禍での感染拡大防止の観点から DVD 鑑賞・音楽活動は休止。緊急事態宣言発令中はやむなくサロンを閉所した。

休業期間中に病気で亡くなられた方がいたことは大変大きなショックだった。その後、開所の際は居場所内の換気・参加者、スタッフへの体温測定、手指消毒などの徹底を実践。現在は週 1 回の健康体操「スマイル体操」を行い、皆の健康維持に努めている。

これまで参加していた人々の中で、コロナ禍でサロンに来ることを控えている人が増えているが、とにかく安否確認が重要だと考えており、現在は「お誕生日会」を「やまもりいこいの家」で開催して各人の様子、体調などをチェックしている。とにかくあの手この手でコロナ対策を必死でやっているというのが現状である。



■居場所からみた「カギとなるアセット」
・元酒屋（屋号の“やまもり”）を貸してくれた平野氏ご夫婦
・あゆみＳＣ（日々の相談にのってくれる、補助金申請のサポート、体操の講師など）
・「やまもりいこいの家」ボランティアスタッフ５人
（全員 70 代であり、若手がいないことで今後の後継者に不安も感じている）
・「岡田なごやかサロン」代表勝﨑氏（サロン運営の先輩）
・トライマム（あゆみの音楽ボランティアがサロンでも活動）
・知多市の補助金（知多市介護予防日常生活支援推進事業補助金）
・長寿会（老人会）のつながり
・リハビリ病院（病院に通う人が寄ってくれる。）
・農家（野菜やミカンをサロンで販売。サロンの利益は無し）
・岡田コミュニティ
（コミュニティが発行、敬老祝いとして配布する高齢者用 100 円クーポンチケット、サロンで使用可）
・地区内回覧板（サロンの PR チラシの回覧）
・元気な高齢者のやる気（自分が出来ることを提案する機会を求めている）

４．居場所に関わる生活支援コーディネーターの活動について

知多ブロック第２層生活支援コーディネーター　市川美千代氏（ＮＰＯ法人あゆみ）

■プロフィール
ＮＰＯ法人あゆみ設立代表。ＳＣ活動は５年目。
子育てを終えた 50 代で NHK 通信教育で福祉の勉強を開始してホームヘルパー2 級を取得。
知多市は 1990 年代から市民互助型在宅福祉活動が盛んで、先輩団体から学びながら 1998 年に自宅を拠点として『ＮＰＯ法人あゆみ』を立ち上げた。

■居場所への関わり方
「かつて岡田の町はとても賑わっていたが、今はかなりさびれてしまった。とにかくみんなで集まれる場所を作って活気を生み出せたら楽しいはず！」という思いを活動開始当初から抱いていた。これは閉じこもり防止や生きがい作りにもつながることである。さらに日常的に地域住民が困った時に助け合える関係をつくっておくことは重要であり、また居場所で楽しく和やかに過ごす時間を持ちながら人と会話することは認知症予防にもつながる。
日常的な近所付き合いの中から生活課題をいち早く発見し、さらに住みやすい環境づくりを目指す、という思いが形になったこの「やまもりいこいの家」への思いは非常に強く、ほぼ毎日様子を見に行っている。
「やまもりいこいの家」では、スマイル体操（健康体操）等をはじめ、各自が持っている様々なス

キル、アイデア、個性・得意分野を活かした参加者企画（カラオケ・折り紙など）を開催しており、連帯感は居場所にとって非常に重要なものとなっている。また、居場所における活動や企画は、マンネリ化しないように新しい取り組みを常に更新することが重要だと考えている。

ケアマネジャーを対象に居場所見学ツアーを組み、地域包括支援センターと「やまもりいこいの家」をつないで現状を理解してもらう活動も年１回実施している。

最近、市川ＳＣが気付いたのは、参加者が思いのほか「研修好き」な人が多いということ。これは日々元気に活動するための原動力にもなるのでは、ということで今後いろいろな研修を試みようと思案中である。

■地域との関わり方

「やまもりいこいの家」は開所後、多くの人々の協力で支援者・利用者の間の垣根がないサロンとして形づくられてきた。利用者自らが受け身ではなく自分の得意分野を発揮し、今ではそれぞれの持っている力を活かし誰でも活躍できる居場所になっている。

ＳＣとしてとにかく多くの人と会って会話することを意識し、居場所作りに必要なヒト・モノ・コトを見つけたらすぐにアタックするなど、アクションは早く、情報はすぐつなぐといったスピード感が重要だと考えている。キーパーソンとの関わりは特に重要で、半年がかりでじっくり時間をかけて醸成すべきだと考えている。

アナログな情報提供が実は確実に役立っている。「回覧板」の存在も大きく、ここに「やまもりいこいの家」での活動を情報提供・掲載することで広い地域に告知できている。

さらに新たに岡田地区で敬老祝いとして配布が始まった「岡田商店街」エリアで使える地域振興100円券。これを地元の人に地元で買い物をしてもらう、できればやまもりいこいの家でこの券を使ってもらえるような働きかけや企画、物品の用意なども居場所の皆で考えて取り組んでいる。

■ＳＣとしての経験や課題

名古屋市内から知多へ転居してきた市川氏。岡田地区でＮＰＯ活動を始めた当初は疎外感が大きく、自分の存在を認めてもらうまでにとても長い時間がかかったと感じているとのこと。昔からの地縁が強く残る地域で、地区外から来た自分がＳＣの活動をすることは簡単ではなかったが、ＮＰＯの仲間が助けてくれたことは大きな支えであった。誰一人孤立させない、という思いをもって活動をしてきて、参加者がサロン内に「助けて」と言える仲間が出来た時には大きな達成感を感じたと言う。

これまでのＳＣ活動を通して実感していることは、とにかく数多くの現場から人、地域、繋がりなどについて沢山学ぶことが自分のスキル・ノウハウを磨く方法だということ。特に人の話を「訊く」スキルは重要だと確信しているそうだ。

５．生活支援コーディネーターの人材育成について

■知多市役所福祉部長寿課　江端秀和氏

■ＳＣの役割・ＳＣへの期待

知多市ではＳＣをこれまで5年間、２地区を社会福祉協議会に、３地区をＮＰＯに委託している。ＮＰＯはテーマ型活動が得意、社会福祉協議会は地縁組織に強いといったそれぞれの強みがあると考えハイブリッド型にしている。

今後も行政が知り得ていない地域の実情をＳＣとして上手く調整し、促し、活動に活かしてもらいたい。生活支援体制整備事業においてＳＣは様々なことに対して中和する役目を担い、協議体の中でもコーディネーター的役割を期待している。

第２層ＳＣにはより「自主的なものを生み出す」意識を持ってもらうことで新たな活動が生まれるのでは、との思いを持っている。街づくりにおける難しい部分もＳＣの知識、現場力で切り開いて欲しいと考えている。

■人材育成（研修実施内容等）・研修への要望

知多市では愛知県の研修（基本研修　２回/年）を活用しており、ＳＣ向け研修会では地域資源をどうつなげていくか、対象者をどう繋げるかといった研修が行われている。

ＳＣには地域に対して「発想の転換」を促す役割を担って貰いたい。それと同時に地域への情報提供などのノウハウが必要だと考えている。

事例７：東京都板橋区高島平地区

１．訪問概要

居場所名	ゆずり葉
訪問日	2021 年 10 月 14 日(木)
訪問場所	ゆずり葉/居酒屋「笑い処」（東京都板橋区高島平８－４－８）
ヒアリング対象	(居場所) ゆずり葉　理事長 齊藤敦子氏 (第１層ＳＣ) 板橋区社会福祉協議会経営企画推進課地域包括ケアシステム推進係 係長 太田美津子氏、小林霧華氏 (第２層ＳＣ) 深町聰子氏、今津紘一氏、山田けい子氏

２．地域の概要

■基本情報

＜東京都板橋区＞

人口（人）	570,024
総世帯数（世帯）	317,322
面積（㎢）	32.22
人口密度（人/㎢）	17691.6
高齢化率（%）	23.87

(※データ版“区”資料編【令和３年度版区勢概要】2021 年４月１日付より)

＜板橋区高島平地区＞

人口（人）	49,396
総世帯数（世帯）	29,089
面積（㎢）	4.9
人口密度（人/㎢）	10,075
高齢化率（%）	30.73

(※板橋区町丁目別人口表　2022 年２月１日付より)

■地域の特徴

＜板橋区全域＞

板橋区の「板橋区高齢者保健福祉・介護保険事業計画 2023」において、国が掲げる地域包括ケアシステムを中核としつつシニア活動支援なども独自に加えた「板橋区版ＡＩＰ」を掲げており、誰もが年齢を重ねても安心して住み慣れたまち（地域）に住み続けることができるよう、７つの重点分野（(1) 総合事業/生活支援体制整備事業（2）医療・介護連携（3）認知症施策（4）住まいと住まい方（5）基盤整備（6）シニア活動支援（7）啓発・広報）を定めている。この「板橋区版ＡＩＰ」の推進をはじめ、利用者のケアプラン点検など要介護者・要支援者向けの保健サービスの充実、65 歳以上のシニア世代だけでなく、少し前のプレシニア世代に健康づくりと生きがいづくりの重要性を啓発・支援している点等が評価され、2020 年に日本経済新聞社が全国 792 市と東京 23 区を対象にした「第 3 回 介護・高齢化対応度調査」では板橋区は全国 2 位の評価を得た。

＜高島平地区＞

板橋区北部、荒川及び新河岸南岸に位置する地域で、区の人口の約 9%を占めている。高島平二丁目、三丁目には日本住宅公団により 1970 年台に完成した高島平団地が、六丁目には卸売市場やトラックターミナルなどの物流拠点が、そして八丁目には商店街が存在している。

高島平団地の入居が始まった当初から自治会等の地縁団体が組織され、現在に至るまで多様な団体が活発に地域づくり・地域福祉に関わっている。現在は、高島平地区で 70 以上のサロンが活動している。また、高島平地区内には、小学校 5 校、中学校 4 校、高校 2 校、大学 1 校（大東文化大学）の他、板橋区医師会病院、高島平中央総合病院がある。

＜生活支援体制整備事業の状況＞

板橋区では区全域に第 1 層ＳＣとして社協職員 1 名、区内 4 ブロック（板橋、上板橋、志村、赤塚）に第 1 層ＳＣとして社会福祉協議会職員各 1 名を配置。日常生活圏域として地域センターの管轄圏域に合わせて 18 の区域を設定しており、第 2 層ＳＣを配置している。現在 18 区域すべてにおいて第 2 層協議体（「支え合い会議」と呼称）が立ち上がっている。

板橋区の生活支援体制整備事業は、他の自治体で一般的に行っているように社会福祉協議会がＳＣを担うのではなく、協議体の運営を住民主体で執り行っているところに特長がある。まず地域の民生・児童委員、NPO、地縁組織など多様な主体に呼び掛け「地域づくりセミナー・準備会」を開催し、ここに参加した住民の中で第 2 層ＳＣと第 2 層協議体のメンバーを選出。選出方法も参加住民の中で話し合って決めている。第 2 層ＳＣは 14/18 地域で計 59 名が配置され（令和 3 年 5 月時点）内 34 名が住民、25 名は専門職（社会福祉法人、包括支援センター職員等）が担う。第 2 層ＳＣを住民が担うことで、地域に根差した継続的な活動が展開できる。

３．居場所の活動内容

■活動概要

ゆずり葉は高島平駅西口北側（駅南側に団地、北側に飲食店が多い）を出て徒歩 1 分の好立地にある。水曜日・木曜日の定休日を除く週 5 日 11：00～17：00 に活動しており、定休日を除き毎日行っ

ているサロン活動を中心に様々な活動が展開されている。全ての活動において居場所の代表齊藤氏が中心となりつつも、居場所に集う地域の方々に役割りを振りながらサービスの担い手/受け手の別なく活動がなされている。元々居酒屋だった店舗を改装して使用しており、現在も昼のゆずり葉の活動が終わると、同じ場所で開いている居酒屋「笑い処」にお客さんが集まってきて、ゆずり葉代表齊藤氏は今度は居酒屋の“ママ”としてカウンターに立つ。

＜サロン活動＞

誰でも参加できるサロンとして定休日以外毎日実施。板橋区社協の「福祉の森サロン」※に登録しており、広報や活動費助成といった支援を受けている。駅前商店街に繋がる通りに面した大きなガラス窓が特徴のゆずり葉は、通りがかりの人でも入りやすいデザインになっている。高島平の団地に住む高齢者はもちろん、蓮沼や坂下といった隣接する地域からやってくる方もおり、地域と程よい距離感を保ちたい方の居場所にもなっている。このサロンに参加した住民らによるネットワークが形成され、お互いの困りごとの助け合いに繋がっている。

また居場所に来る住民はトイレ掃除をしたり、パーティションの用意をしたり、皆さんが使用したマイカップやグラス洗いをしたりと、気を遣わずに自発的に手伝いをすることができる雰囲気になっている。

※「福祉の森サロン」・・・外出機会の少ない高齢者や障がい者、子育て中の親子などが定期的に外出し、身近な場所で気軽に集まり、おしゃべりや健康体操、情報交換など、仲間づくりができる場づくりとして板橋区社協が推進。福祉の森サロンに登録されたグループには活動費の助成（施設等の利用料やコピー代、消耗品代、お茶菓子代等の活動費として、年間 20,000 円（上限）を助成)、サロン保険の加入（保険料は板橋区社協負担)、広報活動支援・区民への情報提供、サロン交流フェスタの開催等の支援を行っている。令和 2 年 12 月時点で区内 346 のサロンが登録されている。

＜認知症カフェ＞

おとしより保健福祉センター（板橋区認知症施策推進係・各おとしより相談センター）の指導・援助を受けながら“地域のよき理解者が助け合える場所”として毎週火曜日午後 1 時半～3 時半に開催。カフェ終了後には「くつろぎタイム」として参加者が気軽に歓談できる時間を設けている。

＜体操/筋トレ教室＞

板橋区が推進・支援する「10 の筋力トレーニング」を中心に毎週 月・火　午前 11 時～午後 3 時半まで実施。区の支援により派遣されるリハビリテーション専門職が指導員となる。コロナ状況下においては居場所にあるモニターを使用して運動していた。1 回につき 13 人ほどが参加。

＜ランチ/弁当の持ち帰り＞

居酒屋の料理長が作るランチの提供（500 円+税）と、1 日 5 個程の弁当の持ち帰りも行っている。ゆずり葉にお弁当を取りに来られない方へは、来ている住民が配達をしたりして自然と助け合いが行われている。

＜見守り＞

齊藤氏が個人経営の電気店に勤めていたころから 20 年行っている“卵の共同購入”が見守りの役割りを果たしている。2 週間に 1 度、齊藤氏が養鶏場から買った生卵を、サロン参加者等事前に注文していた方に配布。卵は家庭で定期的に消費される食品のため、卵の注文数の変化から、2 人暮らしの方が一人暮らしになったことなどに気づくことができ、声掛けのきっかけとなっているという。また養鶏場へ卵を買いに行くのも活動を理解してくれている居酒屋のお客さんが手伝ってくれている。卵の共同購入による寄付は居場所活動の活動費にもなっている。

＜ゆずり葉農園＞

板橋区社会福祉協議会が受託運営している「いたばし総合ボランティアセンター」の花壇を使い、子どもからお年寄りまでが参加する農園。

「農林水産省農林水産政策科学研究所連携研究スキームによる研究」の委託費を活用し、ゆずり葉と東京都健康長寿医療センター研究所による協働プロジェクトとして活動。

ゆずり葉の仲間達が畑の困り事等を夜の居酒屋で話す姿に、夜のお客様達が次々と力を貸してくれる事になり（20 代～80 代）多世代が集う場となっている。

＜各種講座、研修＞

東京都健康長寿医療センターの専門家による認知症についての講座、区社協職員による見守り講座等を定期的に開催。さらに地域活動家達にも協力をお願いしている。

■立ち上げの経緯・背景

20 代のころから高島平団地で両親の経営する地域密着型の電気屋で働いていた齊藤氏は、電化製品の設置や故障の相談といったサービスのために、顧客である団地住民の家の中に入ることが多かった。その仕事の中で、大事なモノを何度も無くしたり、生鮮食品を箪笥にしまったりといった行動をとる高齢者を目の当たりにし、当時は認知症についての知識があったわけではないが、高齢者の家族に異変を知らせる等のサポートを行うようになっていた。その後 2011 年の震災の経験を経て、地域への恩返しをしたいという気持ちから、2016 年、板橋区シニア活動支援係主催の「コミュニティビジネス（CB）・シニア社会参画・社会貢献」に入門し、居場所勉強会に参加。居酒屋の建物を活用した居場所の立ち上げを徐々に形にして行く。

■コロナ禍影響下の活動について

緊急事態宣言下ではサロン活動は休止するも、比較的リスクの低い農園と卵の受け渡し、弁当の持ち帰り活動を継続して行い見守りの活動を止めなかった。

■居場所からみた「カギとなるアセット」

・居酒屋の店舗、居酒屋に来る客（店舗の雰囲気から老若男女問わず入りやすい場所）
・助け合い活動や地域づくりに関心が高く地域に対する愛着の強い高島平の住民
・活発な自治会・町会活動と地域自治の精神（自治会活動の経験豊富で、住民同士活発に意見交換し協議することに慣れている）
・電気屋時代の顧客、経験
・板橋区社会福祉協議会、いたばし総合ボランティアセンター
・東京都健康長寿医療センター研究所、ココからステーション（医療センターの出張所）
・板橋区おとしより保健福祉センター
・シニア世代コミュニティビジネス推進事業の勉強会
（板橋区健康生きがい部 長寿社会推進課シニア活動支援係主催）
・福祉の森サロンネットワーク（区社会福祉協議会主催のサロン運営者による会議）
・板橋区の補助金（認知症カフェ運営補助金）→立上げから 3 年まで活用
・通所型サービスＢの補助金（板橋区健康生きがい部 介護保険課介護予防係）
・現在に至るまでの取引先の多岐にわたる協力者

４．居場所に関わる生活支援コーディネーターの活動について

■担当生活支援コーディネーター名： 小林霧華氏（第２層ＳＣ）
■所属組織：板橋区社会福祉協議会
■板橋区では区全域の第１層ＳＣを板橋区社会福祉協議会経営企画推進課
地域包括ケアシステム推進係（太田美津子氏）が担当。
板橋・上板橋・志村・赤塚の４ブロックに同課職員が４人配置されており、高島平地区のゆずり葉がある志村ブロックは小林霧華氏が担当。

第 2 層協議体・ＳＣを設置するために高島平で開催された「地域づくりセミナー・準備会」では、初回 90 人ほどの住民が参加し、会則の策定や協議体メンバーの枠の設定を住民主導で行い、互選によりＳＣを決めた。高島平協議体（「支え合い会議高島平」）メンバーには町会・自治会、社会福祉法人、UR 職員、サロン・NPO 代表、区職員、地域包括支援センター職員、社会福祉協議会ＳＣ（小林氏）等が設定され、3 人の第 2 層ＳＣが選ばれた。第 2 層ＳＣは 3 人とも民生・児童委員や自治会役員であったり、自身でもサロンを開催しており、ＳＣとしてだけでなく様々な顔をもった住民として頼りにされている。高島平については元々住民主体の居場所が多いため、ＳＣとしては新たなサロンを無理に立ち上げるような支援ではなく、すでにある居場所等に対する支援を行うという方針をとっている。

＜第 2 層ＳＣ＞

H29 年 2 月より 3 人の住民（60～70 歳代）が着任。第 2 層ＳＣとしては地区ネットワーク会議（医師会、民生委員、町会、福祉関係機関等の集まり）、地域ケア会議、リハビリ専門職との連携会議（板橋区主催）等に出席しており、そこで得た情報は協議体で共有するようにしている。まだ協議体の認知度は低く、他の会議に参加することは協議体を知ってもらえる機会であると捉えている。今後の課題としては団地内だけでなく団地を超えた住民同士の助け合いの仕組みを作りたいと考えている。また、高齢者や子育てについて困った人が来てワンストップで相談できる場所としてＳＣの拠点となるような場所が作れないか検討を進めている。

・深町聰子氏
高島平八丁目町会、元民生・児童委員。
ゆずり葉 齊藤氏とは家が近隣のため小さなことでも頻繁に話している。医療関係者にサロンでの講演の依頼をする際、関係者との繋がりを持てずに困っていた齊藤氏に対し、訪問診療医に直接交渉してサポートを行った。現在もゆずり葉創設の箸技道認定証の筆記を担当してくれている。

・今津紘一氏
高島平二丁目団地自治会、地区民生・児童委員協議会長。
ゆずり葉を近くの住民に紹介したりポスターを団地に貼る等の協力や運営相談に乗っている。

・山田けい子氏
民生・児童委員。
知り合いとして 2017 年以降ゆずり葉の体操やランチの活動を手伝っていた。通所型サービス B の活動として山田氏に日当が出ていたが、ゆずり葉の運営費として寄付していた。ゆずり葉の活動に関わることは楽しく、居場所に来ている方の様子を見ながら相談に乗ったりできることで充分だという気持ちがあり日当の受取を辞退して協力していた。
「高島平シニアガイド」※を作成した際には裏表紙に第 2 層ＳＣの連絡先を掲載し、これを読んだ住民から地域内の様々な相談を受け関係諸機関へつなげた。

※高島平第 2 層協議体で作成した冊子でサロンや福祉施設を紹介している。第 2 層ＳＣ等の協議体メ

ンバーが掲載先の取材と、冊子の全戸配布を実施。

＜第１層ＳＣ＞
・小林霧華氏
第 2 層協議体以外にも関連する会議やイベントにはほとんど参加し運営等のサポートを行う。社協の他事業と兼任している部分があるが大部分はＳＣとしての業務を行う。

■課題
・生活支援体制整備事業は制度上、創出した活動の実施主体になることを求められていないことから、新たな地域活動の担い手や協力者の獲得が課題である。
・生活支援体制整備事業は介護保険事業ではあるが、社会福祉協議会としては PTA、若者、子育て世代に積極的に関わり、協議体の活動を発展させたいと考えている。

５．生活支援コーディネーターの人材育成について

■ＳＣの役割・期待
・（第２層ＳＣについて）地域に根差し継続的に活動してくれる方が適していると考えている。
・（第１層ＳＣについて）地域住民と関係性を構築しコミュニケーションを取りながら事業を展開させていく視点が必要だと考えている。

■ＳＣの人材育成（第２層ＳＣに関して）
板橋区では第 2 層ＳＣを住民中心に担っているため、東京都等が実施している社会福祉協議会職員や地域包括支援センターの職員を想定している研修に加え、区独自の研修を区社会福祉協議会が実施している。第２層ＳＣが感じている課題や要望に合わせて第１層ＳＣがテーマを設定し企画している。第２層ＳＣ中堅研修では書面/オンラインにて 3 回連続で開催しＳＣの役割について学んでもらった。またコロナ禍においては外に出向いての活動が制限されている第２層ＳＣに対してモチベーションを保ってもらうということも意識して開催した。コロナ禍においては協議体の開催が制限される中で、知識や情報を習得するために、国の動向等のより専門的なテーマの研修や見守り等の活動につながる研修を組み合わせて開催した。第１層ＳＣとして研修後には、第２層ＳＣに対しアンケートやコロナ禍での活動における課題の聞き取りを丁寧に実施し、コミュニケーションやフォローアップを重視している。

■ＳＣの人材育成（第１層ＳＣに関して）
東京都主催のＳＣ研修等を受講する他、ＳＣ研修以外でも事業の発展に関連があるものは積極的に受講している。

事例８：鳥取県鳥取市河原地区

１．訪問概要

居場所名	ふれあい食堂
訪問日	2021 年 10 月 23 日（土）
訪問場所	「ふれあい食堂」 （鳥取県鳥取市河原町渡一木 277-1 河原町コミュニティセンター　大講堂）
ヒアリング対象	(居場所) ふれあい食堂代表：大門康裕氏（河原人権福祉センター所長） ふれあい食堂運営メンバー：ＳＣ佃亜紀氏 (第１層ＳＣ) 鳥取市社会福祉協議会地域福祉課　宮崎和義氏 (第２層ＳＣ) 稲鳥取市社会福祉協議会地域福祉課地域支え合い担当　西尾宏美氏 (行政側担当者) 鳥取市役所総務部人権政策局 鳥取市中央人権福祉センター所長　川口寿弘氏

2. 地域の概要

■基本情報

＜鳥取県鳥取市＞

人口（人）	188,465
総世帯数（世帯）	77,029
面積（㎢）	765.3
人口密度（人/㎢）	246.3
高齢化率（%）	29.4

（※2020 年度 国勢調査/ 都道府県・市区町村別の主な結果より）

＜鳥取市河原地区＞

人口（人）	6,920
総世帯数（世帯）	2,506
面積（㎢）	83.62
人口密度（人/㎢）	82.7
高齢化率（%）	38.4

(※2020 年度 国勢調査/ 都道府県・市区町村別の主な結果より)

■地域の特徴

＜鳥取市全域＞

鳥取市全域と各地域包括圏域（中学校圏域）の福祉推進主体として、社会福祉協議会、地域包括支援センターの他に重要な機関として人権福祉センターがある。鳥取市における人権福祉センターは、地域における人権啓発及び福祉活動の拠点として生活上の各種相談事業や人権課題の解決のための事業を総合的に行うため、市全域（鳥取市中央人権福祉センター）と各地域 10 か所に設置されている機関である。鳥取市隣保館条例の一部が改正された際に、隣保館を人権福祉センターに名称を変更して現在に至っている。

また鳥取市には高齢者の見守り、地域づくりとしては社会福祉協議会の事業に愛の訪問協力員・となり組福祉員設置事業がある。愛の訪問協力員は 65 歳以上の一人暮らし高齢者に対して日常的な見守り、声掛けを行うことで緊急時における支援体制の構築を図ることを目的とし、民生児童委員が協力員を選出している。となり組福祉員は地域の困りごとの発信役として町内会から選出され、地域の福祉的な要望や課題を地域包括支援センターや社協、民生児童委員等につなげることを目的としている。

鳥取市の地域福祉の状況としては、ふれあい・いきいきサロンの数は増加傾向にあり、平成 24 年度の 238 団体から、令和 2 年度には 392 団体に増加している。また鳥取市の市民活動の特徴として、地域食堂の活動が近年活発に行われていることが挙げられる。市民活動拠点アクティブとっとりの登録団体数（後述する河原共助会も含まれる）は令和 2 年度時点で 157 団体であり、平成 29 年度の 156 団体から大きな変動なく推移している一方で、鳥取市内の地域食堂数は平成 27 年度に 1 団体、29 年度に 10 団体、令和 2 年度に 18 団体と大きく増加傾向にある。

＜鳥取市河原町＞

河原町は鳥取市南部に位置する地域で 2004 年に鳥取市に編入合併され、河原町から鳥取市河原町となった。町の中心地では千代川と八東川が合流する自然豊かな町で、地域内には中学校 1 校、小学校 3 校、公民館 5 ヵ所がある。

＜生活支援体制整備の状況＞

鳥取市では生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員と呼称）には市社協職員が配置されており、第 1 層圏域は 1 名（宮崎和義氏）、第 2 層圏域 7 エリアは各エリア 1 名ずつが担当している。なお、現在第 2 層の 1 エリアで担当者が産休に入っており、別の 2 名が他エリアと兼任して担当している。また第 2 層協議体の設置が準備段階の地域、立ち上がったばかりのエリアもある。

３．居場所の活動内容

■活動概要

毎月第 4 土曜日 10：00～14：00 に河原町コミュニティセンターの大講堂にて開催される多世代を対象とした地域食堂。参加費はこども（高校生以下）無料、大人 100 円。ランチを提供する他、子ど

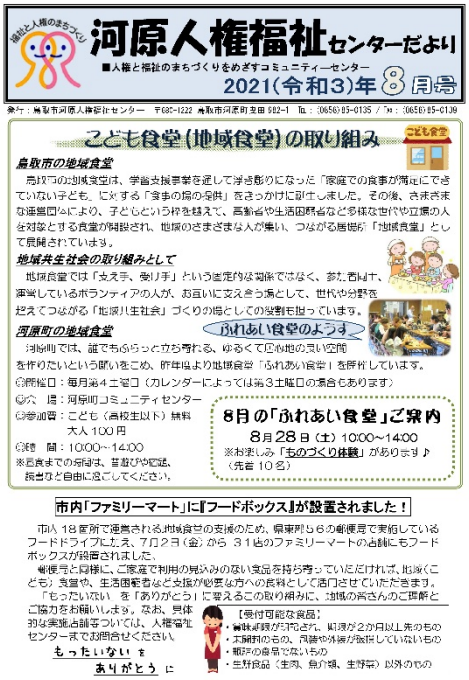
も向けにけん玉・コマ等の昔遊び体験や、学習支援を実施している。食堂で提供されるランチはその時に寄贈された食材・食品をもとに献立が決められているが、毎回品数が多く（訪問した日は１０品目以上もあった)、栄養バランスはもちろん子どもの好きなデザートを入れるなど工夫がなされている。食事を運営スタッフも一緒に食べたり、食後は参加された方々が自発的に食器の片づけを行ったりと、ボランティアと利用者が一緒に食堂を楽しんでいる様子が見られた。

■立ち上げの経緯・背景

2020 年 9 月、新型コロナウィルスの影響が大きかった時期に河原町で立ち上がった「ふれあい食堂」は、河原人権福祉センターの所長、大門氏が代表を務めている。毎回広い会場が 50 人程の参加者で満席になるこの食堂の立上げには、大門氏の前職での経験が大きく関わっている。大門氏は河原人権福祉センターの所長に着任する前の 2018 年、鳥取市中央人権福祉センターに所属していた。鳥取市中央人権福祉センターでは鳥取市と周辺地域圏での地方創生の一環として鳥取市地域食堂ネットワークを 2017 年に創設し、地域食堂の継続的・安定的な運営を支えるために、運営団体・支援団体・行政の連携による仕組み作りを行っている。大門氏はこの鳥取市地域食堂ネットワークの活動のなかで地域食堂・子ども食堂運営者とつながりをもち、子ども食堂に対する興味をもつようになる。

その後 2019 年に河原人権福祉センターに着任した大門氏は、河原で子ども食堂を開催するという計画が着任以前からあったことを知りすぐさま行動に移した。まずは試験的な試みとして山間部の河原人権福祉センターと中心部の河原町コミュニティセンターとで 6 回の食堂開催を行った。試験開催で分かったことは、高齢者の参加者が想定よりも多かったということであった。そこで高齢の方でも立ち寄りやすいようにと「こども食堂」でなく「地域食堂」という位置づけで開催することにした。また試験開催時に積極的に参加してくれた地域の方に声をかけボランティアを集め、食堂の運営ボランティア団体として「河原共助会」を立ち上げる。

現在は 20 人近くになる「河原共助会」が献立の作成から調理、会場設営を行う他、地域住民以外にも民生委員や地域包括支援センター所長、西尾ＳＣも所属しており食堂における相談機能も担っている。試験開催も順調に回を重ね、運営ボランティア団体も組織できたところで 2020 年 9 月「ふれあい食堂」が本格スタートすることとなった。



河原人権福祉センターだより

■人権と福祉のまちづくりをめざすコミュニティーセンター

2021(令和3)年8月号

こども食堂(地域食堂)の取り組み

鳥取市の地域食堂

河原町の地域食堂

ふれあい食堂のようす

8月の「ふれあい食堂」ご案内

8月28日(土)10:00~14:00

※おまかせ「ものづくり体験」があります♪

(先着10名)

市内「ファミリーマート」に『フードボックス』が設置されました!

もったいない を ありがとう に

【受付可能な食品】

・賞味期限が3ヶ月以上、期限が2か月以上先のもの

・未開封のもの、汚損や外装が破損していないもの

・瓶詰の食品でないもの

・生鮮食品(生肉、魚介類、生野菜)以外のもの

■コロナ禍影響下の活動について

ふれあい食堂を開催している大講堂は、広く使えて換気もしやすいという環境から集まって食べる事に関しての不安は大きくはなかった。その一方で調理室は比較的狭かったため、感染者が増えた2021年8月の1回については休みとした。その後は体温測定、消毒、パーテーションの利用をしながら活動を継続している。また、再開後の初回9月には調理が簡単なため調理スタッフが少なくても作れるカレーを提供するという工夫も行った。感染症のリスクが大きい中でもふれあい食堂が継続して活動してきたのには「みなさんの食堂に行きたいという気持ちをしぼめないようにしなければ」、「ふれあい食堂は地域の常夜灯、地域の灯台でありたい」という大門氏の想いがあった。

■居場所からみた「カギとなるアセット」

・運営ボランティア「河原共助会」

大門氏、児童館厚生員、ＳＣ西尾氏、民生委員、地域住民等20人程度が調理や会場設営を行う。専門職も運営ボランティアとして参加していることで、参加住民がより相談がしやすい環境となっている。

・手話通訳のできる住民

手話通訳のできる住民が4人ほど参加しているため、参加者に数人いるろう者の方も参加しやすい環境となっている。

・児童館、佃氏

食堂から2Km程にある下佐貫児童館の厚生員であり、ふれあい食堂の運営の中心となっている。児童館だよりにふれあい食堂の開催について掲載するなど広報を行っている。また、食堂に来る親の子育てに関する相談も受けている。

・企業：弁当工場、食品メーカー
NHK の取材でふれあい食堂が取り上げられたのをきっかけに企業が声を掛けてくれるようになり、食材の支援につながった。企業側も食堂への支援を社会貢献実績として広報に活用している。
・近隣の学校：中学校校長、小学校校長
大門氏のご家族の関係で元々つながりのあった中学校・小学校の校長らは、食堂でのものづくり教室や食堂での職場体験（コロナ禍で職場体験を企業でなかなか受け入れてもらえないため、ふれあい食堂で受入れを行うというもの）について大門氏と企画している。まだ実現に至っていないが校長達は自ら食堂に参加し大門氏と密な連携関係にある。
・行政：鳥取市、地域食堂ネットワーク
・学生ボランティア：ユリイカ
市内の地域食堂を中心に調理ボランティアや学習支援ボランティアを行う大学生ボランティアグループ。ふれあい食堂の調理場では地域の高齢ボランティアに教えてもらいながら作業している。

４．居場所に関わる生活支援コーディネーターの活動について

■担当生活支援コーディネーター名：西尾宏美氏
■所属組織：鳥取市社会福祉協議会 地域福祉課地域支え合い担当　鳥取市第２層生活支援コーディネーター
■プロフィール：
ＳＣ歴３年８か月。子育てのため一時勤務を離れ、子育てがひと段落したため復職。社協勤務歴は約８年。前任ＳＣはなし。
＜担当地域＞河原、佐治、用瀬の３地域担当。鳥取市への吸収合併前は３地域とも八頭郡だった。河原での第２層協議体の立上げにより、担当３地域すべての協議体の設置が完了した。

■居場所への関わり方
元々河原人権福祉センターと関わりがあり、立上げ時に大門氏に声を掛けられ令和元年の食堂の試験開催から関わっている。
河原共助会の一員として地域の方と一緒に調理などの作業を行う。作業を行う中で高齢のボランティアさんからは「家ではお嫁さんが全部してくれるけど、ここ（ふれあい食堂）では自分のペースでできるけえ、ここはすごく楽しい」といった話を聞くこともあり、役割・出番の重要性を感じている。
地域を回る中で「ひとりで寂しいだが、、」という高齢者の話を聞いた時には食堂のチラシをお渡しして紹介している。元気な高齢者に対しては、ボランティアとしての参加を促している。
気軽に相談できる先として地域の方に地域包括支援センターを知ってもらおうと考え、鳥取市南部地域包括支援センター所長や職員に食堂の活動に参加してもらうよう声を掛けたところ、地域包括支援センターとしても地域を知る機会として有効であると捉えてもらい参加してくれるようになった。

■地域との関わり方

普段から民生委員とコミュニケーションとり、地域課題を見つけられるよう意識している。

地域包括支援センターのケアマネージャーから、制度の狭間にあったり地域から孤立してしまったりしているケースを地域の方に自然に知ってもらえる方法はないかと相談を受けた西尾氏は地域の支援が必要な方をマッピングした「支え愛マップ」を作成。ある集落を対象とした支え愛マップの説明会では、集落の 15 世帯中 12 世帯の方が出席し、支援が必要な方（子が知的障害で親は高齢というケース）が自ら集まった地域の方に情報共有することもできた。今後、災害時にマップを活用できるよう計画している。

地域ケア会議にはＳＣとして毎回出席し、食堂等関わっている居場所の紹介をしている他、ケアマネージャーを介して居場所活動に参加したい高齢者を紹介してもらい、西尾氏が同行し居場所へとつなげている。

コロナ状況下で各地の居場所活動が開催できなかった時には自転車で地域をめぐり、改めて地域の様子を知るという試みを行った。

■ＳＣとしての経験や課題

ＳＣになりたての頃は関係づくりができておらず、どこに相談して良いか分からなかったため孤立感はあったが、ふれあい食堂に関わるようになったり支え愛マップを作成する中で、大門氏始め様々な機関や地域住民と繋がれるようになった。今後は河原地区で第２層協議体を立上げ、地域課題を協議体に上げることをしたい。10 月 28 日に１回目を予定。最初は関係機関の方に入ってもらい、その後は地域住民の参加も考えている。

ふれあい食堂としてはより多くの方に参加してもらえるように新規参加者を増やしていくための支援をしたいと考えている。

５．生活支援コーディネーターの人材育成について

■ＳＣの役割・期待

西尾ＳＣ：

ＳＣは地域住民と地域包括支援センターなどの機関を繋ぐパイプ役であり、地域で孤立している高齢者を地域コミュニティーへ戻す役割があると考えている。

鳥取市第１層ＳＣ宮崎氏：

生活支援体制整備事業におけるＳＣの立場については、住民の暮らしをよくするための取り組みであり、あくまで主役は住民であることを意識し活動をして欲しいと考えている。

■ＳＣの人材育成

西尾ＳＣ：

移動支援のニーズがあり情報を集めたかったため、移動支援について学べる研修を受講した。

鳥取市社協ではＳＣ向けの独自研修は実施していないが、鳥取市中央人権福祉センターと他の社会福祉法人と合同で相談研修を開催しており、個別事例についてや鳥取市の重層的支援体制整備事業について学ぶ場としている。福祉関係者と地域住民の福祉学習のプラットフォームとして「まなびば」を開催し、地域住民の健康についてや集いの場についての状況を共有し、今後の方針を検討する説明会を開催している。

事例９：奈良県葛城市新庄中学校区

１．訪問概要

居場所名	畑活プロジェクト「はっぴぃ農園」
訪問日	2021 年 10 月 28 日（木）～ 29 日（金）
訪問場所	畑活プロジェクト「はっぴぃ農園」（奈良県葛城市笛吹 546-1）
ヒアリング対象	(居場所) 畑活プロジェクト「はっぴぃ農園」運営・代表者：新庄セブンつながりレンジャー （第２層協議体）田村登志子氏、高原郁子氏、米田恵子氏、安川賴子氏 (第１層ＳＣ) 大山洋治氏 (第２層ＳＣ) 田口研一郎氏 (行政側担当者) 葛城市役所長寿福祉課　仲村恵美氏

２．地域の概要

■基本情報

＜奈良県葛城市＞

人口（人）	36,832
総世帯数（世帯）	13,288
面積（㎢）	33.72
人口密度（人/㎢）	1,092.3
高齢化率（%）	28.2

(※2020 年度 国勢調査/ 都道府県・市区町村別の主な結果より)

＜葛城市新庄中学校区＞

人口（人）	21,560
総世帯数（世帯）	8,739
高齢化率（%）	26.9

(※2022 年 3 月現在　住民基本台帳より)

■地域の特徴

＜葛城市全域＞

葛城市は、平成 16 年 10 月 1 日、旧新庄町と旧當麻町の 2 町が奈良県内初の合併により誕生。近鉄南大阪線、近鉄御所線、JR 和歌山線によって京都・大阪方面と結ばれ、大阪方面からの車によるアクセスでは、最寄りのインターチェンジである葛城インターチェンジと大阪・松原ジャンクション（西名阪自動車道）は、約 15 分で結ばれる近距離にある。

子どもの医療費助成を奈良県内でもいち早く実施するなど、子育て環境に惹かれての転入者も多い。奈良県内 12 市のなかで、唯一人口が増えている地域だ。

平成 16 年の合併前、當麻町では不登校対策にもいち早く取り組んでいた。旧村単位での村意識、愛郷心も残っている。

豊かな自然があり古代からの歴史と文化の香り高い街だ。国宝・當麻曼荼羅をはじめ数多くの国宝や重要文化財を伝える當麻寺、我が国最古の官道である竹内街道、相撲発祥の地であることなど、名所・旧跡が多い。

＜葛城市新庄地区＞

葛城市内には特急が止まる駅があり、大阪まで行くのに 30 分の好立地。ベッドタウンとしての需要も大いにありそうだ。家族で暮らすとなると新庄地区内でも、駅に近い場所より山がちな高台の方の宅地開発が進み移住者が増加している。

新庄地区内で畑がある笛吹という地区名は、古代よりこの地が笛吹連の本拠地であったことに由来している。新庄地区にある葛木御県神社には「戞羅城薬（かつらぎくすり）」と呼ばれる虫歯に効能のある薬も伝えられていた。笛吹神社は、近年では鬼滅の刃のキャラクターの 1 人に縁の神社として人気を呼んでいる。

■生活支援体制整備の状況（生活支援コーディネーターの配置状況）

・第 1 層ＳＣ　1 名　葛城市社会福祉協議会、社会福祉協議会の地域福祉担当と兼務

・第 2 層ＳＣ　1 名：葛城市社会福祉協議会、社会福祉協議会の介護保険福祉担当と兼務

※便宜的に階層ごとに担当を分けているが、行動や情報共有は 1 層・ 2 層区別なく行っている

・二つの中学校区圏域（新庄・白鳳）に協議体が設置され、2 人のＳＣが 2 圏域に関わっている。

・平成 27 年から大山氏が第 1 層コーディネーターになり、協議体立ち上げの準備を開始し、平成 30 年には第 2 層コーディネーターとして田口氏が加わった。

３．居場所の活動内容

■活動概要

新庄中学校区第 2 層協議体「新庄セブンつながりレンジャー」のメンバーの発案で、コロナ禍でも密にならない活動として 2020 年 11 月から「畑活プロジェクト」を開始。毎週 1 回・土曜日の午前

中に「はっぴぃ農園 in 笛吹」に集まり、農作業をする活動だ。「デイサービスセンター笛吹」の裏にあった耕作放棄地を耕作地に変え、季節に合わせて苗の植え付け、栽培、収穫など一連の農作業を行っている。

毎週土曜日の参加者は、運営を担う協議体メンバー5 人も含めて親子参加もあり 10 人ほど。活動地域である笛吹地区の周辺からやってくる。また、はっぴぃ農園は「デイサービスセンター笛吹」の裏であることから、通所者が畑に顔を出すことも。農業経験者もおり、元気に指導してくれることもあるそうだ。この畑から歩いて数分の場所には第 2 の畑も誕生。この近くで夏休みのラジオ体操が行われるため、ラジオ体操後の小学生に声をかけて参加に繋がった例もあった。活動時間は、夏季は熱中症対策のため 6 時半から開始。作業の少ない冬場は不定期に活動している。

通常の作業に加えて、玉ねぎの苗植え、さつまいも堀りなどはイベント化して、畑活メンバー以外にも広く参加を募ったところ、親子連れなど高齢者以外の参加もあり、多世代交流につながるきっかけになった。収穫できた野菜は畑活参加者で分け合うが、一部は高齢者向けの配食サービスに提供。今後は市内で活動しているこども食堂の食材に使ってもらうなどの活動にもつなげていく予定だ。

まだ活動が始まってやっと 1 年。当初からの課題として、居場所として運営するなら介護予防も兼ねなければならないことがある。その条件を満たすための活動になっているか、運営メンバーにとっては手探りの部分も多かったが、2021 年秋に実施した芋掘りで自信を持てたという。

運営メンバーらは、「杖をついて歩くのがやっとのような高齢者でも、鍬を持つと体を上手に使って耕すようになることもある」「認知症でコミュニケーションが難しいと思っていた人でも、農業の経験から作業について明晰に教えてくれる姿が見られた」など、役立っていると実感した例を挙げてくれた。支援される側だと思っていた人が、役割を得て生き生きする姿、笑顔になる様子を発見したことで、居場所づくりの意義を感じ、活動にもより張り合いが出たようだ。

■立ち上げの経緯・背景

居場所自体はコロナ禍で立ち上げたので次の見出しに譲り、ここでは居場所と不可分の運営団体の立ち上げの経緯や背景についてまとめる。大きな特色として、畑活の運営団体＝葛城市の第２層協議体となっていることが挙げられる。

2017 年 12 月に葛城市社会福祉協議会主催で、住民フォーラム「みんなでつくろう助け合いのまち」を開催。約 200 名の参加者から協議体の活動に興味がある人に手を挙げてもらい、3 回のワークショップを経て、2018 年 6 月に第２層協議体を結成するに至った。第１層協議体は区長会、民生児童委員連合会、老人クラブ連合会など地域の役職者で構成されているが、第２層協議体はワークショップの参加者からの立候補のほか、ＳＣが適任と思われる人に個別に声をかけるなど後押しした例もあるそうだ。このやり方は、これまでも傾聴ボランティアや認知症予防教室のボランティアなどの地域活動で関わりがあり、人となりを知っているからこそできたことだ。

のちに畑活を行う新庄中学校区の第２層協議体は愛称を「新庄セブンつながりレンジャー」に決定。その後、住民へのニーズアンケートの結果を受けて会議を重ねて浮かび上がってきた課題は「地域のつながり（居場所）」「生活支援」「移動手段」の 3 つだった。同時にわかったことは、手助けがほしい人、ボランティアをしたい人両方が地域にはすでに存在すること。ただ「助けて」と言い出せない、どうやって困っている人に出会えばいいのかわからない状況ですれ違いが起こっている。だとすれば、出会いの場、つながれる場さえあれば解決することもあるかもしれないと結論づけた。そこで、居場所づくりに注力することになったのだ。

■コロナ禍影響下での活動について（新たにはじめた取組みや工夫）

課題と居場所づくりという目標ができて間もなく、コロナ禍に突入。協議体の会合もままならないなか、2020 年 6 月に会議を再開し、どのような活動ならできるのかを議論し出てきたのが、居場所として「畑活」を行うアイデアだった。

屋外での活動なら三密にはならないし、なにより畑が介護予防にもつながるだろうという予感が協議体メンバーにはあった。メンバーはそれぞれ畑の経験はなかったが、周囲には畑を楽しみや生きがいにしている元気な高齢者の姿があったのだという。たとえば、メンバーの１人の母親は畑を生きがいにしていたし、畑でのボランティア経験がある人からは「認知症の人が生き生きするよ」というアドバイスがもたらされたという。「コロナで行き場がないけれど畑があるから助かっている」といった話を聞いたり、早朝から畑で交流する人や鍬を持って元気に畑に向かう人を見ていたことも居場所のアイデアになった。

2021 年末現在、はっぴぃ農園は 2 カ所にあるが、最初に決まった場所はデイサービスセンターの裏。これは、ＳＣが仲立ちした場所で、「地域密着型デイサービスなので地域貢献もしたい」「裏の耕

作放棄地を有効活用したい」というデイサービス側のニーズを掴んでいたことが大きい。居場所としての活用を打診したところ賛成してくれ、土地を無償で貸してくれることになった。そして協力関係は今でも続いている。さらに、運営メンバーが農業未経験者ばかりだったので、はっぴぃ農園のある笛吹地区の民生児童委員連合会長で農家でもある松田氏に協力を仰いだところ、数日後には耕作放棄地をトラクターで耕運し、準備万端にしてくれた。

コロナ禍で始まった居場所ゆえに、運営メンバーとしては「コロナだから」と制限された実感はあまりなさそうだが、俯瞰して市内の居場所をみている葛城市役所の担当者は「公共施設は使えなかったからこそ、畑活ができたことで行き場に困っている人が参加できた。野外だからこそ集まれたと思う」と評価している。

社会福祉協議会としては、コロナ禍で居場所が閉ざされ、高齢者とのつながりが途切れてしまうことは大きな懸念であり、積極的にさまざまな策を講じていたという（手芸グループが作った手作りマスク配布、ビデオで介護体操配信、LINE 講座開催など)。LINE 講座開催の意図は、人に会うのが制限されているなか、ビデオ通話などの機能を使うなど「つながり」の重要性を知ってもらうためだった。

■居場所からみた「カギとなるアセット」

まず、居場所を運営する第２層協議体のメンバーが、自主的に集まっている人たちであるのがポイント。やる気のある人を集めるために、あえて「フォーラムに参加し３回の研修を受ける」というハードルを設けたことがポイントだ。

また、ＳＣ2 人が地域ケア会議なども含めて介護施設としっかり関係性ができていたこと、ケアマネージャーとして地域の高齢者を把握できていたことも大きい。ＳＣは協議体運営のサポート役とはいえ、地域の実情を十分に把握した上で協議体メンバーに的確なヒントを投げられる蓄えがあるのはとても心強いことだ。実際に、畑を貸してくれたデイサービスセンターと、初めに畑を作ってくれた後もことあるごとに技術面のサポートをしてくれている農家の松田氏は、ＳＣの働きかけがあって協力者になった経緯がある。

協議体メンバーからＳＣへの信頼も厚く、「気軽に文句を言える関係」とはメンバーの談。意思疎通しやすい関係が築けている。

さらに活動開始からしばらくして加わった２カ所目の「はっぴぃ農園」の場所は、歴史ある笛吹神社のすぐ隣の耕作放棄地を、松田氏の紹介で耕作できることになった。せっかくならと地域活動に熱心だと評判だった笛吹神社の宮司にコンタクトを取ったところ、心強い協力者に。イベント時に境内を使わせてくれたり、トイレを解放してくれたりする関係を築けており、宮司の中学生の息子は居場所活動にも参加している。

４.居場所に関わる生活支援コーディネーターの活動について

■担当生活支援コーディネーター名：田口研一郎氏（44）

■所属組織：葛城市社会福祉協議会　社会福祉協議会の介護保険福祉担当と兼務

第２層生活支援コーディネーター

■プロフィール：

葛城市社会福祉協議会歴：24 年、ＳＣ活動歴：3 年半、居場所活動歴：11 ヶ月

資格：介護福祉士、主任介護支援専門員

通所介護勤務 8 年、居宅介護支援事業所 12 年の後、平成 30 年より第２層生活支援コーディネーターとして協議体立ち上げから関わる。ケアマネージャーとしての業務も行っている。

第１層・第２層ＳＣが各１人ずつ配置されているが便宜的な分け方で、実際は２人セットで常に動いているような感じで活動している。

各ＳＣの名刺は似顔絵入り。それも地域に根ざして活動し、覚えてもらおうという気持ちのあらわれだそう。健康で長生きするために「教養＝今日、用ある」と「教育＝今日、行くとことある」のモットーのもと、積極的に地域に出ていっている。

■居場所への関わり方

ＳＣは、協議体を立ち上げるためのフォーラム開催時から、協議体設立、居場所運営まで一貫して並走してきた。メンバーには協議体やはっぴぃ農園の目的を理解した上で、主体性をもって活動してもらう理想があるので、目的がそれていかないようにＳＣの舵取りが必要なようだ。うまく介護予防に結びつくような居場所になるように、さりげなくサポートしている。

「さりげなくサポート」のために、ＳＣはあえて居場所とは距離をおくように心がけているそうだ。取材が入るなどメディア対応が必要な時はその場に立ち会うようにしているが、それ以外の普段の活動に首を突っ込みすぎないようにしているという。

ＳＣと地域住民との理想的な関係は、住民が「自分たちが主体的に地域を盛り上げている」状態だという。そのため、当初はイベントのチラシをＳＣが作成していたが、現在は協議体に任せている。課題は、現在は協議体＝居場所の運営メンバーになっていること。本来、協議体は個別の居場所運営に注力するのではなく、新庄地区全体の居場所について考える役割に特化できるといいと考えている。そうなったときにこそ、個別の居場所へのＳＣのサポートが生きてくるのではないか。

現在のはっぴぃ農園に特化した状況は先進事例と捉え、ここから他の大字にも居場所を広げていくサポートこそＳＣの役割だと考えている。

■地域との関わり方

ＳＣは社会福祉協議会の地域福祉領域も兼務しているので、「地域のつながり増やす」「困りごと解決」「地域づくり」などの課題を念頭に入れながら動くことを大事にしている。

第２層の管轄は中学校区だが、課題などはもっと小さな単位「大字（だいじ）」ごとに捉えるようにしている。市内に 44 ある大字単位で課題を見つけて、助け合うコミュニティをつくっていく方法を模索中だという。葛城市のＳＣのあり方については、「後方支援。助け合いの仕組みづくりが役割と言われているが、押し付けにならないように住民たちの想いに寄り添うことが肝心。住民たちのやりたいことを汲み取り、実現をサポートする立場にある」と語ってくれた。

■ＳＣとしての経験や課題

居場所づくりをしている協議体のメンバーがやりがいを感じている様子を見られるのがＳＣとしての喜びとのこと。「はっぴぃ農園」は現在農作業に重きが置かれているが、もっと居場所として集える場所にしていきたい気持ちはＳＣのみならず協議体メンバーの願いでもある。また、市全体を管轄するＳＣの立場としては、現在１つにとどまっている活動を他の地域にも広め、将来は市内各所に歩いて通える範囲に居場所がある状態が理想だと考えている。

ここまでかたちにできたのはＳＣとして培ってきた地域との信頼関係や人脈による寄与もあったが、さらに先に進めるための後方支援をどのようにやっていくかは課題だ。

現状は、協議体のメンバーが実働部隊となってしまっているので、畑活動だけに注力しがちで、居場所を広げていく余力がない。また、いずれははっぴぃ農園の活動も自立させていくことが求められる。ただ、そのときに財源をどうするのかは大きな課題として残る。野菜を売って稼ぐ、助成金をもらうなどの方法を模索する必要がある。多様な居場所活動を支えるためには、今後はもっと自由度の高い補助金の施策の必要性を感じるそうだ。

５．生活支援コーディネーターの人材育成について

■ＳＣの役割や期待されていることと人材育成について

役割や期待されていることに関しては、社会福祉協議会にＳＣ業務を委託した葛城市役所の担当、仲村氏に話を聞いた。行政から見ると、行政と住民の真ん中に立ってつなげてくれる存在がＳＣだという。市の担当として第２層の会議には出席しているが、どうしても「行政の言っていること」は違う立場からものを言っていると構えられてしまう傾向にある。そんなときに、ＳＣが仲立ちしてくれると、話し合いがスムーズにいく。

これからさらに行政が期待することとしては、１点は、社会資源シートをＳＣと行政が一緒につくる機会がほしい。２点目には、ＳＣの実績が可視化されたものがほしいという希望があるが、後者についてはすでに現状でもしっかり期待に応えてくれている部分もあると考えている。「実績の可視化」に役立っているのは、ＳＣらが作成する活動報告書だ。第２層協議体の会合に際して、パワーポイントにしっかりまとめられている。加えて、現状はまだ居場所は少ないが、設置件数はわかりやすい評価基準になるので、今後さらに数が増えていくことを期待している。

現状の課題としては、行政とＳＣの間で「協議体が自立するまでのサポート」について、意見がまとまらないことが課題だと行政、ＳＣ双方から聞いた。現状ではまだ自立に向けて動く段階にないので、いずれにとっても具体的な方策はこれから練る段階であることも影響しているであろう。

人材育成についてＳＣ自身が経験したものは、「ＳＣ養成研修」で、「住民主体」「地域づくりの視点」「制度の理解」「ＣＳＷ研修」「先行事例」などの項目について学んだ。研修のなかで印象に残っているアドバイスとして「ＳＣが主役ではないのでしゃべりすぎない。住民の話をより多く聞く」があるそうだ。

上記の研修はまだ新人の頃のものなので、経験を積んだ今になって必要だと思うのは、事業の委託元の行政とＳＣが共に研修を受講することだという。前述の自立に関しての考えをまとめる困難についてもいえることだが、「双方が同じベクトルを向いていくのが何よりも大事」と田口氏は言う。

田口氏が今後研修を受講するなら知りたい事例として挙げてくれたのは、「移送・移動支援について」「有償ボランティア」について。前者は、高齢化や免許返納などで全国的な課題だと考えるからで、後者は居場所の自立を考えるときに向き合わなければいけない問題だと思うからだと教えてくれた。

事例１０： 岩手県花巻市高松第三行政区

１．訪問概要

居場所名	高松第三行政区ふるさと地域協議会　福祉農園・貸し農園 ・生活支援
訪問日	2021 年 10 月 25 日（月）・11 月 2 日（火）
訪問場所(オンライン)	高松第三行政区ふるさと地域協議会　福祉農園・貸し農園 ・生活支援
ヒアリング対象	(居場所) 『高松第三行政区ふるさと地域協議会　福祉農園・貸し農園 ・生活支援』 事務局長　熊谷哲周氏 (行政側担当者) 花巻市健康福祉部長寿福祉課課長補佐　久保田氏

２．地域の概要

■基本情報

＜岩手県花巻市＞

人口（人）	94,676
総世帯数（世帯）	37,979
面積（㎢）	908
人口密度（人/㎢）	104
高齢化率（%）	34

(※2020 年度 国勢調査/都道府県・市区町村別の主な結果より)

＜花巻市矢沢コミュニティ＞（高松第 1-3・矢沢・幸田・高木・東十二丁目）

人口（人）	7,725(内、髙松第三行政区人口 167)
総世帯数（世帯）	3,001(内、高松第三行政区 74)
面積（㎢）	36.95
人口密度（人/㎢）	209
高齢化率（%）	35.7 (内、高松第三行政区 46.7%：2021.9 月現在)

（※2020 年度 国勢調査/都道府県・市区町村別の主な結果より）

■地域の特徴

＜花巻市全域＞

平成 18 年に、石鳥谷、大迫、東和の三町と合併し、人口 10 万人を超えたが現在は減少傾向。旧市町に行政支所は置いているが、福祉政策においてきめ細かく地域に目配りするのは難しい現状もある。

＜高松第三行政区＞

約 70 世帯のうち半数が単身世帯で、高齢化率も人口の半分近い。農村地帯だが、新幹線が止まる新花巻駅まで車で 10 分、花巻空港まで 15 分と、実は交通の便はよい。加えて、平成 20 年からの地域づくり活動で整備された環境に魅力を感じて、移住者が来るようになった。今では 10 世帯が移住者だ。そのうち、1 世帯は東京から、9 世帯は県内からの転居である。

高松第三行政区ふるさと協議会（以下、協議会）のある高松第三行政区について、花巻市健康福祉部長寿福祉課の久保田氏は、花巻市が町村合併前に地域の保健師として活動しているときに、地区をあげて血圧測定などに参加してくれる土壌があった。協議会は「自分たちで自分たちの課題を解決しよう」というこの地域独自の風土から立ち上がった団体と認識している。

＜生活支援体制整備の状況＞

生活支援体制整備事業は整備中だが、特に第 2 層では社協のＣＳＷがＳＣに近い位置付けで活動している。

・配置先（配置組織）：花巻市

第 1 層にあたる人員：市全体で 1 人（平成 27 年～）

第 2 層にあたる人員：市内 5 圏域の地域包括支援センターを社会福祉協議会に委託している。そこで活動するコミュニティソーシャルワーカー（ＣＳＷ）は全体で 10 名

・その他、社協の CSW が地域福祉に向き合っているので、現状ではＣＳＷがＳＣに近いかたちで活動している。その上で、第 1 層と第 2 層の連携はずっと課題になっている。2021 年 10 月に生活支援体制整備事業のキックオフイベントを行い、連携を開始したばかりなので、今後の成果に期待しているところだ。

３．居場所の活動内容

■立ち上げの経緯・背景

平成 20 年春、地区の集会等で「子どもも少ないし高齢者が増えている」「高齢者の一人暮らしや、高齢者のみ世帯も多い」という声が出ていた。このままでは限界集落になるのではないかと思った 6 人の有志が集まり、自主的な地域づくりの話し合いを何度か行った。

調べていくうちに、高齢化率は 40%、高齢者の一人暮らし世帯と高齢者のみの世帯が行政区内の約半分を占めていることが分かった。

「今、何か対策を行わないと大変なことになる」との考えから、既に行政区内で活動している団体とは別に、新たに地域づくりに特化した団体を立ち上げようと考えた。

平成 20 年 6 月、有志が発起人となり「高松第三行政区ふるさと地域協議会（以下、協議会)」の設立総会を行った。ところが、出席した地区民からは反対論が続出。「失敗するからやめろ」「失敗したときの責任は誰がとる」「そもそも地域住民の合意は得ているのか」等々紛糾。流会も覚悟したときに、来賓として出席していた当時の花巻市農政課長が「みなさんの不安な気持ちは十分分かる。しかし、何かアクションをおこさないと何も始まらない。花巻市も応援するので一歩を踏み出してみてはどうか」という言葉で、全世帯を会員とした協議会が設立された。

しかし、協議会は設立されたもののメンバーにまちづくりの専門家はいない。設立して 2 年目に早くも壁にぶち当たった。そこで、アドバイザーや市に相談したところ、岩手県立大学社会福祉学部の宮城好郎教授を紹介されたことが前に進む大きなきっかけになった。

まずは、宮城教授から「みんなが集まり、どんな地域を目指したいのか考えましょう」と提案があった。具体的にやったことは、ほとんどの人が生まれて初めて経験するワークショップや、小学生以上の全住民を対象にしたアンケート調査の実施など。これらの取り組みにより、地区の課題が明確になっていった。その資料をもとに平成 24 年 3 月に住民手づくりの「ふるさと交流福祉計画」を策定。その中で示した「農業・福祉・交流」を柱にした活動は、地区の目指すビジョンとして現在に至っている。

■活動概要

「農業・福祉・交流」を実践する福祉農園の設置、運営地区内にある遊休農地を活用して、地区内の里山に自生しているガマズミとナツハゼを植栽、面積は現在 5,000 ㎡になっている。

農園は、高齢者には作業の場として、障がい者や子どもたちには収穫・交流の場として提供している。農園で収穫した木の実は 6 次産業化でゼリーに加工。花巻市内の産直や直売等で販売しており、収益は作業をした高齢者に還元している。

＜生活支援の取り組み＞

ふるさと交流福祉計画を策定する際の全住民アンケートにおいて、70 才以上の人たちから「現在困っていることや、将来困ること」として「足（車）がなくて病院や買い物に行けない」との悩みが多く出されていた。

そこで、花巻市農政課と長寿福祉課に相談。平成 28～29 年と農林水産省の農山漁村振興交付金を活用して交通弱者の外出支援を社会実験。その後、継続の要望が多く出され平成 30 年から花巻市介護予防・日常生活支援総合事業（総合事業）により継続している。協議会では、外出支援の他にも「地元産農産物を活用した配食サービス」や「高齢者の見回り」、「高齢者宅の除雪」活動に住民主体で取り組んでいる。

＜景観形成と移住者＞

当地区では昭和の時代から、地区内の有志による河川敷や道路のりの草刈りなどの景観形成活動が行われていた。その素地があった上で協議会の活動が始まったころから「景色の良さや交通の便の良さ」に惹かれて移住する人が増え、現在 66 世帯中 10 世帯が移住者で占められている。移住者は 30～40 代が多く、地区の行事や消防団活動にも積極的にかかわっている。なかには、狩猟免許を取得し鳥獣害被害対策の指導をしてくれる人もいて、地区の貴重な人材として活躍している。

＜連携団体との「協働」＞

立ち上げの経緯・背景で述べたが、やる気はあっても協議会の役員のなかにはまちづくりの専門家はいない。具体的な取り組みを行う際に専門的なアドバイスは必須である。そこで協議会では策定した「ふるさと交流福祉計画」を持って関係団体を訪問。協力要請をしたところすべての団体が協力を快諾してくれた。現在の連携団体は下記の 9 団体である。

・花巻市（農政課、農村林務課、長寿福祉課、障がい福祉課）
・花巻中央地域包括支援センター
・花巻市社会福祉協議会
・岩手県立大学社会福祉学部
・東北福祉大学総合マネジメント学部
・岩手県社会福祉事業団やさわの園
・障害福祉サービス事業所こぶし苑
・やさわこども園
・JA いわて花巻

＜令和 2 年から始まった、生活課題解決のための取り組み＞

これまでさまざまな取り組みをおこなってきたが、悩みは取り組みをおこなうための財源の確保で

あった。

農林水産省が令和 2 年に打ち出した「中山間地域等直接支払制度第 5 期対策・集落機能強化加算」を活用すべく、農林水産省・岩手県・花巻市に相談。地区の合意を得て実施することができた。

この制度は、農林水産省が条件不利地域と呼ばれる中山間地域の活性化を図るために「新たな人材の確保や集落機能（営農に関するもの以外）を強化する取組を行う場合に加算」され、地域の生活課題のほぼすべてを対象にしている。一例をあげれば、免許返納者などの総合事業該当者（要支援 1・2、該当者）以外の人たちも、この制度を利用して送迎業務ができるようになっている。

＜これから＞

協議会の立ち上げから 14 年が経過した。過疎化・高齢化の流れは少しずつ進んでいるが、「住民の意識が少しずつではあるが変わってきたように感じている」と熊谷さんは話す。新しいものに対して否定的で、協議会の立ち上げにも否定的だった住民が「まずは話し合ってみよう」「まずはやってみようじゃないか」に変わったという。

そのような変化に伴い、懸案事項であった地区内の水田整備事業（面積 70ha、受益者 84 人）が令和 2 年に着工。福祉農園や貸農園（1,000 ㎡）、ふるさと宅配便の利用者などの交流人口は、年間 1,000 人を超え、収穫時期の秋には農園内に明るい声が響いている。

今後、協議会としては、令和元年に策定した「農村版地域包括ケアシステムの構築ビジョン」で示した福祉農園のケアファーム化を図るとともに、「住民主体、連携団体参加」による、「農と福祉のチカラ」＋「人のチカラ」＝「地域のチカラ」を目指して、活動を続けていく予定だ。

■コロナ禍影響下での活動について

事務局長の熊谷氏は、「過疎地は密と無縁」と笑い、コロナに神経質にならなくていい環境をむしろ利点としている。花巻市役所健康福祉部長寿福祉課 課長補佐 久保田氏によると、花巻市で感染防止のガイドラインを作成し、管内の団体に通知し守ってもらうようにしたそうだ。

■居場所からみた「カギとなるアセット」

現在、長寿福祉課に在籍する久保田氏は保健師のキャリアも持ち、合併前の花巻市の頃から地域を巡回していた経験を持つ。例えば血圧測定に出向くときも地域総出、区長が率先してやってきてくれる土壌が高松地域にはあったという。

熊谷氏は、勤務している会社（地域づくり支援）の関係から活動に先立って必要な資金の調達のための知識もある。補助金、助成金について熊谷氏は「最初は何も分からなかったが、調べたらいろんな事業がある。考えてみれば、全国各地、課題は共通するものも多いのだから、事業があるはずだという前提で調べることが大事」と言う。せっかく使える補助金が国、県、市町村といろんなところにあるのに、現場に情報が届いていないのが問題。インターネットが大事な情報源になっているそうだ。「わからないことがあれば、国相手にだってこの事業について教えてくださいと言えば教えてくれるものです」（熊谷氏）。

協議会のスタート時には、農水省の事業「農山漁村地域力発掘支援モデル事業」を利用。他にも、平成 28 年には農山漁村振興交付金の利用、平成 30 年度ニッセイ財団「高齢社会地域福祉チャレンジ

助成金」の採択を受け年間 200 万円の助成を 2 年間受けるなどしている。移送支援の車両購入のためには、花巻市長寿福祉課の高齢者の生きがいづくりの補助 50 万円も利用している。

福祉の視点から切り取って、さまざまな活動をしてきた協議会だが、久保田氏の言葉を借りると「福祉のメガネで見ていないからこそ、先進的な事例になっている」とのこと。熊谷氏はじめ、協議会の目的はあくまでも福祉も内包する「地域づくり」なのである。福祉の領域にかかわらず、さまざまな領域を横断して課題解決に向けて動いている。また、その担い手＝住民全員、「みんなが主役、みんなで実践」。方向性を決めるアンケートをするにも、小学生からお年寄りまでを対象にするなど、住民参加の意識を醸成してきた。

４．行政と居場所の関わり

協議会は自走していて、行政は後方からサポートする立場だと久保田氏は考えている。熊谷氏は花巻市や県・国の制度や助成金をよく調べ、活用できるものは上手に活用しているので、そのための情報提供は積極的に行うようにしている。

また、高松第三行政区でワークショップやイベントがあるときには、市の職員も顔を出す。行政の枠組みで会議などの場を設けるのではなく、雑談の延長で、使える補助金の情報も含め、情報交換できる関係性にある。

協議会の取組は花巻市内の別地域からも注目され、いい先進事例になっている。移送支援については市内の 8 地域が同様の取り組みをするようになった。

５．生活支援体制整備業におけるＣＳＷの人材育成について
（花巻市において、最も近しい位置付けとして）

■ＣＳＷの役割や期待されていること

行政の担当 久保田氏によると、第１層のコーディネーター（現在ＣＳＷとして１人）は、第２層のコーディネーターを統率し、引っ張り上げる役割を担ってもらえるのが理想だと言う。福祉の専門職としてのスキルも必要だが、それ以前に「住民の話を聞き、やるべきことを組み立てる」ことが基本であり重要だと感じていると言う。

現在のＣＳＷは活動地域である花巻市外に居住している人材であることもあり、地域のことを行政からレクチャーするなどサポートが必要な部分も多い。しかし今後は、地域内の情報を自ら集めて精査し、自走できるようになってもらい、行政はあくまでもサポートの立場に立つことが理想だという。行政のやるべきことは、ＣＳＷとしての権限を使い勝手のよいものにしたり、改善したりしていくことだと久保田さんはその考えを話してくれた。

■ＣＳＷの人材育成について

ＣＳＷを管轄する花巻市としては、岩手県主催のＣＳＷ研修などは、通達があればなるべく欠かさ

ず受けてもらっている。そのため、ＣＳＷの専門知識については相応のインプットができていると考えているそうだ。一方で経験や実績を積むのが難しいと感じているという。

ただし、「経験や実績を積む」ことを補助するような人材育成については未だ模索中と久保田氏。現状で感じているのは、研修をするとしても、1、2回の単発のプログラムではなく、継続して参加する必要があるものが望ましいのではないか、と話してくれた。

上記を踏まえて必要性を感じる研修の内容は、いい事例だけではなくて、うまくいかなかった事例をとり扱って考えさせるような研修だという。「いい事例だけだと他人事で終わってしまうので、自分ごと、自分の地域の問題にも引き寄せて考えられるような事例が実践的なのではないか」。

第３章　研修会

「生活支援コーディネーターによる地域の居場所づくり・つながりづくり研修 ～アセット発見で居場所の「やりたい!」をかなえるワークショップ～」の開催

１　研修会の目的

・生活支援コーディネーターと地域住民や関係者（行政/社協/地域包括/NPO の担当者等）とが地域の課題や活動の発展について共有し、議論できる場となること
・食に関する居場所の事例発表や他地域の SC・住民の意見から、居場所の開発や展開に対して、柔軟な発想や多様なアイデアを得ること
・地域の課題解決や居場所活動の発展のための具体的な対応方法について構想することができるようになること

２　開催概要（開催日・場所）

（１）開催地・日時

■香　川（会場／オンラインでの開催）
日時：2021年11月26日　13:00～17:00
会場：香川県薬剤師会朝日町会館2階／Zoomと併用
参加者：66名

■鳥　取（会場／オンラインでの開催）
日時：2021年12月10日　10:30～15:45
会場：鳥取県立福祉人材研修センター1階ホール／Zoomと併用
参加者：51名

■東　京（会場のみの開催）
日時：2022年1月21日　13時～17時開催
会場：アットビジネスセンターサテライト新宿南口駅前
参加者：19名

■全　国（オンラインのみの開催）
日時：2022年1月26日　13:00～17:00
開催方法：Zoomを利用
参加者：79名

3　プログラム

【講義】「居場所を支える地域のアセット」
千葉大学人文科学研究院教授　清水 洋行 氏（香川、鳥取、東京）
東京大学大学院人文社会系研究科准教授　祐成 保志 氏（全国）

【事例報告】「今あるアセットを活かした居場所の取組み」
（香川）
・愛知県知多市：「岡田なごやかサロン」
　知多中学校区第 2 層 SC/特定非営利活動法人あゆみ 市川美千代氏
　「岡田なごやかサロン」勝﨑芳雄氏
・香川県仲多度郡琴平町：「４１５のわ(よいこのわ)」
　琴平町第 1 層 SC　新原 隆一氏
　「４１５のわ(よいこのわ)」 眞鍋 陽子氏

（鳥取）
・鳥取市河原町：「ふれあい食堂」
　鳥取市第 2 層 SC/鳥取市社会福祉協議会　西尾宏美氏
　「ふれあい食堂」大門康裕氏
・大阪府泉南郡岬町：「喫茶わくわく」
　岬町社会福祉協議会 岬町第 1 層 SC 中家裕美氏
　「喫茶わくわく」 吉田文代氏

（東京）
・東京都稲城市向陽台:「支え合いネットワーク向陽台」
　地域包括支援センターこうようだい向陽台地域第 2 層 SC 谷地中恵子氏
　「支え合いネットワーク向陽台」 江口浩子氏
・大阪府泉南郡岬町：「喫茶わくわく」
　岬町社会福祉協議会 岬町第 1 層 SC 中家裕美氏
　「喫茶わくわく」 吉田文代氏

（全国）
・愛知県知多市：「岡田なごやかサロン」
　知多中学校区第2 層SC/特定非営利活動法人あゆみ 市川美千代氏
　「岡田なごやかサロン」勝﨑芳雄氏
・東京都板橋区「ゆずり葉」
　板橋区第 1 層 SC /板橋区社会福祉協議会 小林霧華氏
　NPO 法人ゆずり葉 齊藤敦子氏

【事例解説】「事例報告からの学び」
高崎市第１層 SC／主管課：高崎市長寿社会課　目﨑 智恵子 氏（鳥取、香川、全国）
稲城市高齢福祉課高齢福祉係　荒井崇宏 氏（東京）

【ワークショップ】「居場所の『やりたい！』をかなえる」
ファシリテーター 日本大学文理学部教授　内藤佳津雄 氏（鳥取、香川、東京、全国）

ワークショップではワークシート（ガイドブックに掲載）を使用した。
オンライン参加者はワークシートをオンライン上で共同編集することで、会場参加時と同じ内容でワークショップを行った。

STEP1　チーム内ワーク
・居場所に関して「やってみたいこと」を書き出して共有
・活用できそうな地域のアセットを書き出して共有
STEP2　グループワーク
・STEP１で話し合ったことを共有
・「やってみたいこと」を実現するためのアイデアを出し合う
STEP3　チーム内ワーク
・STEP２で話し合ったことを参考にし、今後取り組むことをチームで考える

※チーム・・・同じ地域で活動をしている住民、生活支援コーディネーター、行政担当者等
グループ・・上記のチームが複数集まったグループ

4　参加者アンケートの結果

各会場のアンケート結果は以下のとおりであった。

■香　川　（11/26　対面+オンライン）

参加人数：・・・66 名

アンケート回答数（n=22）

生活支援コーディネーター、コミュニティソーシャルワーカー13 名、社会福祉協議会、地域包括支援センター職員 6 名、自治体職員 2 名、協議体構成員、住民 1 名、厚生労働省 1 名

＜以下　回答 n＝22＞

Q1: 研修プログラム全体の満足度をお聞かせください。

大変満足	8
満　　足	10
普　　通	4
不　満　足	0
大変不満足	0

Q2: 居場所づくりを連携して進めていくにあたって、本研修会は参考になりましたか。

大変満足	12
満　　足	8
普　　通	2
不　満　足	0
大変不満足	0

Q3:ワークショップに参加しましたか？

参加した	12
参加しなかった	11

＊以下、ワークショップに参加した方へのご質問です

＜以下　回答 n＝12＞

Q4: ワークショップのテーマ（居場所のやりたいをかなえる）設定は如何でしたか。

大変満足	5
満　　足	5

普　　通	2
不　満　足	0
大変不満足	0

Q5: ワークショップの進め方はテーマ（居場所のやりたいをかなえる）に対して適切でしたか。

大変満足	6
満　　足	4
普　　通	2
不　満　足	0
大変不満足	0

Q6：ワークショップを通して、居場所の開発・展開に関する柔軟な発想や多様なアイデアを得ることができましたか。

大変満足	8
満　　足	2
普　　通	2
不　満　足	0
大変不満足	0

Q7：ワークショップを通して、居場所活動の開発・展開のために今後どう取り組むかについて構想することができましたか。

大変満足	6
満　　足	3
普　　通	3
不　満　足	0
大変不満足	0

Q8:ワークショップを通して、地域のアセット（地域資源）を新たに発見、認識することができましたか。

大変満足	5
満　　足	4
普　　通	3
不　満　足	0
大変不満足	0

Q9:ワークシートは、各ワークを進めるうえで有効なツールでしたか。

大変満足	5
満　　足	6
普　　通	1
不　満　足	0
大変不満足	0

Q10: ワークショップや研修会全体へのご意見・ご感想がありましたらお聞かせください

≪ワークショップ参加者≫

・参加させてもらえて、いろいろとヒントをもらうことができ、本当にいい話が聞けました。当日の参加をさせていただけたこと、本当にありがとうございました。今後も何かあれば、また参加させていただきたいと思います。

・ワークショップでは司会進行役がおりワークシートへの記述もして頂けたので、大変参加しやすかったです。ありがとうございました。 今回の研修を活かせるよう、町民や関係者からの情報収集を行い、地域資源の確認も行っていきたいと思います。

・他者の考えを聞く事で、柔軟な思考になったと思います。居場所作りにはイメージが大切だと思っていましたが、実現可能な目標なのか考えさせられました。閉会の言葉で話されていた、できる事を探し既存の資源を熟知する、まさにこれが答えだと感じました。

・地域性(田舎地区)等をふまえて、活用できそうなアセットを使い　皆さんから「ここに出てきて良かった」と笑顔がこぼれ交流の図れる居場所づくりを意識しながら SC として取り組んでいこうと思います。

・他市町村のご意見を伺う事で、見えていなかった事が見える化できて、大変良かった。今後の活動の方向性のヒントにもなり、少しずつ地域での活動を進めていきたいと思いました。貴重なご意見をありがとうございました。機会があれば他市町村の活動の実際の視察にも行き参考にさせて頂きたいと思いました。

・スモールステップでアドバイスをいただきながら進めていくことで、自分の考えを整理しながらより具体的な計画を作ることができました。 今回学んだアセットを活かすという視点で今後も地域福祉に取り組んでいきたいと思います。

・アセット重視の考え方を知り、是非活用してみたいと思いました。

≪ワークショップ不参加者≫

・アセットという考え方の再認識ができた。知多市や琴平町のよい取り組みが聞けてよかった

・多世代との連携など、とても参考になりました

・アセットというワードは、恥ずかしながら今まで知りませんでした。しかし、「あるもの探し」など、今までの取り組みの中で自然と取り入れることができていて、ニーズ重視との視点の違いを整理することができました。これからの業務でも生かし、頭の中で整理していきたいと思います。ありがとうございました。

・「アセット重視のまちづくり」を目指していきたい。つながりづくりをもう一度見直しながら、一歩ずつ進めていきたい。活躍されている方々のパワーと笑顔が印象的でした。

■鳥　取　（12/10　対面+オンライン）

参加人数：・・・51 名

アンケート回答数（n=18 ）

自治体職員 12 名、社会福祉協議会、地域包括支援センター職員 3 名、生活支援コーディネーター、コミュニティソーシャルワーカー2 名、（公財）長野県長寿社会開発センター1名

＜以下　回答 n＝１７＞

Q1: 研修プログラム全体の満足度をお聞かせください。

大変満足	2
満　　足	13
普　　通	1
不　満　足	1
大変不満足	0

Q2: 居場所づくりを連携して進めていくにあたって、本研修会は参考になりましたか。

大変満足	5
満　　足	10
普　　通	1
不　満　足	1
大変不満足	0

Q3:ワークショップに参加しましたか？

参加した	11
参加しなかった	7

＊以下、ワークショップに参加した方へのご質問です

＜以下　回答 n＝11＞

Q4: ワークショップのテーマ（居場所のやりたいをかなえる）設定は如何でしたか。

大変満足	3
満　　足	8
普　　通	0
不　満　足	0
大変不満足	0

Q5: ワークショップの進め方はテーマ（居場所のやりたいをかなえる）に対して適切でしたか。

大変満足	3
満　　足	6
普　　通	2
不　満　足	0
大変不満足	0

Q6：ワークショップを通して、居場所の開発・展開に関する柔軟な発想や多様なアイデアを得ることができましたか。

大変満足	2
満　　足	6
普　　通	3
不　満　足	0
大変不満足	0

Q7：ワークショップを通して、居場所活動の開発・展開のために今後どう取り組むかについて構想することができましたか。

大変満足	1
満　　足	6
普　　通	4
不　満　足	0
大変不満足	0

Q8:ワークショップを通して、地域のアセット（地域資源）を新たに発見、認識することができましたか。

大変満足	2
満　　足	5
普　　通	4
不　満　足	0

大変不満足	0

Q9:ワークシートは、各ワークを進めるうえで有効なツールでしたか。

大変満足	0
満　　足	8
普　　通	3
不　満　足	0
大変不満足	0

Q10: ワークショップや研修会全体へのご意見・ご感想がありましたらお聞かせください

≪ワークショップ参加者≫

・地域の実情が異なっても、共通するものもあり、大変参考になりました。

・午前中に講義や事例を聞き、自らの場所で取り組んでいること振り返りながら、午後のワークショップに取り組むことができ良かった。何よりも参加者同士で意見交換や取り組みとこれからを取り組めそうなこと、やってみたいことを交換し合えたことがとても良かった。楽しく時間を共有でき、前向きになれ元気をいただきました。有意義な研修でした。ありがとうございました。

≪ワークショップ不参加者≫

・小さなアセットを雪だるま式に育て、さらに大きなアセットにしていくという視点が大変興味深く参考になりました。プロセスから地域の方と共有する重要性に共感。

・コロナ禍で制約がある中での活動は難しいですが、地域での活動は必要だと改めて感じました。

・地域のシニア世代の活動の場をつなげています。圏域の生活支援コーディネーターとの連携を図っています。ニーズとアセットの関係性や活発な事例をうかがうことができて、有意義でした。

■東　京　（1/21　対面のみ）

参加人数：19 名

アンケート回答数（n=14）

社会福祉協議会、地域包括支援センター職員 5 名、生活支援コーディネーター一、コミュニティソーシャルワーカー4 名、NPO 職員 2 名、自治体職員 2 名、協議体構成員・住民 1 名

＜以下　回答 n＝１４＞

Q1: 研修プログラム全体の満足度をお聞かせください。

大変満足	4
満　　足	8

普　　通	0
不　満　足	0
大変不満足	2

Q2: 居場所づくりを連携して進めていくにあたって、本研修会は参考になりましたか。

大変満足	5
満　　足	8
普　　通	0
不　満　足	0
大変不満足	1

Q3: ワークショップのテーマ（居場所のやりたいをかなえる）設定は如何でしたか。

大変満足	7
満　　足	6
普　　通	0
不　満　足	0
大変不満足	1

Q4: ワークショップの進め方はテーマ（居場所のやりたいをかなえる）に対して適切でしたか。

大変満足	6
満　　足	7
普　　通	0
不　満　足	0
大変不満足	1

Q5：ワークショップを通して、居場所の開発・展開に関する柔軟な発想や多様なアイデアを得ることができましたか。

大変満足	4
満　　足	8
普　　通	1
不　満　足	0
大変不満足	1

Q６：ワークショップを通して、居場所活動の開発・展開のために今後どう取り組むかについて構想することができましたか。

大変満足	5
満　　足	8

普　　通	0
不　満　足	0
大変不満足	1

Q7:ワークショップを通して、地域のアセット（地域資源）を新たに発見、認識することができましたか。

大変満足	4
満　　足	8
普　　通	1
不　満　足	0
大変不満足	1

Q8:ワークシートは、各ワークを進めるうえで有効なツールでしたか。

大変満足	3
満　　足	6
普　　通	4
不　満　足	0
大変不満足	1

Q9: ワークショップや研修会全体へのご意見・ご感想がありましたらお聞かせください

・居場所というテーマはずっと考えていたものだったので貴重な話が聞けて良かったです。ありがとうございました。
・自分たちに足りていないものが解った気がします
・事例もとても参考になりました。今月の打ち合わせから発揮したいです。 コロナ禍、事務局の皆様大変だったと思います。ありがとうございました。
・早速、帰ったら「行動」に移したいと思います。
・参加されている方々が熱心でびっくりしました。この会を開催された団体様の熱心さと人の思いを大事にされる思いが伝わってきて、この場に来られて、社協さんの存在が有難いと思っています。必ず支えがあってでないと前に進めない、立てないと思っています。
・他の地域の方の話が参考になりました。
・様々な取り組みや課題を聞き、それに対する意見も聞けて、今後も活かして行けると思いました。
・アセットの感覚を日常に持つ意識が大切だと思いました。

■全　国　（1/26　オンラインのみ）

参加人数：79 名

アンケート回答数（n=34）

生活支援コーディネーター、コミュニティソーシャルワーカー17 名、社会福祉協議会、地域包括支援センター職員 11 名、自治体職員 4 名、NPO1 名、地域包括支援センター職員であり、第 2 層のコーデイネーター1 名

＜以下　回答 n＝３４＞

Q1: 研修プログラム全体の満足度をお聞かせください。

大変満足	4
満　　足	21
普　　通	8
不　満　足	1
大変不満足	0

Q2: 居場所づくりを連携して進めていくにあたって、本研修会は参考になりましたか。

大変満足	9
満　　足	17
普　　通	7
不　満　足	1
大変不満足	0

Q3:ワークショップに参加しましたか？

参加した	21
参加しなかった	13

＊以下、ワークショップに参加した方へのご質問です

＜以下　回答 n＝21＞

Q4: ワークショップのテーマ（居場所のやりたいをかなえる）設定は如何でしたか。

大変満足	6
満　　足	11
普　　通	4
不　満　足	0
大変不満足	0

Q5: ワークショップの進め方はテーマ（居場所のやりたいをかなえる）に対して適切でしたか。

大変満足	2
満　　足	14
普　　通	4
不　満　足	1
大変不満足	0

Q6：ワークショップを通して、居場所の開発・展開に関する柔軟な発想や多様なアイデアを得ることができましたか。

大変満足	4
満　　足	12
普　　通	5
不　満　足	0
大変不満足	0

Q7：ワークショップを通して、居場所活動の開発・展開のために今後どう取り組むかについて構想することができましたか。（※　n=20）

大変満足	3
満　　足	12
20)普　　通	5
不　満　足	0
大変不満足	0

Q8:ワークショップを通して、地域のアセット（地域資源）を新たに発見、認識することができましたか。

大変満足	1
満　　足	17
普　　通	3
不　満　足	0
大変不満足	0

Q9:ワークシートは、各ワークを進めるうえで有効なツールでしたか。

大変満足	4
満　　足	12
普　　通	5
不　満　足	0
大変不満足	0

Q10: ワークショップや研修会全体へのご意見・ご感想がありましたらお聞かせください

≪ワークショップ参加者≫
・アセットの考え方、社会資源の活用に視点を置いた研修が参考になりました。
・生活支援コーディネーターの皆様の取り組みを知ることができた。孤独な仕事なので仲間がいると感じました。
・ステップ１のグループ分けの説明がなかったため戸惑いました。 ワークショップでもう少し他自治体の取り組みを聞ければよかったです。
・研修に参加させていただきありがとうございました。大変有意義でした。研修の構成がすごく参考になりました。 感想はどれも「５」を選択したかったのですが、ネット環境を整えることができず、（ワークシートのダウンロードをするスキルもなく・・・）細かな字や枠組みなどがうまく見えなかったための「４」です。しかし、考え方や情報整理の仕方を学ぶことができ、本当に楽しく今後の活動が明るく感じる研修でした。
・まずは ZOOM を使いこなせるようにならないと、普段使うことになれていない方は研修に参加しても、使う方に時間を取られてしまうなと思いました。 福祉畑にいると、どうしてもその中でしか物事が考えられなくなってしまいます。幅広い視点で、いろいろな業種のかたと連携してアセットを発見・開拓していくことが大切だと感じました。今後の活動の参考にしたいです。
・最初ワークショップに入ってからのシート作成が説明が少し早かったため戸惑ったところもありましたが何とか行うことが出来ました。
・データ（ワークシート）や資料（PDF）はすべて事前にメールいただけると良かった。
・他自治体からアイディア・アドバイスをもらえる仕組みが良かった。
・話す、相談する、発見することが多かったので、楽しく参加できました。ありがとうございました。
・ワークショップで、参加者同士の意見交換及び交流時間が短いため、話したいことを話せなかった。
・ワークショップで沢山の学びをしました。今後に生かしたいです。ありがとうございました。
・次回は資料の事前配付を希望します。
・もう少し時間があればより良かった。参加者のグループを他県の方との組み合わせが、良いと感じました。
・ワークショップで使用したワークシートは、その場で入力して共有できて、使いこなせればとても便利なものだと感じました。グループごとにファシリの方に入っていただくことで、グループワークも行いやすかったです。ありがとうございました。
・当日資料やワークシート等は事前に頂けると助かります。またＺＯＯＭの使い方になれていないと戸惑います。パソコンで無いと難しい等。

≪ワークショップ不参加者≫
・コロナ禍のなか、貴重な情報提供を有難うございました。
・ワークショップに参加したかったです。ぜひ定員を引き上げてください。
・他の自治体の取り組みが聞けて参考になりました。
・ワークショップに参加できなかったのは残念でした。地域の居場所づくりでは、人材発掘の重要性

を再認識しました。

・アセットを重視し、地域づくりを進められている事例がとても参考になりました。

・事例を参考に、主役を忘れず繋がりを深める方法をアセットと一緒に考えて行きたいと思いました。

・居場所では地域住民の皆さんが自主的に考え運営をし、包括支援センターがちょっとした協力をしながら、活動をして下さっています。 研修に参加させていただき、地域の資源を見直し、もっと地域の資源を活用できるよう、行動をしなければいけないと勉強させていただきました。

第４章
「事例でわかる　地域アセット活用ガイドブック
生活支援コーディネーターの居場所づくり・つながりづくりを応援」

１　作成の目的

地域住民による支え合い活動のきっかけとなるであろう「食」を中心とした住民主体の居場所活動開発を行う市町村職員や生活支援コーディネーター等の支援者育成を目的とし、研修会で活用できるガイドブックを作成した。

ガイドブックでは聞き取り調査を行った事例、ワークシートとその使用方法を紹介している。

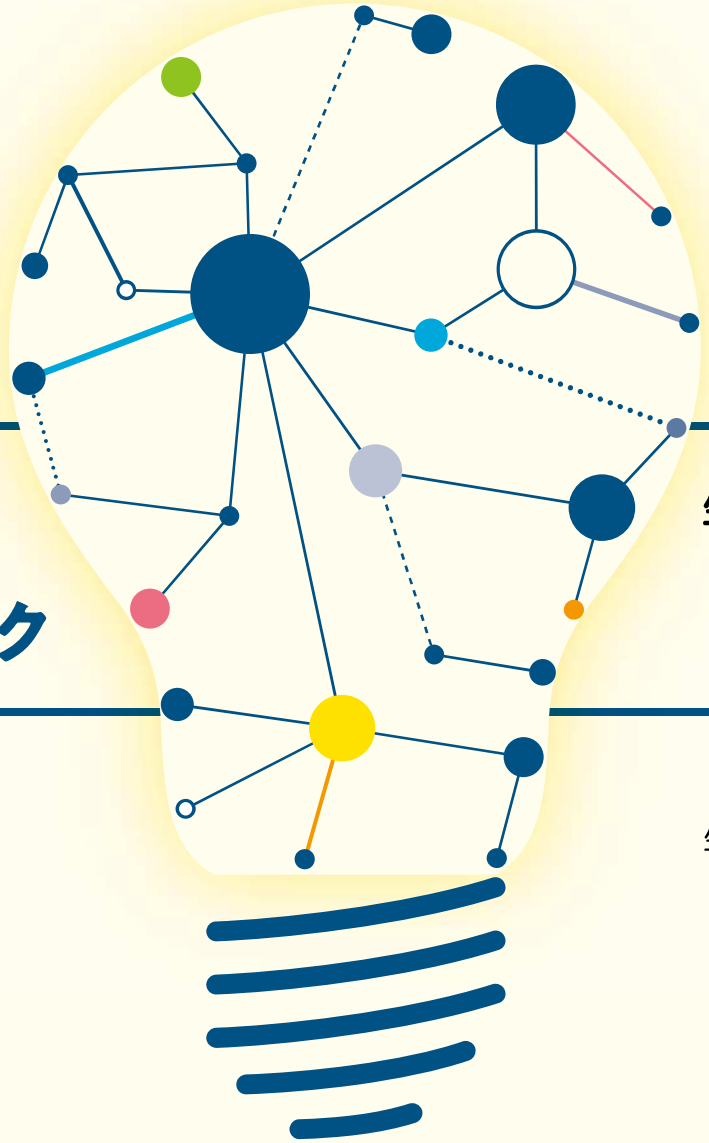
２　内容

次項より、本事業の成果物として作成したカラー冊子「事例でわかる　地域アセット活用ガイドブック　生活支援コーディネーターの居場所づくり・つながりづくりを応援」を収載する。

令和3年度 厚生労働省
老人保健健康増進等事業

事例でわかる

地域アセット活用ガイドブック



生活支援コーディネーターの居場所づくり・つながりづくりを応援

新型コロナウイルス影響下における
生活支援体制整備事業の推進に向けた
人材育成に関する調査研究事業

はじめに

2年間にわたる世界的な新型コロナウイルスの流行で、地域の居場所活動は休止や活動内容の見直しなど大きな変化がありました。人との交流を避ける行動様式が広く浸透して、集まる活動そのものがやりにくくなっている一方で、外出機会や人との接触が減ったことによる高齢者の健康への影響が懸念され、身近なところで参加できる地域の居場所の再開に向けた支援や、新たな活動の開発が求められています。

このガイドブックは、地域の居場所活動に関わっている、あるいは活動を立ち上げたいと考えている生活支援コーディネーターの皆さんが、「アセット重視」の視点で地域資源を発見し、居場所活動に活用することができるようになることをねらいとしています。

コロナ禍のなかでも様々な工夫やアイデアで活動を継続し、新たな取り組みを生み出している事例を参考にしていただき、柔軟な発想で「あるもの」「強み」を活かす、関係者のチームづくりと開発・展開の構想づくりに役立てていただければ幸いです。

目次

はじめに 01
生活支援コーディネーターによるアセットの活用イメージ 04
アセット重視の考え方 06
居場所の特徴分類と基本情報一覧 08

●事例紹介 10

01 すまいる向陽台 東京都稲城市向陽台 11
第2層協議体が文化センターの喫茶室で運営する「住民同士が顔見知りになる居場所」

02 かふぇまんでサロン 香川県高松市香南町横井 15
女性の地域リーダーの力を結集してできた、福祉相談もできてコーヒーが美味しい「かふぇ」

03 喫茶わくわく 大阪府泉南郡岬町淡輪 19
"旧村"の強いつながりから生まれた、朝から集まれるみんなの居場所

04 やまもりいこいの家 愛知県知多市岡田 23
福祉NPOの経験が生きる、週5日通える高齢者の居場所

05 カフェいしださんち 東京都稲城市平尾 27
NPO元代表が自宅の居間にひらいた地域の居場所

06 ゆずり葉 東京都板橋区高島平 31
昼間は福祉サロン、夜は居酒屋。一日中人を集める地域の居場所

07 こうせい親子゛(おやじ)食堂 大阪府大阪市港区港晴 35
男性スタッフが活躍する、参加者が高齢者:子ども=6:4の多世代食堂

08 ふれあい食堂 鳥取県鳥取市河原町渡一木 39
「地域の常夜灯になる」地域共生社会をめざす地域食堂

09 畑活プロジェクト「はっぴぃ農園」 奈良県葛城市笛吹 43
コロナ禍でも密にならない活動を探して実現「畑活プロジェクト」

10 参考事例 高松第三行政区ふるさと地域協議会 岩手県花巻市高松 47

「事例から発想しよう! 我が町アセット活用のヒント」一覧 50

●やってみよう! アセット発見で、居場所の「やりたい!」をかなえるワーク 52
ワークシート 58
ワークショップを「創造的」にすすめるために 62

委員名簿 63

生活支援コーディネーターによるアセット活用イメージ

多くの地域では、地域資源マップづくりなどをとおして「地域資源」が整理されていますが、この冊子で使う「アセット」（地域の「資産」「財産」）は「地域資源」よりも領域の広い概念です。

「アセット活用」とは、すでに地域にある様々な資産や活動などをうまく使ったり盛り立てたりして、活用していこうという意味です。

どんな地域にもじつはすでに様々なアセットがあります。

住民個人が持っている「こんなことをやってみたい」という情熱、仕事や趣味の経験をはじめ、人同士の交流やつながり、福祉関係に限らない地域にある様々な活動、産業、拠点やモノ、情報に関することなど地域にはまだまだ活用されていないアセットが眠っています。

今、各地の「居場所」で様々な地域の支え合い活動が展開されています。

気軽に参加できる場があることで、人が集まり、「こんなことやってみたい」や「小さな困りごと」を共有して、生きがいや課題解決のための新しい活動を生み出しています。

生活支援コーディネーター（SC）が、「新しい居場所、新しい活動」をゼロから立ち上げるのは簡単なことではありません。しかし「元々あったアセット」を見つけ、見守り、活用することで、新たな価値が生み出されると考えると、身近なものから考えれば良いとわかって少し気が楽になりませんか。

アセットは地域での対話や関わりによって力を発揮します。元々あったアセットがその価値を活かすには、アセットを組み合わせたり、つなげたりするSC の関わりが欠かせません。また、協議体メンバー・地域住民・市町村・社協・地域包括担当者など、地域で連携してすすめていく多様な立場の人のチームづくりも大切なポイントです。

住民自身の意欲や経験、地域の人脈、場所やモノ・情報などの「アセット」が
どのように居場所づくりに活用されているか、掲載事例の中からいくつかあげてみます。

アセット▶ コーヒーやトーストにはこだわりたい！という人がいます。

活用の例▶「こだわりのある人」と「居場所づくり」がつながることで、公共施設での開催にも拘わらず「おしゃれして出かけたい」カフェができました。

（事例03 かふぇまんでサロン）

アセット▶ 社協が運営する就労継続支援B型事業所の喫茶店があります。

活用の例▶「公共施設内にある喫茶店」と「居場所」がつながることで、誰でも来やすい場所で、飲食準備の手間が省ける居場所運営ができるようになりました。

（事例01 すまいる向陽台）

アセット▶ 同じ場所で、夜は居酒屋、昼間は地域サロンを開設する店があります。

活用の例▶「居酒屋のお客さんもサロン参加者も」どちらも福祉につながる地域の居場所になりました。

（事例06 ゆずり葉）

アセット▶ 通所介護事業所オーナーが所有する使われていない畑があります。

活用の例▶「コロナ禍でもできる活動」のアイデアが「畑」とつながることで、コロナ禍でも集まれる拠点ができました。

（事例09 畑活プロジェクト「はっぴぃ農園」）

アセット▶ 商店街で使えるクーポンチケットがあります。

活用の例▶「クーポン」を「居場所の利用」にもつなげることで、地域の高齢者が居場所を訪れるきっかけをつくりました。

（事例04 やまもりいこいの家）

アセット▶ 男性の仲間がスポーツチームを組んでいます。

活用の例▶「スポーツチームメンバー」と「多世代食堂」をつなげることで、メンバーがそのまま「地域食堂の男性ボランティア」として大活躍しています。

（事例07 こうせい親子ﾞ食堂）

本ガイドブックでは、左ページのような アセット活用について、〈 3つのアセットにフォーカス 〉して紹介しています。

「元々あったアセット」
居場所の立ち上げや展開の「カギとなるアセット」です。

3つのアセットにフォーカス
「カギとなるアセット」の中から3つのアセットにフォーカスしました。

事例から発想しよう!
我が町アセット活用のヒント
事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

担い手になったのは

退職後の男性

自らも楽しみながら「すまいる向陽台」の運営者

・地域の特長として、同世代の人が多く住むニュータウンのしがらみの少ない自由さがあり、これまでも交流やまちづくりのための住民手づくりのまつりやイベントが活発に行われてきました。
・「地元のために何かしたい」と地域活動への参加を考える人も増えています。岩崎さん、藤井さんも、個人として夫婦で第2層の協議体に参加しました。
・「すまいる向陽台」の居場所運営の中心は男性陣。仕事で培ったスキルも活かして、映画会や料理を楽しむ会などの楽しい企画づくりや広報活動も充実しています。

こんな発想から考えよう!
目的と作業内容を明確にすることで関わりやすくなる人もいる

・地域活動の担い手は女性が多く男性が入りにくい、また、男性は目的がないと参加しにくいという話を聞きます。
・ビジネスマン時代に培ったスキルを活かせたり、趣味の活動を発表できる場をつくるなど、関わり方を明確にすることも、男性が関わりやすくなる工夫のひとつです。

「新たに生まれたアセット」
他のアセットをつなげたり組み合わせたりして活用することで、元々あったアセットに新たな価値が生まれました。

「元々あったアセット」から、「新たに生まれたアセット」がどのように生まれたかを紹介しています。

紹介したアセット活用の事例を「いいな、やってみたいな」と思っても、全く同じアセットを我が町で見つけたり活かしたりするのは難しい場合もあるでしょう。
そこで、どんな発想を持つとこの事例のようなアセットが生まれるのか、我が町でも活用できるような「ヒント」を掲載しました。

巻末では、居場所づくりや展開の構想をチームで考えるワークショップのやり方もご提案しています。ぜひご活用ください。

アセット重視の考え方

アセット重視の考え方は、健康・福祉の分野で、専門家主導に対する反省と、住民の力への着目から生まれてきたものです。

専門家主導の考え方では、「ないもの」（弱み、できないこと）が焦点となります。とりわけ、急を要し、重大なものが優先されます。病気や身体・認知機能が低下した、またそのおそれがあると判断される場合に、必要なサービスが提供されます。これは、問題を抱えた人に的を絞って、サービスやお金などの資源を集中的に投入するという手法です。必要の有無や大小について判断を行うのは専門家です。

専門家主導の考え方が想定する住民像は、サービスの受け手です。住民は消費者の立場に置かれ、主体的な参加の度合いは低くなります。また、取り組みの時間幅は、問題が解消されるまでの期間に限られます。さらに、サービスを評価する際には、客観性が重視されます。「なぜ病気になるのか？」、そして「いかにして素早く治療するか？」が、専門家主導の考え方の基本的な問いです。

これにたいして、アセット重視の考え方は、「あるもの」（強み、できること）に目を向けます。アセットは次のように定義されます。「個人、家族、コミュニティが自由に使える集合的な資源であり、健康に対するマイナスの影響から人々を保護し、健康・福祉を向上させ、生きる上での選択肢を拡大させるもの」*1。

この意味でのアセットは、物やお金に限定されません。誇り、熱意、自信、有意味感、目的、楽観性、首尾一貫感覚といった心理的な資源や、知識、経験、技能、社会関係資本といった社会的な資源も、大切な構成要素です。そして、アセットが集合的な資源であるという点も見逃せません。それらは、隣人や友人との「つながり」（関係性）のなかに蓄えられることによって、力を発揮します。

アセット重視の考え方の前提には、住民自身が、健康・福祉を維持・向上するための力を持っているという見方があります。想定される住民像は、サービスの受け手や消費者というより、共同で問題の解決をはかる仲間（共同生産者）です。住民参加の度合いは高く、専門家が関わりつつ、住民が主体となって進める場面が多くなります。「なぜ健康になるのか？」、そして「いかにして長く健康を保つか？」こそが、アセット重視の考え方の基本的な問いです。

アセット重視の考え方は、専門家主導の考え方とは対照的です（表１参照）。ただし、両者は対立するものではありません。それらが、いわば車の両輪のように相互に補完しあうことで、社会の健康・福祉が向上するといえます。

表１ 専門家主導とアセット重視

	専門家主導	アセット重視
着眼点	ないもの	あるもの
対応の仕方	不足を補う	強みを伸ばす
住民との関係	住民に向けて	住民とともに
住民参加の度合い	低い	高い
時間幅	短い	長い
主な対象	個人	コミュニティ
評価の重点	客観性	主観性
基本的な問い	「なぜ病気になるのか？」	「なぜ健康になるのか？」

アセット重視の考え方では、コミュニティに根ざすことや、コミュニティが主導的な役割を担うことが期待されます。ただし、これはすべてを住民まかせにするということではありません。公的機関には、条件を整えるという重要な役割があります（表２参照）。住民自身がすでに有益な活動を行っていることを認識し、住民が重視している価値や、住民が生きている物語を共感的に理解することが、その第一歩です。

表２ アセット重視の考え方にもとづく公的機関の役割 *2

❶健康の向上に資するコミュニティのアセットを明らかにし、わかりやすく示す。

❷住民を、サービスの受け手ではなく、健康・福祉の共同生産者とみなす。

❸住民が何に取り組んでおり、何を大切にしているかを知ることから始める。住民「に向けて」ではなく、住民「とともに」活動する。

❹個人およびコミュニティのアセットと強みを明らかにし、それらに重点を置きながら、人生における持続可能な改善を行うようサポートする。

❺困難から立ち直る力、関係性、知識、誇りを向上することにより、住民がより良い方向への変化を起こせるようにサポートする。

❻相互にサポートしあうネットワークづくり、友人関係づくりをサポートする。こうしたネットワークがあることで、住民は自らの環境をよりよく理解し、自分の生活をコントロールできるようになる。

❼その地域でうまくいっていることの価値を認める。

❽健康・福祉の向上に役立っている潜在的な要因を明らかにする。

❾コミュニティに権限を委譲し、コミュニティが、自らの将来を自分たちで決め、サービス、資金、建物といった具体的な資源を創出できるようにする。

アセット重視の考え方は、もともと欧州で提唱されました。しかし、アセットという言葉そのものは使われなくとも、共通する考え方にもとづく実践や支援が、すでに各地でひろがりつつあります。皆さんの身近なところにも、その兆しや種を見つけることができるはずです。

*1 Garven, F., J. McLean and L. Pattoni, 2016, Asset-Based Approaches: Their rise, role and reality, Dunedin Academic Press, p.29.

*2 同書 , pp.35-36

「ここがあることで地域が豊かになる 住民主体の居場所ガイドブック」（令和２年度厚生労働省老人保健健康増進等事業成果物）より再掲

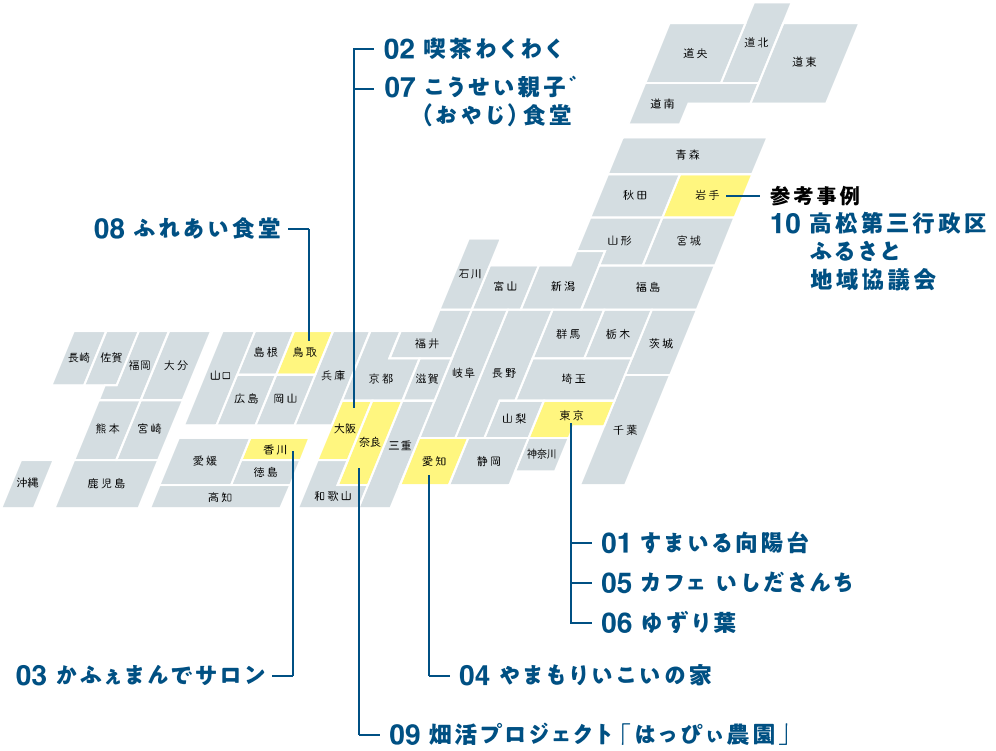
祐成 保志
東京大学大学院人文社会系研究科

居場所の特徴分類と、基本情報一覧

No	居場所の特徴		居場所の名称	居場所の所在地	主な活動圏域	運営団体の名称
01	高齢者向けサロン	公共施設	すまいる向陽台	東京都稲城市向陽台	向陽台地区	支え合いネットワーク向陽台（第2層協議体）
02			かふぇまんでサロン	香川県高松市香南町横井	香南地区	まんでサロン香南
03		空き店舗	喫茶わくわく	大阪府泉南郡岬町淡輪	淡輪6区	わくわく会
04			やまもりいこいの家	愛知県知多市岡田	岡田一区	やまもりいこいの家
05		自宅	カフェいしださんち	東京都稲城市平尾	美望会	NPO法人支え合う会みのり
06		飲食店	ゆずり葉	東京都板橋区高島平	高島平地区	NPO法人ゆずり葉
07	多世代型地域食堂	公共施設	こうせい親子゛(おやじ)食堂	大阪府大阪市港区港晴	港晴地区	港晴地域活動協議会有志
08			ふれあい食堂	鳥取県鳥取市河原町渡一木	河原地区	河原共助会
09	畑作業で交流	畑	畑活プロジェクト	奈良県葛城市笛吹	新庄中学校区	新庄セブンつながりレンジャー（第2層協議体）
10			参考事例 高松第三行政区ふるさと地域協議会	岩手県花巻市高松	高松第三行政区	高松第三行政区 ふるさと地域協議会

拠点の性質	取り組み内容	関わりがある生活支援コーディネーター	
		担当者	所属
公共施設 （コミュニティセンターの喫茶店）	サロン活動（テーブルゲーム、おしゃべりなど）、 イベント	向陽台・長峰・ 若葉台地区第2層SC	地域包括支援センターこうようだい （運営：株式会社アースサポート）
公共施設 （地域保健活動センター）	モーニングサービス、相談支援	香南地区担当第2層SC	高松市社会福祉協議会
空き店舗（元整骨院）	ラジオ体操、モーニングサービス、 みまわり隊、買い物支援	岬町第1層SC（1層2層兼任）	岬町社会福祉協議会
空き店舗（元酒屋）	サロン活動、健康体操、音楽鑑賞会、 DVD鑑賞会、脳トレ、工作、誕生日会	知多ブロック第2層SC	NPO法人あゆみ
自宅開放	サロン活動（ゲーム、歌唱、ワンコインランチ、勉強会など）、 お一人様食事会	坂浜・平尾地区第2層SC	地域包括支援センターひらお （運営：社会福祉法人平尾会）
居酒屋	サロン活動、健康体操、認知症カフェ、ランチ、イベント	志村ブロック第1層SC 高島平地区第2層SC	第1層　板橋区社会福祉協議会 第2層　高島平地区第2層協議体
公共施設（老人憩の家）	子ども食堂、地域食堂、遊びのプログラム（子ども向け）	港区第1層SC	大阪市港区社会福祉協議会
公共施設 （人権福祉センター講堂）	子ども食堂、地域食堂、 学習や遊びのプログラム（子ども向け）	河原地区第2層SC	鳥取市社会福祉協議会
畑（耕作放棄地）	ラジオ体操、野菜や花の植え付け・栽培・収穫、イベント	葛城市第1層SC、 新庄中学校区第2層SC	葛城市社会福祉協議会
遊休農地	ナツハゼ・ガマズミ畑での栽培管理、交流イベント	—	—

事例紹介。


02 喫茶わくわく
07 こうせい親子(おやじ)食堂
08 ふれあい食堂
参考事例
10 高松第三行政区 ふるさと 地域協議会
01 すまいる向陽台
05 カフェ いしださんち
06 ゆずり葉
03 かふぇまんでサロン
04 やまもりいこいの家
09 畑活プロジェクト「はっぴぃ農園」
道央
道北
道東
道南
青森
秋田
岩手
山形
宮城
福島
石川
富山
新潟
福井
群馬
栃木
茨城
埼玉
千葉
東京
神奈川
山梨
静岡
長野
岐阜
滋賀
京都
兵庫
三重
奈良
大阪
和歌山
鳥取
島根
岡山
広島
山口
愛知
香川
徳島
愛媛
高知
福岡
佐賀
長崎
大分
熊本
宮崎
鹿児島
沖縄

01 すまいる向陽台 高齢者向けサロン

東京都稲城市向陽台

第2層協議体が文化センターの喫茶室で運営する「住民同士が顔見知りになる居場所」

基本情報

名　　称 すまいる向陽台
所 在 地 東京都稲城市向陽台6-7 城山文化センター1階
開催日時 第2・第4火 15:00～17:00
運営主体 支え合いネットワーク向陽台(第2層協議体)
開 所 日 2017年2月

東京都稲城市 ※2022年2月住民基本台帳より
人口:93,003人　総世帯数:41,935世帯
面積:17.97㎢　人口密度:5,175.4人/㎢
高齢化率:21.9%

稲城市向陽台地区 ※2022年2月住民基本台帳より
人口:8,869人　総世帯数:3,655
面積:0.94㎢　人口密度:9,435.1人/㎢
高齢化率:27.5%

こんな居場所

[地域] 街開き当初の転入者が退職する時期になった多摩ニュータウン

向陽台は、稲城市の北部に位置し、1988年多摩ニュータウン稲城エリアの中で最初に街開きをしたまちです。丘陵地の地形を活かした景観が美しく、また文化・スポーツ施設や自然林散策路なども整備されています。

街開き当初に転入した世代は現在退職を迎え、その子ども世代が転出する中で、急速に高齢化が進んでいることに大きな危機感を感じるようになりました。転入者が多いため、古いしがらみがなく言いたい事が言えるオープンさがあり、企業を退職した男性陣が活躍しやすい環境があります。一方、古くからの顔なじみがおらず、学校の同窓会などのネットワークもない環境です。どうやって支えあい活動を展開していったらいいかを話し合う中、まずはふらりと立ち寄れる居場所をつくって顔見知りを増やしていこうと、2017年、文化センターの喫茶「陽だまり」を借りて「すまいる向陽台」をオープンしました。

[居場所の様子] 城山文化センター1階にあるカフェで、居場所実施

城山文化センターは、向陽台地区の中心地にある公民館と児童館の複合施設です。「喫茶陽だまり」は文化センター1階のロビーにある喫茶コーナーで、名前のとおり窓から陽が差し込む明るく暖かい空間です。「陽だまり」は障害ある人の就労支援の場として、社会福祉協議会が運営しています。

第2・4火曜日の午後3時～5時まで、この場所を使って「すまいる向陽台」は開催されます。喫茶店のメニューから注文をして、それぞれ自由に過ごします。ときには丸テーブルを囲んでカードゲームを楽しんだり、視聴覚室や調理室では、地元稲城ゆかりの映画を観る会や作って食べる活動もあります。運営者も参加者も、男性陣が多いのがここの特徴です。

こうしてゆるやかに顔見知りを増やしながら、地域で支えあう関係を築いています。

居場所運営団体の性質
- NPO法人
- 任意団体
- 第2層協議体

拠点の性質
- 公共施設
- 店舗／空き店舗
- 自宅
- 畑

生活支援コーディネーターの所属
- 第1層
  - 市役所
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
- 第2層
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
  - 住民

「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

地域での助け合いをするためには、住民同士が顔見知りになる居場所が必要! を実現した取り組みについて、アセットの活用に着目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

・1980年代に街開きしたニュータウン向陽台は一気に高齢化が進み、まもなく市内で一番高齢化率が高いエリアになると言われています。危機感をもち、このまま手をこまねいていてはいけない、と考える住民は少なくありませんでした。

・向陽台地区第2層協議体「支え合いネットワーク向陽台」メンバーは、住民の助け合いの体制づくりのために、まず住民同士が顔見知りになる機会をつくろうと考えました。

主な関係者

住 協議体「支え合いネットワーク向陽台」代表 平田さん
・NPO「ふれあい広場ポーポーの木」設立者。広い地域ネットワークをもち、子どもから高齢者、障害者まで幅広い対象者への支援事業の知見がある。

住 協議体「支え合いネットワーク向陽台」事務長 江口さん
・地元薬局を経営する薬剤師。健康や暮らしの困りごとの相談を受けることが多く、専門機関につなげる役割も担う。

住 「すまいる向陽台」代表 岩崎さん
・2000年代に転入、退職後からマンションの理事や会報誌の作成、配食ボランティアなどの地域活動を始める。支え合いネットワーク向陽台に参加し、「すまいる向陽台」運営代表。

住 「すまいる向陽台」副代表 藤井さん
・街開き時に転入、向陽台体育振興会の初代会長。長く地域のスポーツイベントやまつりに関わり、現在地区連合会の役員を務めている。「すまいる向陽台」副代表。

SC 第2層SC 谷地中さん
・地域包括支援センターこうようだい3年目、第2層SC活動歴1年目。
・20代はアパレル関係で百貨店に10年間勤務、30代半ばでケアマネジャー資格を取得。現在、向陽台・長峰・若葉台圏域を担当。

カギとなるアセット

人

○運営者
・第2層協議体支え合いネットワーク向陽台
(構成:向陽台地区連合会、社会福祉協議会、民生・児童委員、向寿会(老人会)、**★NPO法人ポーポーの木**、NPO 法人支え合う会みのり、NPO法人市民活動サポートセンターいなぎ)
★退職後の男性

場

○活動拠点
★城山文化センターの「喫茶陽だまり」
(就労継続支援B型事業所、市社協が運営)
・城山文化センター内視聴覚室、調理室

モノ・資金

○補助金
・稲城市地域介護予防活動支援事業「通いの場支援補助金」(講師料・会場費・広報費・コーディネーター費・感染予防対策費が対象。それぞれに補助額／上限額あり)
○居場所の飲食
・喫茶陽だまりのメニュー(カレーライスなどの軽食やスイーツ、コーヒーなどの提供、福祉工房で作る焼き菓子や地元野菜の販売)

情報・ネットワーク

○地域全般の人・活動に関する情報
・すまいるネット(支え合いネットワーク向陽台が行う有償の助け合い活動)
・すまいる通信(支え合いネットワークの機関紙。回覧板で配布したり掲示板に掲示)
・NPO法人市民活動サポートセンターいなぎ
★向陽台薬局(事務長の江口さんが経営する調剤薬局)
○高齢者の情報と利用紹介
・地域包括支援センターこうようだい　・すまいる通信
○地域のつながり
・市民まつり

3つのアセットにフォーカス

担い手になったのは

人

元々あったアセット: **退職後の男性**

新たに生まれたアセット: **自らも楽しみながら「すまいる向陽台」の運営者**

会場として活用したのは

場

元々あったアセット: **社協が運営する就労継続支援B型事業所の喫茶室**

新たに生まれたアセット: **人が集まりやすく運営の手間がかからない活動拠点**

居場所と連携相談窓口として活用したのは

人 情報・ネットワーク

元々あったアセット: **協議体メンバーが運営する薬局・NPO**

新たに生まれたアセット: **気軽な相談の窓口**

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

事例から発想しよう!
我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

・地域の特長として、同世代の人が多く住むニュータウンのしがらみの少ない自由さがあり、これまでも交流やまちづくりのための住民手づくりのまつりやイベントが活発に行われてきました。
・「地元のために何かしたい」と地域活動への参加を考える人も増えています。岩崎さん、藤井さんも、個人として夫婦で第2層の協議体に参加しました。
・「すまいる向陽台」の居場所運営の中心は男性陣。仕事で培ったスキルも活かして、映画会や料理を楽しむ会などの楽しい企画づくりや広報活動も充実しています。

こんな発想から考えよう!

目的と作業内容を明確にすることで関わりやすくなる人もいる

・地域活動の担い手は女性が多く男性が入りにくい、また、男性は目的がないと参加しにくいという話を聞きます。
・ビジネスマン時代に培ったスキルを活かせたり、趣味の活動を発表できる場をつくるなど、関わり方を明確にすることも、男性が関わりやすくなる工夫のひとつです。

・「喫茶陽だまり」は、就労継続支援B型事業所として、障害のある人が接客やクッキーの製造販売、地元野菜の販売を行っています。軽食やカフェメニューも充実しています。
・「すまいる向陽台」は、この「喫茶陽だまり」を使っています。参加者はそれぞれ飲み物などを注文し、代金を支払います。「すまいる向陽台」メンバーの役割は話し相手やプログラム運営。食べ物飲み物の提供は「陽だまり」側が行います。

こんな発想から考えよう!

すでにある資源の活用を考える

・喫茶店を居場所として活用する事例は、ありそうであまり多くはありません。
・飲食に関することは全て喫茶店にお任せすることで、運営のハードルはぐっと下がります。
・自分たちでなんでもやろうと背負わずに、「あるものを活用できないか」と考える視点が大切です。

・協議体代表の平田さんは助け合い活動や介護事業などを行うNPOの設立者。子どもから高齢者、障害者まで幅広い対象者への支援事業の経験があります。
・さらに事務長の江口さんは、街開きの頃からある調剤薬局の薬剤師。顔の見える関係づくりができている地元の薬局は、病気や健康のこと以外にも、ちょっとした困りごとの相談をうけることもあります。
・居場所や普段の様子からキャッチした困りごとをSCや地域包括支援センターにつなげ、協議体でみんなの課題として共有する体制ができています。

こんな発想から考えよう!

居場所の介護予防強化には商店街との「つなぎ」も有効

・見守りには、商店街との連携も大切なネットワークです。
・薬局やクリニック、整骨院等の医療関係だけでなく、物販サービスや飲食店においても、「同じ商品を何度も購入している」「支払がうまくできない」等、日常的に接しているお客さんの変化にいち早く気づくこともあります。

この事例から学ぶポイント

荒井 崇宏
稲城市福祉部高齢福祉課

向陽台はニュータウン地域であり、都心に通勤するサラリーマン世帯のベッドタウンという性格が強く、昔から人が住んでいた旧来地域と比べると地縁が強いという地域ではありません。一方で、古いしがらみがなく、お互いの主張を伝えやすいオープンさを持っています。また、ニュータウンにはまちびらきと共に同じような世代の方が転入する傾向があり、あるタイミングで地域の高齢化が一気に進行するという特徴もあります。

こういった特徴を踏まえて、向陽台の方々は、今後予想される高齢化の波に対抗するため、地域での支え合いが必要になると考え、まずは顔見知りになれる場所を作ろうと「すまいる向陽台」の取り組みを始められます。そして、「すまいる向陽台」で顔見知りになっていった参加者の中に生活のお困りごとがある方がいたことから、ちょっとしたお困りごとを有償で助け合う「すまいるネット」という活動に繋がっていきました。「すまいるネット」の取り組みを発足させる際には、地域住民全世帯へのアンケート調査を実施して、住民の意向を丁寧に把握し、取り入れていったそうです。

「すまいる向陽台」の代表・副代表はサラリーマンを退職された男性が担われており、サラリーマン時代に培った企画力、コミュニケーション能力等を発揮してご活躍されているようです。そして、「すまいる向陽台」は既存のカフェ（就労継続支援B型事業所）というアセットをうまく活用することで、喫茶業務を運営するという手間を省き、居場所をコーディネートすることに注力することができています。

また、「すまいるネット」のような支え合いの取り組みは、色々な方法により各地で取り組まれており、様々な先進事例や好事例もあります。そのような中、向陽台では我がまちにあった取り組みとすべく、アンケート結果も踏まえて、誰かに助けてもらうときに遠慮したり気を使ったりしないで済むようにあえて「有償」での助け合いを行う、15分単位で気軽に頼める等の工夫をしながら、ニュータウンならではの支え合いの取り組みを進められ、徐々に規模が拡大してきています。

この事例からは、やれることから始めるとその活動がきっかけとなって新たな活動が生まれてくること、人材（人財）はその人のこれまでの経験等から適材適所の活躍の場が必ずあること、既存のアセットをうまく活用することでやりたいことに注力することができること、好事例をそのまま地域に当てはめるのではなく地域の特徴や地域の意向を踏まえて取り組みに工夫を加えることの重要性、といった学びを得ることができるのではないでしょうか。

■生活支援コーディネーター（SC）の配置状況

稲城市
- 第1層　稲城市高齢福祉課　1名（嘱託）全地域担当
- 第2層　4圏域の地域包括支援センターに1名ずつ（地域包括業務と兼任）
- ・第4地区（向陽台・長峰・若葉台）は地域包括支援センターこうようだい（運営：株式会社アースサポート）に配置されている。

SC 担当SCからのメッセージ

対面で意見を聞く中で、キッカケとなる瞬間をつかむ

・「人がまちをつくる」と思っています。住民の想いは十人十色。様々な思いで生活しておられます。この様々な思いを持った地域の『人と人をつなげていく』ためには、SCの調整力、地域の横のつながりが何よりも必要です。地域の情報収集だけでなく、住民や関係機関との“雑談”の中に新たなアセット発見のヒントがある!と感じています。そこで何か情報をつかんだら、必ず会いに行っています。実際に住民の方々に会って対面で意見を聞く中で、キッカケとなる瞬間をつかむことがポイントです。

住民主体の取り組みは、住民とSCが一緒に考える仕組みが大切

・お互いさまの支え合い活動は住民主体で取り組むことが重要で、住民への押し付けにならないように気をつけています。それには住民とSCが一緒に考える仕組みを作ることが大切です。それが第2層協議体だと考えています。

コロナ禍での工夫

・コロナ禍で活動が休止した際「せっかくつながった縁が途切れてしまう、何か方法はないか」と代表から相談を受けました。たまたま参加した研修先で他市協議体のSCから携帯電話会社によるオンライン会議の講座を教えてもらいました。その結果、協議体の会議はオンラインで開催できるようになりました。SNSを活用した地域活動の継続も試行中です。

02 かふぇまんでサロン 高齢者向けサロン

香川県高松市香南町横井

女性の地域リーダーの力を結集してできた、福祉相談もできてコーヒーが美味しい「かふぇ」

基本情報

名　　称 かふぇまんでサロン
運営主体 まんでサロン香南
所 在 地 香川県高松市香南町横井
開 所 日 2019年6月5日
開催日時 水 9:30〜13:00

香川県高松市 ※2021年10月高松市資料より
人口:424,530人　総世帯数:201,232
面積:375㎢　人口密度:1,132.0人/㎢
高齢化率:28.7%

高松市香南地区 ※2021年10月高松市資料より
人口:7,083人　総世帯数:3,121
面積:14.72㎢　人口密度:481.1人/㎢
高齢化率:29.5%

こんな居場所

[地域] 合併前の町時代の付き合いが残るベッドタウン

かふぇまんでサロンがある高松市香南町は旧香川郡香南町で、2006年に高松市に編入合併されました。香南町は高松市の山間部寄りにあり、農地が5割以上の面積を占めています。市中心部に通勤する人のベッドタウンで、高松空港から近いアクセスの良さにありながら、高齢化率は高松市の中で上位に入ります。

長年地域活動に関わってきた松下さんは、高齢者が増えていく地域の状況をなんとかしたいと考えました。「町内には活発な福祉活動がいくつもあるが連携できていない」「未来の子どもたちのための活動も必要」と、共通の課題意識を持った人たちに声をかけました。各団体の会長に協力を仰ぐなど人脈の豊かさは、合併前の町時代からの付き合いが残る地域の良さが活きました。

[居場所の様子] おしゃれして出かけるカフェ

2017年に「まんでサロン香南」を立ち上げ、「高齢者居場所づくり事業」を第1水曜と第4土曜に、「こども食堂」を第2・4土曜に開催することになりました。第4土曜は食の提供だけでなく共に作る体験活動を重視し、多世代交流の機会も提供してきました。活動は活発になってきましたが、予約や登録が不要でボランティア活動でもない、高齢者が気軽におしゃべりできる場がないことが気になりました。

そこで2019年には、気軽におしゃべりを楽しむ居場所「かふぇ まんでサロン」をオープン。毎週水曜日に開催しています。運営メンバーは女性ばかり。看板メニューは、こだわりの渋皮をとったコーヒー豆から淹れるコーヒーと、と高級トースターで焼いたトーストです。利用者は毎回20名くらいで、第1水曜日には居場所活動を終えてやってくる人もいます。

「まるごと福祉相談員」の役割も持つ生活支援コーディネーターがいて支援につながる相談ができたり、参加状況を把握して見守りの機能も果たしています。

居場所運営団体の性質
- NPO法人
- 任意団体
- 第2層協議体

拠点の性質
- 公共施設
- 店舗／空き店舗
- 自宅
- 畑

生活支援コーディネーターの所属
- 第1層
  - 市役所
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
- 第2層
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
  - 住民

「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

予約も登録もなく、ふらりと立ち寄れるカフェのような居場所が欲しい!を実現した取り組みについて、アセットの活用に着目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

・同じ課題意識を持つ町内の活動団体の女性代表者に声をかけ、共鳴した人たちで立ち上げたのが「まんでサロン香南」です。

・松下さんを筆頭に、様々な活動をおこなってきた人たちが「一緒にやろう!」の精神で集まり、2017年から、高齢者の居場所活動や子ども食堂を実現させてきました。

・さらに、気になっていたのが香南地域には高齢者が気軽に集まれる喫茶店のような場所がないこと。登録や予約が不要で、気楽に出かけていってなじみの人とおしゃべりが楽しめる場所をつくろうと2019年、「かふぇまんでサロン」を立ち上げることにしました。

主な関係者

住 まんでサロン香南 代表 松下さん
・長く地域活動に関わり、人脈が広い。各団体の代表へ声かけして「まんでサロン香南」を立ち上げた。

住 まんでサロン香南 事務局メンバー
・2017年の会の立ち上げを支援した生活支援コーディネーターと元市職員がボランティアとして会に関わり、活動を支えている。

SC 第2層生活支援コーディネーター
・香南地区担当のSCは2名。「まるごと福祉相談員」の役割も持ち、参加者の困りごとの相談や見守りを行う。居場所運営では、記録や情報発信、補助金申請のサポート、コロナ対策など黒子としてサポートしている。

用語

[まるごと福祉相談員]介護・障害・子育て・生活困窮など分野を問わず相談支援に対応する。高松市が市社協に委託し、市内全エリアに配置。

[わが町こんなとこシート]高松市社協のコーディネーターが使用している地域資源把握のためのシート。地元の人しか知らないような細かな社会資源もまとめられている。

カギとなるアセット

人

○運営者
★議員、地域ボランティア、市役所、社協など地域でさまざまな役割を担ってきた女性たち。
・第2層協議体「香南地区地域福祉ネットワーク会議」

○特技のある人
★こだわりのコーヒーとトーストを提供できる人、エプロン製作ができる人

場

○地域保健活動センター
★旧香南町保健センター。温泉施設がある道の駅「香南楽湯」と高松市社協香南支所に隣接し、地域の中心の好立地にある。

モノ・資金

○補助金・助成金
・高松市高齢者居場所づくり事業
・高松市社協地域福祉活動促進事業

○かふぇ運営費
・利用料金(コーヒーセット300円等)
・かふぇスタッフ謝礼(各回4人、1人400円/回)

○食材
・朝市で仕入れる野菜(隣接の「香南朝市」から)
・ご近所からお裾分け

情報・ネットワーク

○地域全般の人・活動に関する情報
・香南地区コミュニティ協議会　・たかまつこども食堂ネットワーク連絡会　・「わが町こんなとこシート」

○高齢者の情報と利用紹介
・高松市社協生活支援コーディネーター、まるごと福祉相談員(かふぇまんでサロン開催時には同席し、参加者の相談対応を行う)

○LINEグループ(活動メンバーはLINEを活用して情報共有)

3つのアセットにフォーカス

担い手になったのは(人)
- 元々あったアセット：様々な福祉活動をしている団体の長
- 新たに生まれたアセット：ボランティアメンバー

カフェづくりで活用したのは(人)
- 元々あったアセット：こだわりのコーヒーとトーストを提供できる人、エプロン製作ができる人
- 新たに生まれたアセット：「おしゃれして出かけて行きたい」雰囲気づくり

会場として活用したのは(場)
- 元々あったアセット：空き状態になった旧保健センター
- 新たに生まれたアセット：家賃無料、アクセスが良い活動拠点

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

事例から発想しよう!
我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

・合併前の香南町時代からの付き合いが残り、地域愛が強い元気な高齢者が多い土地柄。かつて町議会議員をつとめた松下さんが、地域団体の女性リーダーたちに声をかけ、「メンバーひとりがひとりを誘うくらいの口コミの力」を発揮して活動メンバーが集まりました。

・立ち上げに関わった元市職員と社協SCは、退職後も活動を支えています。
・ボランティアメンバーは34人で全員女性。「スマイル」「笑顔で明るく楽しく」がモットー。

こんな発想から考えよう!

まずは話し合いや活動の「場」をつくってみる

・それぞれの活動や団体が一つに結集するのは簡単なことではありませんが、話し合いや活動の「場」をつくり、そこに参加してもらうことから始めるとハードルが下がるかもしれません。
・新たな活動は「プロジェクト」として立ち上げる方式も動きやすい手段の一つになりそうです。

・助成金で制作したのぼり旗やスタッフおそろいのエプロンで、「お出かけして行くカフェ」という雰囲気を出しています。
・松下さんはコーヒーについて学んだ経験もあり、「せっかく出すならとびきり美味しいものを出したい」と、

コーヒーは渋皮をとった豆を挽いたもの、高級トースターで焼くパンとこだわっています。コーヒーセットにはゆで卵と野菜、果物、おまけのおやつがつき、喫茶店のモーニングメニューさながらです。

こんな発想から考えよう!

誘い文句になるような特徴を考える

・知人を居場所に誘う時、どんな風に誘うでしょうか。「おいしいランチが出るから行こう」「縁側があってちょっと休憩できるのよ」「今度、健康体操やらない?」等々。
・居場所に「誘い文句となるような特徴」があると、知人を誘いやすく口コミで広がります。また、誘われた方もイメージを持って参加することができます。

・会場である地域保健活動センターは、道の駅、社協支所、通所介護施設と接続する多目的施設の中にあり、高松市香南支所まで徒歩10分のアクセスの良い場所にあります。
・地域保健活動センターは、合併前は

町の保健センターでした。保健センター機能が町外に移転し、「地域保健活動センター」として地域団体等に貸し出すことになったことを受けて、生活支援コーディネーターが団体の活動場所として提案しました。

こんな発想から考えよう!

公共施設の上手な活用方法を探る

・公共施設は、多くの人が平等に使えるように利用日が抽選で決まるなど、使い勝手が良くないという声があります。一方、誰もが知っている場所で、個人の家よりも気兼ねがないと感じる人も。なにより料金が低価格という利点があります。
・会議室だけでなく、ロビーや関連部署のカウンター前、中庭など、様々なスペースを活用して、展示やリサイクルなどを行っている活動もあります。

この事例から学ぶポイント

お互い支え合い、学び合う活動から つながり続けることを諦めない

日下 直和
社会福祉法人香川県社会福祉協議会

平成18年1月に高松市と合併した香南町は、市の南西部に位置し、なだらかな丘陵地に自然豊かな農村地帯が広がり、一方、町の南部には高松空港があり、その利便性から町内には様々な業種の企業が進出しています。まさに田園都市としての様相を呈している町であります。

自然環境も豊かで住みやすい町であり、また、合併前からボランティア活動や民生委員活動等の福祉活動が活発で、住民同士のつながりも強い地域でした。言わば地域づくりを進めやすい文化や土壌がもともとあったところで、これは地域の強みであると同時に、生活支援コーディネーター(以下、SC)にとっては、様々な活動に取り組みやすい地域でもあるとも言えます。

そのような中、食を通じた支援や居場所づくり、世代間交流を推進することを目的に、平成29年6月に「まんでサロン香南」が発足しました。活動は、当初の月2回開催の「高齢者の居場所づくり事業」と世代間交流のできる「こども食堂」に加え、令和元年6月からは、地域の人たちが気軽に集える「カフェまんでサロン」が毎週開催されるなど、活動の幅も徐々に広がっていきました。

活動場所の地域保健活動センターが無償で確保されたことも、活動が広がった大きな要因と言えます。運営資金についても、様々な助成制度等が活用できるようSCがつないできました。このようにSCが「まんでサロン香南」の運営メンバーと、つかず離れずの、絶妙な間合いを取りながら伴走して支援に当たってきたことが、持続的な活動につながったとも言えます。

「まんでサロン香南」代表の松下桂子氏は、元町議会議員であり、幅広いネットワークを持ちリーダシップをしっかり発揮しながら、これまで活動を牽引してきました。松下代表は一見カリスマ型のリーダーのようにも見えますが、実は運営メンバーを支えて後押する“しんがり的”存在であり、共感や共有をとても大事にするリーダーであると感じました。

また、団体としての活動の進め方は、決して縦ラインの方法で決めるのではなく、運営委員メンバーが主体的に話し合って決めていて、さらには食生活改善や地元地区社協や地域の様々な団体と、上手く横につながり無理なく活動を広げていくことのできる、ネットワーク型の団体と言えます。

長引くコロナ禍で食を提供する活動が制限される中にあっても、カフェではテイクアウトを実施したり、「こども食堂」の取り組みも同様で、屋外で感染のリスクを下げつつ、月2回、地元の大学生と一緒になって、近くに広がるひまわり畑の観察等を行う「出張まんでサロン香南こども食堂・ひまわりプロジェクト」を実施するなど、つながり続けることを決して諦めませんでした。

運営メンバーどうしが支え合い、そこをSCがサポートし、また、SC自身もその活動から多くの学びと気づきを得て支えられています。いろんな支え合いの輪の重なりの真ん中に子どもたちや高齢者をはじめ、多世代の地域住民がいます。

そんな、「まんでサロン香南」の取り組みの中に、私自身も多くの学びを得たところです。

■生活支援コーディネーター(SC)の配置状況

高松市
- 第1層　高松市 介護保険制度運営協議会　1名
- 第2層　高松市社会福祉協議会地域福祉課 地域共生社会推進室　15名
- ・44の小学校区に担当2名ずつを、15名のメンバーで重複して担当している。

SC 担当SCからのメッセージ

地域の信頼を得るために、アセットを共有する仕組み

・地域にSCが入ったときの最初の反応は「地域のことを知っているのか!」と言われてしまうことが多いです。そこで、地域のイベントに何度も参加して情報収集したり、様々な機会にできるだけ地域に足を運んだりすることで、地域の信頼を得てきました。

・そうやって築いた信頼も、担当が変わる度に一から積み上げるのでは、住民もSCも大変です。そこで、アセスメントシート「わが町こんなとこシート」をつくり、この情報を共有して地域のことを引き継げるようにしました。また、前任者と新任者が一緒に2ヶ月くらいは地域に出向いて、現場で実際に顔を合わせて引き継ぎをするようにしています。

「黒子」に徹する

・SCの基本理念は「あらゆる相談を断らない」です。「困ったときのSC」として、いつでも後方支援できる黒子としての存在になることを心がけています。

・黒子としてのサポートとしては、居場所開催時の記録や発信、補助金の申請の手伝い、コロナ禍での対策のあり方や周知方法などがあります。

03 喫茶わくわく 高齢者向けサロン

大阪府泉南郡岬町淡輪

"旧村"の強いつながりから生まれた、朝から集まれるみんなの居場所

基本情報

名　　称 喫茶わくわく
所 在 地 大阪府泉南郡岬町淡輪 4326-1
開催日時 月 9:30～15:00
運営主体 わくわく会
開 所 日 2019年12月

大阪府泉南郡岬町 ※2022年1月岬町資料より
人口:15,035人　総世帯数:7,436
面積:49.18㎢　人口密度:305.7人/㎢
高齢化率:39.2%

岬町淡輪地区 ※2018年10月淡輪地区資料より
人口:9,357人　総世帯数:4,151
面積:9.05㎢　人口密度:1,034人/㎢
高齢化率:34.0%

こんな居場所

[地域] 過疎化高齢化が進む、昔ながらの顔見知りが住むまち

喫茶わくわくがある岬町は、和歌山市に隣接する海・山のある風光明媚なまち。大阪・難波まで南海電鉄で50分のベッドタウンでもあります。退職後の住民が現役時代の経験を地元で発揮してくれるという期待も高まる地域です。しかし、少子高齢化が進行中で2021年4月から過疎認定をされており、介護認定を受けている人も多いです。

岬町は旧村と新興地区に分かれ、新興地区には近年30～40代の若い世帯の移住も増えてきています。

喫茶わくわくは、昔ながらの顔見知りが多い旧村地区にあります。居場所が立ち上がる前は、高齢者の健康維持のために「朝のラジオ体操」、体操終了後は小学生の登校の見守り活動を行ってきました。

[居場所の様子] 特技が活かせる場

喫茶わくわくは毎週月曜日の朝9時半～15時までオープンしています。岬町内に住んでいる人であれば誰でも参加できます。

メニューはモーニング300円。パン、ゆで卵、バナナ、お菓子が紙皿に盛られ、コーヒーが付きます。体操で体を動かし、子どもたちの登校見守りと交流をした後にカフェに集っての楽しい語らいは、格別な時間となっています。

居場所でわいわいにぎやかに過ごすうちに、顔見知りも増えていきました。そんな中、買い物や外出に困っているという声も出ました。そこで、「新鮮な魚を買いに行こう!」と、「道の駅みさき」まで送迎する買い物支援活動など、ニーズに応じた活動が次々に展開されています。

居場所運営団体の性質
- NPO法人
- 任意団体
- 第2層協議体

拠点の性質
- 公共施設
- 店舗／空き店舗
- 自宅
- 畑

生活支援コーディネーターの所属
- 第1層
  - 市役所
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
- 第2層
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
  - 住民

「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

ラジオ体操の後、おしゃべりする場所が欲しい! を実現した取り組みについて、アセットの活用に着目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

・岬町淡輪は、ほとんどの人が顔見知りという人間関係のつながりが深い地域です。淡輪に生まれ育ち淡輪地区福祉委員会副委員長で民生・児童委員でもある吉田さんは、「これからも安心して暮らし続けられる地域にするためになんとかしたい!」と考えていました。

・吉田さんは「高齢者が楽しく健康維持するためにラジオ体操の会を立ち上げたい」と思い立ち、SCの中家さんに相談しました。吉田さんの親族が経営していた整骨院前の駐車場で毎週月曜日の朝7時半からのラジオ体操がスタートしました。

・参加者の「ラジオ体操の後にお茶を飲んでおしゃべりする場がほしい」という声に後押しされ、空き店舗となった整骨院を借りてモーニングサービスの提供が始まりました。

主な関係者

SC 生活支援コーディネーター(SC) 中家さん
・大阪府岬町社会福祉協議会9年目、第1層SC活動歴6年目。
・前職は宝飾デザイナー、販売等。岬町役場、デイサービス勤務を経て現職。

住 喫茶わくわく 運営責任者 吉田さん
・淡輪地区福祉委員会副委員長、民生・児童委員副会長。地域に親族や同窓生など、昔からの知り合いが多く住んでいる。民生・児童委員歴も長く地域からの人望が厚い。

住 わくわく会 会長 多賀井さん
・高齢者支援・地域の居場所づくりなどの活動を行うため、淡輪6区の住民が組織化した「淡輪6区わくわく会」の会長。買い物支援車両提供兼ドライバー、喫茶の看板や感染予防パーテーションの制作、敷地の草刈りまで多くを担っている。吉田さんの従兄弟。

カギとなるアセット

人

○運営者
★旧村に代々住んでいる淡輪6区の住民の強いつながりがある人
・住民の共助の精神
(できることは自分で。気づいた人がさっさと動く)
・料理やDIYなどそれぞれの得意なことがある人
・岬町に住む様々な業種に就いていた退職者

場

○居場所
★旧ニコニコ鍼灸整骨院の建物と駐車場(無償で借りている)
○買い物支援の拠点
・道の駅 みさき「夢灯台」

モノ・資金

○助成金
・岬町(R3.5～ 岬町住民主体地域活動補助金)
○喫茶運営費
・モーニング300円、コーヒーのみ(お菓子付き)100円

情報・ネットワーク

○公的機関との連携
・岬町生活支援・介護予防サービス協議体
・岬町社会福祉協議会　・淡輪地区福祉委員会
・岬町
○地域全般の人とのつながり
・「グリーンピース」(淡輪6区の新興住宅側の住民組織)
・淡輪盆踊りなどの伝統的イベント
○他地区とのネットワーク
★多奈川地区福祉委員会「赤提灯」(地域ワークショップ)
★淡輪10.11区「地域を知る"BAR"」

3つのアセットにフォーカス

担い手になったのは(人)

元々あったアセット: **旧村地域の人のつながり**
新たに生まれたアセット: **それぞれの得意を活かしたボランティア**

会場として活用したのは(場)

元々あったアセット: **代表の家族が所有する空き店舗**
新たに生まれたアセット: **使い勝手がいい専用の活動拠点**

居場所のイメージづくりに活用したのは(情報・ネットワーク)

元々あったアセット: **他地区の地域ワークショップに参加、先進活動を知る**
新たに生まれたアセット: **「わくわく会」の具体化へ**

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

事例から発想しよう!
我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

・淡輪旧村地域は、親戚同士や同窓生など昔からのつながりがあり、長いご近所付き合いの中での共助の精神が残っています。 ・喫茶わくわくを運営する有志ボランティアは旧村地域の吉田さんのつながりが基軸になっていますが、新興地区からの参加者とも自然な交流が生まれるようになっています。 ・「人は頼られると輝く」とSCの中家さんは考えています。料理やお菓子づくり、DIYなど「それぞれの得意なことで出番づくり」を意識して活動を支援しています。	こんな発想から考えよう! **みんなで特技や好きなことをシェアしてみる**	・居場所では、誰のどんな特技でも発揮できる可能性があります。特技や好きなことについて、語り合うプログラムを行っている居場所がありました。準備の手間をかけなくても、参加者が少なくてもOK、まずは1回やってみることで、気軽な出番づくりができます。
・ラジオ体操を行うために整骨院の駐車場を借りていましたが、整骨院が空き店舗だったこともあり、居場所スペースとして無料で使わせてもらえることになりました。大きな掃き出し窓があり、換気も万全。コロナ禍でも対応できる環境が確保できました。 ・拠点の前の道路は小学校の通学路です。ラジオ体操終了時は参加者が自然に小学生の登校見守りをするようになり、高齢者と小学生の交流も実現しました。	こんな発想から考えよう! **まずはできることから動いてみる**	・都合の良い空き店舗は簡単にはみつかるものではありませんが、条件を満たすことを優先させるより、あるもの・できることからスモールステップで進めるうちに訪れるチャンスもありそうです。
・吉田さんは平成30年に町内の他地区で開かれた地域ワークショップに参加して岬町内の居場所活動や買い物支援などの活動報告を聞き、まちの今後を話し合う機会を得ました。 ・ワークショップのあとの居酒屋タイムでは、他地区の住民・関係者と話し合って刺激を受けました。自分たち淡輪6区でもなにかできないか、と具体的な構想がはじまりました。	こんな発想から考えよう! **我が町や隣町の活動を調べてみる**	・他団体の活動を見学にいくことは、とても参考になります。活動内容だけでなく、参加者やスタッフの構成、開催時間や頻度なども見学ポイントです。 ・まずは我が町や隣町の活動から調べてみましょう。見学に行くときはSCだけではなく、一緒にすすめる住民メンバーと誘い合って行きましょう。同じものを見た経験がチームづくりに生きます。SCだけでなく一緒に進める住民メンバーと一緒に、がポイントです。

この事例から学ぶポイント

隅田 耕史
NPO法人フェリスモンテ

「住民の主体性」に沿ったSCの支援というものがよくわかる事例です。

喫茶の居場所活動を最初に始めるのではなく、駐車場のスペースを活用してラジオ体操から始めたというのは特徴的だと思います。その参加者たちから、「ラジオ体操後に座ってお茶でも飲みたい」という声が出てくるのは、とても自然な流れです。

また取材の一環で、「道の駅　みさき」で食べた「生しらす丼」は、とてもおいしかったです。「このおいしい魚を、自分の目で見て、鮮度の良いまま買って帰って食べたい」と思うのは、とても自然なことだと思いました。また、それを叶えるために運転してあげようと思う人たちが何人もいるというのも、そのニーズが共有されているからこそで、この地域ならではのものだと思いました。

コロナ禍に、「『喫茶わくわく』を閉めようとしたが、開くのを扉の前で待っている人がいたので開けた」という話も象徴的なように思いました。

これらの活動は、自分たちの場所で、自分たちで意思決定ができるからこそだと思いました。取材の途中には、盆踊りを披露してくれました。はじめは「さわりだけ」ということでしたが、いつの間にか踊っていました。

「地域を知る“BAR”」などに参加した吉田さんのように、先行して活動している地域の集まりに、関心や意欲のある方が参加していくという枠組みができているところが素晴らしいと思いました。

SCの中家さんへのインタビューの中で、喫茶を立ち上げるために準備をしていた地域があったが、開設直前に中止になったという話がありました。中家さんはその経験について否定的にとらえるのではなく、「それぞれの地域に合ったものを、必要なタイミングで行っていくことの大切さを知った」というように前向きに語られていたのが印象的でした。

「喫茶わくわく」の取り組みやその発展は、まさにその地域の、そこで活動している方に合った動きだと思います。そして活動が形になっていった上で、行政とも話し合いを重ね、継続性を高めるように補助金の仕組みを作っていったことも、とても大切なことだと思います。

今後、買い物支援を広げていくことを準備されているということなので、これまで培ってきたSCとしての支援プロセスを踏まえて、無理なく、できるところから活動を始めていかれることでしょう。

住民の気持ちとSCの動きを時間軸で見ていくことで、SCにできることが見えてくるのではないでしょうか。

■生活支援コーディネーター（SC）の配置状況

大阪府泉南郡岬町
第1層・第2層兼任
岬町社会福祉協議会　1名（専任）全地域担当

SC 担当SCからのメッセージ

住民の方が主役になるために、前に出すぎず引き際を見極める

・モットーとして「SCから提案」ではなく、常に地域の人に「どうしましょう?何が必要ですか?」と「訊く」ことを大事にしています。かつて「無人喫茶」をやろうとかなり話が進んでいた企画が頓挫してしまった経験があります。もしかしたらあまり必要性を感じていなかったのに、押しつけてしまったのかも知れないとの反省があるからです。

・また、「それは難しいのでは･･･」と否定的なことは言わないようにしています。住民のみなさんが本当にやりたいことは何かを見つけ出す姿勢をいつも心がけています。

わからないことは、素直に住民の方やいろんな方に支えてもらう

・新人SCの時には「何をどうしたらいいのか?」全く分からず思い悩んだこともありました。今では、分からないことは「教えて下さい!」といろいろな方に「訊く」ことで道筋が見えてくると確信しています。住民の方が空いている曜日、時間に合わせ出向き、フットワーク良く地区内を回って「教えて下さい」というスタンスです。これが地域のニーズを知る一番の近道だと実感しています。

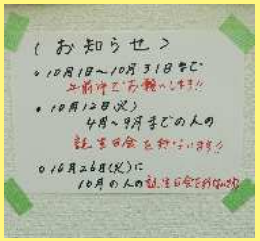
今後の展開

・わくわく会では、居場所づくり、買い物支援と、活動の輪が広がっていますが、さらに今後、「喫茶わくわく」は防災・減災の拠点、避難所としての機能も持つことが求められていると感じています。「喫茶わくわく」に行けば、安心・安全・楽しい!という居場所になることをめざしています。

04 やまもりいこいの家 高齢者向けサロン

愛知県知多市岡田

福祉NPOの経験が生きる、週5日通える高齢者の居場所



基本情報

名　　称 やまもりいこいの家
所 在 地 愛知県知多市岡田字上中田65-2
開催日時 月～金 9:30～15:00
運営主体 やまもりいこいの家
開 所 日 2019年6月

愛知県知多市 ※2021年11月知多市資料より
人口:85,061人　総世帯数:36,428
面積:45.9㎢　人口密度:1,853.1人/㎢
高齢化率:28.0%

知多市岡田地区 ※2021年11月知多市資料より
人口:7,931人　総世帯数:3,146
面積:4.06㎢　人口密度:1,953.4人/㎢
高齢化率:26.4%

こんな居場所

[地域] 古い町並みはかつて栄えた産業の名残

「やまもりいこいの家」がある知多市岡田地区は、知多半島の北西部に位置し、交通の利便も良好な住宅地です。かつて隆盛を極めた知多木綿産業の様子が色濃く残る古い町並みが現在も多く残されています。「岡田街並み保存会」が設立され、古民家の1つを居場所として活用する取り組みが試みられていました。

このような地域で、それまで酒屋「やまもり」を営んでいたご夫婦が店を閉める際、空き店舗の有効活用を周囲に相談しました。岡田地区で先に立ち上がっていた居場所「岡田なごやかサロン」とつながったことで気運が高まり、居場所づくりが実現しました。

[居場所の様子] 地域の誰もが知っている元酒屋で平日5日開催

「やまもり」は、昔からある酒屋で、平坦地でバス停にも近いというアクセスの良さがあります。この立地の良さを活かして、平日週5日開催する常設サロンが行われています。

元店舗らしく、前面はガラスで中の様子がうかがえます。自動ドアで中に入ると、広い長方形の会場に、テーブルとイス、ソファー、お茶が用意されたカウンター等があり、壁には童謡の歌詞や手づくりの凧や書道等の作品などが展示されています。和気あいあいとお茶を飲んだりおしゃべりをしたり、時には体操をして過ごします。

杖をついていた方が「今日は杖なしで」と歩いて来られたり、みんなの生きがいの場になっています。昔ながらの知り合いが多い地域とはいえ、参加者の中には初対面同士もいるそうで、地域のきずなはこの居場所でさらに広まっています。

居場所運営団体の性質
- NPO法人
- 任意団体
- 第2層協議体

拠点の性質
- 公共施設
- 店舗／空き店舗
- 自宅
- 畑

生活支援コーディネーターの所属
- 第1層
  - 市役所
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
- 第2層
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
  - 住民

「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

誰もが知っている元酒屋の閉店を機に居場所にしたい!を実現した取り組みについて、アセットの活用に着目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

・2017年、知多市岡田一区で先代からの酒屋「やまもり」を営んでいた平野さんは、高齢を理由に閉店を決め、別の地区で古民家再生の居場所を運営していた勝﨑さんに、店舗を地域のために有効活用できないかと相談しました。

・「やまもり」があるのは誰もが知っている地区の中心地ですが、今は高齢者が集まれる喫茶店などがないエリアです。勝﨑さんはその話をSCにつなぎました。

・ここで高齢者が楽しく賑やかに集まれる居場所を作ろうと決まり、SCの市川さんを中心にして居場所づくりが動き出しました。

主な関係者

SC 第2層生活支援コーディネーター 市川さん
・2017年から知多ブロックの第2層生活支援コーディネーター。NPO法人あゆみ設立代表。50代で福祉の勉強を開始。1990年代から市民互助型在宅福祉活動が活発に展開されていた知多市で、先輩団体から学びながら平成10年に自宅を拠点としてNPO法人あゆみを設立した。

住 元酒屋「やまもり」オーナー 平野さん夫妻
・親の代から酒屋を経営、空き店舗の再活用を同年会で知り合いだった勝﨑さんに相談した。

住 「やまもりいこいの家」運営メンバー
・「岡田コミュニティ」長寿会関係者を中心に男女合わせて約10名。

住 「岡田なごやかサロン」代表 勝﨑さん
・知多木綿で栄えた岡田の歴史文化を活かすまちづくりの会の主宰者。岡田三区の古民家活用の居場所「岡田なごやかサロン」の代表。

カギとなるアセット

人

○運営者／参加者
★岡田コミュニティ関係者
（回覧板がしっかり回り、長寿会（老人会）の活動も盛ん）
・岡田第一区の住民

場

★拠点である元酒屋「やまもり」

モノ・資金

○知多市介護予防・日常生活支援推進事業補助金
・初年度100万円（拠点整備）
・年間35万円程度（運営費）
★クーポンチケット
岡田コミュニティが発行する100円クーポン（敬老祝として配布）を使用できる
○地域の農家で育てた野菜や果物

情報・ネットワーク

○地域の人、活動に関する情報
・岡田コミュニティ、長寿会、同年会
○高齢者の情報と利用紹介
・NPO法人あゆみ
・岡田コミュニティ回覧板
○運営に関する情報
・岡田三区の高齢者の居場所「岡田なごやかサロン」（サロン運営の先輩格）

用語 [同年会] 同じ年に生まれた人でつくる親睦の会。厄払いや還暦会などを行う。

3つのアセットにフォーカス

担い手になったのは（人）
- 元々あったアセット：昔からよく知る仲間たち
- 新たに生まれたアセット：スタッフや参加者に

会場として活用したのは（場）
- 元々あったアセット：元酒屋、屋号「やまもり」
- 新たに生まれたアセット：アクセス便利な常設拠点

広報ツールとして活用したのは（モノ・資金）
- 元々あったアセット：岡田コミュニティの100円クーポンチケット
- 新たに生まれたアセット：居場所利用のきっかけを地域にPR

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

事例から発想しよう!
我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

・地域には、同じ年齢の人たちでつくる「同年会」という集まりがあります。空き店舗転用の計画が始まったのは、同年会で「岡田なごやかサロン」の話を「やまもり」の平野さんが聞いたことがきっかけです。	・岡田地区はこの地に長く住んでいる人が多くいて、長寿会や同年会をはじめ、昔からの人間関係が続いています。互いによく知っている仲間同士の口コミが居場所に人を引き寄せています。	こんな発想から考えよう! **地域に参加できる会がないか調べてみる**	・学校の同窓会や同期会、お寺や神社・祭に関係する人の集まりから、犬の散歩仲間まで地域には様々なコミュニティがあります。口コミは思わぬネットワークで広がることも。 ・町会自治会以外の小さな集まりにも目を向けると、新たな出会いがあるかもしれません。
・元酒屋は「やまもり」の屋号で地域の人に知られており、街道沿いのバス停からすぐの好立地にあります。高低差もなくみんなが通いやすい場所にあります。 ・SCが市の補助金を紹介し、内装工事やエア	コンの設置ができました。さらに拠点の月2万円程度の拠点借上料にも補助金が使えるため、オーナーの平野さんの負担は最小限に抑えられています。	こんな発想から考えよう! **空き店舗を長く安定して活用することを考える**	・家賃を対象にしている、行政や民間の補助金があるかを調べてみましょう。 ・補助金がない場合でも、例えば、会費や寄付を集める、フリーマーケットをするなどのほか、居場所の特徴を活かした、部屋貸しやレンタルボックスで趣味の作品販売など資金調達の工夫をしている例があります。
・岡田コミュニティは、地域内の商店で使えるクーポンを発行して、敬老祝として配布しています。SCが商店街にかけあい、「やまもりいこいの家」でも使えるようにしました。飲み物とお菓子がつく100円の参加費にクーポンが使えます。	・「クーポンが使える店」としてコミュニティの回覧板でも紹介されていて、地域に知ってもらうためのよい広報になっています。	こんな発想から考えよう! **「お墨付き」を活用する**	・行政や町会自治会からの支援や協力は運営への大きな後押し。地域の掲示板や回覧板のPRも効果があります。 ・助成金を受けたらその事業名や、支援団体からの寄付や協賛をチラシに掲載するなど「お墨付き」をうまく活用しましょう。

この事例から学ぶポイント

松下 典子
NPO法人ゆいの会
前知多市第1層生活支援コーディネーター(2016.4-2021.3)

NPOがSCを担う意義とは

NPO法人ゆいの会は、2016年から2020年まで、知多市から委託を受け第1層生活支援コーディネーターとして活動を進めてきました。また、2017年からは、5中学校区のうち3地区をNPO法人、2地区を社会福祉協議会が第2層生活支援コーディネーターとして取り組みを進めています。

私は1991年に「ゆいの会」を立ち上げ、変化する身近な暮らしの課題解決として「私たちができる」お互い様の助け合い活動に取り組んでいました。それが住民互助の在宅支援になり、さらに介護保険制度につながりました。NPOの長年の活動の成果として、市、社協と対等な関係で議論し新しい仕組みを作り上げていく機会を得たことにワクワクしました。

生活支援コーディネーターの役割のひとつである「介護予防・日常生活支援」の仕組みとサービス開発については生活者の視点からNPO活動ですでに取り組んできたことで、住民の自発的・自立的助け合い活動の要である居場所づくりの啓発とその実践支援に努めてきました。

豊かな暮らしを追い求めて多様化した社会は、核家族化や一人世帯が増加し、かつてあった町内会やコミュニティ機能がなくなり始めています。第2層SCの役割は日常生活圏域で暮らしの気になることや不安に思うことを出し合う場を設け、一人一人の個性や特技、経験や情報をつなぎ新しい仕組みづくりを考えるチームを作ることと考えます。居場所は人が出会い情報が集まる生きた学びの場であり、自らも意識を変えていく実践の場となります。

生活支援コーディネーターはこれまでになかった新しい地域の仕事です。住民のやる気と小さな仕事づくりの調整役として、さらに仲間の新しい取り組みを黒子となってリードしネットワーク化する伴走者だと考えてきました。拠点の確保や仲間づくり、事業化、組織化するプロセスは、地域社会を立体的、構造的に再編する力強さがあります。「自分が当事者になる5年後10年後に向けて、この地域で住み続けるための仕組みを作ろう!」と住民に呼びかけ、やる気を引き出す役割ともいえます。

地域は生き物、進化し続けています。アセット重視に加えて、プロセス重視の視点も大切です。生活支援コーディネーターが取り組む居場所支援は重層化するケア問題の解決だけではなく、人が育ち合う小規模多機能自治へのプロセスであり、地域再構築の道具であることを、地域で活動するみなさんと共有したいと思っています。

■生活支援コーディネーター(SC)の配置状況

知多市
- 第1層　知多市福祉部長寿課　1名
- 第2層　5中学校区ごとに1名ずつ配置
  (配置組織:知多市社協2地区、NPO法人あゆみ、NPO法人ゆいの会、NPO法人だいこんの花)。

SC 担当SCからのメッセージ

ヒト・モノ・コト(アセット)をみつけたらすぐにアタック

・とにかく多くの人と会って会話することを意識しています。居場所づくりに必要な「ヒト・モノ・コト」を見つけたら、すぐにアタック!です。やまもりいこいの家の情報を得たときも、すぐにオーナーの平野さんに連絡をとって会いに行き、いかにこの場所が居場所として適しているかを熱弁しました。情報のつなぎやアクションのスピード感は、本当に重要だと考えています。

地域のキーマンを大切にし、時間をかけて関係づくり

・地域のキーマンとの関わりは重要です。半年くらいじっくり時間をかけて信頼関係を醸成しています。

・岡田地区は昔からの地縁が強く残る地域です。地区外から来た自分がSC活動を始めた当初は「あなた誰?!」と何度も言われ、自分の存在を認めてもらうまでにとても長い時間がかかったと感じています。

・私の活動の原点として「健康体操」がありますが、これを高齢者に伝えることがコミュニケーションツールとなり、様々な会話が生まれ、自分のさらなる気づきや学びにつながったことはとても重要な経験です。

コロナ禍での工夫

・コロナ禍でサロンに来ることを控えている人もいますが、とにかく安否確認が重要だと考えており、現在は「お誕生日会」を開催して、各人の様子や体調をチェックしています。とにかくあの手この手でコロナ対策を必死でやっているというのが現状です。

05 カフェ いしださんち 高齢者向けサロン

東京都稲城市平尾

NPO元代表が自宅の居間にひらいた地域の居場所

基本情報

名　　称 カフェ いしださんち
所 在 地 東京都稲城市平尾
開催日時 第1日と第3土 13:00～15:30
運営主体 NPO法人支え合う会 みのり
開 所 日 2012年6月

東京都稲城市 ※2022年2月住民基本台帳より
人口:93,003人　総世帯数:41,935
面積:17.97㎢　人口密度:5,175.4人/㎢
高齢化率:21.9%

稲城市平尾地区 ※2022年2月住民基本台帳より
人口:12,182人　総世帯数: 6,001
面積:1.50㎢　人口密度:8,121.3人/㎢
高齢化率:30.9%

こんな居場所

［地域］丘陵地帯を開発した、眺めは良いがアクセスに課題ありの住宅街

カフェいしださんちがある稲城市平尾地区は新宿副都心から南西へ約20km離れた多摩ニュータウンの入口に当たり、1970年代から計画的に市街地整備が進みました。特に「いしださんち」周辺は、急峻な丘陵地帯が切り開かれた眺望が良い場所である一方、高齢者にとっては車等の足がないと移動が難しいという課題があります。

居場所オーナー石田さんは、長年高齢者向けの食事サービス活動団体の役員として活動してきましたが、2011年東日本大震災をきっかけにご近所同士がつながる居場所の必要性を実感しました。しかし、住宅街である自宅周辺には集まれる場所がなく、翌年自ら自宅でカフェを開催することにしました。

［居場所の様子］自宅開放カフェは、ご近所のなくてはならない居場所

ある第3土曜の昼過ぎに訪ねると、三々五々人が集まり和やかな時間が流れ始めました。ひとしきりおしゃべりすると「そろそろ歌いますか」と歌詞が書かれた模造紙が壁にかけられ、ピアノ伴奏に合わせてセレクトされた歌をみんな歌います。その後は、手づくりのプリンとコーヒーでちょっと休憩。ときにはマジックショーが行われたり、隣の和室で体操をしたり。「生活支援コーディネーターの健康講座や、落語の催しもいいのでは」など毎回プログラムを工夫しています。最近はZoomでのセミナー視聴も行っています。

一人暮らし世帯が多いエリアでもあり、配食弁当をみんなで一緒に食べる「おひとり様夕食会」も開催されるようになりました。今では、ご近所のみなさんにとってなくてはならない居場所になっています。

居場所運営団体の性質
- NPO法人
- 任意団体
- 第2層協議体

拠点の性質
- 公共施設
- 店舗／空き店舗
- 自宅
- 畑

生活支援コーディネーターの所属
- 第1層
  - 市役所
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
- 第2層
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
  - 住民

「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

公的集会所がない住宅街の中に身近に通える居場所が欲しい! を実現した取り組みについて、アセットの活用に着目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

・居場所オーナーの石田さんは、1983年設立の食事サービス活動団体「支え合う会みのり」のメンバーです。
・石田さんが住んでいるのは、独居高齢者が多く、公的な集会所からも離れている「平尾・美望会地区」。自身も夫を見送って一人暮らしとなり、長く暮らしてきたこの地で楽しみながら近隣での関係づくりをしたい、それが何かのときのためにみんなの役に立つと考えて、自宅のリビングを開放して「カフェいしださんち」をはじめることにしました。
・夫の介護期間中に地域包括支援センターの支援を受けていたこともあり、すでに相談できる関係ができていました。

主な関係者

住 居場所オーナー 石田さん
・「NPO法人支え合う会みのり」元理事長。1970年代から丘の上に開発された「平尾・美望会地区」に暮らしている。2011年に夫を見送り一人暮らしとなった。気張らずに自宅に人を招くことができるのは、海外駐在時代の経験が大きい、と話す。

SC 生活支援コーディネーター(SC) 白井さん
・社会福祉法人平尾会が受託する「地域包括支援センターひらお」に第2層SCとして配置されている。平尾会に20年勤務、病院・老人ホームの看護師を経て、現在は地域包括支援センターでSC業務を兼任している。ケアマネジャー。第2層SC活動歴6年目。

カギとなるアセット

人

○運営者／参加者
・居場所オーナーの石田さん
★支え合う会みのりのボランティア仲間(管理栄養士)
★婦人之友「友の会」仲間(ケアマネジャー、歌唱指導)
・働き者の参加者　・民生・児童委員、美望会(住民自治会)
・声楽、ピアノ、フルート、ハーモニカ、日本舞踊など「一芸」ある人たち

場

○住宅街にある居場所
★石田さん宅(1970年代築のゆったりした2階建て住宅。大きな窓、ピアノがある広いリビング)
・リビングにあるプチギャラリー(参加者の作品を展示)
・坂道、階段がある「バリア有りの環境」(石田さん宅まで歩いて来られるように頑張る)

モノ・資金

○活動に必要なモノ
・助成金は利用していない。居場所オーナー 石田さんによるものが大きい。
○参加費
・食事代や弁当代などの実費
○食事
・支え合う会みのりの配食弁当(お一人様夕食会で利用)

情報・ネットワーク

○地域全般の人・活動に関する情報
・美望会(平尾地区の住民自治組織。坂の上で眺めがいいことからこの名がついた)
○高齢者の情報と利用紹介
・介護予防日常生活支援総合事業 A「かがやき倶楽部みのり」(支え合う会みのりが行ってきた経験を活かした調理実習プログラムが特長。カフェいしださんちと連携関係)
★稲城市地域包括支援センターひらお
・みどり会(老人会)

3つのアセットにフォーカス

担い手になったのは(人)

元々あったアセット: **長年NPOや福祉関係で活動してきた仲間**
新たに生まれたアセット: **居場所で特技を発揮する人**

会場として活用したのは(場)

元々あったアセット: **自宅のリビングとキッチン**
新たに生まれたアセット: **近所の人が集まる住宅地のなかの「おうちサロン」**

居場所で介護予防を強化するために活用したのは(情報・ネットワーク)

元々あったアセット: **地域包括支援センター職員**
新たに生まれたアセット: **健康・介護予防講座の講師や相談対応**

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

事例から発想しよう!
我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

・長年、NPOで活動してきた石田さんは広い人脈を持っています。現役ケアマネジャーの友人や、みのりの仲間が「カフェいしださんち」のコアメンバーになりました。
・基本的に石田さんは忙しく立ち働きません。キッチンでは「勝手知ったる」メンバーがコーヒーを淹れたりお菓子を運んだり、後片付けも手際よく最後まで行います。
・お菓子づくりが得意な人、料理が得意な人、歌のピアノ伴奏をしてくれる人、写真撮影が得意な人など、個性豊かな人の輪が活動を豊かに楽しくしています。

こんな発想から考えよう!

特技が活かせると楽しく参加できる

・自分の特技を活かす場があり、みんなに喜んでもらうのは、活動に参加する大きな動機のひとつです。
・雑談の中で趣味や特技の話題が出たときに「今度やろう」と盛り上がったり、「○○がやりたいな、できる人いないかな」とあらゆるところで話題に出してみるのがコツです。

・坂の上のゆったりした昭和モダンの一軒家。明るくて見晴らしの良いリビングと続きの和室は、20人は集まれる広さがあります。
・かつて来客が多かった石田さん宅はキッチンも広く、またお客さんが多かったので、揃いの食器もたくさんありました。

・坂の上のため、当初白井さんは「坂を登って来られるかな」と心配しましたが、「行きたい気持ち」があると頑張れる、体力づくりにもつながるのではと考えるようになったそうです。

こんな発想から考えよう!

民有地でもみんなで集まれる場所はある

・自宅を開放するのは抵抗があるという人も多いでしょう。家の中は開放せずに、「庭」や「駐車場」のみを活用している例もあります。
・また、営業時間外の飲食店店舗を借りるなど、店舗を活用させてもらい、居場所を開いている例もあります。

・SCの白井さんは、「カフェいしださんち」を必要な人に紹介するほか、存在を知ってもらうように心がけています。
・年に数回はプログラムの講師として招かれ、フレイル予防の講話をしたり、高齢者のための暮らしの情報を伝えています。生活支援コーディネーターや地域包括支援センターを住民に知ってもらい、いざというときには気軽に相談できるような関係づくりをしています。
・周辺は路線バスも通らず高齢者にとっては不便なエリア。令和元年から毎週火曜日、地域包括支援センター運営法人「平尾会」が地域貢献の一環として、デイサービスの送迎車を商店街まで運行することになり、白井さんも調整役として関わりました。

こんな発想から考えよう!

居場所の介護予防強化には専門職との「つなぎ」を考える

・「地域包括支援センターへ相談に行くのは敷居が高い」という話はよく聞きます。居場所でSCと住民が顔見知りになっていれば、いざというときの相談がスムースです。
・さらにSCの名前と顔を覚えてもらうために、似顔絵を入れたチラシを作成して配布するなどの工夫をしている人もいます。

この事例から学ぶポイント

祐成 保志
東京大学大学院人文社会系研究科

「カフェいしださんち」は、見晴らしのよい丘の上にひらかれた住宅地にたたずむ個人宅です。開催日には、近所にお住まいの方々が続々と集まってきます。この居場所が10年にわたって継続されてきた原動力は何でしょうか。

入居の時点で住宅は完成していても、暮らしが完成しているわけではありません。想定していなかった不便が、日々の生活の中で生じます。ときには、個別の対処では足りず、住民が知恵と労力を持ち寄って、共同で解決することが求められる場面もあるでしょう。このような活動の積み重ねを通じて、住宅地は“まち”へと成熟し、家族の成長や老いをつつみ込む厚みと奥行きをもちはじめます。そのような時間を共有してきた人たちの経験と記憶が、「カフェいしださんち」の基礎を形づくっています。

この事例が教えてくれるのは、アセットが、はじめからアセットとしてあらわれるわけではないということです。それは、アセットが単独で力を発揮するわけではなく、他のアセットとの関わりのなかで価値を持つことを示しています。

例えば、「カフェいしださんち」の立地について考えてみましょう。すばらしい眺望が得られる半面、交通の便はよくありません。公民館などの公的な施設からも離れた場所にあります。それらは、単独でみれば不利な条件ともいえますが、むしろ、居場所を維持する力になっています。

この逆転を可能にしたのは、自宅のリビングルームを開放しようと思い立った石田さんの人柄、支え合う会みのりの配食サービスで培われたネットワーク、そして参加者のあいだで共有されている心の習慣（親しみやすさ、おせっかい、誰も取り残さないという思いなど）、といったアセットです。

公的な補助を受けていない個人宅での活動であることもまた、必ずしも有利な条件とはいえません。しかし、コロナの感染拡大という危機的状況にあっても、孤独を回避するというミッションを貫いて、活動を持続することができました。

「カフェいしださんち」は、住民の発意と創意工夫でつくられた居場所です。このため、第2層SCの白井さんの関わり方は、立ち上げや運営面での直接的なサポートとは異なり、健康管理講座のように、参加者の関心に応じた情報提供が中心です。この事例からは、地域ですでに活動している多様な交流の場があることに気づき、それらの担い手との接点をつくり、第2層協議体などを通じて、グループ間の情報交換や助け合いを促すことが、SCの重要な役割であることが分かります。

■生活支援コーディネーター（SC）の配置状況

稲城市
- 第1層　稲城市高齢福祉課　1名（嘱託）全地域担当
- 第2層　4圏域の地域包括支援センターに1名ずつ（地域包括業務と兼任）
  - ・第1地区（坂浜・平尾）／地域包括支援センターひらお（運営：社会福祉法人平尾会）

SC 担当SCからのメッセージ

今あるものを知ってもらうことも大切

・SCとしての活動当初は「新しいものを作らなければいけない」と思っていたのですが、現在は「今あるものを知ってもらうことも大切」と感じています。地域住民にまだ知られていない交流の場やつながりが、すでにたくさんあることに気がついたからです。「カフェいしださんち」もその中の1つです。独居や高齢者のみの世帯が多い地域なので、気軽に参加できる居場所としてもっと紹介していきたいです。

・また、社会福祉協議会の地区担当とは緊密に連絡を取り合い、社協が立ち上げた居場所にも一緒に立ち寄るなど連携が進んでいます。

居場所で顔見知りになると、日常的にもつながる

・居場所で交流している人同士が顔見知りになることで、居場所に来ていないときでも、挨拶や声かけ、さりげない見守り、困ったときに助け合いができる行動につながっています。これは嬉しい成果です。

今後の展開

・第2層会議での「世代間交流の行事を育成会に働きかけよう」という提案を受けて昔遊びイベントを開催。地域の顔見知りが増えて挨拶運動や見守り活動へと展開しました。今後は、若い世代ともつながる活動にも取り組んでいきたいです。

06 ゆずり葉 高齢者向けサロン

東京都板橋区高島平

昼間は福祉サロン、夜は居酒屋。一日中人が集まる地域の居場所

基本情報

名　　称 ゆずり葉
所 在 地 板橋区高島平 8-4-8
開催日時 月・火・金・土・日 11:00～17:00
運営主体 NPO法人ゆずり葉
開 所 日 2014年9月　NPO法人設立2017年9月

東京都板橋区 ※2021年4月板橋区資料より
人口: 570,024人　総世帯数: 317,322
面積:32.22㎢　人口密度:17691.6人/㎢
高齢化率:23.87%

板橋区高島平地区 ※2022年2月板橋区資料より
人口:49,396人　総世帯数:29,089
面積:4.9㎢　人口密度:10,075人/㎢
高齢化率:30.73%

こんな居場所

[地域] 高島平団地入居時より自治会活動が盛んな地域

「ゆずり葉」がある板橋区高島平地区は、板橋区北部、荒川の南側に位置する地域です。1970年代に完成した高層集合住宅群である高島平団地がこのまちのシンボルです。

高島平団地の入居が始まった当初から自治会等の地縁団体が組織され、現在に至るまで多様な団体が活発に地域づくり・地域福祉に携わっています。

ここで長年電器店として地域の人たちと関係づくりをしてきた齊藤さんは、お客さんが高齢になる姿にこれまでお世話になった恩返しがしたいと、居場所づくりを考えました。しかし、居場所を維持するには運営資金が必要です。そこで、居酒屋の建物を活用し、夜は居酒屋営業、昼は地域の居場所運営という2本柱の活動を立ち上げました。

[居場所の様子] 居酒屋のお客さんがサロン活動をサポート

ゆずり葉は、団地とは反対側の高島平駅西口北側を出て徒歩1分の商店街の中にあります。店舗正面には、窓を大きく開けたカウンターがあり、外から中の様子が見えるオープンなつくりです。中からも通りを行く人が見えて、「あとで来てね」などと声かけする様子も見られます。

週5日11時～17時のサロン活動を中心に、認知症カフェや筋トレ教室など様々な活動が展開されています。活動の中心は居場所のNPO代表齊藤さん。サロンが終わると居酒屋のママとして活躍します。

昼のサロン参加者がそのまま居酒屋で飲んだり、居酒屋のお客さんがサロンのお手伝いをしたりと、福祉サロンと居酒屋という2つの異なるシーンがあることで、人が人を呼ぶ居心地の良い居場所が実現しています。看板にあるキャッチフレーズのとおり"食べれる しゃべれる 集いの空間"です。

居場所運営団体の性質
- NPO法人
- 任意団体
- 第2層協議体

拠点の性質
- 公共施設
- 店舗／空き店舗
- 自宅
- 畑

生活支援コーディネーターの所属
- 第1層
  - 市役所
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
- 第2層
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
- 住民

「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

長年お世話になった地域に恩返しがしたい!を実現した取り組みについて、アセットの活用に着目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

・20代の頃から家族が経営する高島平団地の電器店で働いていた齊藤さんは、電器製品の設置や故障の相談で、よく顧客の高齢者の家の中へ入ることがありました。そこで大事なものを何度もなくしたりする高齢者の様子を目の当たりにし、異変があったとき離れて暮らす家族に知らせるなどのサポートを行うようになりました。

・その後、東日本大震災の経験を経て、地域への恩返しをしたい気持ちから、板橋区主催のシニア世代コミュニティビジネス推進事業の勉強会に参加、2015年に居酒屋の店舗を活用した居場所活動を立ち上げました。

主な関係者

NPO法人ゆずり葉代表
居酒屋「笑い処」ママ 齊藤さん
・実家は高島平団地の電器店。この地域に恩返しがしたいと居酒屋と居場所を立ち上げた。いたばし総合ボランティアセンター運営委員、一社)国際箸学会理事。"感謝"と"笑顔"がモットー。

「笑い処」料理長 加藤さん
・ホテルや一流料亭での経験がある。魚をさばくのが大好き。「笑い処」でのおすすめはラム肉料理。

サポーターたち
・居酒屋のお客さん、齊藤さんの電器店時代からの知り合い、現在に至るまでの取引先、地域の商店会。

高島平地域担当第1層SC 小林さん
・齊藤さんが進める取り組みを「福祉の森サロン」や「認知症カフェ」などの制度につなげたり、利用者やボランティアの紹介などのサポートをしている。

カギとなるアセット

人

○運営者
・NPO代表=居酒屋「笑い処」のママ
○ボランティア
・サロン参加者　**★居酒屋のお客さん**
○協力者
・板橋区、板橋区社協、都健康長寿医療センター研究所の専門職

場

○活動拠点
★オープンで入りやすい居酒屋「笑い処」
・ゆずり葉農園(ボラセンミニ農園)

モノ・資金

○助成金・補助金
・福祉の森サロン(板橋区社協)　・通所型サービスB板橋区
○委託費
・東京都健康長寿医療センター研究所(農林水産省の研究費獲得)
○会費、寄付、食品提供

情報・ネットワーク

○高齢者の見守り情報
・第2層協議体　・NPO代表が長年行っている「卵の共同購入」(注文や受け渡し時にお困りごとを把握し声かけ)
・NPO代表の電器店時代の顧客、経験
・ココからステーション(医療センターの出張所)
・板橋区おとしより保健福祉センター
○地域全般の人
・活動に関する情報
・地元の自治会や町会(自治意識が高く活動が活発)
・民生・児童委員
○居場所への支援・情報交換
★板橋区社協、いたばし総合ボランティアセンター
・サロンネットワーク(区社協主催)

3つのアセットにフォーカス

サポーターになったのは

人

元々あったアセット　**居酒屋のお客さん**

新たに生まれたアセット　**居場所「ゆずり葉」のサポーターへ**

会場として活用したのは

場

元々あったアセット　**夜は居酒屋、昼はサロン**

新たに生まれたアセット　**福祉につながる地域の居場所**

地域福祉に位置づけるために活用したのは

情報・ネットワーク

元々あったアセット　**NPOの自主的な取り組み**

新たに生まれたアセット　**社協と連携して持続性のある制度事業へ**

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

事例から発想しよう!
我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

・ゆずり葉の活動において齊藤さんは、新しい参加者が迷わないように、「指示を出すのも責任をとるのも自分」と考えています。その一方でとても「頼み上手」でもあります。ゆずり葉のホームページの作成や、口コミで人を呼ぶ、サロンや農園での手伝いや募金など、ゆずり葉の活動の多くをサポートしているのは居酒屋「笑い処」のお客さんです。
・居酒屋のお客さんの様々なサポートに「ゆずり葉」の会員からの"ありがとう"があり、それが居酒屋のお客さんの心を動かすという循環ができています。

こんな発想から考えよう!

場所を共有する人をねらおう

・いつもと違うメンバーが集まりそうなイベントを企画してみてください。新しい人との交流が、次の活動を生み出すきっかけになるでしょう。
・また、その居場所をどんな団体が利用しているのかを調べ、お互いの活動に招待しあったりするのも良い方法です。同じ場所を活用していても、活動内容により違う雰囲気が生まれることもあり、それがまた新たな活動に興味を持つ動機になります。

・入口の看板には「ゆずり葉」と「笑い処」が並び、ここは一体何の店?とちょっと気になる店の構えです。入口横の大きな窓からは中の様子が見え、老若男女誰でも入りやすいです。
・一見福祉とは遠い、お酒が並ぶ大人の居場所の雰囲気が、「福祉施設はいやだ」という人も居心地よく過ごせる理由かもしれません。
・高齢者が語る成功談・失敗談が意外と若者の役に立ち、高齢者も若者をかわいがる立場を楽しんでいます。役割が自然に生まれています。

こんな発想から考えよう!

福祉施設ではない場所の良さを考える

・福祉を実現するためには、必ずしも"福祉施設らしい"デザインである必要はありません。一旦福祉から離れてその場所を捉えなおしてみると、その場所に集う人の心身の健康維持につながる良さを発見できるかもしれません。

・ゆずり葉では、サロン、ランチ、都市型農福プログラム、生みたて卵の共同購入など、制度や助成とは関係なく齊藤さんが必要だと思う活動を発展させてきました。
・活動の様子を見た社協や区役所が制度の仕組みのなかに取り込みました。例えば「福祉の森サロン」への登録や「認知症カフェ」立ち上げ支援、通所型サービスBの補助金などです。
・NPOとしての自主性を活かしながら、活動が効果的に持続できるよう社協や区役所、東京都健康長寿医療センターと連携しています。

こんな発想から考えよう!

最初の「やりたい」のために制度を上手に活用

・ゆずり葉は、制度にあわせて立ち上げたのではなく、「こんな居場所が必要」と思って活動してきたものが、あとから制度に位置づけられてきました。
・制度や補助事業から考えると、「これは条件にあてはらない」と始める前からあきらめてしまうこともあるかもしれません。あくまで「やりたい」が先にあって、どうやったら支援できるか考えるという順番は大切です。

この事例から学ぶポイント

中島 智人
産業能率大学経営学部

「ゆずり葉」の事例から学ぶことができるポイントとして、まず、起業家的・企業家的姿勢の重要性を指摘したいと思います。ここでいう「起業家的姿勢」とは、地域の困りごとに着目し、それに対処するために新しい何かを始めることです。この事例では、代表である齊藤敦子さんが、起業家として、高島平という地域で、誰もが気軽に立ち寄れる地域に開かれた集いの場・通いの場を開設したということです。「企業家的姿勢」には、立ち上げた事業を事業体として継続させること、事業を経営すること、という意味を込めています。この事例では居場所経営、つまり通いの場「ゆずり葉」を継続して運営することです。

「誰でも」通い集う場とするためには、その場所が魅力的であるだけではなく、継続的な運営に必要なヒト・モノ・カネといった経営資源を、様々な方法で集めなければなりません。「ゆずり葉」では、ランチの売り上げのほか、立ち上げ時に認知症カフェとして区の補助金を受けたり、利用者に「会員」として会費や寄付を求めたりと、多様な資金を得ています（カネ）。また、利用者が他の利用者を気にかけたり、利用者やゆずり葉の活動を支援したいと思う人たちの力を借りたりと、様々な人的ネットワークを活用しています（ヒト）。そして、夜は居酒屋となる場所を、昼に居場所として利用しています（モノ）。「ゆずり葉」の継続的な運営のための様々な方策は、福祉的な居場所の持続可能なビジネス・モデルとして、参考になるのではないでしょうか。

次に指摘したいのは、生活支援コーディネーターの役割として、条件整備・環境整備の重要性です。この事例では、社会福祉協議会が担っている第1層生活支援コーディネーターの役割です。多くの第2層の生活支援コーディネーターを住民が担っている板橋区では、第2層SCを含めて住民主体の生活支援体制整備事業を進めるうえで、第1層SCの役割に特徴があります。印象的なのは、第1層SCの「ゆずり葉」のような地域活動を行う人たちに対する眼差しです。それは、齊藤さんや居場所に通い集う人たちの意志を尊重し、その人たちがそれぞれの想いを達成できるよう支援する、というものです。一定の水準を満たした一律の体制を整えるのではなく、地域の特性を受け入れて、「そこにあるもの」から住民主体で体制を作り上げるために、第1層のSCは住民が活動しやすいような条件・環境を整備する、という取り組みは、アセット重視の考え方そのものと言えるのではないでしょうか。

■生活支援コーディネーター（SC）の配置状況

板橋区

第1層　板橋区社会福祉協議会全域統括1名、区内4ブロック（板橋、上板橋、志村、赤塚）各1名、計5名を配置。

第2層　日常生活圏域18区域で第2層協議体が立ち上がっており、2層SCは協議体メンバーから選出されている。地域に根ざして継続して活動してもらうため、2層SCの半数以上は住民（民生・児童委員、自治会長など）。

SC 担当SCからのメッセージ

アセット同士のネットワークづくりが、第1層SCの開発すべき資源

・高島平のような地域活動が活発な土地柄では、地域に既に多種多様なアセットが存在しています。既存アセットが豊富にある地域は、無理に新たな活動を創出するのではなく、既存アセットをいかに活用するかが大切です。各活動の「良いところ」と「良いところ」を掛け合わせていく考えです。月1回高齢者が集まるサロンもあれば、常設開催で多様な人が出入りする居場所もあります。どちらが優れているということではなく「一つ一つが宝物」ととらえ、それらをつなぎ合わせる場が、第2層協議体です。このネットワークを土台にアセット同士が互いに作用することで、今ある居場所の発展や新しい居場所の創出につながります。このネットワーク自体が、生活支援コーディネーターが開発するべき資源だと考えています。

「住民主体」は、「住民がしたい活動を主体的に展開すること」

・また、住民主体も大切です。住民主体とは「住民に主体的にやってもらうこと」ではなく、「住民がしたい活動を主体的に展開すること」だと思います。地域の「困り事」を、地域の「やりたい」で助ける。ありがとうの交換から、地域づくりの良い循環が生まれる。それが住民主体の活動になります。

・地域に隠れているアセットも必要なアセットも、専門職ではなくそこに暮らす地域住民が一番わかっていることです。それらの情報を収集把握し、つなぎ合わせるためにみんなで協議する。それが第2層協議体の理想形だと思っています。

07 こうせい親子゛（おやじ）食堂

多世代型地域食堂

大阪府大阪市港区港晴

男性スタッフが活躍する、参加者が高齢者:子ども=6:4の多世代食堂

基本情報

名　　称 こうせい親子゛食堂
所 在 地 大阪市港区港晴1-5-18 港晴会館 老人憩の家
開催日時 第2土 11:00～14:00
運営主体 港晴地域活動協議会 有志
開 所 日 2020年7月

大阪市港区 ※2020年国勢調査より
人口:80,948人　総世帯数:42,612
面積:7.86㎢　人口密度:10,298.7人/㎢
高齢化率:27.8%

大阪市港区港晴地区 ※2021年9月大阪市資料より
人口:4,512人　総世帯数:2,469
面積:0.41㎢　人口密度:11,004.8人/㎢
高齢化率:30.3%

こんな居場所

[地域] 地域のつながりが強く、住民の交流が活発な地域

こうせい親子゛食堂がある大阪市港区は、ウォーターフロント開発などにより新しいまちのにぎわいがある一方、昔ながらの顔見知りが多く住民同士の交流が活発な下町情緒あふれる住宅街の一面もある地域です。神社の祭りやイベントが盛んで、地域と学校とのつながりも強く子どもの安全を守るための活動が育まれてきた土壌があります。

このような地域で、コロナ禍において、高齢者の引きこもりや子どもの孤食を心配する声が住民から上がったことをきっかけに、2020年7月、子どもから高齢者までが集う多世代食堂「こうせい親子゛食堂」が立ち上がりました。

[居場所の様子] 男性スタッフによる多世代食堂

「こうせい親子゛食堂」は、毎月第2土曜日の11時から14時まで、地域のコミュニティ施設「港晴会館老人憩の家」で開催されています。ネーミングには、親子をはじめ多世代の人に来て欲しい気持ち、運営はおやじが担うという意気込みが込められています。

ある夏の日に訪ねると、野球の練習を終えた子どもたちや、近所で誘いあって来た高齢者など、たくさんの人で賑わっていました。今日のメニューはカレーライス。子どもは100円（就学前の児童は無料）、大人は200円で、誰でも食べることができます。用意した100食は、終了時刻前に完食になることもあるほどの人気です。

メニューは、大人にも満足してもらえるようカレーに甘口と辛口が用意される日があったり、「シチュー」や「から揚げとトン汁定食」など、バリエーションが増えています。

月1回の活動が日常の暮らしの中にも広がり、まちで子どもに会うと「カレーのおっちゃん」と声をかけてもらう関係づくりができ始めています。

居場所運営団体の性質
- NPO法人
- 任意団体
- 第2層協議体

拠点の性質
- 公共施設
- 店舗／空き店舗
- 自宅
- 畑

生活支援コーディネーターの所属
- 第1層
  - 市役所
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
- 第2層
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
  - 住民

「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

コミュニティ施設「老人憩の家」で食事をしながら多世代交流がしたい! を実現した取り組みについて、アセットの活用に着目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

・民生・児童委員の信野さんは、コロナ禍で、高齢者がひきこもりがちになったり、学校が休校になると子どもたちがさらに孤食を強いられたりするのではないか、という危機感を感じ、「こんな時だからこそなにかできないか」と考えました。

・「誰でも来られて交流ができる食堂を立ち上げたい」と信野さんが生活支援コーディネーターに相談したことがきっかけとなり、「こうせい親子食堂」を立ち上げることになりました。

主な関係者

住 民生・児童委員の信野さん
・地域活動協議会副会長等を務め、地域ネットワークが広い。

住 こうせい親子食堂代表 黒川さん
・前地域活動協議会(以下「地活協」)会長。自らの地活協会長時代に定年制を導入し、令和2年度末に退任。地域のお祭りやイベントには積極的に参加していて、男性の人脈も豊富。

SC 生活支援コーディネーター(SC) 久保さん
・大阪市港区社会福祉協議会5年目、第1層SC活動歴3年目。
・前職は設計関係技術者。祖父の介護の際、人とつながる「ケアマネ」の仕事に興味をもち転職。

社協 地域見守りコーディネーター 河本さん
・港晴地域を担当し、港晴会館に隣接する「港晴東会館老人憩の家」に常駐している。

用語

[地域活動協議会(地活協)]概ね小学校区を範囲として地域振興会(町内会)、社協、NPO、企業などで組織され、地域課題の解決やまちづくりに取り組んでいる(大阪市24区独自の仕組み)。

[地域見守りコーディネーター]おもに老人憩の家に常駐している相談支援員。地域住民の中から必要な知識やノウハウをもつ人が支援者として1名ずつ配置されている(大阪市港区社協独自の仕組み)。

カギとなるアセット

人

○運営者/ボランティア
地域活動協議会有志、民生・児童委員、昔からの顔見知り
★大阪港カッターレースの仲間

場

○高齢者の活動拠点
★高齢者のためのコミュニティ施設「老人憩の家」

モノ・資金

○助成金
・大阪市ボランティア活動振興基金
○食品提供
・大阪市社会福祉協議会
・こどもの居場所サポートおおさか(企業等からの食品提供をコーディネイト)

情報・ネットワーク

○地域全般の人・活動に関する情報
・地域活動協議会
○高齢者の情報と利用紹介
・港区社会福祉協議会「見守り相談室」
★地域見守りコーディネーター
★地域包括支援センター/ブランチ
○子どもに関する情報
・港晴小学校(PTA、校長先生)
・地域子ども支援ネットワーク
○ボランティアになってくれそうな人のネットワーク
・神社の祭り
・港晴フェスタ(港晴小学校を会場に、地域活動協議会が主催)

3つのアセットにフォーカス

担い手になったのは
人
元々あったアセット: カッターレースチームの仲間
新たに生まれたアセット: こうせい親子食堂の男性ボランティア

子どもも参加する多世代食堂の会場として活用したのは
場
元々あったアセット: 高齢者のための施設「老人憩の家」
新たに生まれたアセット: 子どもも参加する多世代食堂の拠点へ

居場所で介護予防を強化するために活用したのは
情報・ネットワーク
元々あったアセット: 地域見守りコーディネーター 地域包括支援センター/ブランチ
新たに生まれたアセット: こうせい親子食堂の相談支援者

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

事例から発想しよう!
我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

・民生・児童委員の信野さんは、常々地域でもっと男性に活躍してもらいたいと感じていました。立ち上げる活動は男性を中心に運営できるようにしたいと考え、前年度に地活協の会長を退任した黒川さんに声をかけました。

・黒川さんは、大阪港で行われるカッターレース(手漕ぎボート競技)にシルバーチームで参加しています。カッターレースのチーム仲間にも親子食堂への協力を呼びかけました。地活協の現会長で、小学校PTA会長の経験もあるチーム仲間が副代表になりました。

こんな発想から考えよう!

楽しい人間関係があればボランティアも楽しくできる

・「地域活動への男性参加は少ない」という課題はよく聞きますが、「スポーツや趣味の仲間」がいる男性は多いことでしょう。
・公共主催のイベントやサークル、あるいは民間の様々な教室も含めて、糸口をさぐるのも良いかも知れません。

・港晴地域には老人憩の家が2つあります。「港晴東会館」では70歳以上を対象にした高齢者食事サービスの活動が行われていますが、「港晴会館」には食事提供の活動がなく、使われていない時間もありました。

・「港晴会館」は小学校のはす向かいにあり、子どもたちが来やすい場所でもあります。
・そこで、老人憩の家「港晴会館」を拠点として、高齢者も子どもも来やすい多世代食堂を行うことにしました。

こんな発想から考えよう!

高齢者+子どもが参加する活動として高齢者用施設を活用

・「高齢者のための」といった利用者を限定する施設もありますが、高齢者にプラスして子どもを参加者に位置づけて、多世代交流を実現している活動が近年増えています。「子どものためなら」という新しい協力者の獲得も期待できそうです。
・空き時間や空きスペースを地域貢献活動として貸し出す福祉施設も多くあります。

・老人憩の家港晴会館に配置されている地域見守りコーディネーターの河本さんは活動日には必ず参加し、ボランティアメンバーと一緒に皿洗い等を手伝いながら参加している高齢者の相談にのったり、高齢者と子どもの世代間交流のつなぎ役として活躍してもらっています。顔見知りの河本さんがいることで初めての高齢者も参加しやすくなり、地域への周知も進んでいます。また地域包括支援センターとの連携も欠かせません。
・高齢者にとって、子どもと交流したり、歩いて来ること自体が介護予防になっています。

こんな発想から考えよう!

居場所の介護予防強化には専門職との「つなぎ」を考える

・居場所でおしゃべりをしているとポロッと困りごとが出るという話や、一緒に過ごす中で「いつもと様子が違う」と気づくことがあるという話を聞きます。
・専門職との連携は運営者・参加者双方にとって大きな安心感です。注意するポイントを居場所運営者と共有して、何かあったとき頼りになる関係をつくっておきましょう。

この事例から学ぶポイント

隅田 耕史
NPO法人フェリスモンテ

地縁組織の内と外、あるいは互助と共助が織りなす地域づくりがイメージできる事例だと思います。

『こうせい親子˝(おやじ)食堂』が立上り、多くの人に愛されるようになったのは、運営主体が地域活動協議会の中心メンバーでありながらも、地域活動協議会の中の活動にせずに、独立した運営にした点が重要だと思います。特にコロナ禍の受け止め方が人によって大きく異なる状況であったことを振り返ると、なおさらだと思います。

訪問した際にまず印象に残っているのは、『ちょい悪おやじ』たちが楽しそうにしているなということでした。40、50代の現役世代の男性たちが活動に参加しているきっかけをうかがうと、カッターレース(大型手漕ぎボートのレース)の参加メンバーが中心になっているそうです。楽しんで活動をするということが、その場の魅力にも、活動の継続にも大切なことですが、あらためて実感させられました。

食堂だけでなく、2階を活用して子どもたちが遊べるようにするなど、活動を続けながら、楽しく発展しているようでした。地域の公園の掃除を定期的に行うようになるなど、建物の外を出て、地域全体の活動に広がっています。

中心メンバーの「おやじ」たちが楽しそうに取材陣とお話をされているなか、視界の先で洗い物をしながらこちらを見守っていたのが、仕掛け人の民生・児童委員の信野さんでした。この活動が幾重にもなって支えられている様子を感じました。

SCの久保さんは、日常的に出入りして、その都度必要な情報を伝えたりすることで、関係者たちと信頼関係を築いていっているようでした。地域活動協議会ですでに取り組まれてきた互助の活動と、その中心メンバーが別に取り組む互助の活動がうまく連続できていたのは、関係者たちの信頼とコミュニケーションがあったからこそだと思いました。各地で広がっているこども食堂等の活動とSCが結びついていない地域が多く見受けられますが、多世代型の活動への支援としてSCの業務にしっかりと位置付けている点も重要です。

またSCの久保さんは、2021年度から住民主体の訪問型サービスのコーディネートも始めるようになっています。居場所の中で関係性が深まってくる中で、一人ひとりのニーズや家庭の様子がわかってくることもあります。そのときに、「この人のお手伝いをしてもいいよ」という活動したいという気持ち、あるいは「この人になら話してもいい、手伝ってもらってもいい」と思えるような利用したいという気持ちを後押しする仕組みにもなります。日常的な助け合いの延長線上にある互助の取り組みと、よりシステム化された共助の取り組みがつながっていくような今後の展開にも期待していきたいと思います。

地域に様々なものがあることが大切ですが、それぞれの特性を理解することの大切さがよくわかるのではないでしょうか。

■生活支援コーディネーター(SC)の配置状況

大阪市港区

第1層　大阪市港区社会福祉協議会　1名(専任)
・全地域担当

第2層　大阪市港区社会福祉協議会
・11地域のうち、6地域(港区包括圏域)と5地域(港区南部包括圏域)に1名ずつ計2名(第2層の配置は令和3年度9月から)。

担当SCからのメッセージ

高齢者と子どもが集まる居場所の価値を実感

・高齢者にとっての「こうせい親子˝食堂」は、「子どもと接することができる」「歩いて来ること自体が介護予防になっている」など、他では得難い価値を生み出していることを実感しています。

・居場所に来ている子どもが、道でボランティアの男性たちと出会ったときに、楽しそうに「カレーのおっちゃん!」と気軽に声かけし合えるような関係づくりができたことも、とても嬉しく誇らしいです。

・地域のみなさんの熱意で、コロナ禍にあっても新たな居場所をつくることができたことに本当に感謝の気持ちで一杯です。

今後の展開

・高齢者と子どもの交流がもっと活発になるよう、次なる活動を住民の方と一緒に検討しています。

・1つは、食堂2階の部屋を学習支援や多世代の居場所(遊び場)として利用したいというアイデアです。学生などにボランティア層を広げ、子どもたちの学習支援や、昔遊びによる大人と子どもの交流をしていきたいです。

・また、公園の広場に畑を作り食堂用に野菜を育てるという構想も練っています。そのために必要な準備など、居場所やその他の関係各所と相談しながら検討中です。

08 ふれあい食堂 多世代型地域食堂

鳥取県鳥取市河原町渡一木

「地域の常夜灯になる」地域共生社会をめざす地域食堂

基本情報

名　　称 ふれあい食堂
所 在 地 鳥取県鳥取市河原町渡一木277-1 河原町コミュニティセンター大講堂
開催日時 第4土 10:00～14:00
運営主体 河原共助会
開 所 日 2020年9月

鳥取県鳥取市 ※2020年国勢調査より
人口: 188,465人　総世帯数:77,029
面積:765.3㎢　人口密度:246.3人/㎢
高齢化率:29.4%

鳥取市河原町 ※2020年国勢調査より
人口:6,920人　総世帯数:2,506
面積:83.62㎢　人口密度:82.7人/㎢
高齢化率:38.38%

こんな居場所

［地域］古事記にも地名が登場する、早くから開けた地域

鳥取市河原町は鳥取県東部に位置し、早くから開けた地域で古代には因幡国八上郡の中心として栄えました。古事記にも地名が登場しています。2004年に8町村と鳥取市に編入合併されました。町の中心で二つの川が合流する自然の豊かな地域です。

鳥取市には、福祉推進主体として社協、地域包括支援センターの他に重要な機関として「人権福祉センター」があり、福祉活動の拠点として相談事業などを行っています。市全域を対象にした中央人権福祉センターと10の地域にセンターが設置されています。

中央人権福祉センターは2017年「鳥取市地域食堂ネットワーク」を創設し、子ども食堂・地域食堂の立ち上げと運営を支える支援を行っています。2019年に河原人権福祉センター所長に着任した大門さんは、河原町でも子ども食堂を立ち上げる計画があったことを知り、すぐに試験開催を実施しました。試験開催で高齢者の参加が多かったことから「地域食堂」としての立ち上げを決め、食堂運営ボランティア団体「河原共助会」を組織、2020年9月に「ふれあい食堂」がスタートしました。

［居場所の様子］講堂で開催の地域食堂には高齢者から子どもまでが参加

毎月第4土曜日の10時～14時に開催される「ふれあい食堂」は、子どもに限らずに誰でも来られる「多世代食堂」です。会場は、河原町コミュニティセンターの大講堂。広々とした会場に、会議用の机を2台あわせて4人掛けにした上にテーブルクロスをひき、この島が12程作られると、最大50人が座れる食堂ができあがります。

参加費は子ども(高校生以下)無料、大人100円。この日のメニューは、クリームシチュー、麻婆豆腐、しらすのたまごとじ、つけあわせ、フルーツヨーグルト。栄養満点で満足感の高いメニューです。食前には、けん玉やコマ等の昔遊び体験のお楽しみや、学習支援も行っています。

居場所運営団体の性質
- NPO法人
- 任意団体
- 第2層協議体

拠点の性質
- 公共施設
- 店舗／空き店舗
- 自宅
- 畑

生活支援コーディネーターの所属
- 第1層
  - 市役所
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
- 第2層
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
  - 住民

「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

計画はあったが行われていなかった「地域食堂」を、「試験開催」として実現した取り組みについて、アセットの活用に着目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

・地域食堂の試験開催をしてみると子ども以外の高齢者等のニーズも高いことが分かり、大門さんは子どもを中心に誰でも参加できる「ゆるくて居心地のよい小さな空間」をコンセプトとした多世代交流の地域の居場所をつくろうと考えました。
・大門さんがめざしたのは、人権福祉センターを核に、市社協SC、児童館、地域包括支援センター、人権擁護委員、民生・児童委員、学校など町内の様々な機関と連携し、相談やプラットフォームの機能がある地域食堂です。

主な関係者

人権 河原人権福祉センター所長 大門さん
・2019年に河原人権福祉センター所長に着任。ふれあい食堂立ち上げにあたり、児童館、学校、社協、地域包括など様々な機関に声をかけ連携を呼びかけた。

住 河原共助会のメンバー
・地域住民や民生・児童委員、児童館厚生員、福祉活動関係者が参加している。

SC 第2層生活支援コーディネーター 西尾さん
・鳥取市社会福祉協議会8年目、第2層SC活動歴4年目。
・元々社協職員で、子育てで一時職場を離れていたが復職。河原共助会の一員として活動に参加。

カギとなるアセット

人

○運営ボランティア
★河原共助会
（地域住民／民生・児童委員／児童館厚生員／人権擁護委員／地域包括支援センター職員／社会福祉協議会職員／河原人権福祉センター職員 など）
○特技がある人
★手話通訳ができる人

場

○地域食堂の会場
・河原町コミュニティセンター大講堂

モノ・資金

○食材提供
★NHKの取材を見た企業からの食材寄付
・道の駅清流茶屋かわはら
・NPO法人和貴の郷
・マルサンアイ(株)

情報・ネットワーク

○鳥取市内の地域食堂に関するネットワーク
★地域食堂ネットワーク
・鳥取市
○大学生ボランティア
・ユリイカ
○子どもに関する情報
★小学校／中学校／保育園
○ふれあい食堂のPR
・児童館だよりに掲載
・NHKの取材

3つのアセットにフォーカス

担い手になったのは（人）
元々あったアセット：**意欲のある住民や関係者**
新たに生まれたアセット：**「河原共助会」メンバー**

中間支援として活用したのは（モノ・資金／情報・ネットワーク）
元々あったアセット：**鳥取市地域食堂ネットワーク**
新たに生まれたアセット：**運営サポートや寄付食品のシェア**

子どもが参加しやすくなるために活用したのは（情報・ネットワーク）
元々あったアセット：**小・中学校の校長先生**
新たに生まれたアセット：**子ども参加のプログラムの立案**

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

事例から発想しよう!
我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

・立ち上げる前の試験開催に参加し、積極的に関わってくれた住民や包括職員・民生・児童委員・児童館厚生員・SCに所長が声をかけ、食堂の調理や会場設営、企画を行うボランティアグループ「河原共助会」を結成しました。
・困難を抱える人のアウトリーチの場とするためには相談対応ができる人が必要です。民生・児童委員や社協、SCもに加わり、手話通訳者も参加してくれることになりました。
・参加する人みんなに役割がある食堂です。調理には90代の人や、ろう者も参加しています。

こんな発想から考えよう!

どの立場で参加するかを考える

・居場所や地域食堂の運営に、住民と一緒に行政職員や公的機関の職員、民間事業者など多様な人が関わることがあります。そんなときは例えば「社協職員として居場所づくりに携わっておりますが、本日は一児の母で地域住民として参加します」など宣言してしまうのもオススメです。一市民として地域の人と同じ目線で参加するうちに信頼関係も生まれますし、「仕事」として支援する場面もきっとあります。

・「鳥取市地域食堂ネットワーク」に加盟して、食品の寄贈やコロナ禍での運営についての情報共有、寄付金の分配などの支援を受けています。
・鳥取大学のサークル「ユリイカ」もネットワークの構成団体です。遊びや調理のボランティアとして「ふれあい食堂」へも毎回学生が参加しています。
・NHKでふれあい食堂が取り上げられたことをきっかけに、地元の弁当会社や食品メーカーからの寄付もありました。

こんな発想から考えよう!

「こんな支援あったらいいな」を整理しておく

・多くの企業がCSR活動に取り組んでいます。SDGsの観点から、地域の活動に支援する動きも増えています。
・また、支援内容を明確に伝えた方が、企業も支援がしやすいようです。どんな支援が必要か整理しておくと、いざというときに対応しやすいでしょう。

・小学校校長に子どもに参加してもらうための相談をすることもあります。構想段階ですが「モノづくり教室」のアイディアなどが出ています。
・中学校校長は食堂に毎回参加、中学生が職場体験としてふれあい食堂に参加する計画も進みそうです。

こんな発想から考えよう!

学校に通う子どもや孫、卒業生関係者から広げてみる

・子どもの参加には、学校との連携が大切です。活動メンバーが子どもたちと顔見知りになることで、子どもも安心して参加でき、なにかあった際には学校に相談ができるからです。
・直接学校に連携について訪ねるのもいいですが、地域活動メンバーに学校に通う子どもや、卒業生でも学校とつながりがある人はいないか聞き、その人と一緒に訪ねていく方がスムースです。

この事例から学ぶポイント

河原ふれあい食堂は毎月数十人の地域住民が集まる食堂を開催し、バラエティ豊かな献立と昔遊びや学習支援によって老若男女が楽しく過ごせる居場所を提供しています。この活動は様々なアセットにより成り立っていますが、その中でもとくに重要な位置を占めるのが「鳥取市地域食堂ネットワーク」という仕組みです。子どもの問題が顕在化する中で市内の民間団体と行政が子ども食堂の活動を始めたことをきっかけとして2017年に設立された地域食堂ネットワークは、現在40団体以上の地域食堂の運営と支援を行っています。ネットワークでは地域食堂を「子どもを中心に地域の様々な人が集う居場所、多様な人や社会資源がつながる場」と位置づけ、地域食堂が継続的・安定的に運営を行うための仕組みづくりを行い、地域共生社会をめざす活動を行っています。具体的には、企業から受けた寄付金・食材を集約し各食堂団体へ分配したり、学生ボランティアグループと連携してボランティアを派遣したりする他、情報交換会等の情報共有を精力的に行っています。

このようなモノや情報の支援を受けることで、河原ふれあい食堂は安定的に活動を継続することができており、多様な人の出会い・ふれあいのプラットフォームとなっているのです。私たちが食堂に訪問したときに目に入ったのは、感染症対策のパーテーションを挟んで賑やかにおしゃべりする高齢者、少し離れた距離で手話で会話するボランティアと聴覚障害のある方、調理ボランティアとして参加している市内の大学生、おもちゃで遊ぶ幼児等様々な方が一つの会場で思い思いに過ごしている様子でした。河原では昔と比べて子どもがずいぶん減ったけれど食堂は高齢者が子どもたちと触れ合えるいい機会になっている、と児童館に勤め食堂の運営を行う佃さんがおっしゃっていましたが、確かに大学生に調理を教えたり、子どもに昔遊びを教える高齢者の生き生きとした姿が印象的でした。また、大門さんを中心に様々なアイデアを出し、まずは試験的に実施してみる!という河原ふれあい食堂の行動力もまた素晴らしいと感じました。最近では、地域の医師に相談して病院に来た引きこもりがちの高齢者に”処方箋”としてふれあい食堂を勧めてもらう事はできないかと構想していて、高齢者の孤立・孤独に対する社会的処方の取り組みを始めようとしているそうです。

河原ふれあい食堂がしなやかな共生の場として活動を継続させ、さらにその活動の幅を広げていることは、地域食堂ネットワーク・鳥取市、SCを始めとした専門職、そしてボランティアに参加する住民の方々といった関係者が地域食堂のもつ意義や地域づくりのビジョンを共有しながら連携できていることが大きなカギとなっていると言えるでしょう。

（事務局）

■生活支援コーディネーター（SC）の配置状況

鳥取市

第1層SC　鳥取市社会福祉協議会　1名（専任）

第2層SC　鳥取市社会福祉協議会　7名（専任）

・2層圏域は市内に41地区あり、地区ごとに担当がいる。

SC 担当SCからのメッセージ

居場所に関わることで地域を知り、つなぎ役へ

・SCになりたての頃は、地域や関係機関とのつながりができておらず、どこに相談して良いか分からなかったため孤立感がありましたが、ふれあい食堂に関わるようになり、様々な機関や地域住民を「知る」ことができ、今ではつなぎ役として関われるようになりました。

3つのポイント

・SCとして大切にしている3つのポイントがあります。

・1つ目は「知ること」です。

地域を「知る」、地域活動を「知る」、地域の人材を「知る」ことです。知ることが「つなぎ役」への第一歩です。

・2つ目は「人脈づくり」です。

人と人との信頼関係があってこそ「つなぐ」ことができます。

・3つ目は「気づくこと」です。

気づきの視点が増えていけば「つなぎ役」としての視野が広がります。

今後の展開

・2021年12月、河原町で第2層協議体が立上りました。各関係機関や地域住民の「つなぎ役」として、地域課題を検討していく取り組みが始まったところです。

09 畑活プロジェクト「はっぴぃ農園」

畑作業で交流

奈良県葛城市笛吹

コロナ禍でも密にならない活動を探して実現「畑活プロジェクト」

基本情報

名　　称　畑活プロジェクト「はっぴぃ農園」
運営主体　新庄セブンつながりレンジャー(第2層協議体)
所 在 地　奈良県葛城市笛吹546-1
開催日時　土 午前中
開 所 日　2020年11月

奈良県葛城市 ※2020年国勢調査より
人口:36,832人　総世帯数:13,288
面積:33.72㎢　人口密度:1,092.3人/㎢
高齢化率:28.2%

葛城市新庄中学校区 ※2022年3月住民基本台帳より
人口:21,560人　総世帯数:8,739
高齢化率:26.9%

こんな居場所

[地域] 市街地と山地・丘陵地が半々の地域

「はっぴぃ農園」がある奈良県葛城市は、2004年(H16)旧新庄町と旧當麻町の2町が奈良県内初の合併により誕生した市で、地図を見ると市街地と山地・丘陵地帯がちょうど半々のエリアです。京都・大阪方面への鉄道や車によるアクセスが便利で、医療費助成などの子育て環境に惹かれての転入者も多いです。

「はっぴぃ農園」を運営するのは、2018年に結成された新庄中学校区第2層協議体「新庄セブンつながりレンジャー」です。協議体が行った住民ニーズアンケートから浮かび上がった生活課題は「居場所」「生活支援」「移動」の3つ。まずはつながりづくりの場をつくろうと、居場所づくりに取り組むことを決めた矢先にコロナ禍に突入、どんな活動ならできるのかを議論して出てきたのが居場所として畑を使うというアイデアでした。

[居場所の様子] 耕作放棄地を居場所として再生

2020年11月から始まった「畑活プロジェクト」は、毎週1回土曜日の午前中に「はっぴぃ農園」に集まり、農作業をする活動です。耕作放棄地を畑に変えて、季節に合わせて苗の植え付け、栽培、収穫など一連の農作業を行っています。

参加者は運営を担う協議体メンバー5人も含めて10人ほどです。また、はっぴぃ農園は「デイサービスセンター笛吹」の裏にあり、通所者が畑に顔を出し、元気に指導してくれることもあります。「歩くのがやっとのような高齢者でも、鍬を持つとしゃんとする」「認知症でコミュニケーションが難しいと思っていた人でも、元農家の経験から作業のアドバイスしてくれた」と、畑の効果を実感しています。

収穫できた野菜は畑活参加者で分け合うだけでなく、高齢者向けの配食サービスに提供しています。今後は市内で活動している子ども食堂の食材として使ってもらう計画もあり、輪が広がっています。

居場所運営団体の性質
- NPO法人
- 任意団体
- 第2層協議体

拠点の性質
- 公共施設
- 店舗／空き店舗
- 自宅
- 畑

生活支援コーディネーターの所属
- 第1層
  - 市役所
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
- 第2層
  - 社会福祉協議会
  - 地域包括支援センター
  - NPO法人
  - 住民

「居場所の立ち上げや展開に活用したアセット」と「活用のヒント」

コロナ禍でも密にならない活動として実現した「畑活プロジェクト」を、アセットの活用に着目してご紹介します。

課題認識とやりたかったこと

・住民アンケートで、地域には「手助けがほしい人」「ボランティアをしたい人」両方がいることが分かりました。出会いの場があれば解決することがあるかもと、まず出会いの場を立ち上げることになりました。

・居場所づくりという目標ができてまもなくコロナ禍に突入。畑を生きがいにしている元気高齢者をみていたことから、密にならない屋外の「畑」を居場所とするアイデアが生まれ、取り組みに向けた準備が始まりました。

主な関係者

SC 第2層生活支援コーディネーター(SC)
田口さん
・葛城市社会福祉協議会24年目、第2層SC活動歴4年目。介護福祉士、主任介護支援専門員、ケアマネージャー。
・通所介護勤務8年、居宅介護支援事業所12年の後、SCとして協議体立ち上げから関わる。

SC 第2層生活支援コーディネーター(SC)
大山さん
・葛城市社会福祉協議会20年目。第1層SC活動歴7年目。社会福祉士。
・2002年から地域福祉を担当し、生活支援体制整備事業に当初から関わっている。

住 新庄地域の第2層協議体
「新庄セブンつながりレンジャー」のメンバー
・2017年2月に葛城市社協主催住民フォーラム「みんなでつくろう助け合いのまち」で、活動に興味があると手を挙げた人たち。

カギとなるアセット

人

○運営者
・新庄セブンつながりレンジャー(第2層協議体)
○協力者
★トラクターを所有する民生・児童委員
○畑活参加者
★デイサービス通所者
・地域の親子
・農業経験者
・ラジオ体操後に畑に寄る子ども

場

○畑活を行う居場所(農地)
★デイサービス所有の耕作放棄地
・第2の畑(近くで夏休みはラジオ体操が実施されている)

モノ・資金

○畑の収穫物
・配食サービスの食材に提供

情報・ネットワーク

○地域ケア会議
・地域貢献活動を行う、裏に畑を所有するデイサービス事業所などと出会う場
○地域のつながりづくり
★住民フォーラム「みんなでつくろう助け合いのまち」
・傾聴や認知症カフェボランティア
○畑活プロジェクトのイメージづくり
・早朝から畑で交流する高齢者
・鍬を持って元気に畑に向かう高齢者

元々あったアセット / 新たに生まれたアセット 3つのアセットにフォーカス

畑の先生になったのは
人
元々あったアセット: 民生・児童委員、デイサービス通所者など
新たに生まれたアセット: 農作業を教えてくれる人 農作業が好きな人

畑活の場として活用したのは
場
元々あったアセット: デイサービス所有の耕作放棄地
新たに生まれたアセット: コロナ禍でも集まれる拠点

運営主体確立に活用したのは
情報・ネットワーク
元々あったアセット: 3回の研修会
新たに生まれたアセット: やる気のある第2層協議体

「カギとなるアセット」の中から
3つのアセットにフォーカスしました。

・「コロナで行き場がないけど畑があるから助かっている」といった会話や、畑仕事は「認知症の人が生き生きするよ」といったアドバイスから畑活のアイデアは生まれました。
・「新庄セブンつながりレンジャー」メンバーには農業経験がなかったため、畑がある地区で農業を営んでいる民生・児童委員に協力を仰いだところ、耕作放棄地をトラクターで耕運してくれました。
・畑で作業をしていると「こうするといいよ」と教えてくれる人が次々に出てきて助けられています。

・SCの田口さんは、デイサービス管理者から使っていない畑を地域貢献で使えないか、という相談を受けていました。畑活プロジェクトでの活用を打診したところ、無償で貸してもらえることになりました。農具置き場や水も使わせてもらっています。
・デイサービスの通所利用者が畑に出てきて活動に参加することもあります。認知症の利用者さんが農業の経験を教えてくれることもあります。

・第2層協議体メンバーは充て職ではなく、自主的に参加を決めた人たちであることがポイントです。あえて「フォーラムに参加して3回の研修を受けた人」というハードルを設けました。
・住民のやる気が継続するにはSCのサポートは欠かせません。説明会や収穫イベントの運営、害獣よけの柵づくりなどのサポートに協議体メンバーからの信頼は厚く、意思疎通しやすい関係が築けています。

事例から発想しよう!
我が町アセット活用のヒント

事例でご紹介したアセットから発想を広げて、我が町で活用できるアセットはないか、考えてみましょう。

こんな発想から考えよう!
「あったらいいな」を伝える

・「こんな居場所、あったらいいな」と思ったら、まずは誰かに伝えてみましょう。長年知っている人でも、どんな趣味や特技、人のネットワークがあるかは知らないことが多いです。「それだったら手伝えるよ」と協力が得られたり、「それなら○○さんを紹介しようか」と情報が得られたりするかも知れません。
・知っているつもりの人の意外な一面を発掘していく気持ちで、どんどん伝えてみましょう。

こんな発想から考えよう!
「気になっている」ことを伝える

・「ここの空き店舗、所有者さん誰かな?」「ここの畑、借りることできないかな?」など、気になることがあったら、「あったらいいな」同様、なにかと機会を見つけては話題に出してみましょう。畑活プロジェクトのように、お互いが「出会えて良かった」と思える状況に「いつ」なるかはわからないのですが、動かなければ始まりません。常にアンテナをはっておくことが大切です。

こんな発想から考えよう!
活動の趣旨を共有する

・運営母体や居場所を立ち上げる際は、活動の主旨を伝えて確認し、それに賛同してくれる人が集まることが大切です。例えばあるコミュニティ農園では、「個人が農作業を楽しむだけでなく、みんなの行う農作業が農園主を支援することになり、地域の緑や食の確保に貢献する」主旨を伝え、賛同する人に参加してもらいました。共通の理解をもった上でスタートさせることで、活動は活性化していくことでしょう。

この事例から学ぶポイント

清水 洋行
千葉大学大学院人文科学研究院

畑活プロジェクトでは、意欲ある住民による小さな集団が起点となり、地域資源を活用したアセットを組み合わせて新たな取り組みをつくり、それがさらに別の地域資源をアセットとして組み合わせながら･･･という、雪だるま式にアセットがつながってくプロセスがよくわかります。プロセスが進むにつれて、いろいろな出番が生まれ、住民たちがそれぞれのかたちで参加できる居場所になっていきます。このプロセスの最初のアセットは、意欲のある住民たちの小さな集団です。ここでは第2層協議体メンバーである新庄セブンつながりレンジャー（以下、レンジャー）同士のつながりです。そして、レンジャーのメンバーが、この地域の日常の生活の一部である畑仕事が、住民同士のコミュニケーションを生み出す場であることに気づき、畑を使った居場所づくり向かうことから最初のアセットに別のアセットがつながり始めます。

まずはデイサービスセンターの畑、続いて畑のある地区に住む農家の方です。畑はその土地が、農家の方はその農作業のスキルが、それぞれアセットとなります。この畑や農家の方は、いずれもSCがレンジャーたちに紹介した地域資源です。これらは、SCが所属する社協の地域福祉活動などを通じて知っていた地域資源です。活動を通じて思わぬかたちでアセットとなった地域資源もありました。「杖を鍬に持ち替えて」参加するだけでなく、畑作業のやり方を他の参加者たちに教えてくれるようになったデイサービスの利用者さんたちです。眠っていた経験が引き出され、畑仕事のノウハウというアセットとなりました。住民向け説明会の開催場所となった神社は地域の中心的な場所で、地域の人々が親しみを抱いていて集まり易いところでした。つまり、境内やトイレがアセットとなっただけでなく、神社がもっている雰囲気も、地域の人を引き寄せるアセットとなったといえるでしょう。

最後に、ポイントを3つあげます。1つめは、各々の地域資源は、いろいろな点で居場所づくりに役立ち、様々なアセットとして活用されるということです。例えばデイサービスセンター自体も地域資源ですが、そのうちの畑は活動場所として、利用者さんたちの経験は畑仕事のノウハウとして、それぞれアセットとなっています。2つめは、アセットを組み合わせることが大切で、それによって新しい取り組みが生まれてくることです。3つめは、この新しい取り組みは予期せぬ方向に展開するということです。生活支援コーディネーターの大切な役割の一つは、この雪だるま式に進むプロセスが生活支援体制整備事業から脱線しないよう気を付けつつ、新たな地域資源と橋渡しすることといえるでしょう。

（主な参考文献）Snow, Luther K. The Power of Asset Mapping: How your Congregation Can Act on Its Gifts. (2004)

■生活支援コーディネーター（SC）の配置状況

葛城市

第1層SC　1名　葛城市社協、社協の地域福祉担当と兼務
第2層SC　1名　葛城市社協、社協の介護保険担当と兼務

※便宜的に階層ごとに担当を分けているが、行動や情報共有は1層2層区別なく行っている。

・二つの中学校区圏域（新庄・白鴎）に協議体が設置され、2人のSCが2圏域に関わっている。

SC 担当SCからのメッセージ

居場所への関わり

・協議体を立ち上げるためのフォーラム開催時から、協議体設立、居場所運営まで一貫して並走してきました。介護予防に結びつくような居場所になるように、「さりげなくサポート」しています。そのために、あえて居場所とは距離をおくように心がけています。メディア対応が必要なときは立ち会うようにしていますが、普段の活動に首を突っ込みすぎないようにしています。

・その理由は、「社協の施策を住民が手伝っている」ではなく、「自分たちがやりたいことをやっている」にしたいからです。現在、居場所づくりをしている協議体のメンバーはとてもやりがいを感じているので、それはSCにとっても喜びとなっています。

今後の展開

・「はっぴぃ農園」は現在農作業に重きが置かれていますが、居場所として集える場所にしていきたいとの思いが、協議体メンバーにもあります。

・また、「はっぴぃ農園」第2の畑も誕生しています。第2の畑の近くでは夏休みにラジオ体操が行われており、終了後の小学生が参加するなど広がりをみせています。このような居場所づくりを、市内全域へ展開していきたいです。

10 参考事例 高松第三行政区ふるさと地域協議会 畑作業で交流 岩手県花巻市高松

岩手県花巻市の「高松第三行政区ふるさと地域協議会」は、過疎化・高齢化・一人暮らし世帯増の危機感が増す地域で、農福連携を中心にした事業を行い、地域の活性化に取り組んでいます。
住民主体の介護予防の取り組みや資源の活用に学ぶところが多いため参考事例として掲載します。

基本情報

名　　称 高松第三行政区ふるさと地域協議会
開 所 日 2008年6月

花巻市 ※2020年国勢調査より
人口:94,676人
総世帯数:37,979
面積:908㎢
人口密度:104人／㎢
高齢化率:34%

花巻市矢沢コミュニティ ※2020年国勢調査より
人口:7,725人
総世帯数:37,979(高松第三行政区の人口:167人)
面積:36.95㎢
人口密度:209 人/㎢
高齢化率:35.7%(高松第三行政区:46.7%)

こんな居場所

[地域] アクセスはよいが、高齢化、過疎化、一人暮らし世帯増

花巻市高松第三行政区は花巻市の東南部に位置し、東北新幹線新花巻駅まで車で10分、花巻空港まで15分と交通の便は良いものの過疎化高齢化が進み(高齢化率46.7%)、一人暮らし世帯や高齢者のみの世帯が48.48%の中山間地域です。地域では高齢化による生活課題の他にも、農業の担い手不足など多くの課題を抱えていました。

2008年、「このままでは限界集落になってしまう」と危機感を抱いた6人が発起人になり、全世帯参加の「ふるさと地域協議会」が設立されました。

協議会は2011年、岩手県立大学の協力を得て「農業・福祉・交流を連携させた地域の活性化」を目指して住民手づくりの「ふるさと交流福祉計画」を策定。農福連携の活動が始まりました。

[居場所の様子] 福祉農園や貸し農園での交流や、6次産業化で生きがい創出

居場所として最も近い活動は、遊休農地を活用した福祉農園(5,000㎡)と貸し農園(1,000㎡)での、作業・収穫・交流です。

福祉農園は将来「ケアファーム(青空デイサービス)をめざした取り組みで、里山に自生しているガマズミやナツハゼなどの木の実を栽培し、収穫した木の実を6次産業化によりゼリーに加工・販売。地域の高齢者の雇用や生きがいを創出しています。

貸し農園は地域内外の人たちが交流をしながら自家菜園として利用しています。ここでも交流と生きがいづくりが生まれています。

その他にも生活支援活動として高齢者の見回り、外出支援、配食サービス、除雪を行っており、住民全員が「みんなが主役、みんなで実践」をモットーとした地域づくりが展開されています。

地域の活性化に活用したアセット

課題認識と活動の経緯

・地区の集会等で人口減少や高齢化が話題になり、住民は「このままでは限界集落になるのではないか」と不安を持っていました。
・危機感を持った有志6人が自主的な勉強会を行い、課題を共有していきました。
・行政区内の全世帯を会員にした「高松第三行政区ふるさと地域協議会」が立ち上がりましたが、当初は試行錯誤の連続でした。
・岩手県立大学の指導を得て2011年「ふるさと交流福祉計画」を策定、さらに2019年には岩手県立大学と連携団体(9団体)との協力の下「農村板地域包括ケアシステム構築ビジョン」を策定しました。

取り組み概要」と「活用した主な助成金

活動の概要

○福祉農園

・居場所として最も近い活動は、遊休農地を活用した福祉農園(5,000㎡)です。農園では、高齢者、障がい者、子どもが作業・収穫・交流ができ、将来は「介護予防・日常生活支援総合事業」を活用した「ケアファーム」としての運営を展望しています。
・農園には、もともと地域の里山に自生しているガマズミとナツハゼを植栽。アイデアは住民参加のワークショップで出されたものです。収穫した実はゼリーに加工・販売する6次産業化へ発展し、作業する高齢者(70～80才代)に賃金を払うことで、雇用と生きがい創出につながりました。

○貸し農園

・面積は1,000㎡で17区画があります。利用者は地区外8割、地区内2割です。1シーズン(4～11月)1区画1,000円の利用料で、仮設トイレや作業用の鍬なども備え付けられています。利用者の中から野菜の先生になってくれる人も現れ、やりがいと交流が広がっています。

○生活支援

・福祉農園で収穫・加工されたものは、配食サービスの食材にも使われています。現在、1～3月の週1回、10個を高齢者に無料で配布しています。
・外出支援は、2016～2017年の社会実験を経て、2018年から花巻市介護予防・日常生活支援総合事業(総合事業)の「訪問型サービスB」により本格実施しています。総合事業の対象に該当しない方の利用が課題でしたが、農水省「中山間地域等直接支払制度・集落機能強化加算」を活用することにより解決しています。

活用した主な助成金

○助成金

・農林水産省「農山漁村地域力発掘支援モデル事業」
・農林水産省「農山漁村振興交付金」
・厚生労働省「高齢者生きがい活動促進事業」
・ニッセイ財団「高齢社会地域福祉チャレンジ助成金」

○移送支援の車両購入

・花巻市「高齢者生きがい就労創出支援事業」

カギとなるアセット

人

○運営者
- ・集落の全住民(ふるさと地域協議会に参加)
- ・会長、役員、事務局長
- ・協議会設立の6人の仲間たち(前行政区長、市議会議員等からなる)

○農園管理者
- ・地域の70代男女10人ほどの雇用されている人

○集落に活気をもたらす人
- ・移住してきた10世帯の人たち

場

○交流拠点(福祉農園、貸し農園)
- ・遊休農地活用

モノ・資金

○畑の収穫物

○6次産業の材料
- ・里山に自生していたナツハゼやガマズミの実

○助成金
- ・農林水産省「農山漁村地域力発掘支援モデル事業」
- ・農林水産省農山漁村振興交付金
- ・厚生労働省「高齢者生きがい活動促進事業」
- ・ニッセイ財団「高齢社会地域福祉チャレンジ助成金」

○移送支援の車両購入
- ・花巻市長寿福祉課の高齢者の生きがいづくり

情報・ネットワーク

○福祉農園で交流を呼びかけるネットワーク
- ・子ども園
- ・障害者施設

○「高松第三行政区ふるさと交流福祉計画」策定・実施の協力者
- **★岩手大学社会福祉学部**
- ・花巻市／地域包括支援センター／社協／JAいわて花巻／矢沢保育園

この事例から学ぶポイント

原田 晃樹
立教大学コミュニティ福祉学部

高松第三行政区ふるさと地域協議会は、2008年に全住民を会員として発足しました。地縁コミュニティを基盤に置いていますが、地区の将来に危機感を抱いた有志6人が地道に地区住民に働きかけて設立しており、既存の活動とは独立した運営がなされています。

協議会ではふるさとづくり計画を定めており、そこでは「農業」「福祉」「交流」を活動の柱としています。活動内容は、遊休農地を活用した貸農園の運営、地域に親しまれた産品を活かした加工品の開発・販売、高齢者のデイサービスや障害者施設との共同による高松福祉農園の運営、農園での作業や収穫を通じた交流会、独居高齢者等への配食、足を持たない人への移送サービスなど多岐にわたります。

協議会の運営には、活動に持続性を持たせるための様々な工夫が施されています。第一に、多くの住民が運営に参加しやすい環境づくりにつとめていることです。例えば、加工品の試作品づくりでは多くの住民に参加してもらいますが、試食会の際、人気のない(手がつけられない)試作品があればスタッフがさりげなく下げるというように、参加する側の気持ちに立った対応が行き届いています。

第二に、「農業」「福祉」「交流」という目的が、実際の活動では各々有機的につながっていることです。農園での活動が、障害者、健常者、子ども、高齢者、学生、さらには移住者も参加しやすい交流の場になり、収穫物は加工品や配食の原材料になります。活動の場面ごとに支援する・される立場は入れ替わります。そうした関係が、個々人のエンパワーメントにつながっているだけでなく、交流が進む中で地域の隠れた課題も把握しやすくなり、生活課題支援の事業化にもつながっています。

第三に、公的資源を有効に使っていることです。協議会は、各省庁・自治体・JAから様々な交付金・助成金を受けており、地域の主要団体から日常的に有形無形の支援も受けています。公的団体の支援は分野別の縦割りが大半であり、それらが地域で活かされるには現場でのアレンジが不可欠ですが、縦割りの支援を受けることで、暗黙のうちに自分たちの活動を規定してしまいがちです。制度や利用可能な資源を熟知し、それらを自分たちが必要とする支援に結びつける協議会の手腕は卓越しています。

高松第三地区の取り組みは、生活支援体制整備事業としての活動ではありませんが、個々の事業に多くの資源を投入できない農山村地域にとって、生活支援のひとつのモデルを示しているといえるかもしれません。

「事例から発想しよう! 我が町アセット活用のヒント」一覧

01～09の事例で紹介した「こんな発想から考えよう」を、5つのカテゴリーに分けて整理しました。
詳細は各事例ページをご覧ください。

❶担い手について

目的と作業内容を明確にすることで関わりやすくなる人もいる	事例01 すまいる向陽台	東京都稲城市向陽台(**P13**)上段
みんなで特技や好きなことをシェアしてみる	事例03 喫茶わくわく	大阪府泉南郡岬町淡輪(**P21**)上段
特技が活かせると楽しく参加できる	事例05 カフェいしださんち	東京都稲城市平尾(**P29**)上段
場所を共有する人をねらおう	事例06 ゆずり葉	東京都板橋区高島平(**P33**)上段
どの立場で参加するかを考える	事例08 ふれあい食堂	鳥取県鳥取市河原町渡一木(**P41**)上段

❷組織の運営について

すでにある資源の活用を考える	事例01 すまいる向陽台	東京都稲城市向陽台(**P13**)中段
まずは話し合いや活動の「場」をつくってみる	事例02 かふぇまんでサロン	香川県高松市香南町横井(**P17**)上段
誘い文句になるような特徴を考える	事例02 かふぇまんでサロン	香川県高松市香南町横井(**P17**)中段
まずはできることから動いてみる	事例03 喫茶わくわく	大阪府泉南郡岬町淡輪(**P21**)中段
「お墨付き」を活用する	事例04 やまもりいこいの家	愛知県知多市岡田(**P25**)下段
「こんな支援あったらいいな」を整理しておく	事例08 ふれあい食堂	鳥取県鳥取市河原町渡一木(**P41**)中段
活動の趣旨を共有する	事例09 畑活プロジェクト「はっぴぃ農園」	奈良県葛城市笛吹(**P45**)下段

❸拠点について

公共施設の上手な活用方法を探る	事例02 かふぇまんでサロン	香川県高松市香南町横井(**P17**)下段
空き店舗を長く安定して活用することを考える	事例04 やまもりいこいの家	愛知県知多市岡田(**P25**)中段
民有地でもみんなで集まれる場所はある	事例05 カフェいしださんち	東京都稲城市平尾(**P29**)中段
福祉施設ではない場所の良さを考える	事例06 ゆずり葉	東京都板橋区高島平(**P33**)中段
高齢者+子どもが参加する活動として高齢者用施設を活用	事例07 こうせい親子ﾞ(おやじ)食堂	大阪府大阪市港区港晴(**P37**)上段
「気になっている」ことを伝える	事例09 畑活プロジェクト「はっぴぃ農園」	奈良県葛城市笛吹(**P45**)中段

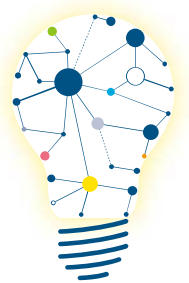
❹地域ネットワークについて

我が町や隣町の活動を調べてみる	事例03 喫茶わくわく	大阪府泉南郡岬町淡輪(**P21**)下段
地域に参加できる会がないか調べてみる	事例04 やまもりいこいの家	愛知県知多市岡田(**P25**)上段
楽しい人間関係があればボランティアも楽しくできる	事例07 こうせい親子ﾞ(おやじ)食堂	大阪府大阪市港区港晴(**P37**)下段
学校に通う子どもや孫、卒業生関係者から広げてみる	事例08 ふれあい食堂	鳥取県鳥取市河原町渡一木(**P41**)下段
「あったらいいな」を伝える	事例09 畑活プロジェクト「はっぴぃ農園」	奈良県葛城市笛吹(**P45**)上段

❺介護予防の強化

居場所の介護予防強化には商店街との「つなぎ」も有効	事例01 すまいる向陽台	東京都稲城市向陽台(**P13**)下段
居場所の介護予防強化には専門職との「つなぎ」を考える	事例05 カフェいしださんち	東京都稲城市平尾(**P29**)下段
最初の「やりたい」のために制度を上手に活用	事例06 ゆずり葉	東京都板橋区高島平(**P33**)下段
居場所の介護予防強化には専門職との「つなぎ」を考える	事例07 こうせい親子ﾞ(おやじ)食堂	大阪府大阪市港区港晴(**P37**)中段

やってみよう。



アセット発見で、居場所の「やりたい!」をかなえるワーク。

10の事例から、住民自身がもつ強みや既にある様々な地域資源を活かした活動の展開を見てきました。
これまで思いつかなかったような小さなアセットも、組み合わせたりつなげたりすることで、新たな価値が生まれることがお分かりいただけましたか。
アセットの捉え方や活用が理解できたら、ワークショップで担当する地域での居場所の立ち上げや展開の構想づくりをしてみましょう。

このワークのねらい

このワークのねらいは、次の２点です。

①生活支援コーディネーターと地域住民や関係者（行政 / 社会福祉協議会 / 地域包括支援センター /NPO 等の担当者）とが地域の課題や活動の展開について共有し、議論できる場をつくります。
このワークをきっかけに、地域で連携して居場所づくりを進めていくチームづくりにつながることを期待しています。

②他の活動や他の地域の生活支援コーディネーターや住民と意見交換を行います。
いつも話し合う仲間とは違う視点を持った人の意見を聞くことで、居場所の立ち上げや展開に対して、柔軟な発想や多様なアイデアを得ることができること、また、地域の課題解決や居場所活動の活性化のための具体的な対応方法について構想することがねらいです。
このワークをきっかけに、新たに発見したアセットを活かして、実際の居場所の開発・継続支援を行うことにつながることを期待しています。

このワークの特徴

居場所で「こんなことやりたい！」をイメージして、その内容を語りあいながら実現に向けて考えます。

●やりたいから考える

・実現できるかできないかはちょっと脇に置いて、「こんな居場所をやってみたい」を書き出すことから始めます。わくわくする気持ちでイメージしてください。
・決して「やらねばならない」から考えないでください。「やらねばならない」は、「やらせる方」も「やらさせる方」も負担を感じて、良いアイデアが浮かびません。
・「やりたい」から考えることで、我が事として考え積極的に取り組む気持ちを引き出します。

●語りあう

・このワークは、１人ではなく複数の人と一緒に考えることを基本としています。地域住民、行政職員、生活支援コーディネーター、社会福祉協議会、地域包括支援センター等の専門職といった、できるだけ立場の違う人の参加があると理想的です。
・立場が違えば経験や知識が違い、その違いが発想の幅を広げることにつながります。１人では煮詰まってしまうことも、立場の違う人と語りあうことで、「この役割しかない」と決めつけていた資源に、新しいアセットとしての価値を発見することでしょう。

ワークの進め方

プログラム

STEP 1

チーム内ワーク 20分

・居場所に関して「やってみたいこと」を書き出して共有しよう。

・活用できそうな地域のアセットを書き出して共有しよう。

STEP 2

グループワーク 60分

・STEP1で話し合ったことを共有しよう。

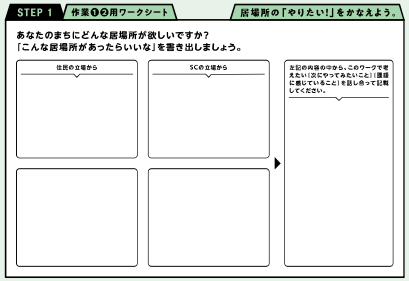
・「やってみたいこと」を実現するためのアイデアを出し合おう。

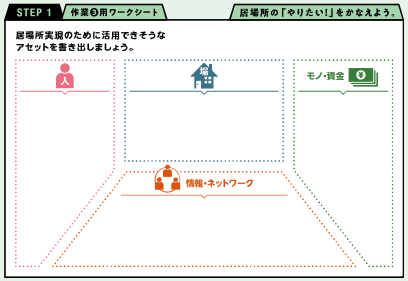
STEP 3

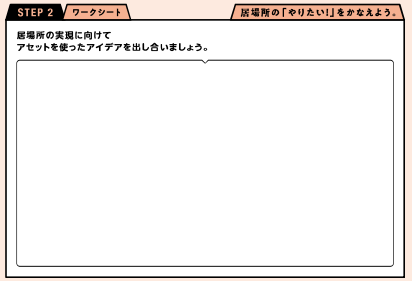
チーム内ワーク 15分

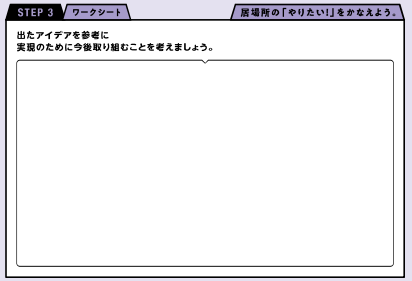
・STEP2で話し合われたアイデアを参考にして、今後取り組むことをチームで考えよう。

使用するシート









参加者

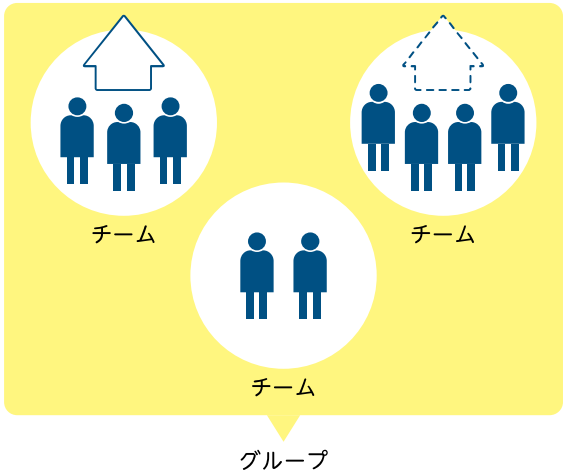
このワークでは、「チーム」と「グループ」という2つの呼び方をします。

チーム

・同じ居場所で活動をしている人たち。
あるいは、これから同じ居場所で活動をしようとしている人たち。
・1チーム2～4人程度が運営しやすい。1人でも参加可能。

グループ

・上記のチームが複数集まったもの。
・2～4グループ程度が運営しやすい。



①1チームで行う場合

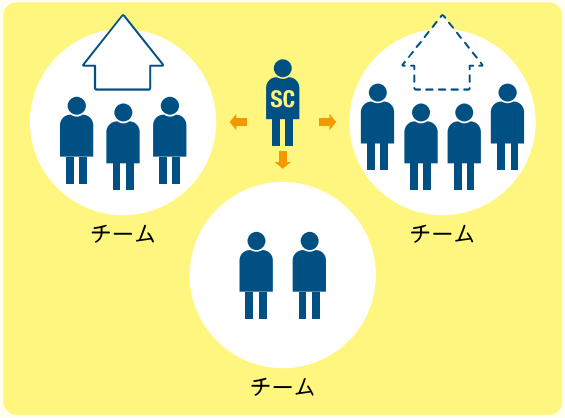
・3つのステップ全てを同じチーム(人)で行います。

②2チーム以上で行う場合

・左ページのプログラムをご覧ください。
・STEP1とSTEP3は、各チーム内で行います。
・STEP2のみ、全チームが集合してグループとなって行います。

※チームが複数あり、同一人物が複数の活動に関わっている場合は、参加人数等を配慮してどのチームに入るか決めてください。

※生活支援コーディネーター等の専門職は、複数の活動に関わっていることが想定されます。STEP1とSTEP3では、関わっている団体をあちこち見て回ってください。



シートの記入例

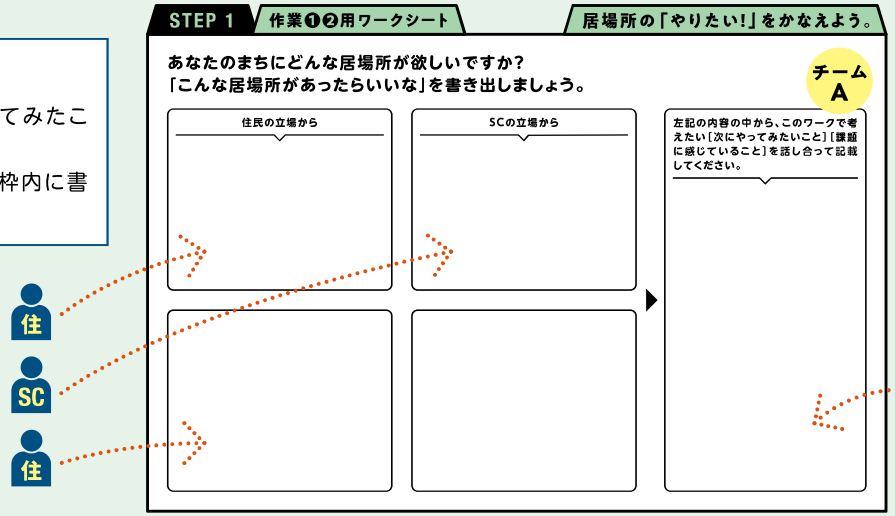
STEP 1

チーム内ワーク

作業❶

・各参加者が、居場所でやってみたことを考えます。
・自分が参加している立場の枠内に書きます。

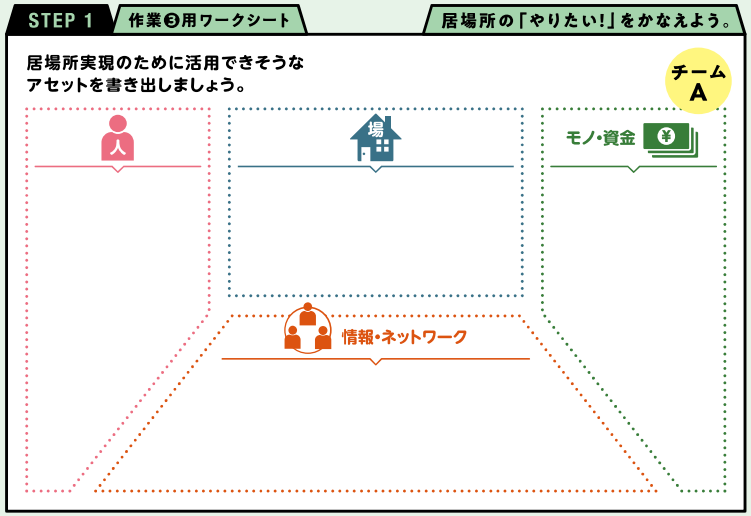
ポイント 「できるできない」や「他の人はどう思うかな」を一旦忘れて、自分の気持ちや考えを素直に書きましょう。



作業❷

・各参加者の内容を発表します。
・お互いの意見を聞きながら「どんな居場所をめざすか」を話し合い、書き出します。

ポイント 各々の意見を聞いた後、共通する考えを確認し、全員が「やってみたい」と思える居場所を考えます。



作業❸

・作業1-2で書いた内容を実現するために、活用できるアセットはないか、下記のカテゴリーに分けて考えます。

人／場／モノ・資源／
情報・ネットワーク

ポイント 4つのカテゴリー全てに書けなくても、1〜2コでも大丈夫。

注)住民の方が2人参加していたら、空欄に「住民の立場から」を作ってください。他の立場の方も同様です。

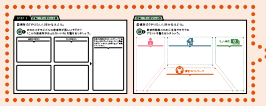
**ここまで20分。
時間になったら終了。
続いて、各チームが集合してグループになります。**

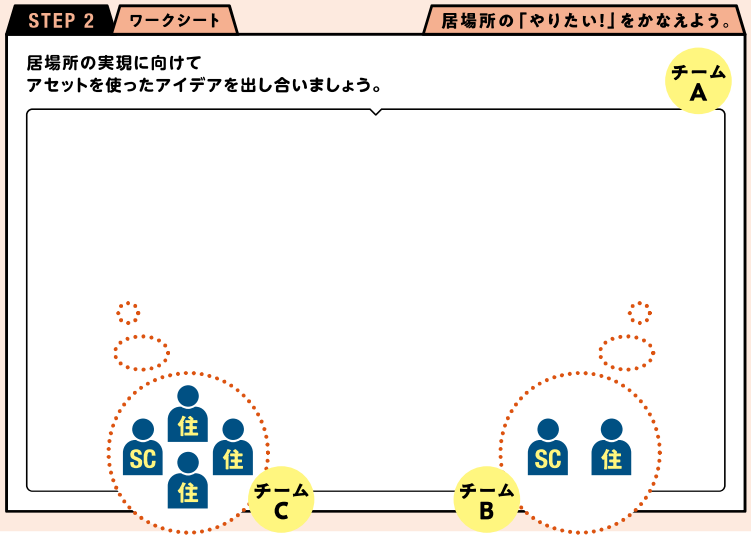
STEP 2

グループワーク

作業

・チームが集合してグループになります。
・各チームから、STEP1で考えた内容をシートを見せながら発表します。
・他のチームは、発表内容について質問したりアイデアを出したりします。
・出されたアイデアは、各チームのSTEP2のシートに記録します。





ポイント 成功例や失敗例、参考になりそうなアイデアを自由に出してください。3チームなら1チーム20分、2チームなら1チーム30分。1チームの時間内で、発表とアイデア出しをします。

3チームで行う場合の時間割り例

時間	チームA	チームB	チームC
0:05	発表		
0:15	記録	アイデア出し	アイデア出し
0:05		発表	
0:15	アイデア出し	記録	アイデア出し
0:05			発表
0:15	アイデア出し	記録	アイデア出し

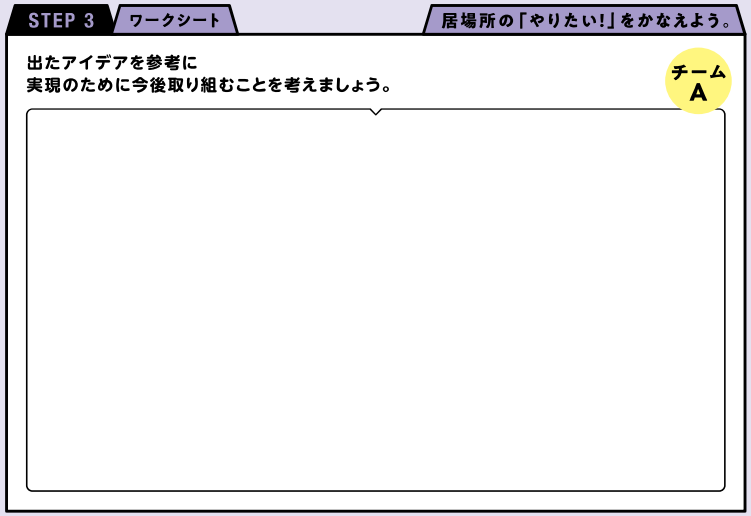
各チームの持ち時間が来たら、次のチームに交代します。

STEP 3

チーム内ワーク

作業

・各チームの作業です。
・STEP2で出されたアイデアを参考に、居場所の実現に向けてどこから取り組むかを考え、シートに記載します。



**最後のまとめは15分。
実現に向けて、次のステップは見えましたか?
ここで考えたことを、活動メンバーにも共有して、具体的な活動に活かしてください!**

STEP 1 作業❶❷用ワークシート　居場所の「やりたい!」をかなえよう。

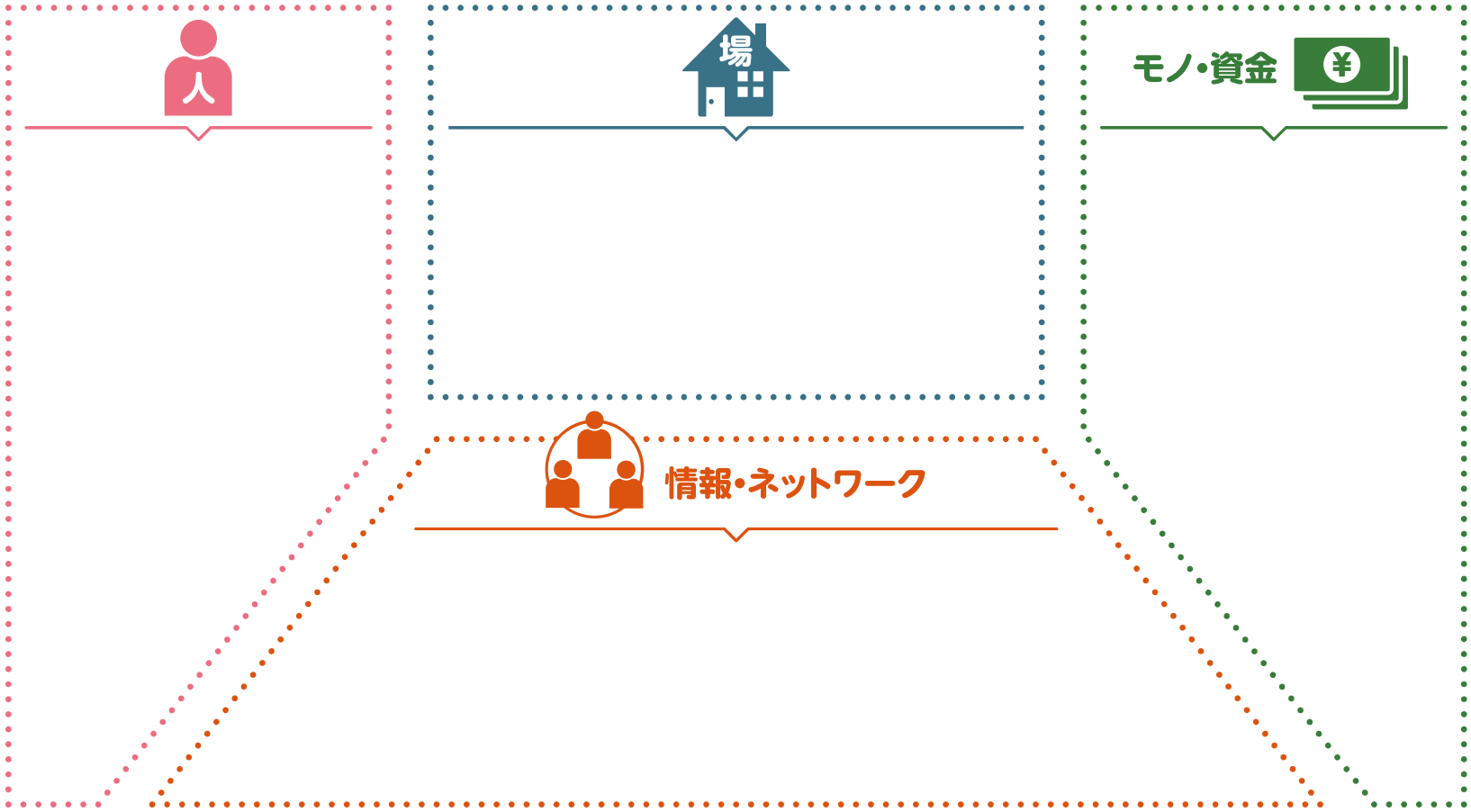
あなたのまちにどんな居場所が欲しいですか?
「こんな居場所があったらいいな」を書き出しましょう。

住民の立場から

SCの立場から

左記の内容の中から、このワークで考えたい［次にやってみたいこと］［課題に感じていること］を話し合って記載してください。

居場所実現のために活用できそうな
アセットを書き出しましょう。



STEP 2 ワークシート

居場所の「やりたい!」をかなえよう。

居場所の実現に向けて
アセットを使ったアイデアを出し合いましょう。

STEP 3 ワークシート

居場所の「やりたい!」をかなえよう。

出たアイデアを参考に
実現のために今後取り組むことを考えましょう。

ワークショップを「創造的」にすすめるために

講師が一方的に知識を提供する、いわゆる座学の講義型研修に対して、参加者同士の意見交換やディスカッションの時間を大切にするワークショップという研修形態は、日本の社会福祉の研修プログラムにおいてもすっかり定着してきたといえます。知識・情報のインプットで終わってしまう講義に比べて、インプットした知識や情報を自分の経験や考えに照らし合わせて検討し、検討した結果を他者と共有し、他者の意見を聞き、他者からフィードバックをもらうことで、新たな考え方やものの見方を得ることができるという点が一般的にワークショップの良いところと考えられています。講義で得られた知識や情報が実践に反映される割合は必ずしも高いものとはいえませんが、ワークショップを通して見えてきた自分の新しい考え方や、ワークショップの過程で生み出された新たなアイデアは、実践に反映される可能性が高くなりますし、知識と情報の定着率も一方的な講義に比べて高いといわれています。

しかし、ワークショップ形式にすれば自動的に学びが深まるかというと、必ずしもそうとは限りません。実施形態はワークショップであったとしても、自由な発想で創造的な意見交換ができなければワークショップをする意味はあまりないかもしれません。むしろ、講義型研修のような体系的な知識と情報を得ることもできず、ほとんど得るものがないまま、すなわちインプットがないまま、アウトプットだけを求められても、いつもの発想でいつもの考えを述べて終わってしまうということもあります。ワークショップという学びの形態を用いるのであれば、いつもとは異なる発想でいつもと異なる考えに至ることが期待されます。

では、どのようにワークショップを設計すると自由な発想で創造的な意見交換ができるでしょうか。効果的なのは固定観念をリセットするような問いを参加者に投げかけることです。例えば、地域共生社会における地域づくりの方法について参加者みんなで創造的に検討することを目的に開催されるワークショップの場合、本題に入る前に、そもそも地域共生社会は本当に望ましいものなのか参加者に検討してもらうような機会を設けることが効果的かもしれません。

地域共生社会や地域包括ケアの実現、生活困窮者の自立、孤立の解消といった考え方は近年、国が推進している施策であり、社会のあり方として否定されるものではないので、ワークショップで議論をするときなど、そうした考え方を前提に議論することが少なくありません。しかし、その時点ですでに自由な発想を妨げてしまい、思考に枠組みを設けてしまっているのです。

地域共生社会を実現するために、地域の中でどのような助け合いの仕組みを作ることができるかというようなテーマで意見交換をすると、身近なアセットを探して、それらを結びつける方法について様々なアイデアが出てくるかもしれません。しかし、地域活動に関わる住民は本当に地域共生社会を求めているでしょうか。おそらくワークショップで出てくるアイデアは地域共生社会に対して前向きな住民の関与を前提とした考えになりますが、その時点で、とても狭く限定的な発想に基づいて議論してしまっているといえます。そこで、例えば、「あなた自身は地域共生社会を本当に求めていますか」というような質問を投げかけて意見交換をしてもらうとします。具体的には、「地域の見守り活動に参加することで、自分のプライベートの時間を犠牲にしなければいけないとします。それでもあなたは地域活動に参加しますか」というような質問について自分目線で考えを述べてもらうと、自分のプライベートの時間は守りたいという声が意外と多いことに驚くかもしれません。仮にそのように地域共生社会に対して後ろ向きなコメントが出てきたときに、はじめて前提となる枠組みを外すことができるでしょう。

「地域共生社会は実は多くの人にとっては望ましいものではないかもしれない」という考えや、「地域共生社会の実現がうまくいかないときに、我々の生活はどのような局面を迎えるのか」というような発想が芽生えてきます。そのような発想に立ち返ったときに、「それなら地域共生社会の推進はもっとこうならないといけない」というように前提を凌駕する自由で創造的な発想が湧き上がってくるでしょう。

こうした思考法をクリティカル・シンキングといったりしますが、そうした思考を導き出すためのクリティカルな問いを投げかけることがワークショップの設計にとって重要になります。ワークショップの主催者やファシリテーターは、国の法制度や福祉の基盤となる考え方などに対して常に批判的な視点を持ち、さらには自分の視点や価値観に対しても疑いの目を向け続けることが求められます。

室田 信一
東京都立大学人文社会学部

新型コロナウイルス影響下における
生活支援体制整備事業の推進に向けた
人材育成に関する調査研究事業

【研究委員会】

（委員長）

内藤 佳津雄	日本大学文理学部 教授

（委　員）

秋山 由美子	特定非営利活動法人 日本地域福祉研究所　理事
荒井 崇宏	稲城市福祉部高齢福祉課高齢福祉係　係長
石田 惇子	一般社団法人全国食支援活動協力会　代表理事
石橋 智昭	公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団　主席研究員
日下 直和	社会福祉法人香川県社会福祉協議会　事務局長
清水 洋行	千葉大学大学院人文科学研究院　教授
祐成 保志	東京大学大学院人文社会系研究科　准教授
隅田 耕史	特定非営利活動法人フェリスモンテ　事務局長
高橋 良太	社会福祉法人全国社会福祉協議会地域福祉部　部長
中島 智人	産業能率大学経営学部　教授
原田 晃樹	立教大学コミュニティ福祉学部　教授
平野 覚治	一般社団法人全国食支援活動協力会　専務理事
室田 信一	東京都立大学人文社会学部　准教授
目﨑 智恵子	高崎市第１層生活支援コーディネーター 主管課高崎市福祉部長寿社会課

【ワーキング部会】

（部会長）

平野 覚治	一般社団法人全国食支援活動協力会　専務理事

（委　員）

荒井 崇宏	稲城市福祉部高齢福祉課高齢福祉係　係長
清水 洋行	千葉大学大学院人文科学研究院　教授
祐成 保志	東京大学大学院人文社会系研究科　准教授
中島 智人	産業能率大学経営学部　教授
原田 晃樹	立教大学コミュニティ福祉学部　教授
目﨑 智恵子	高崎市第１層生活支援コーディネーター 主管課高崎市福祉部長寿社会課

令和3年度 厚生労働省老人保健健康増進等事業
新型コロナウイルス影響下における
生活支援体制整備事業の推進に向けた人材育成に関する調査研究事業

事例でわかる

地域アセット活用ガイドブック

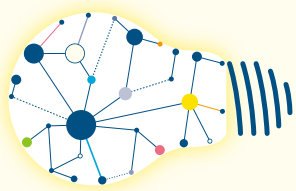
生活支援コーディネーターの居場所づくり・つながりづくりを応援

一般社団法人　全国食支援活動協力会　編

ガイドブック編集チーム
伊藤浩巳・小泉愛佳・岩嵜いづみ（一般社団法人 全国食支援活動協力会）
宮地成子（場所づくり研究所 有限会社プレイス）
デザイン　カタヤナギユウイチ

一般社団法人 全国食支援活動協力会
〒158-0098　東京都世田谷区上用賀6-19-21
TEL　03-5426-2547　https://www.mow.jp/

発行日　2022年3月30日



【資料集】

1　研修会チラシ（香川会場）
2　研修会チラシ（鳥取会場）
3　研修会チラシ（東京会場）
4　研修会チラシ（全国会場）
5　研修会テキスト（香川会場）
6　研修会テキスト（鳥取会場）
7　研修会テキスト（東京会場）
8　研修会テキスト（全国会場）

令和３年度厚生労働省老人保健健康増進等事業
「新型コロナウイルス影響下における生活支援体制整備事業の推進に向けた人材育成に関する調査研究事業」

会場参加＋オンライン ハイブリッド開催

生活支援コーディネーターによる 地域の居場所づくり・つながりづくり研修

～アセット発見で居場所の「やりたい!」をかなえるワークショップ～

参加無料
会場参加 25組70名
（事前予約制・先着順）

日時　2021年11月26日（金）
13:00～17：00（開場12：30）
場所　香川県薬剤師会朝日町会館2階
（高松市朝日町1－1－11）無料駐車場有
オンライン参加の場合はZOOMを使用します

SC＋協議体メンバー・地域住民・その他（市町村・社協・地域包括担当者など）地域で連携して進めていく方2.3名でご参加ください

コロナ影響下の地域の居場所づくり・つながりづくりをチームで考えよう！

講義➤➤➤➤➤➤　「居場所を支える地域のアセット」
千葉大学人文科学研究院教授　清水 洋行 氏

事例報告➤➤➤➤　「今あるアセットを活かした居場所の取組み」
●愛知県知多市：古民家を活かした憩いの場
特定非営利活動法人あゆみ　知多中学校区第2層SC　市川 美千代 氏
「岡田なごやかサロン」代表　勝﨑 芳雄 氏

●香川県仲多度郡琴平町：商店街のたまり場
琴平町社会福祉協議会　琴平町第1層SC　新原 隆一 氏
「４１５のわ（よいこのわ）」　眞鍋 陽子 氏

講義➤➤➤➤➤➤　「事例報告からの学び」
高崎市第１層SC（主管課：高崎市長寿社会課）目﨑 智恵子 氏

ワークショップ➤　「居場所の『やりたい！』をかなえる」
日本大学文理学部教授／本事業研究委員会委員長
ファシリテーター　内藤 佳津雄 氏

【お申込みフォーム】　https://forms.gle/2GanF6AXxzHu5TP37
※主催者HPのリンクからもお申込みいただけます

主催：一般社団法人 全国食支援活動協力会　TEL　03-5426-2547
共催：社会福祉法人 香川県社会福祉協議会　TEL　087-861-0545

●研修会のねらい

✓地域で連携して居場所づくりを進めていくチームをつくる
✓アセット※を活かした、居場所の開発・継続支援を立案する
✓事例からコロナウイルス影響下の居場所活動を学ぶ

※この研修におけるアセット重視の考え方とは、地域の「あるもの」（強み、できること）に目を向け、住民自身の強みや、既にある様々な地域資源を活かしてサービスの展開を図る考え方です。

●報告事例「今あるアセットを活かした居場所の取組み」

✓先進的な事例から居場所の立上げや展開のノウハウを学ぶ

「岡田なごやかサロン」
かつて知多木綿で栄えた知多市岡田で空き家だった古民家を改修し、週4日開催の常設のサロンに。知多市介護予防・日常生活支援総合事業の補助を利用し、高齢者を中心とした集いの場となっている他、街の歴史や文化を伝える貴重な場にもなっている。

「サービスステーション・ちょっとこ場」
金刀比羅宮参道に繋がる新町商店街のサービスステーションとしてオープン。
ボランティアステーションや生活情報センターとして地元住民や観光客、誰でも立ち寄れるたまり場として開放されている。

●ワークショップ「居場所の『やりたい！』をかなえる」

✓居場所を立上げ・継続・展開するためのアセット活用アイディアをグループ内でシェアして、今後の取組を自地域のチームで考える

STEP1地域内ディスカッション
➡Q1「居場所を立上げ・継続・展開していくために、次にやってみたいこと」

STEP2グループ内共有
➡各地域の「やってみたいこと」の実現方法について他の地域と構成したグループ内でアイデアを出し合う

STEP3地域内ディスカッション
➡Q2「Q1を実現するために今後取り組むこと」

●対象

生活支援コーディネーター・コミュニティソーシャルワーカーなど
＋　連携して居場所づくりを進めていく方

・協議体メンバー/自治体職員/社会福祉協議会/地域包括支援センター/NPO/居場所活動の立上げを考えている住民の方等をお誘いあわせの上ご参加下さい。
・当日は地域ごとのチームでワークショップを行います。
・「誰を誘えばいいか分からない…」といった場合は主催者までお気軽にご相談ください。

お申込み
フォーム
QRコード

※　原則、会場内ではマスク着用のご協力をお願い致します。
※　会場に入る前、当日の体温を測らせて頂きます。
※　その他不明なことなどありましたらご相談ください。

一般社団法人　全国食支援活動協力会（担当：小泉・伊藤）
〒158-0098 東京都世田谷区上用賀6-19-21　TEL：03-5426-2547　Eメール：infomow@mow.jp

令和３年度厚生労働省老人保健健康増進等事業
「新型コロナウイルス影響下における生活支援体制整備事業の推進に向けた人材育成に関する調査研究事業」

会場参加＋オンライン ハイブリッド開催

生活支援コーディネーターによる 地域の居場所づくり・つながりづくり研修

～アセット発見で居場所の「やりたい!」をかなえるワークショップ～

参加無料
会場参加 25組70名
（事前予約制・先着順）

日時　2021年12月10日（金）
10:30～15：45（開場10：00）
場所　鳥取県立福祉人材研修センター1階ホール
（鳥取県鳥取市伏野1729-5）無料駐車場有
オンライン参加の場合はZOOMを使用します

SC＋協議体メンバー・地域住民・その他（市町村・社協・地域包括担当者など）地域で連携して進めていく方2.3名でご参加ください

コロナ影響下の地域の居場所づくり・つながりづくりをチームで考えよう！

講義➤➤➤➤➤➤　「居場所を支える地域のアセット」
10：40　千葉大学人文科学研究院教授　清水 洋行 氏

事例報告➤➤➤➤　「今あるアセットを活かした居場所の取組み」
10：55
●鳥取県鳥取市河原町
鳥取市社会福祉協議会　鳥取市第2層SC　西尾 宏美 氏
「ふれあい食堂」　大門 康裕 氏

●大阪府泉南郡岬町
岬町社会福祉協議会　岬町第1層SC　中家 裕美 氏
「喫茶わくわく」　吉田 文代 氏

講義➤➤➤➤➤➤　「事例報告からの学び」
11：45　高崎市第１層SC（主管課：高崎市長寿社会課）　目﨑 智恵子 氏

ワークショップ➤➤　「居場所の『やりたい！』をかなえる」
13：00
日本大学文理学部教授／本事業研究委員会委員長
ファシリテーター　内藤 佳津雄 氏

【お申込みフォーム】　https://forms.gle/GR72MgNy4kB9qFUR7
※主催者HPのリンクからもお申込みいただけます
主催：一般社団法人 全国食支援活動協力会　TEL　03-5426-2547
後援：社会福祉法人 鳥取県社会福祉協議会

●研修会のねらい

✓地域で連携して居場所づくりを進めていくチームをつくる
✓アセット※を活かした、居場所の開発・継続支援を立案する
✓事例からコロナウイルス影響下の居場所活動を学ぶ

※この研修におけるアセット重視の考え方とは、地域の「あるもの」（強み、できること）に目を向け、住民自身の強みや、既にある様々な地域資源を活かしてサービスの展開を図る考え方です。

●報告事例「今あるアセットを活かした居場所の取組み」

✓先進的な事例から居場所の立上げや展開のノウハウを学ぶ

「ふれあい食堂」
こどもからお年寄りまで大勢の方が集まる多世代型の地域食堂。鳥取市の地域食堂ネットワークや、地域の企業・農協や教育機関等と連携しながら持続可能な居場所のしくみづくりを行っている。

「喫茶わくわく」
モーニングサービスを行うサロン「喫茶わくわく」は大阪湾に面した自然豊かな岬町で、ラジオ体操から始まった活動。現在は買い物支援や移動支援、見守り支援といった多くの活動へ展開している。

●ワークショップ「居場所の『やりたい！』をかなえる」

✓居場所を立上げ・継続・展開するためのアセット活用アイディアをグループ内でシェアして、今後の取組を自地域のチームで考える

STEP1地域内ディスカッション
➡Q1「居場所を立上げ・継続・展開していくために、次にやってみたいこと」

STEP2グループ内共有
➡各地域の「やってみたいこと」の実現方法について他の地域と構成したグループ内でアイデアを出し合う

STEP3地域内ディスカッション
➡Q2「Q1を実現するために今後取り組むこと」

●対象

生活支援コーディネーター・コミュニティソーシャルワーカーなど
＋　連携して居場所づくりを進めていく方

・協議体メンバー/自治体職員/社会福祉協議会/地域包括支援センター/NPO/居場所活動の立上げを考えている住民の方等をお誘いあわせの上ご参加下さい。
・当日は地域ごとのチームでワークショップを行います。
・「誰を誘えばいいか分からない…」といった場合は主催者までお気軽にご相談ください。

お申込みフォームQRコード

※　原則、会場内ではマスク着用のご協力をお願い致します。
※　会場に入る前、当日の体温を測らせて頂きます。
※　その他不明なことなどありましたらご相談ください。

一般社団法人　全国食支援活動協力会（担当：小泉・伊藤）
〒158-0098 東京都世田谷区上用賀6-19-21　TEL：03-5426-2547　Eメール：infomow@mow.jp

令和３年度厚生労働省老人保健健康増進等事業
「新型コロナウイルス影響下における生活支援体制整備事業の推進に向けた人材育成に関する調査研究事業」

集合研修

生活支援コーディネーターによる地域の居場所づくり・つながりづくり研修

～アセット発見で居場所の「やりたい!」をかなえるワークショップ～

参加無料
定員 12組40名
（事前予約制・先着順）

日時　２０２２年１月２１日（金）
13：００～　１７：００
場所　アットビジネスセンターサテライト新宿南口駅前
渋谷区代々木2-8-3　新宿GSビル8階

SC＋協議体メンバー・地域住民・その他（市町村・社協・地域包括担当者など）地域で連携して進めていく方2.3名でご参加ください

コロナ影響下の地域の居場所づくり・つながりづくりをチームで考えよう！
他地域のコーディネーターと交流しよう！

講義➤➤➤➤➤➤　「居場所を支える地域のアセット」
千葉大学人文科学研究院教授　清水 洋行 氏

事例報告➤➤➤➤　「今あるアセットを活かした居場所の取組み」
●愛知県知多市
特定非営利活動法人あゆみ　知多中学校区第2層SC　市川 美千代 氏
「岡田なごやかサロン」代表　勝﨑 芳雄 氏

●東京都板橋区高島平
板橋区社会福祉協議会　第2層SC　小林 霧華 氏
「ゆずり葉」代表　齊藤 敦子 氏

講義➤➤➤➤➤➤　「事例報告からの学び」
稲城市高齢福祉課高齢福祉係 係長　荒井 崇宏 氏

ワークショップ➤➤　「居場所の『やりたい！』をかなえる」
日本大学文理学部教授／本事業研究委員会委員長
ファシリテーター　内藤 佳津雄 氏

【お申込みフォーム】　https://forms.gle/gkpoADUkQw6d7oYL8
※主催者HPのリンクからもお申込みいただけます
主催：一般社団法人 全国食支援活動協力会　TEL　03-5426-2547

お申込みフォーム QRコード

●研修会のねらい

✓地域で連携して居場所づくりを進めていくチームをつくる
✓アセット※を活かした、居場所の開発・継続支援を立案する
✓事例からコロナウイルス影響下の居場所活動を学ぶ

※この研修におけるアセット重視の考え方とは、地域の「あるもの」（強み、できること）に目を向け、住民自身の強みや、既にある様々な地域資源を活かしてサービスの展開を図る考え方です。

●報告事例「今あるアセットを活かした居場所の取組み」

✓先進的な事例から居場所の立上げや展開のノウハウを学ぶ

「岡田なごやかサロン」

かつて知多木綿で栄えた知多市岡田で空き家だった古民家を改修し、週4日開催の常設のサロンに。知多市介護予防・日常生活支援総合事業の補助を利用し、高齢者を中心とした集いの場となっている他、街の歴史や文化を伝える貴重な場にもなっている。

「ゆずり葉」

高島平団地近くの居酒屋を使ったサロン。認知症カフェや高齢者向け筋トレ、農水省の農福連携プロジェクトによる農園など幅広い活動を行っている。また、近くの医療機関と連携した高齢者向け講座なども精力的に開催している。

●ワークショップ「居場所の『やりたい！』をかなえる」

✓居場所を立上げ・継続・展開するためのアセット活用アイディアをグループ内でシェアして、今後の取組を自地域のチームで考える

STEP1地域内ディスカッション
➡Q1「居場所を立上げ・継続・展開していくために、次にやってみたいこと」

STEP2グループ内共有
➡各地域の「やってみたいこと」の実現方法について他の地域と構成したグループ内でアイデアを出し合う

STEP3地域内ディスカッション
➡Q2「Q1を実現するために今後取り組むこと」

●対象

生活支援コーディネーター・コミュニティソーシャルワーカーなど
＋　連携して居場所づくりを進めていく方

- 協議体メンバー/自治体職員/社会福祉協議会/地域包括支援センター/NPO/居場所活動の立上げを考えている住民の方等をお誘いあわせの上ご参加下さい。
- 当日は地域ごとのチームでワークショップを行います。
- 「誰を誘えばいいか分からない…」といった場合は主催者までお気軽にご相談ください。

一般社団法人　全国食支援活動協力会（担当：小泉・伊藤）
〒158-0098 東京都世田谷区上用賀6-19-21　TEL：03-5426-2547　Eメール：infomow@mow.jp

令和３年度厚生労働省老人保健健康増進等事業
「新型コロナウイルス影響下における生活支援体制整備事業の推進に向けた人材育成に関する調査研究事業」

オンライン研修

生活支援コーディネーターによる地域の居場所づくり・つながりづくり研修

～アセット発見で居場所の「やりたい!」をかなえるワークショップ～

参加無料
定員 12組60名
（事前予約制・先着順）

日時　２０２２年１月２６日（水）
　　１３：００ ～　１７：００
場所　ZOOM を利用したオンライン研修

SC＋協議体メンバー・地域住民・その他（市町村・社協・地域包括担当者など）地域で連携して進めていく方2.3名でご参加ください

コロナ影響下の地域の居場所づくり・つながりづくりをチームで考えよう！
他地域のコーディネーターと交流しよう！

講義➤➤➤➤➤➤　「居場所を支える地域のアセット」
東京大学大学院人文社会系研究科准教授　祐成 保志 氏

事例報告➤➤➤➤　「今あるアセットを活かした居場所の取組み」
●東京都稲城市向陽台
地域包括支援センターこうようだい向陽台地域第2層SC　谷地中 恵子氏
支え合いネットワーク向陽台　江口 浩子氏

●大阪府泉南郡岬町
岬町社会福祉協議会　岬町第1層SC　中家 裕美 氏
「喫茶わくわく」　吉田 文代 氏

講義➤➤➤➤➤➤　「事例報告からの学び」
高崎市第１層SC（主管課：高崎市長寿社会課）　目﨑 智恵子 氏

ワークショップ➤➤　「居場所の『やりたい！』をかなえる」
日本大学文理学部教授／本事業研究委員会委員長
ファシリテーター　内藤 佳津雄 氏

【お申込みフォーム】　https://forms.gle/dyyDf8K9vJcQHjZo7
※主催者HPのリンクからもお申込みいただけます
主催：一般社団法人 全国食支援活動協力会　TEL　03-5426-2547

お申込み
フォーム
QRコード

●研修会のねらい

✓地域で連携して居場所づくりを進めていくチームをつくる
✓アセット※を活かした、居場所の開発・継続支援を立案する
✓事例からコロナウイルス影響下の居場所活動を学ぶ

※この研修におけるアセット重視の考え方とは、地域の「あるもの」（強み、できること）に目を向け、住民自身の強みや、既にある様々な地域資源を活かしてサービスの展開を図る考え方です。

●報告事例「今あるアセットを活かした居場所の取組み」

✓先進的な事例から居場所の立上げや展開のノウハウを学ぶ

「支え合いネットワーク向陽台」
多摩ニュータウンの東端に位置する向陽台地区の第2層協議体、支え合いネットワーク向陽台では、カフェ「すまいる向陽台」や住民同士が助け合う仕組み「すまいるネット」を立上げ、住民が安心して暮らせる地域を目指し活動している。

「喫茶わくわく」
モーニングサービスを行うサロン「喫茶わくわく」は大阪湾に面した自然豊かな岬町でラジオ体操から始まった活動。現在は買い物支援や移動支援、見守り支援といった多くの活動へ展開している。

●ワークショップ「居場所の『やりたい！』をかなえる」

✓居場所を立上げ・継続・展開するためのアセット活用アイディアをグループ内でシェアして、今後の取組を自地域のチームで考える

STEP1地域内ディスカッション
➡Q1「居場所を立上げ・継続・展開していくために、次にやってみたいこと」

STEP2グループ内共有
➡各地域の「やってみたいこと」の実現方法について他の地域と構成したグループ内でアイデアを出し合う

STEP3地域内ディスカッション
➡Q2「Q1を実現するために今後取り組むこと」

●対象

生活支援コーディネーター・コミュニティソーシャルワーカーなど
＋　連携して居場所づくりを進めていく方

・協議体メンバー/自治体職員/社会福祉協議会/地域包括支援センター/NPO/居場所活動の立上げを考えている住民の方等をお誘いあわせの上ご参加下さい。
・当日は地域ごとのチームでワークショップを行います。
・「誰を誘えばいいか分からない…」といった場合は主催者までお気軽にご相談ください。

一般社団法人　全国食支援活動協力会（担当：小泉・伊藤）
〒158-0098 東京都世田谷区上用賀6-19-21　TEL：03-5426-2547　Eメール：infomow@mow.jp

生活支援コーディネーターによる地域の居場所づくり・つながりづくり研修
～アセット発見で居場所の「やりたい!」をかなえるワークショップ～

＜場所＞ 香川会場 香川県薬剤師会朝日町会館２階
＜オンライン＞ Zoom を使用いたします。
https://us02web.zoom.us/j/87461334897?pwd=czlwam9oalo5OGU1d0xYRjlleWIxUT09
ミーティング ID: 874 6133 4897
パスコード: 066174
＜日時＞ 2021年11月26日(金) 13:00～17:00

第１部(13:00～14:30)
●ご挨拶
内藤 佳津雄 氏(日本大学文理学部教授)

●この研修のねらい
平野 覚治（全国食支援活動協力会専務理事）

●講　義 :「居場所を支える地域のアセット」
清水 洋行 氏（千葉大学人文科学研究院教授）

●事例報告 :「今あるアセットを活かした居場所の取組み」
【事例 1】愛知県知多市 : 古民家を活かした憩いの場(特定非営利活動法人あゆみ)
市川 美千代 氏(知多中学校区第２層 SC)・ 勝﨑 芳雄 氏(「岡田なごやかサロン」代表)
【事例 2】香川県仲多度郡琴平町 : 子どもと大人の居場所づくり(琴平町社会福祉協議会)
新原 隆一 氏（琴平町第１層 SC）・ 眞鍋 陽子 氏（「415のわ(よいこのわ)」）

●講　義:「事例報告からの学び」
目﨑 智恵子 氏(高崎市第1層 SC／主管課:高崎市長寿社会課)

第２部(14:30～17:00)
●ワークショップ :「居場所の『やりたい！』をかなえる」
ファシリテーター 内藤 佳津雄 氏

●研修の最後に : アンケートへのご協力のお願い

生活支援コーディネーターによる
地域の居場所づくり・つながりづくり研修

『研修のねらい』

令和3年度厚生労働省老人保健健康増進等事業研究委員会　ワーキング部会長
全国食支援活動協力会　専務理事

平野覚治

一般社団法人 全国食支援活動協力会

「生活支援体制整備事業の推進に向けた人材育成に関する調査研究事業」事業概要

○新型コロナウイルスの影響で住民主体の活動が自粛される等、高齢者の心身機能の低下が懸念されているため、住民主体の活動の継続、再開に向けた取組・支援が必要。
また、住民主体の活動においては、「アセット重視」※の考え方の下、既存の様々な社会資源に目を向け、これらをつなげて生活支援の充実を図る等、地域生活を豊かにするという考え方も必要。
※アセット重視・・・「あるもの」（強み、できること）に目を向け、住民自身がもつ強みや、既にある様々な地域資源を活かしてサービスの展開を図る考え方。

○住民主体の活動を推進するためには、何れも市町村とともに重要な役割を担う生活支援コーディネーター（以下、「SC」と言う）による地域に対する支援力の向上を図ることが重要。

○このため、本調査研究事業においては、地域住民の支え合い活動のきっかけとなる「食」を中心として、
・新型コロナウイルス影響下で、様々な工夫をしながら住民主体の居場所活動を実践している事例
・既存の地域資源を有効に活用、つなぐことで、地域に必要とされる居場所に発展している事例
等を収集・分析することにより、SCの新たな気付き、発想の転換等、地域に対する支援力の向上に資する「地域の居場所サポートハンドブック（仮称）」を作成する。

○併せて、SC等を対象とした研修事業を実施し、本ハンドブックの評価・検証等を図ることとする。

生活支援コーディネーターによる地域の居場所づくり・つながりづくり研修

事例報告

✔先進的な事例から居場所の立上げや展開のノウハウを学ぶ
　住民主体の居場所を持続可能なものにするためのSCの活動に注目

ワークショップ

✔ 地域で連携して居場所づくりを進めていくチームをつくる
✔アセット※を活かした、居場所の開発・継続支援を立案する
✔事例からコロナウイルス影響下の居場所活動を学ぶ

※この研修におけるアセット重視の考え方とは、地域の「あるもの」（強み、できること）に目を向け、住民自身の強みや、既にある様々な地域資源を活かしてサービスの展開を図る考え方です。
→このあと、清水先生より講義いただきます。

他地域の参加者から柔軟な発想や多様なアイデアをもらいましょう

コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査

実施主体
- 一般社団法人全国食支援活動協力会
- 千葉大学人文科学研究院　清水洋行研究室

アンケートの背景
- 各地の食支援活動が、昨年から続くコロナ禍において、活動方法の見直しや利用者・担い手との関わり方などの様々な影響を受けている。
- 一方で、「食」のもつ意義が改めて見直されるとともに、全国の企業から「食支援」にかかわる活動への食材・食品の寄付が増えている。

アンケートの目的
- 食支援活動の現状と意義・課題の把握
- 寄付された食材・食品を各地域の活動に届ける食材支援のあり方を検討する資料とする

コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査

アンケートの対象・回答活動の概略

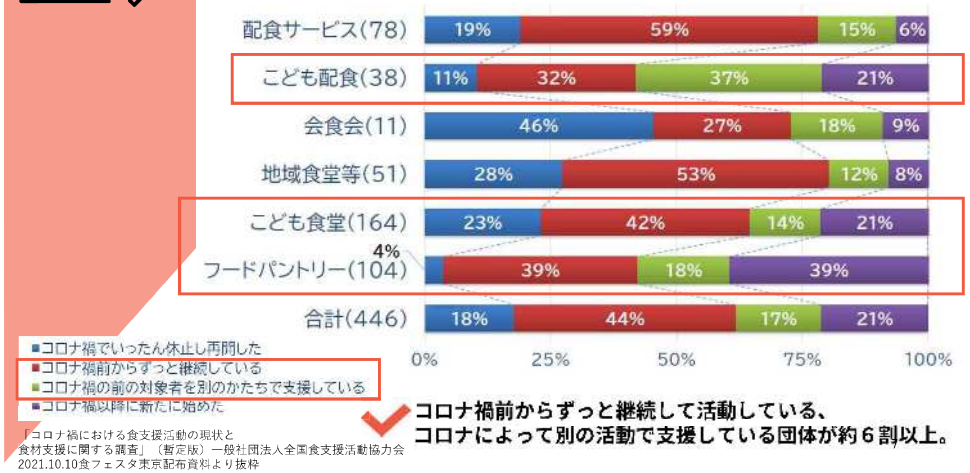
活動の種類	①活動中	②活動休止中	合計
配食サービス	84	3	87
こども配食	39	1	40
会食会	11	9	20
地域食堂・多世代食堂、コミュニティカフェ	56	28	84
こども食堂	178	37	215
フードパントリー	109	2	111
不明・無回答	3	1	4
合計	480	81	561

● 活動の状況：
①2021年7月時点で実施中の食支援活動
②2021年7月時点で休止中の食支援活動

出典：「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会 2021.10.10食フェスタ東京配布資料

5

活動の種類別にみた活動経緯【実施中の活動】



コロナ禍前からずっと継続して活動している、
コロナによって別の活動で支援している団体が約６割以上。

「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会 2021.10.10食フェスタ東京配布資料より抜粋

コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査

アンケートの対象・回答活動の概略

回答活動の概略　活動の所在地
【10活動以上を抜粋】

都道府県名	活動数	都道府県名	活動数
東京都	51	福島県	17
神奈川県	48	大分県	16
埼玉県	47	北海道	15
大阪府	45	宮城県	15
愛知県	34	熊本県	13
福岡県	29	香川県	13
千葉県	26	鹿児島県	10

出典：「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会 2021.10.10食フェスタ東京配布資料

6

新型コロナ感染に伴う休止中に取り組んだこと

	利用者に対して		ボランティアに対して	
	実施中の活動が休止期間に取り組んだ（78活動）	休止中の活動が取り組んだ（78活動）	実施中の活動が休止期間に取り組んだ（76活動）	休止中の活動が取り組んだ（74活動）
個別に安否や状況を確認した	33.3	30.8	26.3	35.1
アンケート調査で状況を確認した	3.8	5.1	0.0	0.0
利用者に情報発信を続けた	42.3	37.2	39.5	32.4
利用者宅に訪問した	10.3	11.5	1.3	0.0
食事なしで交流会を開催した	11.5	12.8	14.5	8.1
オンラインで交流会を開催した	5.1	2.6	5.3	5.4
その他	15.4	42.3	10.5	25.7
取り組みなし	32.1	16.7	23.1	20.3

「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会 2021.10.10食フェスタ東京配布資料より抜粋

8

資料-12

休止中に利用者に対して行った取り組み

- 情報発信し、希望者へ食材の配付
- 誰でも気軽にいつでも立ち寄れる居場所作りが、逆に個人宅や来所者の連絡先をいっさい不問で運営していたため、近隣の顔見知りは連絡がとれているが、住所がわからない来所者は現在も連絡がとれていない。会報等を通じて絵手紙や俳句、川柳などを募集。サロン(カフェ)の外に掲示している。
- 施設内の一室を、地域住民の交流スペースとして開放した。手指消毒等の実施、2時間までの利用制限あり。
- Facebookでの現状報告　限られた人数でのオレンジカフェ、ケアラーズカフェ
- 昨年の6月から配食を実施。配食ボランティアが個々に手渡しをし、安否状況を確認。社協(ゆうあい)の方も毎月来られ、情報誌・プレゼント等を利用者に配っていただいています
- 食材配布に切り替えた

休止中に利用者に対して行った取り組み

- 会食会から配食に変更
- 食事の提供をしていない曜日のサロンは、活動を続けていた。
- 食堂は休止だが配食は実施した(高齢者や障害者は食を休止することはできない)
- つながりが切れない様に声かけ、お手紙ポスティングを欠かさない

ボランティアに対する活動の効果（３つまで選択）
【実施中の活動。ボランティアがいる活動のみ】

	望ましい生活リズムや習慣が身につく	学びの機会になる	食育の機会になる	食事を楽しむことができる	栄養を摂ることができる	他の人と交流できる	心のよりどころとなる	出番や役割を得られる	経済的な支援になる	困りごとを相談・発信できる	地域や社会の情報を得られる
配食サービス(48)	25.0%	29.2%	4.2%	2.1%	0.0%	87.5%	31.3%	60.4%	6.3%	12.5%	22.9%
こども配食(28)	0.0%	14.3%	0.0%	0.0%	0.0%	85.7%	39.3%	71.4%	7.1%	10.7%	35.7%
会食会(8)	12.5%	25.0%	12.5%	12.5%	0.0%	50.0%	37.5%	75.0%	12.5%	25.0%	37.5%
地域食堂等(36)	19.4%	13.9%	2.8%	16.7%	5.6%	72.2%	41.7%	83.3%	0.0%	5.6%	22.2%
こども食堂(121)	3.3%	24.8%	5.0%	8.3%	5.0%	74.4%	38.0%	72.7%	4.1%	5.8%	29.8%
フードパントリー(67)	0.0%	20.9%	3.0%	1.5%	0.0%	80.6%	28.4%	79.1%	1.5%	6.0%	44.8%
合計(308活動)	7.8%	22.4%	3.9%	6.2%	2.6%	77.9%	35.4%	73.4%	3.9%	7.8%	31.8%

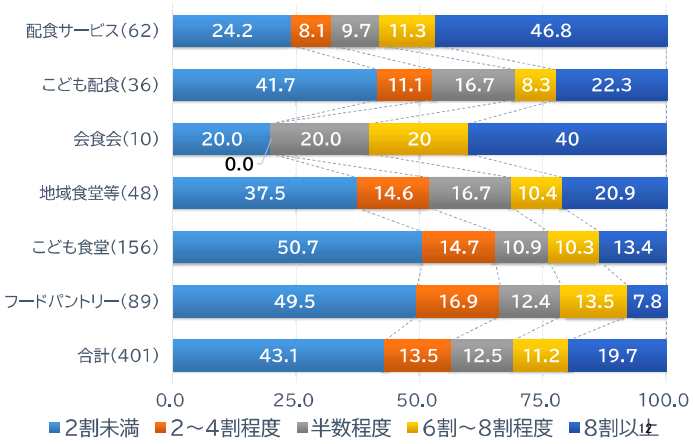
「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会
2021.10.10食フェスタ東京配布資料より抜粋

利用者に対する活動の効果（３つまで選択）
【実施中の活動】

	望ましい生活リズムや習慣が身につく	学びの機会になる	食育の機会になる	食事を楽しむことができる	栄養を摂ることができる	他の人と交流できる	心のよりどころとなる	出番や役割を得られる	経済的な支援になる	困りごとを相談・発信できる	地域や社会の情報を得られる
配食サービス(68)	30.9%	0.0%	13.2%	47.1%	73.5%	36.8%	17.6%	1.5%	19.1%	19.1%	5.9%
こども配食(25)	16.0%	0.0%	16.0%	24.0%	44.0%	36.0%	40.0%	4.0%	64.0%	36.0%	8.3%
会食会(8)	0.0%	12.5%	25.0%	75.0%	37.5%	50.0%	37.5%	0.0%	12.5%	25.0%	25.0%
地域食堂等(38)	7.9%	7.9%	10.5%	60.5%	26.3%	55.3%	34.2%	13.2%	26.3%	26.3%	2.6%
こども食堂(117)	11.1%	15.4%	22.2%	51.3%	30.8%	41.0%	35.0%	2.6%	31.6%	21.4%	7.7%
フードパントリー(78)	2.6%	5.1%	6.4%	10.3%	43.6%	20.5%	39.7%	1.3%	80.8%	48.7%	10.3%
合計(334活動)	12.9%	7.8%	15.0%	40.4%	43.1%	36.8%	32.9%	3.3%	41.9%	29.0%	7.8%

「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会
2021.10.10食フェスタ東京配布資料より抜粋

ボランティアに占める65歳の人の割合
【実施中の活動で、ボランティアがいる活動のみ】



活動種類別・寄付してほしい食材・食品【実施中の活動】

	なし	米	肉、魚	野菜、果物	冷蔵・冷凍の総菜・食材・食品	レトルト食品、インスタント食品	調味料	菓子類	飲料	お弁当	その他
配食サービス(77)	21%	33%	9%	7%	0%	7%	16%	3%	4%	1%	1%
こども配食(36)	6%	22%	47%	6%	3%	6%	0%	0%	3%	8%	0%
会食会(11)	27%	36%	18%	0%	0%	0%	9%	9%	0%	0%	0%
地域食堂等(50)	10%	24%	28%	10%	8%	2%	4%	4%	6%	2%	2%
こども食堂(165)	2%	27%	35%	4%	7%	10%	1%	6%	2%	2%	3%
フードパントリー(99)	3%	39%	13%	3%	5%	25%	3%	4%	1%	1%	2%
合計(438)	8%	30%	25%	5%	5%	11%	5%	4%	3%	2%	2%

「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会
2021.10.10食フェスタ東京配布資料より抜粋

活動種類別の「行政・社協からの助成・補助・委託」の状況【実施中の活動】（複数回答）

	受けていない	単年度のものを受けている	3年以内の期限付きのものを受けている	4年以上の期限付きのものを受けている	5年以上継続予定／期限が決まっていないものを受けている
配食サービス(79)	26.6%	46.8%	2.5%	1.3%	25.3%
こども配食(38)	36.8%	42.1%	5.3%		18.4%
会食会(11)	18.2%	54.5%			27.3%
地域食堂等(53)	41.5%	37.7%		7.5%	17.0%
こども食堂(171)	40.4%	49.7%	2.9%		10.5%
フードパントリー(108)	55.6%	40.7%	2.8%	0.9%	4.6%
合計(460)	40.9%	45.2%	2.6%	1.3%	13.5%

「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会
2021.10.10食フェスタ東京配布資料より抜粋

食材・食品の寄付を受けるうえでの困りごと【実施中の活動】

	寄付を受ける必要はない	困りごとはない	量が足りない	量が多すぎる	必要な食材・食品の寄付がない(少ない)	保管スペースがない(足りない)	冷蔵・冷凍設備がない(容量不足)	受け取り場所が遠い	運搬手段がない	寄付に関する情報が入手しにくい	その他
配食サービス(76)	8%	17%	8%	7%	25%	30%	33%	12%	8%	28%	9%
こども配食(36)		13%	15%	8%	23%	49%	49%	21%	10%	13%	10%
会食会(11)	18%	36%			46%	36%	18%	9%	9%	46%	
地域食堂等(54)	4%	15%	17%	2%	28%	32%	32%	15%	17%	28%	20%
こども食堂(176)		16%	14%	2%	23%	52%	55%	16%	14%	18%	12%
フードパントリー(106)		4%	34%	3%	26%	52%	57%	19%	17%	17%	16%
合計(462)	2%	13%	18%	4%	25%	45%	47%	16%	14%	21%	13%

「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会
2021.10.10食フェスタ東京配布資料より抜粋

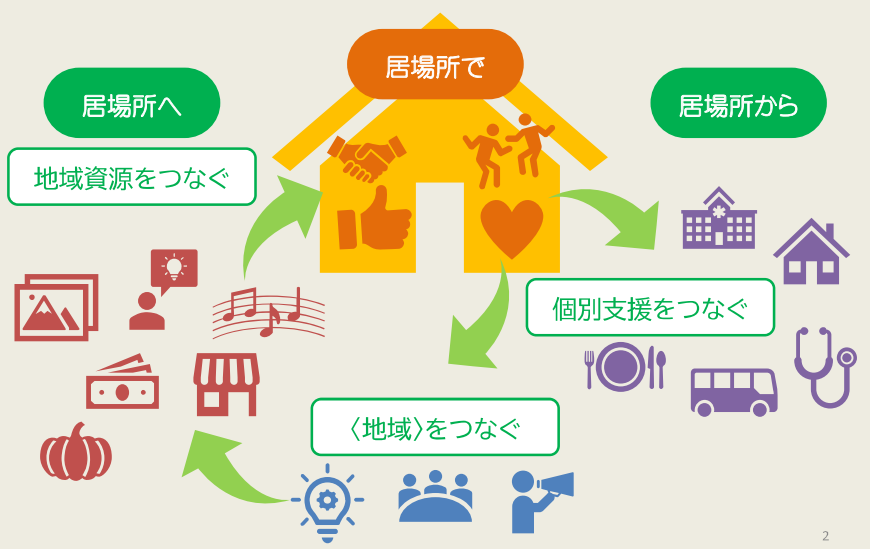
生活支援コーディネーターによる
地域の居場所づくり・つながりづくり研修
～アセットの発見で居場所の「やりたい！」をかなえる

居場所を育てるための支援とは

2021年11月26日(金)
清水　洋行
(千葉大学 人文科学研究院)

1

居場所の機能とSCの役割



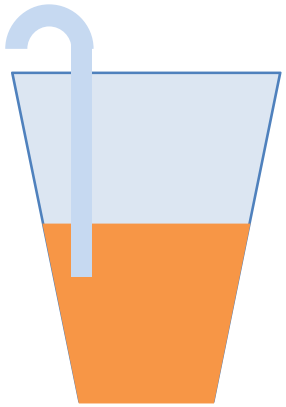
2

ニーズ重視とアセット重視(1)

	ニーズ重視	アセット重視
着眼点	ないもの	あるもの
対応の仕方	不足を補う	強みを伸ばす
住民との関係	住民に向けて	住民とともに
住民参加の度合い	低い	高い
時間幅	短い	長い
主な対象	個人	コミュニティ
評価の重点	客観性	主観性
基本的な問い	「なぜ病気になるのか?」	「なぜ健康になるのか?」

(資料)一般社団法人 全国食支援活動協力会編集・発行『住民のやる気を支える支援の手引き』(2019年)p.49

ニーズ重視とアセット重視(2)



「ないもの」に着目

- 病気
- 困りごと

住民へ
サービス・支援
を提供する

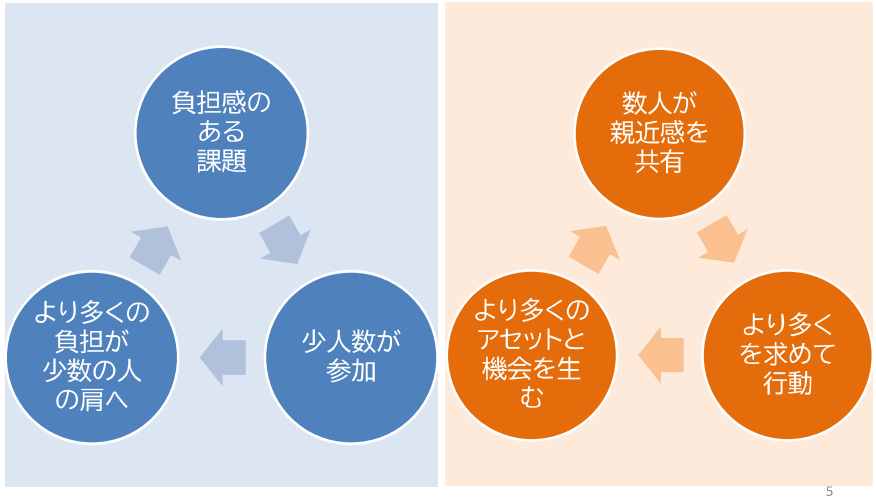
「あるもの」に着目

- 「やりたい」、「ほっとけない」
- 得意(趣味、仕事から)
- 仲間、人脈
- 建物、畑、車…
- お金

住民とともに
サービス・支援
(活動)を創る

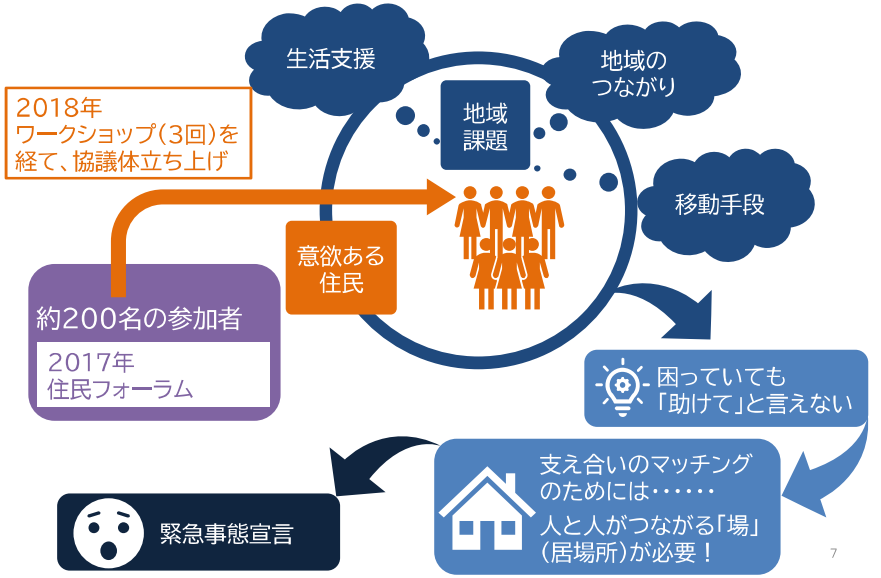
4

担い手をめぐる〈ネガティブ・サイクル〉と〈ポジティブ・サイクル〉



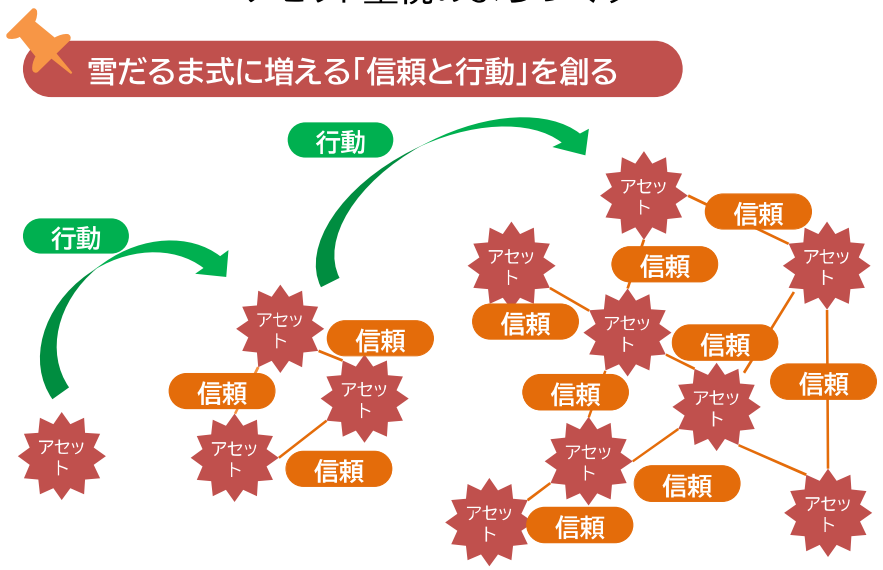
5

畑活プロジェクト(奈良県葛城市)を事例に(1)

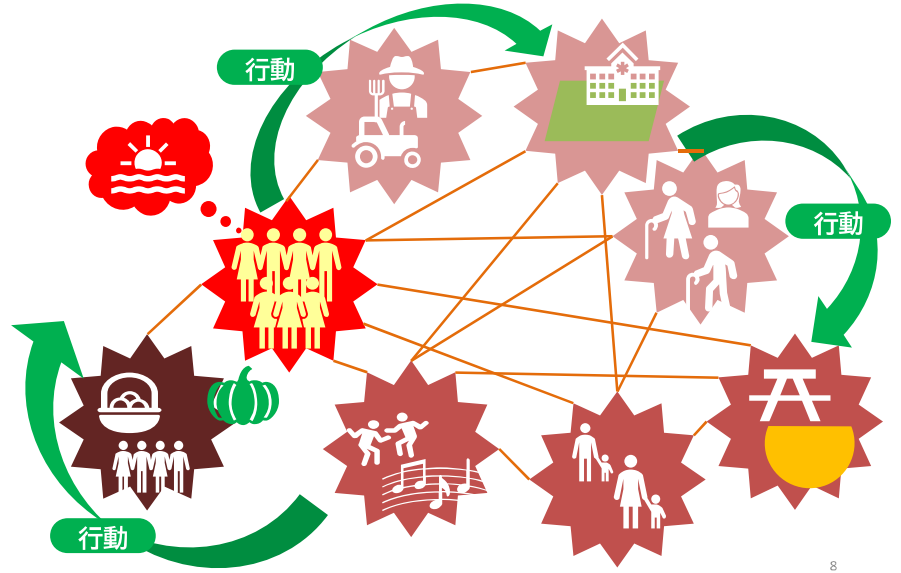


7

アセット重視のまちづくり



畑活プロジェクト(奈良県葛城市)を事例に(2)



8

畑活プロジェクトにみるアセット(1)

- 最初のメンバーのアセット
  - 意欲
  - 住民であること(地域の生活を知っている。地域のつながりがある)
  - 得意
  - 他の活動に参加
  - メンバー同士のつながりと親近感
- ディサービスセンター
  - 畑
  - 利用者さんたち(＋潜在していたスキル・経験)
  - 職員さんたち
- 民生委員・児童委員のAさん
  - 畑のご近所さん
  - トラクター(＋操作スキル)

畑活プロジェクトにみるアセット(2)

- 神社
  - 広場(空間)
  - まちのシンボル(歴史・記憶)
- 子育て中の親子
- 朝にラジオ体操をしている子どもたち
- 市
  - 広報紙ほか
- ローカルテレビ
- 配食グループ
  - ボランティアさんたち
  - 利用者さんたち

畑活プロジェクトにみるアセット(3)

- 生活支援コーディネーターのBさん
  - 社会福祉協議会の活動等を通じた地域でのつながり
  - 市とのつながり
  - スキル・経験
- 第一層協議体
  - 区長会、民生委員・児童委員連合会、寿連合会、ボランティア連絡会、県農協、社会福祉協議会、市保健福祉部、市長寿福祉課
  - 地域包括支援センター
  - C地区協議体のメンバーたち

公的機関の役割

① 健康の向上に資するコミュニティのアセットを明らかにし、わかりやすく示す。

② 住民を、サービスの受け手ではなく、健康・福祉の共同生産者とみなす。

③ 住民が何に取り組んでおり、何を大切にしているかを知ることから始める。住民「に向けて」ではなく、住民「とともに」活動する。

④ 個人およびコミュニティのアセットと強みを明らかにし、それらに重点を置きながら、人生における持続可能な改善を行うようサポートする。

⑤ 困難から立ち直る力、関係性、知識、誇りを向上することにより、住民がより良い方向への変化を起こせるようにサポートする。

⑥ 相互にサポートしあうネットワークづくり、友人関係づくりをサポートする。こうしたネットワークがあることで、住民は自らの環境をよりよく理解し、自分の生活をコントロールできるようになる。

⑦ その地域でうまくいっていることの価値を認める。

⑧ 健康・福祉の向上に役立っている潜在的な要因を明らかにする。

⑨ コミュニティに権限を委譲し、コミュニティが、自らの将来を自分たちで決め、サービス、資金、建物といった具体的な資源を創出できるようにする。

(資料)一般社団法人 全国食支援活動協力会編集・発行『住民のやる気を支える支援の手引き』(2019年)p.50

参考

- 一般社団法人 全国食支援活動協力会編集・発行『住民のやる気を支える支援の手引き』(2019年)
- 一般社団法人 全国食支援活動協力会編集・発行『ここがあることで地域が豊かになる住民主体の居場所ガイドブック』(2021年)
- Kretzmann, John P. and McKnight, John. Building Communities from the Inside Out: A Path toward Finding and Mobilizing a Community's Asset.(1993)
- Snow, Luther K. The Power of Asset Mapping: How your Congregation Can Act on Its Gifts. (2004)

事例報告①
愛知県知多市岡田地区

古民家を活かした憩いの場

「岡田なごやかサロン」代表
勝﨑 芳雄 氏
特定非営利活動法人あゆみ　知多中学校区第2層SC
市川 美千代 氏

活用できそうだと思ったアセット

1
- 古民家所有
  伊井さん

2
- 勝﨑さん
- 街並保存会、
  岡田の歴史
- 岡田ゆめみたい

3
- グラウンド
  ゴルフ仲間
  （長生会）

4
- 知多市の助成

3

当初やりたかったこと

1 市川さん
岡田の古民家を見て、こんな素敵な場所に居場所があったらいいなと思った。

2 勝﨑さん
歴史ある岡田の街並保存と共に活性化もできたらいいなと思った。

→

2

知多市 生活支援体制整備事業

愛知県知多市

・人口：約8万人
・高齢化率：27.8%
・介護認定率：15%

特定非営利活動法人あゆみ

誰もが住み慣れた地域で安心して暮らせるまちづくりを目指し「困ったときはお互い様」を合言葉に平成10年8月住民主体として発足。

2層コーディネーター 市川美千代

50歳で福祉関係の資格を取得し、福祉の道へ。
「大人の学校」で地域活動について学ぶ。

※大人の学校・・・団塊世代が長年培ってきた知識や技術、経験をまちづくりに活かしてもらおうと知多市が開校。

＜第1層生活支援コーディネーター＞
知多市
＜第2層生活支援コーディネーター＞
NPOが3地区、社協が2地区を担当
H29年より岡田エリアを（特非）あゆみが受託

4

岡田 古民家との出会い

岡田の街なみを見学中、素敵な古民家を発見！
幼いころの昔の暮らしが懐かしく思い出されるような住宅
「こんな場所で常設のサロンができたらいいな・・・」

しばらくして古民家を買い取った方と活用方法について考え、
サロン開所に向けて話し合いを重ねる

サロンへのサポート

サロンスタッフへの研修
- 補助金交付申請についての研修
- 居場所・サロン入門編の研修
- 社会の変化と制度の理解／知多市の現状とこれから　など

補助金申請
- 知多市介護予防･日常生活支援推進事業の補助金申請

初年度　金額：100万
使途：畳の取替、エアコンの設置、カーテン、照明器具、天井・床の修繕 等

2年目～　金額：約35万
使途：運営費（2/3）、家賃

持続可能なしくみをつくるためのサポート

”住民主体”の居場所

サロンスタッフの運営会議に2層ＳＣとして参加

サロンの状況、収支報告、気になる利用者の様子について話し合う。
相談があればともに考えるが、物事を決めて進めるのはスタッフの方々。

スタッフご自身の社会参加、生きがいづくり、介護予防などの楽しみを尊重しながら、”住民主体”の活動となるよう支援

地域住民自身もアセット
スタッフと利用者の垣根がないサロンに育っている！

岡田なごやかサロン

知多市介護予防・日常生活支援事業として平成２９年に開設。
古い街並みの中の古民家で、高齢者の憩いのサロンとして、
おしゃべりや、体操・趣味の発表など自由に過ごしている。

開場日：月・火・水・金の９時～１２時
利用料：１００円（お茶、コーヒー、お菓子付き）

岡田の街並み

木綿蔵

9

“学童を見守る辻地蔵さん”

11

なまこ壁の蔵

10

12

資料-20

13

思い出話ができる
昭和レトロの部屋

15

岡田なごやかサロン

14

回想法体験　令和1年10月

“回想法”で盛り上がるサロン

16

資料-21

昔のなつかしいラジオの登場、
何年もの？

近くの人が持ち込んでくれた
珍しいパン焼き機

17

19

資料-22

おじいちゃん・おばあちゃんとあそぼう会　令和1年10月

共催：NPO法人子育て支援を考える会TOKOTOKO　後援：岡田コミュニティ

18

さいごに

生活支援コーディネーターとして意識していること

- ☑ ヒト・モノ・コト（アセット）をみつけたらすぐにアタックする！
- ☑ 地域のキーマンを大切にし、時間をかけて関係づくりをする！

勝﨑さんとの繋がりから新たな居場所へ

岡田のある夫妻が酒屋を閉めることに、、。
勝﨑さんからの紹介で、2層SCとして新たな居場所「やまもりいこいの家」の立上げ支援へ。

2層協議体の立上げへ

地域の話し合いの場「まぜこぜ岡田ミーティング」の立上げ、推進支援。

20

事例報告②
香川県仲多度郡琴平町

子どもと大人の居場所づくり

「４１５のわ（よいこのわ）」
眞鍋 陽子 氏
琴平町社会福祉協議会　琴平町第1層SC
新原 隆一 氏

活用できそうだと思ったアセット

1. 公会堂
2. 社協の事業（プラットフォーム事業）
3. 本の寄贈
4. お年寄り 読み聞かせボランティア

3

当初やりたかったこと

1. 使われていなかった公会堂を活用したい
2. 子育て世代と高齢者が集まれる場所が欲しい
3. 子どもが図書を読む環境をつくりたい

→

2

居場所づくりの進め方

社会福祉法人琴平町社会福祉協議会
事務局次長兼地域生活支援課課長　新原隆一
415のわ　代表　眞鍋陽子

4

琴平の小さな拠点　～気づきから生まれる取り組み～

ちょっとこ場

公会堂
絵本文庫どり～む

楽集館

住民参加型在宅福祉サービス
「ささえ愛隊」拠点

こんぴら朝市

もぐもぐ

ちょっとこ場当番表

日	月	火	水	木	金	土
					1 午前 お会 午後	2 午前 高木・京兼 午後 近藤
3 午前 藤井 午後 藤井	4 午前 NikoNiko 午後 火曜会	5 午前 稲穂会 午後 藤井	6 畳作会	7 午前 今井 午後 吉田	8 ひまわり	9 午前 都村 午後 田中
10 午前 藤井 午後 象郷婦人会	11 午前 都村 午後 琴平婦人会	12 午前 稲穂会 午後 横井	13 畳作会	14 午前 五條あゆみ会 午後 岡木	15 午前 お会 午後 老人クラブ	16 午前 あさがお 午後 近藤
17 午前 榎井婦人会 午後 象郷婦人会	18 午前 NikoNiko 午後 火曜会	19 午前 稲穂会 午後 横井	20 午前 藤田 午後 老人クラブ	21 午前 榎井婦人会 午後 吉田	22 ひまわり	23 午前 都村 午後 横井
24 午前 藤井 午後 古田	25 午前 都村 午後 琴平婦人会	26 午前 稲穂会 午後 横井	27 畳作会	28 午前 五條あゆみ会 午後	29 午前 藤田 午後 今井	30 午前 都村 午後 近藤

活動の広がり

- 人が集まってくる、つながる仕組み
- 琴平町ボランティア連絡会議結成･･･横のつながり。
  10時～16時までの当番
- 3つのひだまりクラブが利用。
- 写経クラブが最初は1つだけだったが3つに！
- 七夕祭り、クリスマス会などの人をつなげる行事の開催
- 誰かがいるという安心感
- 商店街に買い物来た時の休憩場所としてほっと一息つける場所に
- 三水会の毎月の利用
- ふれあいコンサートの実施　毎月第2木曜日
- 自治会や、商店街の会合に

ちょっとこ場ができるまで

課題 → 孤立死・孤独死（メディアで賑わっていた） → 孤立・孤独の解消

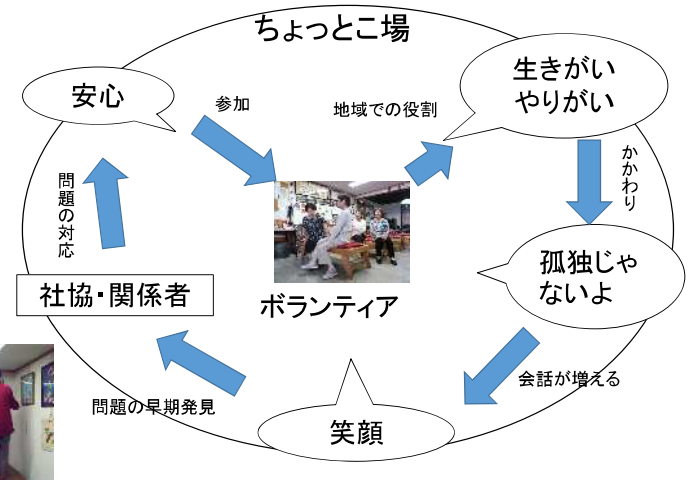
琴平町社会福祉協議会が日本生命財団「高齢社会先駆的事業（高齢者福祉助成）」の中で拠点づくりに着手。

地域福祉を推進していく上で、「場」が必要不可欠 → 新しい活動が生まれる

琴平町ボランティア連絡会議結成

開設当初は、アルバイトを雇い開けていましたが、これをきっかけに「琴平町ボランティア連絡会議」結成の声が上がり2004年12月に設立。ちょっとこ場を活動拠点としたことで、琴平町ボランティア連絡会議が365日10時～16時までの間、留守番ボランティアとして当番を組むようになった。

ちょっとこ場の役割



ボランティア団体の課題

社協として

- 住民が考え、動ける新しい仕組み
- 若い世代の地域活動への参画

→ プラットフォーム事業 → 住民の活動拠点 → 公会堂

＜全体会＞（A表）

①わたしのまちの良いところ	③10年後の琴平町
・交通が便利	・子供を気軽にあずけられるコミュニティ
・活気	・元気な福祉の行きとどいた町
・地域の助け合い	・人口が増え若者の時代
・あいさつがよくできる	・活気ある町、問題のない町
・町民が親切である(道を聞かれた時)	・声の掛け合い町
・便利	・人口が増加
・親しみやすい人間性	・琴平町で住み続けたいと思う人が増える
・交通の便が良い	・子供や若者が多い活気のある住みやすい町
・同級生が多い	
②身近なところで困っているところ	**④わたしができること**
・若者が少ない	・夢（目標）を口に出して伝える
・子供が少ない、高齢者が多い	・元気でいる事
・高齢のお宅が多い	・ゴミ0の町にしていきたい
・子供が少ないと言われること	・タイムリーな情報提供
・子育てについての相談者がいない	・元気な年寄りが子供を預かることができる（2～3時間）
・風呂屋さんが1つしかない	・一人暮らしの買物ボランティア
スーパーマーケットが遠い	・近所の助け合い
・子供が少ない	・地域のつながり、近隣との連携を大切にする
・空家が多くなった	

＜全体会＞B表

	住民	関係機関	行政
町	・若い人に住みやすくして 子供を生んでもらいたい ・少子化（人口減少）・若者が少ない ・県外に行った子たちが帰ってこない ・若い人の出会いの場 ・近所の会話なし 若者と （考えのすれ違い）	・子供の衰退びが 多い ・少子化対策として 若い方が安心して 面けるよう 子供にやさしい町に してほしい	・若い人の職場・若い人が住まない ・若者が少ない・若者の転出 ・若者が帰等する様なまちづくり ・子供が少ない・子供の遊び場 ・子育ての環境・地域住民の高齢化と少子化 ・子供が少ないので多くなるようになってほしい ・交流の場づくり（世代間、町民温泉） ・中学生、小学校の高学年の自転車の乗り方等の指導ができてない様に思える
地区	・若い人が子育てにおわれて地域のことにかんしんがありません 他の地域のように協力をどう呼びかけたらいいのか？ ・地区の行事への参加者が少ない（新しく入ってきた人） ・地域の会合、行事等の、参加意欲が少ない方がいる （増えてきている） ・若者がいない・地域の行事が難しくなってきた ・皆様が団結して前進したい ・近所に子どもの遊び相手が少ない		
自治会	・連合自治会の行動計画 ・自治会に加入してない家庭が増えている ・自治会の高齢化・会合に参加 ・地域においての集会に参加しない人が少ない ・自分のことはできるだけ人にたよらず自分でする ・協力して行うこと・連絡がとりにくい ・老人多（若者が少ない・若い人の話し合い（歴が合わない）		

プラットフォーム事業の開始

共助の社会づくり
プラットフォーム事業　子育て・次世代支援WG

全体会
5月14日

→ 子育て・次世代支援WG
9月14日
12月14日
1月25日

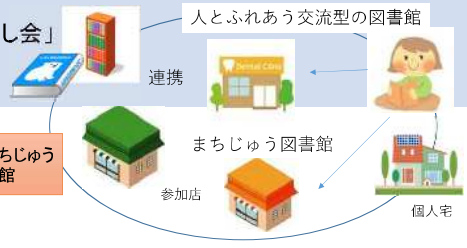
参加者の思い

- 図書館が欲しい
- 子どもと大人が一緒にいれる場所
- 気軽に交流できる場所がほしい
- 子どもたちがノビノビといれる空間
- 子育て世代の場所がほしい
- 子どもが安全に遊ばせる場所がほしい

共通の夢 → 415のわ

私たちにできることを実践！

	平成25年度	平成26年度	平成29年
415のわ	5月に絵本を集めるためちらしの作製及び町民に呼びかけ。(全戸配布) 絵本の修繕、カバーかけ。 9月「絵本文庫どり～む」オープニングイベント 毎月第1土曜日　読み聞かせの日 毎月1回定例会の実施	毎月第1土曜日　読み聞かせの日 部屋の衣替え 7月28日　香川県子ども文庫連祭りへの共催。読み聞かせの実施	まちじゅう図書館の取り組み
	通　年		
	毎年1回「どり～む祭り」の開催 毎月第1水曜日に「英語のおはなし会」 毎月1回定例会の開催 毎週日曜日開館		



13

その他

・象郷地区には住民が気軽に使える拠点がない･･･ニーズ
→楽集館

・第2層協議体　･･･「ささえ愛こんぴら」
生活支援「ささえ愛隊」　→遺贈でいただいた家を拠点に

・第2層協議体及び第3層協議体(琴平地区)
買い物支援「こんぴら朝市」の開催　毎月第2、第4日曜日

・商店街の空き店舗を活用した、惣菜屋のオープン

14

さいごに

◎意識していること
- ・困りごとに耳を傾ける
- ・関係性づくり

} 信頼関係

- ・熱は熱いうちに仕掛けていく
- ・バックアップ(後方支援)　･･･主役は住民

15

居場所の「やりたい！」をかなえよう

STEP①

Q1-1　あなたのまちにどんな居場所が欲しいですか？
「こんな居場所があったらいいな」を書き出しましょう

◇住民の立場から

高齢者の活躍の場をつくりたい。

◇SCの立場から

学習支援ができたらいいな。

左記の内容の中から、このワークで考えたい＜次にやってみたいこと＞＜課題に感じていること＞を話し合って記載してください。

子供が宿題・昔遊びのできる居場所をつくって多世代交流！！

1

居場所の「やりたい！」をかなえよう

STEP②

Q2　居場所の実現に向けて、アセットを使ったアイデアを出し合いましょう

・大学生に学習支援ボランティアを依頼
・駄菓子販売のコーナーを食堂に作る
・チラシを回覧で呼び掛ける
・庭でベイゴマ大会
・老人会経由で宣伝
・お手玉づくりワークショップを開く
・見守りの各戸訪問の時に、昔遊びの道具がないか聞いてまわる

3

居場所の「やりたい！」をかなえよう

STEP①

Q1-2　居場所実現のために、活用できそうなアセットを書き出しましょう

人

・昔遊びをしっている高齢者
・いつも食堂に来てくれる大学生

モノ・資金

・各家で眠っている遊具

場

公民館の２階和室

・町会の回覧板

情報・ネットワーク

2

居場所の「やりたい！」をかなえよう

STEP③

Q3　出たアイデアを参考に、実現のために今後取り組むことを考えましょう

・コーディネーター：昔遊びイベントのチラシを作成
　住民Aさん：町会、老人会、PTAにチラシの配布依頼

・住民Aさん：いつも食堂に来る教育学部の学生B君のゼミに、学習支援ボランティアの依頼の呼びかけをお願いする。

・コーディネーター：民生委員Cさんに、昔遊び道具のある家が無いか、訪問時に聞いてもらうよう依頼する。

4

生活支援コーディネーターによる地域の居場所づくり・つながりづくり研修
～アセット発見で居場所の「やりたい!」をかなえるワークショップ～

＜日時＞ 2021 年 12 月 10 日(金) 10:30～15:30
＜場所＞ 鳥取会場 :鳥取県立福祉人材研修センター
＜ハイブリッド形式＞
オンラインは Zoom を使用いたします。

ミーティングID:
https://us02web.zoom.us/j/88106410878?pwd=cWdFWU5TN1lGUENRQ045bTlFM1Azdz09
ミーティング ID: 881 0641 0878
パスコード: 436010

研修内容

【第 1 部】(10:30～12:10)
●ご挨拶・この研修のねらい : 平野 覚治 (全国食支援活動協力会専務理事)
●講 義:「居場所を支える地域のアセット」
清水 洋行 氏 (千葉大学人文科学研究院教授)
●事例報告:「今あるアセットを活かした居場所の取組み」
＜事例 1＞
鳥取市河原町 : 「子どもが中心にいる『ゆるくて居心地のよい小さな空間』を目指す居場所づくり」
(鳥取市第2層 SC/鳥取市社会福祉協議会)西尾宏美さん／「ふれあい食堂」大門康裕さん

＜事例 2＞
大阪府泉南郡岬町 : 「淡輪 6 区 喫茶わくわく」
(岬町第 1 層 SC/岬町社会福祉協議会) 中家裕美さん／わくわく会「喫茶わくわく 代表」吉田文代さん

●解説:「事例報告からの学び」目﨑 智恵子 氏
(高崎市第1層 SC／主管課:高崎市長寿社会課)

【第 2 部】(13:00～15:30)
●ワークショップ:「居場所の『やりたい ！』をかなえる」
ファシリテーター 内藤 佳津雄 氏
●閉会のご挨拶:鳥取県 社会福祉協議会 地域福祉部
部 長 朝倉 香織 氏
●研修の最後に:アンケートへのご協力のお願い

以上

生活支援コーディネーターによる
地域の居場所づくり・つながりづくり研修

『研修のねらい』

令和3年度厚生労働省老人保健健康増進等事業研究委員会　ワーキング部会長
全国食支援活動協力会　専務理事

平野覚治

一般社団法人 全国食支援活動協力会

「生活支援体制整備事業の推進に向けた人材育成に関する調査研究事業」事業概要

○新型コロナウイルスの影響で住民主体の活動が自粛される等、高齢者の心身機能の低下が懸念されているため、住民主体の活動の継続、再開に向けた取組・支援が必要。
また、住民主体の活動においては、「アセット重視」※の考え方の下、既存の様々な社会資源に目を向け、これらをつなげて生活支援の充実を図る等、地域生活を豊かにするという考え方も必要。
※アセット重視・・・「あるもの」（強み、できること）に目を向け、住民自身がもつ強みや、既にある様々な地域資源を活かしてサービスの展開を図る考え方。

○住民主体の活動を推進するためには、何れも市町村とともに重要な役割を担う生活支援コーディネーター（以下、「SC」と言う）による地域に対する支援力の向上を図ることが重要。

○このため、本調査研究事業においては、地域住民の支え合い活動のきっかけとなる「食」を中心として、
・新型コロナウイルス影響下で、様々な工夫をしながら住民主体の居場所活動を実践している事例
・既存の地域資源を有効に活用、つなぐことで、地域に必要とされる居場所に発展している事例
等を収集・分析することにより、SCの新たな気付き、発想の転換等、地域に対する支援力の向上に資する「地域の居場所サポートハンドブック（仮称）」を作成する。

○併せて、SC等を対象とした研修事業を実施し、本ハンドブックの評価・検証等を図ることとする。

生活支援コーディネーターによる地域の居場所づくり・つながりづくり研修

事例報告

✔先進的な事例から居場所の立上げや展開のノウハウを学ぶ
　住民主体の居場所を持続可能なものにするためのSCの活動に注目

ワークショップ

✔ 地域で連携して居場所づくりを進めていくチームをつくる
✔アセット※を活かした、居場所の開発・継続支援を立案する
✔事例からコロナウイルス影響下の居場所活動を学ぶ

※この研修におけるアセット重視の考え方とは、地域の「あるもの」（強み、できること）に目を向け、住民自身の強みや、既にある様々な地域資源を活かしてサービスの展開を図る考え方です。
→このあと、清水先生より講義いただきます。

他地域の参加者から柔軟な発想や多様なアイデアをもらいましょう

コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査

実施主体
- 一般社団法人全国食支援活動協力会
- 千葉大学人文科学研究院　清水洋行研究室

アンケートの背景
- 各地の食支援活動が、昨年から続くコロナ禍において、活動方法の見直しや利用者・担い手との関わり方などの様々な影響を受けている。
- 一方で、「食」のもつ意義が改めて見直されるとともに、全国の企業から「食支援」にかかわる活動への食材・食品の寄付が増えている。

アンケートの目的
- 食支援活動の現状と意義・課題の把握
- 寄付された食材・食品を各地域の活動に届ける食材支援のあり方を検討する資料とする

コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査

アンケートの対象・回答活動の概略

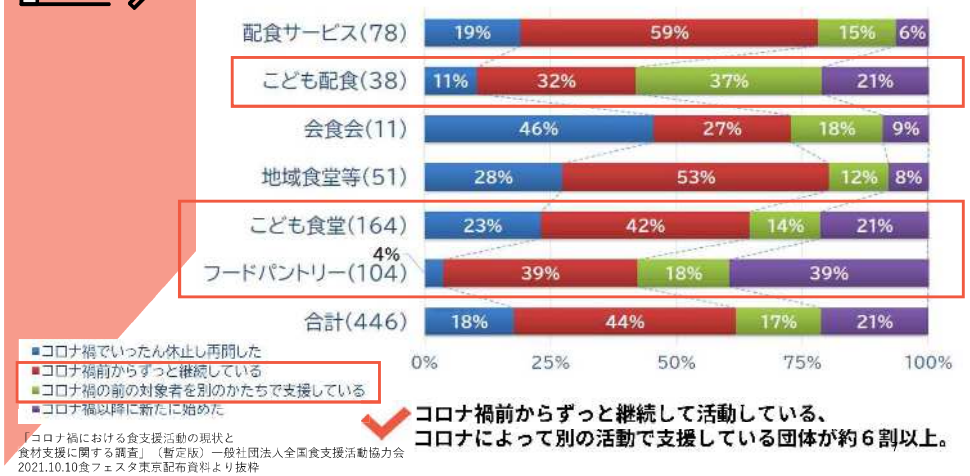
活動の種類	①活動中	②活動休止中	合計
配食サービス	84	3	87
こども配食	39	1	40
会食会	11	9	20
地域食堂・多世代食堂、コミュニティカフェ	56	28	84
こども食堂	178	37	215
フードパントリー	109	2	111
不明・無回答	3	1	4
合計	480	81	561

● 活動の状況：
①2021年7月時点で実施中の食支援活動
②2021年7月時点で休止中の食支援活動

出典：「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会 2021.10.10食フェスタ東京配布資料

5

活動の種類別にみた活動経緯【実施中の活動】



コロナ禍前からずっと継続して活動している、
コロナによって別の活動で支援している団体が約６割以上。

「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会 2021.10.10食フェスタ東京配布資料より抜粋

コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査

アンケートの対象・回答活動の概略

回答活動の概略　活動の所在地
【10活動以上を抜粋】

都道府県名	活動数	都道府県名	活動数
東京都	51	福島県	17
神奈川県	48	大分県	16
埼玉県	47	北海道	15
大阪府	45	宮城県	15
愛知県	34	熊本県	13
福岡県	29	香川県	13
千葉県	26	鹿児島県	10

出典：「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会 2021.10.10食フェスタ東京配布資料

6

新型コロナ感染に伴う休止中に取り組んだこと

	利用者に対して		ボランティアに対して	
	実施中の活動が休止期間に取り組んだ（78活動）	休止中の活動が取り組んだ（78活動）	実施中の活動が休止期間に取り組んだ（76活動）	休止中の活動が取り組んだ（74活動）
個別に安否や状況を確認した	33.3	30.8	26.3	35.1
アンケート調査で状況を確認した	3.8	5.1	0.0	0.0
利用者に情報発信を続けた	42.3	37.2	39.5	32.4
利用者宅に訪問した	10.3	11.5	1.3	0.0
食事なしで交流会を開催した	11.5	12.8	14.5	8.1
オンラインで交流会を開催した	5.1	2.6	5.3	5.4
その他	15.4	42.3	10.5	25.7
取り組みなし	32.1	16.7	23.1	20.3

「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会 2021.10.10食フェスタ東京配布資料より抜粋

8

休止中に利用者に対して行った取り組み
- 情報発信し、希望者へ食材の配付
- 誰でも気軽にいつでも立ち寄れる居場所作りが、逆に個人宅や来所者の連絡先をいっさい不問で運営していたため、近隣の顔見知りは連絡がとれているが、住所がわからない来所者は現在も連絡がとれていない。会報等を通じて絵手紙や俳句、川柳などを募集。サロン(カフェ)の外に掲示している。
- 施設内の一室を、地域住民の交流スペースとして開放した。手指消毒等の実施、2時間までの利用制限あり。
- Facebookでの現状報告　限られた人数でのオレンジカフェ、ケアラーズカフェ
- 昨年の6月から配食を実施。配食ボランティアが個々に手渡しをし、安否状況を確認。社協(ゆうあい)の方も毎月来られ、情報誌・プレゼント等を利用者に配っていただいています
- 食材配布に切り替えた

休止中に利用者に対して行った取り組み
- 会食会から配食に変更
- 食事の提供をしていない曜日のサロンは、活動を続けていた。
- 食堂は休止だが配食は実施した(高齢者や障害者は食を休止することはできない)
- つながりが切れない様に声かけ、お手紙ポスティングを欠かさない

ボランティアに対する活動の効果（３つまで選択）
【実施中の活動。ボランティアがいる活動のみ】

	望ましい生活リズムや習慣が身につく	学びの機会になる	食育の機会になる	食事を楽しむことができる	栄養を摂ることができる	他の人と交流できる	心のよりどころとなる	出番や役割を得られる	経済的な支援になる	困りごとを相談・発信できる	地域や社会の情報を得られる
配食サービス(48)	25.0%	29.2%	4.2%	2.1%	0.0%	87.5%	31.3%	60.4%	6.3%	12.5%	22.9%
こども配食(28)	0.0%	14.3%	0.0%	0.0%	0.0%	85.7%	39.3%	71.4%	7.1%	10.7%	35.7%
会食会(8)	12.5%	25.0%	12.5%	12.5%	0.0%	50.0%	37.5%	75.0%	12.5%	25.0%	37.5%
地域食堂等(36)	19.4%	13.9%	2.8%	16.7%	5.6%	72.2%	41.7%	83.3%	0.0%	5.6%	22.2%
こども食堂(121)	3.3%	24.8%	5.0%	8.3%	5.0%	74.4%	38.0%	72.7%	4.1%	5.8%	29.8%
フードパントリー(67)	0.0%	20.9%	3.0%	1.5%	0.0%	80.6%	28.4%	79.1%	1.5%	6.0%	44.8%
合計(308活動)	7.8%	22.4%	3.9%	6.2%	2.6%	77.9%	35.4%	73.4%	3.9%	7.8%	31.8%

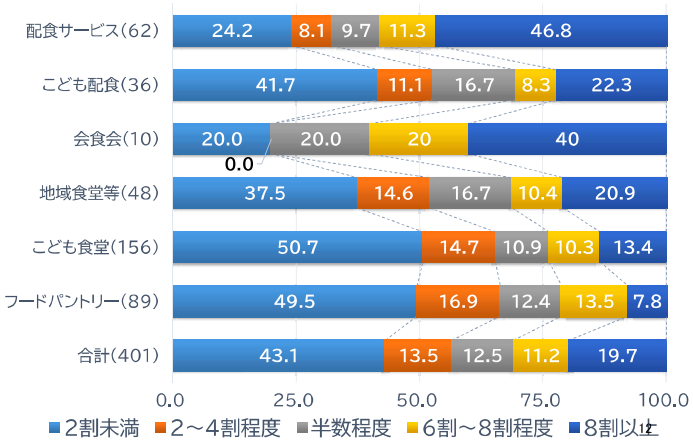
「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会
2021.10.10食フェスタ東京配布資料より抜粋

利用者に対する活動の効果（３つまで選択）
【実施中の活動】

	望ましい生活リズムや習慣が身につく	学びの機会になる	食育の機会になる	食事を楽しむことができる	栄養を摂ることができる	他の人と交流できる	心のよりどころとなる	出番や役割を得られる	経済的な支援になる	困りごとを相談・発信できる	地域や社会の情報を得られる
配食サービス(68)	30.9%	0.0%	13.2%	47.1%	73.5%	36.8%	17.6%	1.5%	19.1%	19.1%	5.9%
こども配食(25)	16.0%	0.0%	16.0%	24.0%	44.0%	36.0%	40.0%	4.0%	64.0%	36.0%	8.3%
会食会(8)	0.0%	12.5%	25.0%	75.0%	37.5%	50.0%	37.5%	0.0%	12.5%	25.0%	25.0%
地域食堂等(38)	7.9%	7.9%	10.5%	60.5%	26.3%	55.3%	34.2%	13.2%	26.3%	26.3%	2.6%
こども食堂(117)	11.1%	15.4%	22.2%	51.3%	30.8%	41.0%	35.0%	2.6%	31.6%	21.4%	7.7%
フードパントリー(78)	2.6%	5.1%	6.4%	10.3%	43.6%	20.5%	39.7%	1.3%	80.8%	48.7%	10.3%
合計(334活動)	12.9%	7.8%	15.0%	40.4%	43.1%	36.8%	32.9%	3.3%	41.9%	29.0%	7.8%

「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会
2021.10.10食フェスタ東京配布資料より抜粋

ボランティアに占める65歳の人の割合
【実施中の活動で、ボランティアがいる活動のみ】



活動種類別・寄付してほしい食材・食品【実施中の活動】

	なし	米	肉、魚	野菜、果物	冷蔵・冷凍の総菜・食材・食品	レトル食品、インスタント食品	調味料	菓子類	飲料	お弁当	その他
配食サービス(77)	21%	33%	9%	7%	0%	7%	16%	3%	4%	1%	1%
こども配食(36)	6%	22%	47%	6%	3%	6%	0%	0%	3%	8%	0%
会食会(11)	27%	36%	18%	0%	0%	0%	9%	9%	0%	0%	0%
地域食堂等(50)	10%	24%	28%	10%	8%	2%	4%	4%	6%	2%	2%
こども食堂(165)	2%	27%	35%	4%	7%	10%	1%	6%	2%	2%	3%
フードパントリー(99)	3%	39%	13%	3%	5%	25%	3%	4%	1%	1%	2%
合計(438)	8%	30%	25%	5%	5%	11%	5%	4%	3%	2%	2%

「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会
2021.10.10食フェスタ東京配布資料より抜粋

活動種類別の「行政・社協からの助成・補助・委託」の状況【実施中の活動】（複数回答）

	受けていない	単年度のものを受けている	3年以内の期限付きのものを受けている	4年以上の期限付きのものを受けている	5年以上継続予定／期限が決まっていないものを受けている
配食サービス(79)	26.6%	46.8%	2.5%	1.3%	25.3%
こども配食(38)	36.8%	42.1%	5.3%		18.4%
会食会(11)	18.2%	54.5%			27.3%
地域食堂等(53)	41.5%	37.7%		7.5%	17.0%
こども食堂(171)	40.4%	49.7%	2.9%		10.5%
フードパントリー(108)	55.6%	40.7%	2.8%	0.9%	4.6%
合計(460)	40.9%	45.2%	2.6%	1.3%	13.5%

「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会
2021.10.10食フェスタ東京配布資料より抜粋

食材・食品の寄付を受けるうえでの困りごと【実施中の活動】

	寄付を受ける必要はない	困りごとはない	量が足りない	量が多すぎる	必要な食材・食品の寄付が(少ない)	保管スペースがない(足りない)	冷蔵・冷凍設備がない(容量不足)	受け取り場所が遠い	運搬手段がない	寄付に関する情報が入手できない	その他
配食サービス(76)	8%	17%	8%	7%	25%	30%	33%	12%	8%	28%	9%
こども配食(36)		13%	15%	8%	23%	49%	49%	21%	10%	13%	10%
会食会(11)	18%	36%			46%	36%	18%	9%	9%	46%	
地域食堂等(54)	4%	15%	17%	2%	28%	32%	32%	15%	17%	28%	20%
こども食堂(176)		16%	14%	2%	23%	52%	55%	16%	14%	18%	12%
フードパントリー(106)		4%	34%	3%	26%	52%	57%	19%	17%	17%	16%
合計(462)	2%	13%	18%	4%	25%	45%	47%	16%	14%	21%	13%

「コロナ禍における食支援活動の現状と食材支援に関する調査」（暫定版）一般社団法人全国食支援活動協力会
2021.10.10食フェスタ東京配布資料より抜粋

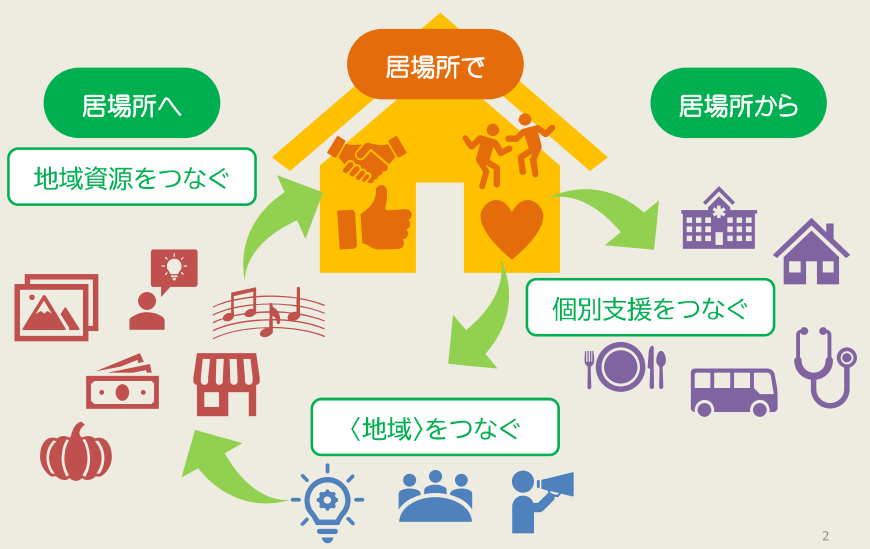
生活支援コーディネーターによる
地域の居場所づくり・つながりづくり研修
～アセットの発見で居場所の「やりたい！」をかなえる

居場所を育てるための支援とは

2021年12月10日(金)
清水　洋行
(千葉大学 人文科学研究院)

1

居場所の機能とSCの役割



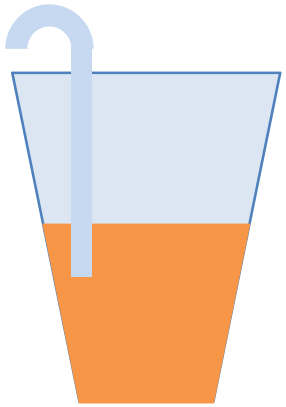
2

ニーズ重視とアセット重視(1)

	ニーズ重視	アセット重視
着眼点	ないもの	あるもの
対応の仕方	不足を補う	強みを伸ばす
住民との関係	住民に向けて	住民とともに
住民参加の度合い	低い	高い
時間幅	短い	長い
主な対象	個人	コミュニティ
評価の重点	客観性	主観性
基本的な問い	「なぜ病気になるのか?」	「なぜ健康になるのか?」

(資料)一般社団法人 全国食支援活動協力会編集・発行『住民のやる気を支える支援の手引き』(2019年)p.49

ニーズ重視とアセット重視(2)



「ないもの」に着目

- 病気
- 困りごと

住民へ
サービス・支援
を提供する

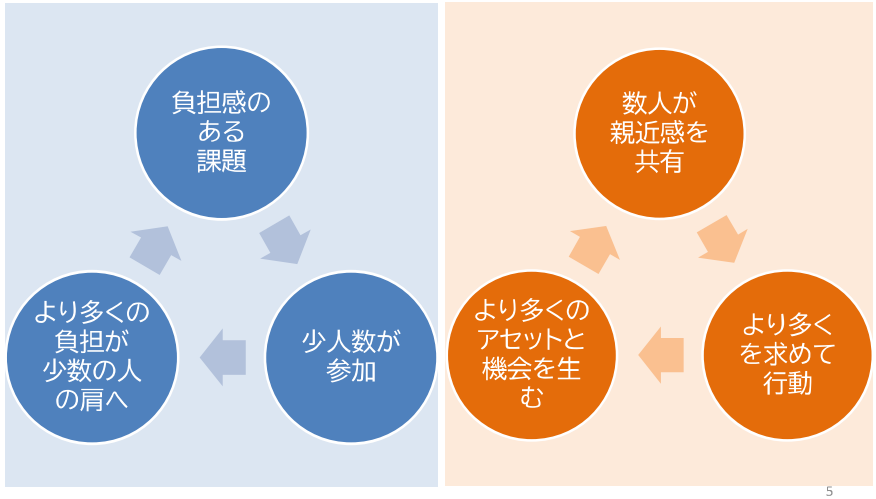
「あるもの」に着目

- 「やりたい」、「ほっとけない」
- 得意(趣味、仕事から)
- 仲間、人脈
- 建物、畑、車…
- お金

住民とともに
サービス・支援
(活動)を創る

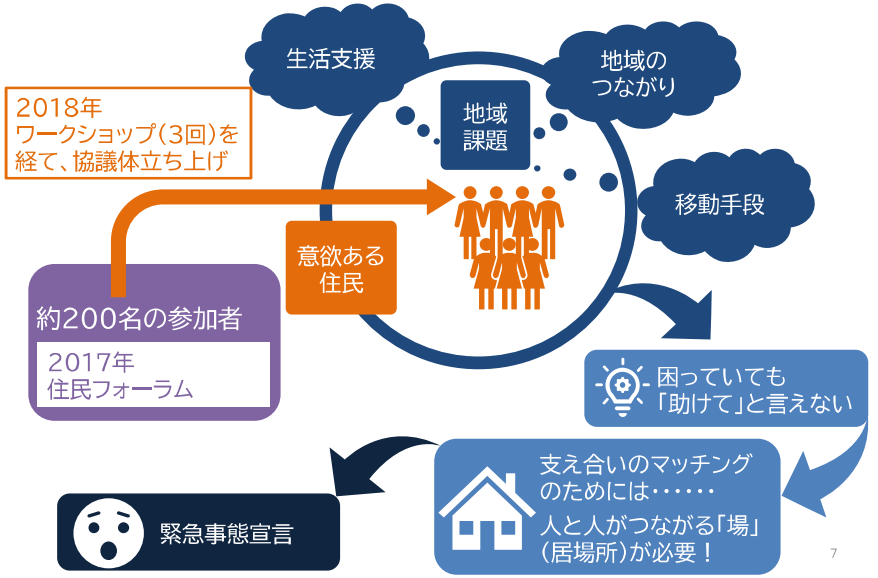
4

担い手をめぐる〈ネガティブ・サイクル〉と〈ポジティブ・サイクル〉



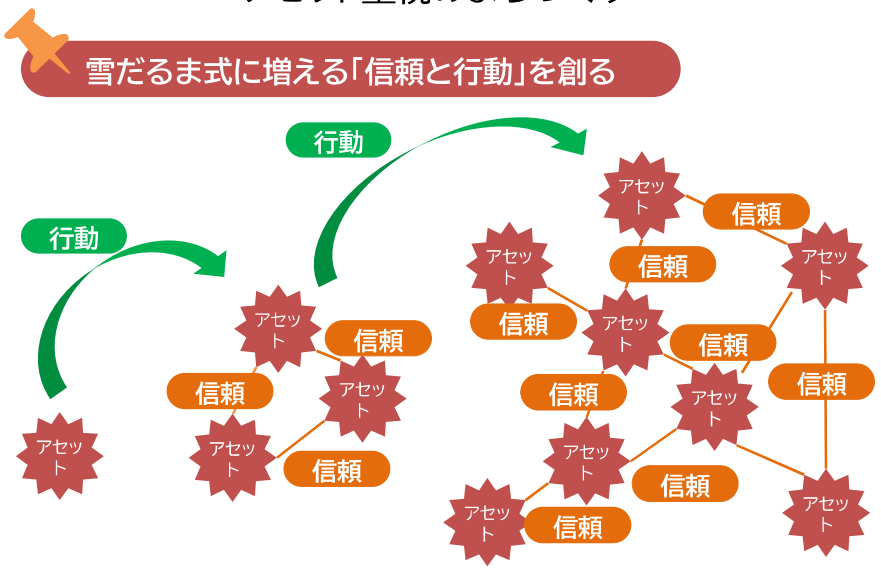
5

畑活プロジェクト(奈良県葛城市)を事例に(1)

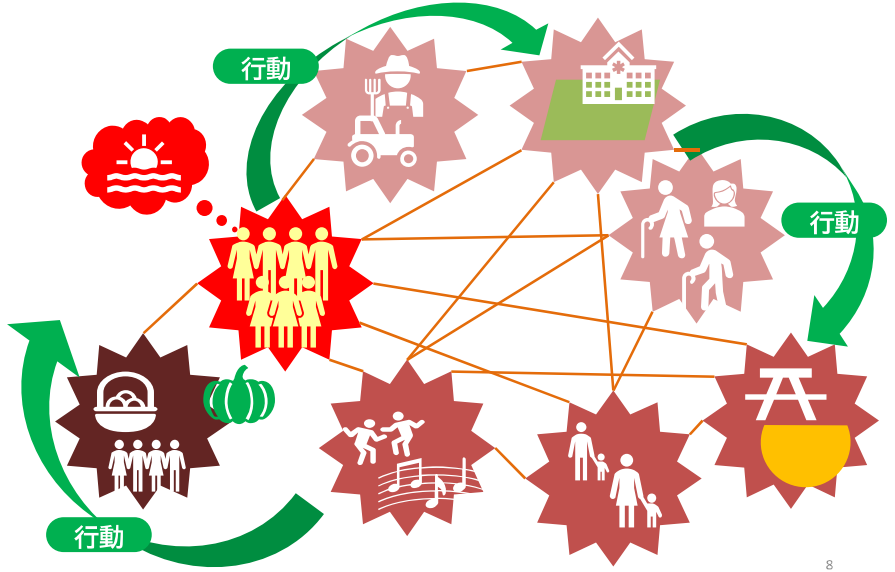


7

アセット重視のまちづくり



畑活プロジェクト(奈良県葛城市)を事例に(2)



8

畑活プロジェクトにみるアセット(1)

- 最初のメンバーのアセット
  - 意欲
  - 住民であること(地域の生活を知っている。地域のつながりがある)
  - 得意
  - 他の活動に参加
  - メンバー同士のつながりと親近感
- ディサービスセンター
  - 畑
  - 利用者さんたち(＋潜在していたスキル・経験)
  - 職員さんたち
- 民生委員・児童委員のAさん
  - 畑のご近所さん
  - トラクター(＋操作スキル)

畑活プロジェクトにみるアセット(2)

- 神社
  - 広場(空間)
  - まちのシンボル(歴史・記憶)
- 子育て中の親子
- 朝にラジオ体操をしている子どもたち
- 市
  - 広報紙ほか
- ローカルテレビ
- 配食グループ
  - ボランティアさんたち
  - 利用者さんたち

畑活プロジェクトにみるアセット(3)

- 生活支援コーディネーターのBさん
  - 社会福祉協議会の活動等を通じた地域でのつながり
  - 市とのつながり
  - スキル・経験
- 第一層協議体
  - 区長会、民生委員・児童委員連合会、寿連合会、ボランティア連絡会、県農協、社会福祉協議会、市保健福祉部、市長寿福祉課
  - 地域包括支援センター
  - C地区協議体のメンバーたち

公的機関の役割

① 健康の向上に資するコミュニティのアセットを明らかにし、わかりやすく示す。

② 住民を、サービスの受け手ではなく、健康・福祉の共同生産者とみなす。

③ 住民が何に取り組んでおり、何を大切にしているかを知ることから始める。住民「に向けて」ではなく、住民「とともに」活動する。

④ 個人およびコミュニティのアセットと強みを明らかにし、それらに重点を置きながら、人生における持続可能な改善を行うようサポートする。

⑤ 困難から立ち直る力、関係性、知識、誇りを向上することにより、住民がより良い方向への変化を起こせるようにサポートする。

⑥ 相互にサポートしあうネットワークづくり、友人関係づくりをサポートする。こうしたネットワークがあることで、住民は自らの環境をよりよく理解し、自分の生活をコントロールできるようになる。

⑦ その地域でうまくいっていることの価値を認める。

⑧ 健康・福祉の向上に役立っている潜在的な要因を明らかにする。

⑨ コミュニティに権限を委譲し、コミュニティが、自らの将来を自分たちで決め、サービス、資金、建物といった具体的な資源を創出できるようにする。

(資料)一般社団法人 全国食支援活動協力会編集・発行『住民のやる気を支える支援の手引き』(2019年)p.50

参考

- 一般社団法人 全国食支援活動協力会編集・発行『住民のやる気を支える支援の手引き』(2019年)
- 一般社団法人 全国食支援活動協力会編集・発行『ここがあることで地域が豊かになる住民主体の居場所ガイドブック』(2021年)
- Kretzmann, John P. and McKnight, John. Building Communities from the Inside Out: A Path toward Finding and Mobilizing a Community's Asset.(1993)
- Snow, Luther K. The Power of Asset Mapping: How your Congregation Can Act on Its Gifts. (2004)

事例報告①
鳥取県鳥取市河原町

子どもが中心にいる「ゆるくて居心地のよい小さな空間」を目指す居場所づくり

「ふれあい食堂」
大門　康裕
鳥取市社会福祉協議会　鳥取市第2層SC
西尾 1宏美

令和３年１２月１０日

活用できそうだと思ったアセット

1
- 人権福祉センター
- 鳥取市社会福祉協議会
- 民生児童委員
- 人権擁護委員

2
- 熱意ある住民
- 児童館厚生員
- 保育園園長
- 小学校校長
- 中学校校長
- 手話通訳者

3
- 食品メーカー
- 道の駅
- NPO法人
- 地域の商店
- 福祉施設

4
- 鳥取市等の補助金
- 鳥取市地域食堂ネットワーク
- 河原町総合支所
- ユリイカ（大学生ボランティア団体）

資料-37

当初やりたかったこと

1. 地域食堂（子ども食堂）、誰でも参加
2. 多世代交流の地域の居場所であり、住民の通いの場にしたい
3. プラットフォームを活用し、孤立のない地域にしたい
4. 相談支援をしたい

食堂の立ち上げ時の考え方

- 無理をしない。

　食堂に対して思いが強すぎると、考え方や思い、行動が大きくなってしまう、そのことが負担になったり挫折したりする。（例えば参加者、開催回数、食事の内容などです）

- ボランティア団体を結成する。

　ボランティアの参加者が自主的に行動し、主力になることで楽しさややる気がでて、長く続けていける。また責任感も生まれる。

- 他の機関（福祉、教育など）との関係を持ち、連携をする。

　食堂参加者やメンバー、ボランティア参加者の困りごとの掘り起こしをし相談機能の充実を図る。また市社協、民生児童委員、保育園、小中学校（校長先生）、などと連携する。

～やっぱり一緒に食べたいね。コロナ禍の子ども食堂～

5

「ふれあい食堂」立上げ経緯

- 平成30年6月　地域食堂打合会を開催
- 平成31年4月　地域食堂開催進展なし
- 令和元年5月　地域食堂の試験的実施決定
- 令和元年7月～9月　河原人権福祉センターで実施
  調理ボランティア7名（児童館厚生員、手話通訳者、主婦）
- 令和元年10月～12月　河原町コミュニティーセンターで実施
  調理ボランティア11名（市社協SC、河原町社協、地域包括、民生児童委員、人権擁護委員、主婦）

注意：令和元年は平成31年5月から

6

「河原共助会」の発足

試験的実施から見えてきた問題点や課題をなんとかしたい。

- 相談機関の参加で参加者の困りごと解決
  - ○鳥取市社会福祉協議会地域支え合い推進員○児童館厚生員
  - ○鳥取市社会福祉協議会南部地域包括支援センター○人権擁護委員
  - ○鳥取市社会福祉協議会河原総合福祉センター○民生児童委員
- ボランティア活動で充実感を味わう。
- 共に支え合う人間関係を築ける。
- 食堂に対する思いやりや、やりがいが持て、お互いが依存し合える。

河原共助会発足決定！！

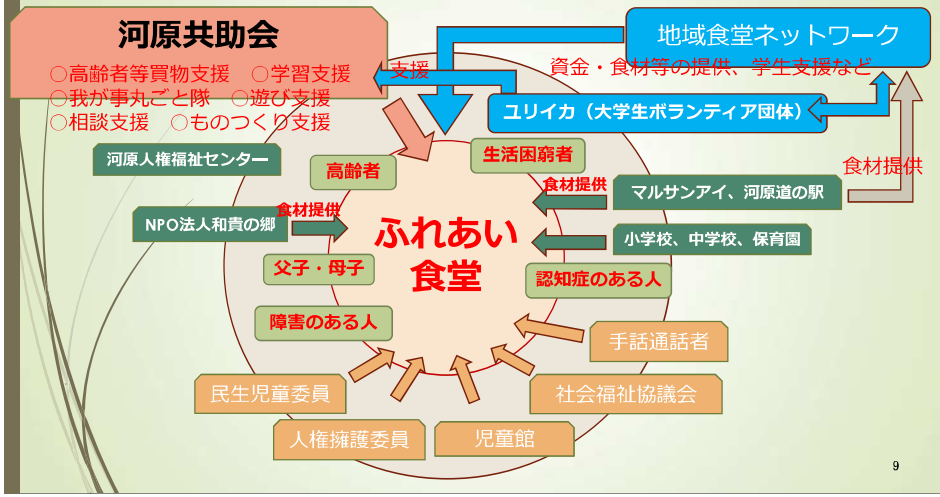
7

「河原共助会」スタート

- 運営は「河原共助会」が主体
  - 「ふれあい食堂」は誰でも参加
  - 「ふれあい食堂」は子どもが中心にいる「ゆるくて居心地のよい小さな空間」
- 令和2年6月6日18名で「河原共助会」を発足
- 令和2年9月26日「ふれあい食堂」をスタート

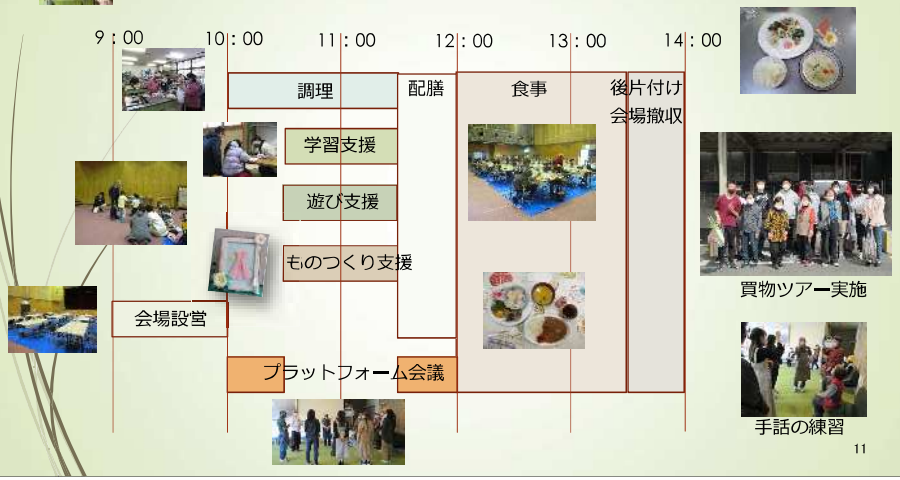
8

「ふれあい食堂」のネットワーク



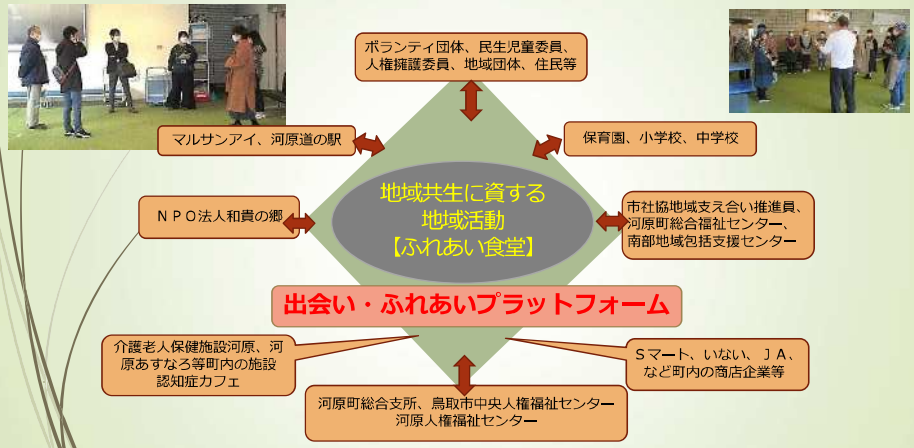
9

「ふれあい食堂」のタイムスケジュール



11

出会い・ふれあいプラットフォーム



10

「ふれあい食堂」で役割をもつ喜び

多世代が集まる居場所であり、
多世代の交流の場であり、問題解決の場。

役割をもって参加！！

“感謝されたい” “喜ばれたい” “必要とされたい”
“自信につながる” “生きがいややりがいを感じる”

役割が楽しい！！

「ふれあい食堂」の今後は！

出会い・ふれあいプラットフォーム

地域の活性化
地域福祉の活動

企画中

☆中学生の職場体験
☆お医者さんの処方箋
☆河原町の歴史

事例報告①
鳥取県鳥取市河原町

令和３年１２月１０日

子どもが中心にいる「ゆるくて居心地のよい小さな空間」を目指す居場所づくり

ご清聴ありがとうございました。

「ふれあい食堂」
大　門　　康　裕
鳥取市社会福祉協議会　鳥取市第２層SC
西　尾　　宏　美

終わりに

「何もできなくてもいい、
そこに行くだけで誰かの役に立つことがある」

参加者が役割を持った「ふれあい食堂」

「今は行けなくても、いつでも行くことができる」場所

地域の常夜燈であり、
地域の灯台であり続けたい。！！

資料-41

地域課題/個別ケースを居場所へつなげる

☑ 「ひとりで寂しいだが、、」という高齢者に対して食堂の紹介・参加の声掛けを促す。

☑ 元気高齢者には食堂のボランティアへの参加を促す。

SCの役割＝地域で孤立している高齢者を地域社会の一員として参画できるような環境を整えて、関係者や地域住民の方の協力をいただきながら後押しを行うこと。

地域の機関を居場所へつなげる

☑ 近くで開催している認知症カフェの参加者にも声をかけ、一緒に食事をするという取り組みができるのでは？と提案。

→SCとして認知症カフェとの「つなぎ」を行う。

＊認知症カフェの参加者には、一緒に食事をするだけではなく、ボランティアの方々と一緒に調理や配膳など出来る範囲で手伝ってもらうようにお願い。（役割りを持ってもらう）

”つなぎ役”としてのSCになるために

「知ること」
地域を「知る」、地域活動を「知る」、地域の人材を「知る」
知ることが「つなぎ役」への第一歩。

「人脈作り」
人と人との信頼関係があってこそ「つなぐ」ことが出来る。

「気付くこと」
気付きの視点が増えていけば「つなぎ役」としての視野が広がる。

今後は、、
今年１２月、河原町で協議体（第2層協議体）の立上げを行う。
各関係機関の調整役、「つなぎ役」として個別事例の検討等を行っていく。

河原町地域包括ケアシステム推進連絡会（第２層協議体）

設立	令和3年12月20日（月）〔準備会：令和3年10月28日（木）〕
目的	地域包括ケアシステムの構築、地域共生社会の実現に向けて、町内関係機関（相談機関）等を参集して、横のつながりの強化（縦割り解消）を行い、ネットワーク作り、情報共有等を図りながら、地域住民の取り組みとの連携、融合、協働作業を視野に入れて今後の河原町の地域づくりを進めていく話し合いの場となるように目指していきます。 なお人権福祉センター参画のもと、必要に応じて生活困窮者自立支援法第９条に基づいた支援会議の機能を有して開催する場合があります。
構成組織	○人権福祉センター(所長)　○総合支所市民福祉課(課長・保健師) ○南部地域包括支援センター(所長) ○第1層協議体関係者(必要に応じて) 〔事務局〕市社協河原町総合福祉センター 地域支え合い推進員(第２層ＳＣ)
開催	2ヶ月に1回（原則：偶数月第３金曜日）　※必要に応じて臨時開催有
協議内容	1.生活困窮者に対する支援を図るために必要な情報の交換及び支援体制に関する検討 2.地域での暮らしに関する課題で緊急又は重大なものを検討 3.鳥取市全域および自治会、集落等との連携
その他	将来的には地域住民の参画を目指していきます。

事例報告②
大阪府泉南郡岬町

淡輪６区
喫茶わくわく

わくわく会「喫茶わくわく」
吉田 文代 氏
社会福祉法人岬町社会福祉協議会 生活支援コーディネーター
中家 裕美 氏

当初やりたかったこと

1 自分が住んでいる淡輪６区がこれからも安心して暮らせる地域であるためにどうにかしたい！

2 コロナ禍でも、「喫茶わくわく」はみんなの居場所だから開け続ける！

3 SCになったのだから、泣いても失敗してもいい、住民さんを笑顔にしたい、生きがいになることや楽しい活動、人と人をつなげたい！

→

活用できそうだと思ったアセット

1 接骨院前の広場

2 道の駅

3 赤提灯
どないしたらええん会

4 岬町の助成
制定：令和３年５月２５日

多奈川地区福祉委員会

※「喫茶わくわく」
相手に寄り添う心遣いがあたたかい居場所になる

・心がけていること

①コロナ対策を徹底的にする。

②担い手も来客者も自己責任で参加。

・当たり前にしていること

スタッフ同士や来客者に対して、やさしい言葉と心遣い。

楽しい場、生きがい。

・力を入れていること

主体的にニーズを把握し、足らない支援を創出。

新型コロナウイルス感染防止対策の強化

「居場所」の重要性
行くところ、行けるところがある大切さ！

4

5

淡輪6区わくわく会　設立

H31.1.15　地域の住民による組織化

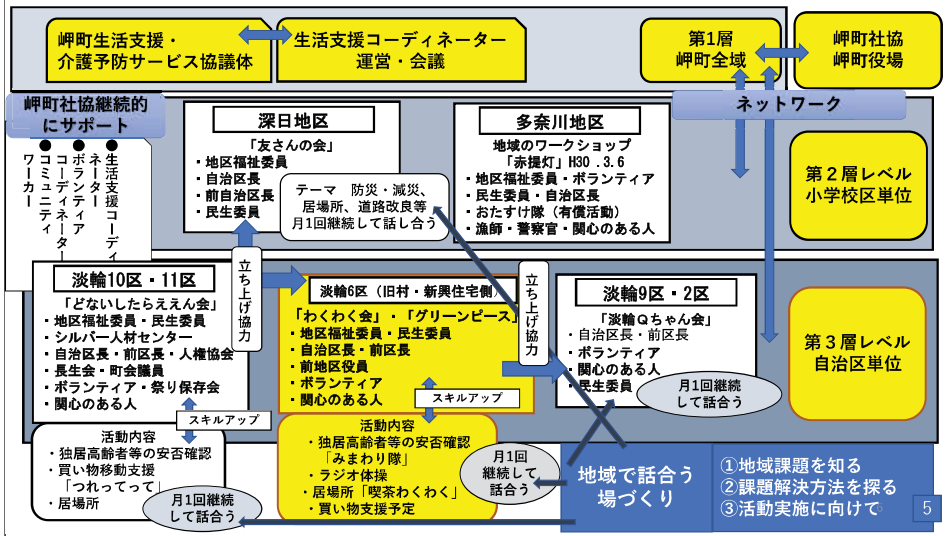
- 現在会員：14名（令和3年10月現在）会員会費：1,000円／年
- 活動目的：地域福祉の向上を図ることを目的とし、高齢者等支援、地域の居場所づくり、その他必要な活動を行う

☆活動内容
① ラジオ体操
② みまわり隊（マップ作成）
※喫茶わくわく（居場所）
③一緒に行こう会（買い物支援）

淡輪６区地域マップ作成

6

7



6

わくわく会活動内容

①ラジオ体操

- 平成３１年４月開始～令和元年１１月（２９回延べ２９８名）
- 期　間：４月～１１月（冬季１２月～３月休み）
- 開催日：毎週月曜日午前７時３０分～
- 雨天中止

②みまわり隊

- みまわり隊について事前訪問確認（民生委員訪問）
- 第１回みまわり隊訪問（２～３名ペア）令和元年１１月開始～
- みまわり隊１班～５班（各班１０名程度みまわり訪問）１回/月
- みまわり隊訪問から困りごとなどのニーズを収集する

7

8

わくわく会活動内容

③一緒に行こう会（買い物支援）

◦ みまわり隊（見守り）活動から買い物や外出することに困難を感じる方々のニーズを把握
「道の駅」に新鮮な魚を買いに行きたいとの要望があり⇒わくわく会メンバー見学
⇒ドライバー６名「道の駅みさき　夢灯台」見学へ
⇒６名福祉有償運送講習会参加（R2.11.16）ドライバー育成（福祉有償運送講習修了者）
◦ 買い物支援（有償活動令和３年７月～開始）令和３年１１月現在実利用者数 １０名
◦ 一緒に行こう会のリーダーが個人所有の車両提供
◦ なんでも揃う大型スーパー「トライアル」（淡輪地区望海坂）も検討中

道の駅みさき　夢灯台

「道の駅みさき」見学の様子

買い物支援の様子

8

サービスづくりではなく地域づくり

9

他地区で立ちあがった団体と情報交換の場

10

さいごに

- 住民の方が主役になるために、前に出すぎず、引き際を見極める
- 多様な価値観に柔軟に対応し、揺るがない柱をつくる
- わからないことは、素直に住民の方やいろんな方に教えてもらう
- 住民の方が空いている曜日、時間に合わせ出向き、話し合いの場をどんどんもつ（岬町社協本部の理解が、あってこそ動けてます。）
- 失敗しても恐れず言い訳をしない、いつも謙虚に、体あたり！

ありがとうございました！

居場所の「やりたい！」をかなえよう

STEP①

Q1-1　あなたのまちにどんな居場所が欲しいですか？
「こんな居場所があったらいいな」を書き出しましょう

◇住民の立場から

高齢者の活躍の場をつくりたい。

◇SCの立場から

学習支援ができたらいいな。

左記の内容の中から、このワークで考えたい＜次にやってみたいこと＞＜課題に感じていること＞を話し合って記載してください。

子供が宿題・昔遊びのできる居場所をつくって多世代交流！！

1

居場所の「やりたい！」をかなえよう

STEP②

Q2　居場所の実現に向けて、アセットを使ったアイデアを出し合いましょう

・大学生に学習支援ボランティアを依頼
・駄菓子販売のコーナーを食堂に作る
・チラシを回覧で呼び掛ける
・庭でベイゴマ大会
・老人会経由で宣伝
・お手玉づくりワークショップを開く
・見守りの各戸訪問の時に、昔遊びの道具がないか聞いてまわる

3

居場所の「やりたい！」をかなえよう

STEP①

Q1-2　居場所実現のために、活用できそうなアセットを書き出しましょう

人

・昔遊びをしっている高齢者
・いつも食堂に来てくれる大学生

モノ・資金

・各家で眠っている遊具

場

公民館の２階和室

・町会の回覧板

情報・ネットワーク

2

居場所の「やりたい！」をかなえよう

STEP③

Q3　出たアイデアを参考に、実現のために今後取り組むことを考えましょう

・コーディネーター：昔遊びイベントのチラシを作成
　住民Aさん：町会、老人会、PTAにチラシの配布依頼

・住民Aさん：いつも食堂に来る教育学部の学生B君のゼミに、学習支援ボランティアの依頼の呼びかけをお願いする。

・コーディネーター：民生委員Cさんに、昔遊び道具のある家が無いか、訪問時に聞いてもらうよう依頼する。

4

生活支援コーディネーターによる地域の居場所づくり・つながりづくり研修
～アセット発見で居場所の「やりたい!」をかなえるワークショップ～

＜日時＞ 2022 年 1 月 21 日(金) 13：00～17：00 ※開場 12：45
＜場所＞ アットビジネスセンターサテライト 新宿南口駅前
渋谷区代々木 2-8-3 新宿 GS ビル 8 階

研修内容

【第 1 部】13：00～ 14：30

●この研修のねらい： 内藤佳津雄 氏 （日本大学文理学部教授）

●講 義：「居場所を支える地域のアセット」 清水洋行 氏 （千葉大学人文科学研究院教授）

●事例報告：「今あるアセットを活かした居場所の取組み」
＜事例 1＞
愛知県知多市 ： 「古民家を活かした憩いの場」
知多中学校区第 2 層 SC/特定非営利活動法人あゆみ 市川美千代さん／「岡田なごやかサロン」勝﨑芳雄さん
＜事例 2＞14：00～14：20
東京都板橋区 ： 「人と人をつなぐ 人と地域をつなぐ 架け橋になる居場所づくり」
板橋区第 1 層 SC /板橋区社会福祉協議会 小林霧華さん／NPO 法人ゆずり葉 齊藤敦子さん

●解説：「事例報告からの学び」荒井崇宏 氏（稲城市高齢福祉課高齢福祉係）

【第 2 部】14：40～17：00

●ワークショップ：「居場所の『やりたい ！』をかなえる」
ファシリテーター 内藤佳津雄 氏

以上

生活支援コーディネーターによる
地域の居場所づくり・つながりづくり研修

『研修のねらい』

一般社団法人 全国食支援活動協力会

「生活支援体制整備事業の推進に向けた人材育成に関する調査研究事業」事業概要

○新型コロナウイルスの影響で住民主体の活動が自粛される等、高齢者の心身機能の低下が懸念されているため、住民主体の活動の継続、再開に向けた取組・支援が必要。
また、住民主体の活動においては、「アセット重視」※の考え方の下、既存の様々な社会資源に目を向け、これらをつなげて生活支援の充実を図る等、地域生活を豊かにするという考え方も必要。
※アセット重視・・・「あるもの」（強み、できること）に目を向け、住民自身がもつ強みや、既にある様々な地域資源を活かしてサービスの展開を図る考え方。

○住民主体の活動を推進するためには、何れも市町村とともに重要な役割を担う生活支援コーディネーター（以下、「SC」と言う）による地域に対する支援力の向上を図ることが重要。

○このため、本調査研究事業においては、地域住民の支え合い活動のきっかけとなる「食」を中心として、
・新型コロナウイルス影響下で、様々な工夫をしながら住民主体の居場所活動を実践している事例
・既存の地域資源を有効に活用、つなぐことで、地域に必要とされる居場所に発展している事例
等を収集・分析することにより、SCの新たな気付き、発想の転換等、地域に対する支援力の向上に資する「地域の居場所サポートハンドブック（仮称）」を作成する。

○併せて、SC等を対象とした研修事業を実施し、本ハンドブックの評価・検証等を図ることとする。

生活支援コーディネーターによる地域の居場所づくり・つながりづくり研修

事例報告

✔先進的な事例から居場所の立上げや展開のノウハウを学ぶ
住民主体の居場所を持続可能なものにするためのSCの活動に注目

ワークショップ

✔ 地域で連携して居場所づくりを進めていくチームをつくる
✔アセット※を活かした、居場所の開発・継続支援を立案する
✔事例からコロナウイルス影響下の居場所活動を学ぶ

※この研修におけるアセット重視の考え方とは、地域の「あるもの」（強み、できること）に目を向け、住民自身の強みや、既にある様々な地域資源を活かしてサービスの展開を図る考え方です。
→このあと、清水先生より講義いただきます。

他地域の参加者から柔軟な発想や多様なアイデアをもらいましょう

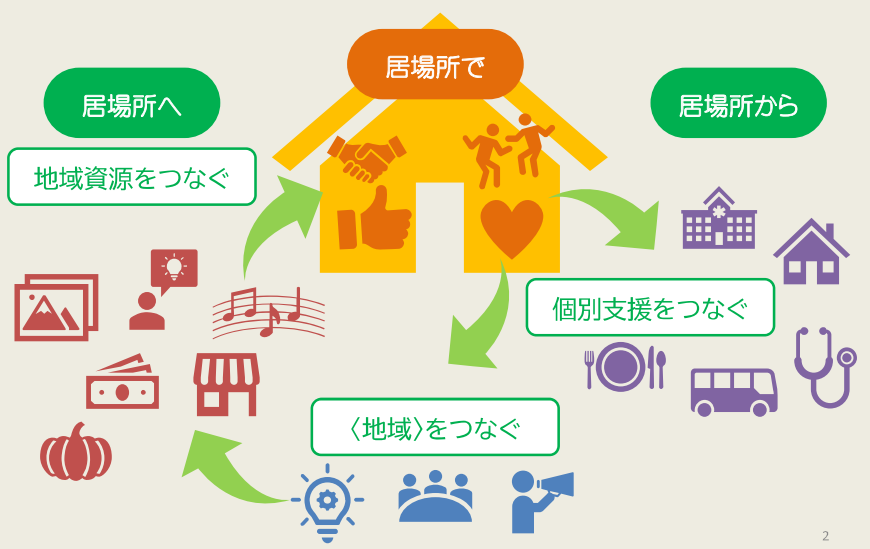
生活支援コーディネーターによる
地域の居場所づくり・つながりづくり研修
～アセットの発見で居場所の「やりたい！」をかなえる

居場所を育てるための支援とは

2022年1月21日(金)
清水　洋行
(千葉大学 人文科学研究院)

1

居場所の機能とSCの役割



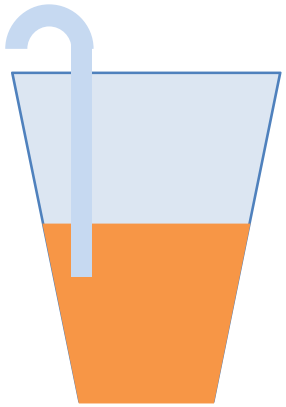
2

ニーズ重視とアセット重視(1)

	ニーズ重視	アセット重視
着眼点	ないもの	あるもの
対応の仕方	不足を補う	強みを伸ばす
住民との関係	住民に向けて	住民とともに
住民参加の度合い	低い	高い
時間幅	短い	長い
主な対象	個人	コミュニティ
評価の重点	客観性	主観性
基本的な問い	「なぜ病気になるのか?」	「なぜ健康になるのか?」

(資料)一般社団法人 全国食支援活動協力会編集・発行『住民のやる気を支える支援の手引き』(2019年)p.49

ニーズ重視とアセット重視(2)



「ないもの」に着目

- 病気
- 困りごと

住民へ
サービス・支援
を提供する

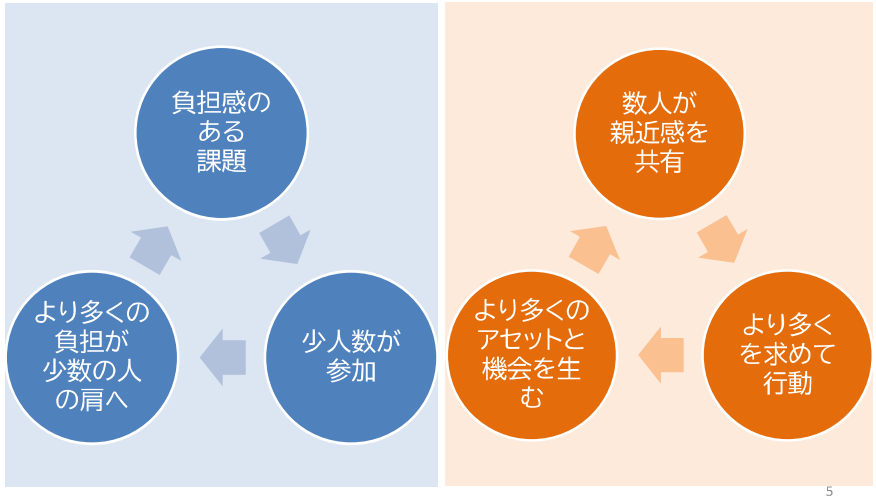
「あるもの」に着目

- 「やりたい」、「ほっとけない」
- 得意(趣味、仕事から)
- 仲間、人脈
- 建物、畑、車…
- お金

住民とともに
サービス・支援
(活動)を創る

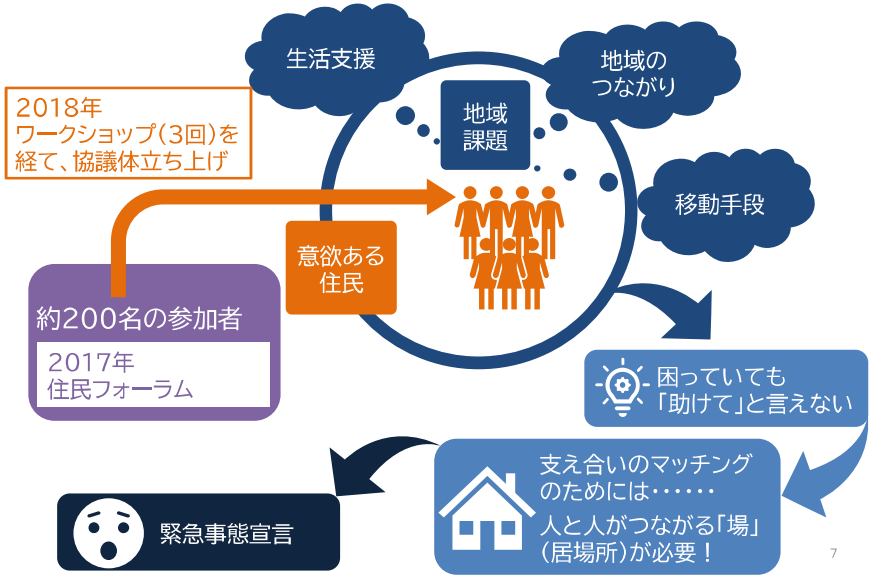
4

担い手をめぐる〈ネガティブ・サイクル〉と〈ポジティブ・サイクル〉



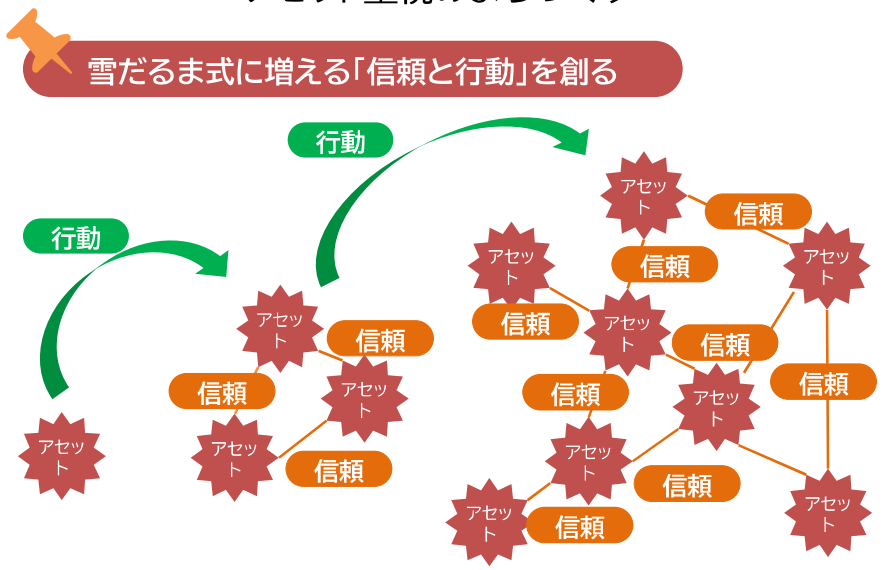
5

畑活プロジェクト(奈良県葛城市)を事例に(1)

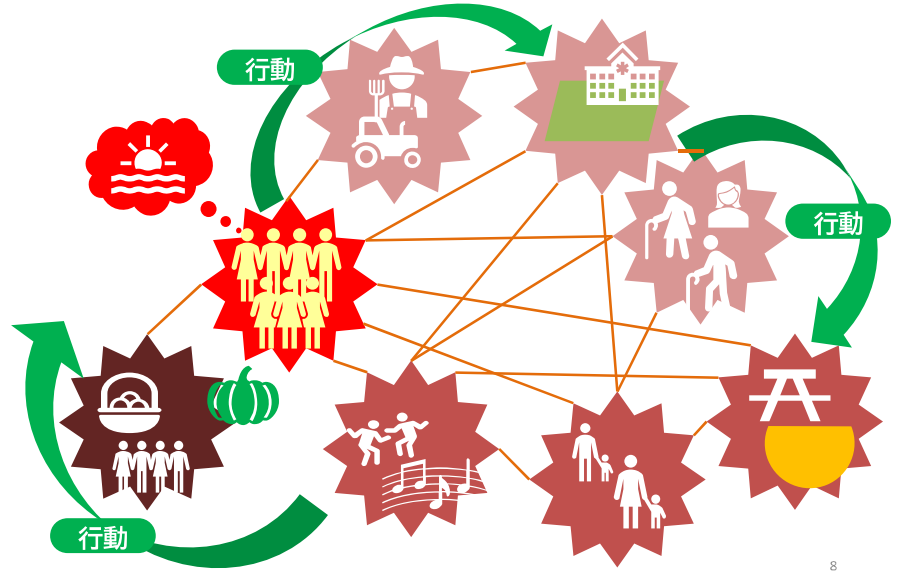


7

アセット重視のまちづくり



畑活プロジェクト(奈良県葛城市)を事例に(2)



8

畑活プロジェクトにみるアセット(1)

- 最初のメンバーのアセット
  - 意欲
  - 住民であること(地域の生活を知っている。地域のつながりがある)
  - 得意
  - 他の活動に参加
  - メンバー同士のつながりと親近感
- ディサービスセンター
  - 畑
  - 利用者さんたち(＋潜在していたスキル・経験)
  - 職員さんたち
- 民生委員・児童委員のAさん
  - 畑のご近所さん
  - トラクター(＋操作スキル)

畑活プロジェクトにみるアセット(2)

- 神社
  - 広場(空間)
  - まちのシンボル(歴史・記憶)
- 子育て中の親子
- 朝にラジオ体操をしている子どもたち
- 市
  - 広報紙ほか
- ローカルテレビ
- 配食グループ
  - ボランティアさんたち
  - 利用者さんたち

畑活プロジェクトにみるアセット(3)

- 生活支援コーディネーターのBさん
  - 社会福祉協議会の活動等を通じた地域でのつながり
  - 市とのつながり
  - スキル・経験
- 第一層協議体
  - 区長会、民生委員・児童委員連合会、寿連合会、ボランティア連絡会、県農協、社会福祉協議会、市保健福祉部、市長寿福祉課
  - 地域包括支援センター
  - C地区協議体のメンバーたち

公的機関の役割

①	健康の向上に資するコミュニティのアセットを明らかにし、わかりやすく示す。
②	住民を、サービスの受け手ではなく、健康・福祉の共同生産者とみなす。
③	住民が何に取り組んでおり、何を大切にしているかを知ることから始める。住民「に向けて」ではなく、住民「とともに」活動する。
④	個人およびコミュニティのアセットと強みを明らかにし、それらに重点を置きながら、人生における持続可能な改善を行うようサポートする。
⑤	困難から立ち直る力、関係性、知識、誇りを向上することにより、住民がより良い方向への変化を起こせるようにサポートする。
⑥	相互にサポートしあうネットワークづくり、友人関係づくりをサポートする。こうしたネットワークがあることで、住民は自らの環境をよりよく理解し、自分の生活をコントロールできるようになる。
⑦	その地域でうまくいっていることの価値を認める。
⑧	健康・福祉の向上に役立っている潜在的な要因を明らかにする。
⑨	コミュニティに権限を委譲し、コミュニティが、自らの将来を自分たちで決め、サービス、資金、建物といった具体的な資源を創出できるようにする。

(資料)一般社団法人 全国食支援活動協力会編集・発行『住民のやる気を支える支援の手引き』(2019年)p.50

参考

- 一般社団法人 全国食支援活動協力会編集・発行『住民のやる気を支える支援の手引き』(2019年)
- 一般社団法人 全国食支援活動協力会編集・発行『ここがあることで地域が豊かになる住民主体の居場所ガイドブック』(2021年)
- Kretzmann, John P. and McKnight, John. Building Communities from the Inside Out: A Path toward Finding and Mobilizing a Community's Asset.(1993)
- Snow, Luther K. The Power of Asset Mapping: How your Congregation Can Act on Its Gifts. (2004)

事例報告①
愛知県知多市岡田地区

古民家を活かした憩いの場

「岡田なごやかサロン」代表
勝﨑 芳雄 氏
特定非営利活動法人あゆみ　知多中学校区第2層SC
市川 美千代 氏

活用できそうだと思ったアセット

1
- 古民家所有 伊井さん

2
- 勝﨑さん
- 街並保存会、岡田の歴史
- 岡田ゆめみたい

3
- グラウンドゴルフ仲間（長生会）

4
- 知多市の助成

3

当初やりたかったこと

1 市川さん
岡田の古民家を見て、こんな素敵な場所に居場所があったらいいなと思った。

2 勝﨑さん
歴史ある岡田の街並保存と共に活性化もできたらいいなと思った。

→

2

知多市 生活支援体制整備事業

愛知県知多市

・人口：約8万人
・高齢化率：27.8%
・介護認定率：15%

特定非営利活動法人あゆみ

誰もが住み慣れた地域で安心して暮らせるまちづくりを目指し「困ったときはお互い様」を合言葉に平成10年8月住民主体として発足。

2層コーディネーター 市川美千代

50歳で福祉関係の資格を取得し、福祉の道へ。
「大人の学校」で地域活動について学ぶ。

※大人の学校・・・団塊世代が長年培ってきた知識や技術、経験をまちづくりに活かしてもらおうと知多市が開校。

＜第1層生活支援コーディネーター＞
知多市
＜第2層生活支援コーディネーター＞
NPOが3地区、社協が2地区を担当
H29年より岡田エリアを（特非）あゆみが受託

4

岡田 古民家との出会い

岡田の街なみを見学中、素敵な古民家を発見！
幼いころの昔の暮らしが懐かしく思い出されるような住宅
「こんな場所で常設のサロンができたらいいな・・・」

☑ しばらくして古民家を買い取った方と活用方法について考え、
サロン開所に向けて話し合いを重ねる

5

サロンへのサポート

☑ サロンスタッフへの研修
- 補助金交付申請についての研修
- 居場所・サロン入門編の研修
- 社会の変化と制度の理解／知多市の現状とこれから　など

☑ 補助金申請
- 知多市介護予防･日常生活支援推進事業の補助金申請

初年度　金額：100万
使途：畳の取替、エアコンの設置、カーテン、照明器具、天井・床の修繕 等

2年目～　金額：約35万
使途：運営費（2/3）、家賃

⇨ **持続可能なしくみをつくるためのサポート**

6

”住民主体”の居場所

サロンスタッフの運営会議に2層ＳＣとして参加

サロンの状況、収支報告、気になる利用者の様子について話し合う。
相談があればともに考えるが、物事を決めて進めるのはスタッフの方々。

スタッフご自身の社会参加、生きがいづくり、介護予防などの楽しみを尊重しながら、”住民主体”の活動となるよう支援

⇨ **地域住民自身もアセット**
スタッフと利用者の垣根がないサロンに育っている！

7

岡田なごやかサロン

知多市介護予防・日常生活支援事業として**平成２９年**に開設。
“古い街並みの中の古民家”で、高齢者の憩いのサロンとして、
おしゃべりや、体操・趣味の発表など自由に過ごしている。

開場日：月・火・水・金の９時～１２時
利用料：１００円（お茶、コーヒー、お菓子付き）

8

岡田の街並み

なまこ壁の蔵（大正９年）　　奥は現役の郵便局（明治３５年）

昭和のメグロオートバイ　　木綿蔵（昭和元年）　　昭和のマツダT360

岡田なごやかサロン

思い出話ができる
昭和レトロの部屋

13

近くの人が持ち込んでくた
珍しいパン焼き機

昔のなつかしいラジオの登場、
何年もの？

15

回想法体験　令和1年10月

“回想法”で盛り上がるサロン

14

おじいちゃん・おばあちゃんとあそぼう会　令和1年10月

おじいちゃん
と遊ぶ

共催：NPO法人子育て支援を考える会TOKOTOKO　後援：岡田コミュニティ

16

おばあちゃんと遊ぶ！

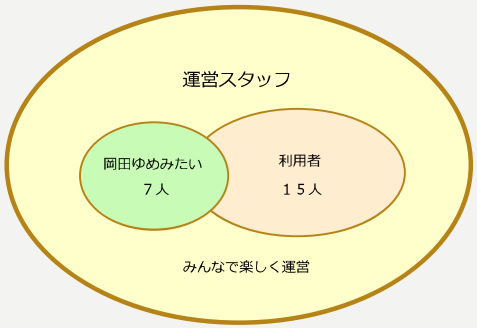
お母さんは
後ろで見守る

17

終

19

岡田なごやかサロンの運営



18

さいごに

生活支援コーディネーターとして意識していること

- ☑ ヒト・モノ・コト（アセット）をみつけたらすぐにアタックする！
- ☑ 地域のキーマンを大切にし、時間をかけて関係づくりをする！

勝﨑さんとの繋がりから新たな居場所へ

岡田のある夫妻が酒屋を閉めることに、、。
勝﨑さんからの紹介で、2層SCとして新たな居場所「やまもりいこいの家」の立上げ支援へ。

2層協議体の立上げへ

地域の話し合いの場「まぜこぜ岡田ミーティング」の立上げ、推進支援。

20

人と人をつなぐ

人と地域をつなぐ

架け橋になる居場所づくり

NPO法人　ゆずり葉
代表　齊藤　敦子
板橋区社会福祉協議会
第1層生活支援コーディネーター　小林　霧華

当初やりたかったこと

①高齢者の居場所づくり

②食支援

③つなぐきっかけ

大きなガラス張りの窓がある建物がゆずり葉の拠点。
昼間はNPO活動の場、夜は地域の居酒屋になります。

活用できそうだと思ったアセット

①居酒屋

②社会福祉協議会（福祉の森サロン、ボランティアセンター等）

③行政（通所型サービスB補助金）

④場に集う人

「ゆずり葉」とは

ユズリハ(譲葉)
ユズリハ科ユズリハ属の常緑高木。古名はユズルハ。
和名は、春に枝先に若葉が出たあと、前年の葉がそれに譲るように落葉することに由来する。
Wikipediaより

宝物を
次世代へつなぐ

4

つなぐ場であるというプライド

居酒屋＝人が人を求める場所

わたしは元気だ！
地域包括支援センターの
支援なんか受けない！

ゆずり葉の仲間が
ついていてくれるなら
話を聞いてもいい
みんないるから怖くない…！

あるとき
いつの間にか

まぁまぁ落ち着いて
話だけでも聞いてみたら？

ゆずり葉に乗う人

5

「ありがとう」の栄養

【背景】
◆企業のCSR
◆テレワークの増加
◆定年退職者の生きがい

ありがとう

どういたしまして

【できること】
◆小さなお手伝い
◆合間時間・所有物の活用
◆おもてなし

助けてほしい人

助けたい人

6

高島平地域の第2層協議体

板橋区版生活支援体制整備事業

第1層SC
社協受託

連携・支援

第2層SC

働きかけ

構成員の互選

多様な主体
地縁組織
民生・児童委員
NPO
サロン
福祉団体など
＋
誰でも参加OK

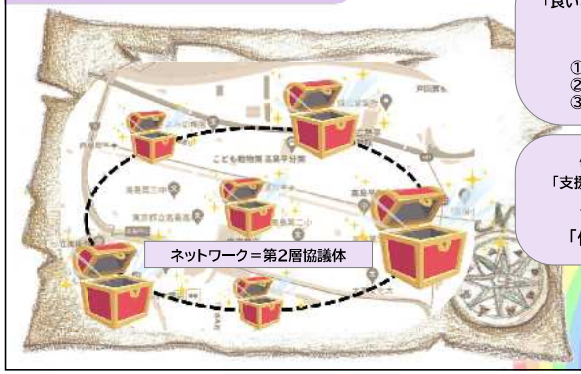
各団体から
参加者を選出

第2層
協議体

町会・自治会
老人クラブ
民生・児童委員
地域包括支援センター
福祉の森サロン
NPO法人
UR都市機構
介護事業所
地域住民

7

生活支援コーディネーターの視点



既存のアセット
「良いところ」×「良いところ」
＝
「居場所の拡大」
①気軽に参加しやすい
②継続して通いやすい
③強みを発揮しやすい

個人が有するアセット
「支援ニーズ」と「活動ニーズ」
↓↓マッチング↓↓
「住民主体の活動」

8

居場所の「やりたい！」をかなえよう

STEP①

Q1-1　あなたのまちにどんな居場所が欲しいですか？
「こんな居場所があったらいいな」を書き出しましょう

◇住民の立場から

高齢者の活躍の場をつくりたい。

◇SCの立場から

学習支援ができたらいいな。

左記の内容の中から、このワークで考えたい＜次にやってみたいこと＞＜課題に感じていること＞を話し合って記載してください。

子供が宿題・昔遊びのできる居場所をつくって多世代交流！！

1

居場所の「やりたい！」をかなえよう

STEP②

Q2　居場所の実現に向けて、アセットを使ったアイデアを出し合いましょう

・大学生に学習支援ボランティアを依頼
・駄菓子販売のコーナーを食堂に作る
・チラシを回覧で呼び掛ける
・庭でベイゴマ大会
・老人会経由で宣伝
・お手玉づくりワークショップを開く
・見守りの各戸訪問の時に、昔遊びの道具がないか聞いてまわる

3

居場所の「やりたい！」をかなえよう

STEP①

Q1-2　居場所実現のために、活用できそうなアセットを書き出しましょう

人

・昔遊びをしっている高齢者
・いつも食堂に来てくれる大学生

モノ・資金

・各家で眠っている遊具

場

公民館の２階和室

・町会の回覧板

情報・ネットワーク

2

居場所の「やりたい！」をかなえよう

STEP③

Q3　出たアイデアを参考に、実現のために今後取り組むことを考えましょう

・コーディネーター：昔遊びイベントのチラシを作成
　住民Aさん：町会、老人会、PTAにチラシの配布依頼

・住民Aさん：いつも食堂に来る教育学部の学生B君のゼミに、学習支援ボランティアの依頼の呼びかけをお願いする。

・コーディネーター：民生委員Cさんに、昔遊び道具のある家が無いか、訪問時に聞いてもらうよう依頼する。

4

生活支援コーディネーターによる地域の居場所づくり・つながりづくり研修
～アセット発見で居場所の「やりたい!」をかなえるワークショップ～

＜日時＞ 2022 年 1 月 26 日(水)　13：00～17：00
＜参加方法＞
①第 1 部　講義/事例紹介　13:00～
https://us02web.zoom.us/j/81437401803?pwd=a2ZvcFM1Y0VrOXFnUVVBa2pGaW51UT09
ウェビナーID:814 3740 1803
パスコード:327393

②第 2 部　ワークショップ　14:30～　※途中で URL を変更します。
https://us02web.zoom.us/j/87534298552?pwd=OVk1YTRhaDZLSEdCa0RqVjFKa3d4UT09
ミーティング ID: 875 3429 8552
パスコード: 579561

研修内容

【第 1 部】13：00～　14：30

●この研修のねらい：　内藤佳津雄 氏　（日本大学文理学部教授）

●講　義:「居場所を支える地域のアセット」　祐成保志 氏　（東京大学大学院人文社会系研究科准教授）

●事例報告：「今あるアセットを活かした居場所の取組み」
＜事例　1＞
東京都稲城市向陽台
地域包括支援センターこうようだい向陽台地域第 2 層 SC　谷地中恵子さん
「支え合いネットワーク向陽台」　江口浩子さん
＜事例 2＞
大阪府泉南郡岬町
岬町社会福祉協議会　岬町第 1 層 SC　中家裕美さん
「喫茶わくわく」　吉田文代さん

●解説：「事例報告からの学び」目﨑智恵子 氏　（高崎市第 1 層 SC（主管課：高崎市長寿社会課））

【第 2 部】14：40～17：00

●ワークショップ：「居場所の『やりたい　！』をかなえる」
ファシリテーター　　内藤佳津雄 氏

生活支援コーディネーターによる
地域の居場所づくり・つながりづくり研修

『研修のねらい』

一般社団法人 全国食支援活動協力会

生活支援コーディネーターによる地域の居場所づくり・つながりづくり研修

事例報告

✔先進的な事例から居場所の立上げや展開のノウハウを学ぶ

住民主体の居場所を持続可能なものにするためのSCの活動に注目

ワークショップ

✔ 地域で連携して居場所づくりを進めていくチームをつくる
✔アセット※を活かした、居場所の開発・継続支援を立案する
✔事例からコロナウイルス影響下の居場所活動を学ぶ

※この研修におけるアセット重視の考え方とは、地域の「あるもの」（強み、できること）に目を向け、住民自身の強みや、既にある様々な地域資源を活かしてサービスの展開を図る考え方です。
→このあと、清水先生より講義いただきます。

他地域の参加者から柔軟な発想や多様なアイデアをもらいましょう

「生活支援体制整備事業の推進に向けた人材育成に関する調査研究事業」事業概要

○新型コロナウイルスの影響で住民主体の活動が自粛される等、高齢者の心身機能の低下が懸念されているため、住民主体の活動の継続、再開に向けた取組・支援が必要。
また、住民主体の活動においては、「アセット重視」※の考え方の下、既存の様々な社会資源に目を向け、これらをつなげて生活支援の充実を図る等、地域生活を豊かにするという考え方も必要。
※アセット重視・・・「あるもの」（強み、できること）に目を向け、住民自身がもつ強みや、既にある様々な地域資源を活かしてサービスの展開を図る考え方。

○住民主体の活動を推進するためには、何れも市町村とともに重要な役割を担う生活支援コーディネーター（以下、「SC」と言う）による地域に対する支援力の向上を図ることが重要。

○このため、本調査研究事業においては、地域住民の支え合い活動のきっかけとなる「食」を中心として、
・新型コロナウイルス影響下で、様々な工夫をしながら住民主体の居場所活動を実践している事例
・既存の地域資源を有効に活用、つなぐことで、地域に必要とされる居場所に発展している事例
等を収集・分析することにより、SCの新たな気付き、発想の転換等、地域に対する支援力の向上に資する「地域の居場所サポートハンドブック（仮称）」を作成する。

○併せて、SC等を対象とした研修事業を実施し、本ハンドブックの評価・検証等を図ることとする。

2022/1/26

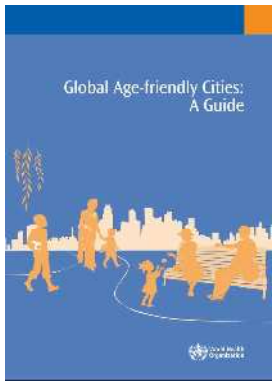
居場所を支える地域のアセット

作成：祐成保志（東京大学）

本資料のうち、出典が記されていない箇所は、全国食支援活動協力会編「住民のやる気を支える支援の手引き　第3章」（2019年）から抜粋・加筆したものです

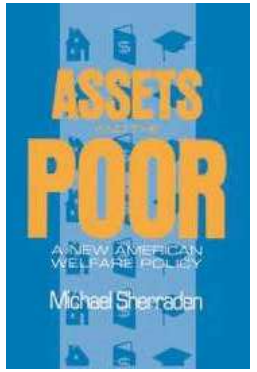
はじめに

- **「コミュニティのなかに“place”があること」**
  - WHO『Global Age-friendly Cities: A Guide』（2007年）。
  - 「年齢が障壁にならないまち」（エイジフレンドリーシティ）を実現するための基本的な条件。
  - 「place」は、たんなる物理的・地理的な場所ではありません。
  - 精神的な安心感や人とのつながりまでを含む「居場所」を指しています。



はじめに

- **福祉政策におけるアセット重視**
  - アメリカの社会福祉学者マイケル・シャラーデンの『Assets and the Poor』（1991年）。
  - 「インカム」（所得：給付金や手当など）に偏った福祉政策を批判し、「アセット」（資産）の意義を強調しました。
  - 資産形成の支援は、持ち家取得の優遇など、中間層にたいして進められてきたものです。これを低所得層にまで拡大しようとしました。

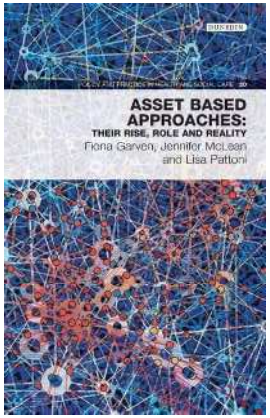


はじめに

- **福祉政策におけるアセット重視**
  - ➢「所得や消費への支援は、いわばその時々の生活を支えるものであって、長期的な視点をもっているわけではない。これに対して貯蓄などの資産は長期の人生設計にかかわり、貧困者が長期の見通しをもって行動したり、その中でライフチャンスをつかみ取ることを可能にし、またそのような態度を培うことができる」（岩田正美『社会的排除』有斐閣、2008年、178-179頁）。
  - – インカム（所得）は、消費のための手段。アセット（資産）は、それを元に価値を生み出すことができます。
  - – アセット重視は、こうした価値創出の機会が、万人に保障されるべきであるという考え方です。

はじめに

- **健康づくりにおけるアセット重視**
  - 「個人、家族、コミュニティが自由に使える集合的な資源であり、健康に対するマイナスの影響から人々を保護し、健康・福祉を向上させ、生きる上での選択肢を拡大させるもの」(Garven, McLean & Pattoni Asset Based Approaches, 2016: 29)。
  - 「アセット重視」の考え方は、「ニーズ(必要)」重視にたいする反省から生まれてきました。
  - ただし、両者は対立するものというより、互いに補い合うものです。



ニーズ重視の考え方

- ニーズ重視の考え方の特徴から見てみましょう。

- ニーズ(必要)とは、「ないもの」のことです。
- 正常な状態から何が失われたのかを特定するところから、支援がはじまります。その際には、急を要し、重大なニーズが優先されます。
- 欠如を抱えた人に的を絞って、医療をはじめとする専門的なサービスが集中的に投入されます。

- 必要の有無や緊急度について判断を行うのは専門家であり、利用者は受動的な消費者の立場に置かれることになります。
- ニーズ重視の考え方は、専門家主導といえるでしょう。

ニーズ重視の考え方

- ニーズ重視の考え方が想定する住民像は、専門職が提供するサービスの受け手です。
- このため、住民参加の度合いは低くなります。住民が参加するとしても、専門職が主導する場面が多くなります。

- また、取り組みの時間幅は、ニーズがみたされるまでの期間に限定されます。

- 「なぜ病気になるのか？」、そして「いかにして素早く治療するか？」が、ニーズ重視の考え方の基本的な問いであると言えるでしょう。

アセット重視の考え方

- アセット重視の考え方は、「あるもの」に着目します。その前提には、人が、健康・福祉を維持・向上するための力を有しているという見方があります。

- アセットは、物やお金に限定されません。
- 心理的な資源(誇り、熱意、自信、有意味感、目的、楽観性、首尾一貫感覚など)や、身体化された資源(知識、経験、技能など)、そして人間関係も重要な資源です。

- これらのアセットは集合的なものでもあります。
- そして、コミュニティを支える公的・民間・サードセクターの組織、コミュニティ内部のネットワーク、そしてコミュニティの有形・無形のアセットが含まれます。

アセット重視の考え方

- 想定される住民像は、サービスの受け手というより、共同で問題の解決をはかる仲間です。
- 住民参加の度合いは高く、専門職が関わりつつ、住民が主導する場面が多くなります。
- 「なぜ健康になるのか？」、そして「いかにして長く健康を保つか？」こそが、アセット重視の考え方の基本的な問いです。

アセット重視の考え方

- 想定される住民像は、サービスの受け手というより、共同で問題の解決をはかる仲間です。
- 住民参加の度合いは高く、専門職が関わりつつ、住民が主導する場面が多くなります。
- 「なぜ健康になるのか？」、そして「いかにして長く健康を保つか？」こそが、アセット重視の考え方の基本的な問いです。

ニーズ重視とアセット重視の相互補完

	ニーズ重視	アセット重視
着眼点	ないもの	あるもの
対応の仕方	不足を補う	強みを伸ばす
住民との関係	住民に向けて	住民とともに
住民参加の度合い	低い	高い
時間幅	短い	長い
主な対象	個人	コミュニティ
評価の重点	客観性	主観性
基本的な問い	「なぜ病気になるのか？」	「なぜ健康になるのか？」

公的機関の役割

- アセット重視の考え方にもとづく公的機関の役割について、これまでの研究では以下の点が指摘されています。

① 健康の向上に資するコミュニティのアセットを明らかにし、わかりやすく示す。
② 住民を、サービスの受け手ではなく、健康・福祉の共同生産者とみなす。
③ 住民が何に取り組んでおり、何を大切にしているかを知ることから始める。住民「に向けて」ではなく、住民「とともに」活動する。
④ 個人およびコミュニティのアセットと強みを明らかにし、それらに重点を置きながら、人生における持続可能な改善を行うようサポートする。
⑤ 困難から立ち直る力、関係性、知識、誇りを向上することにより、住民がより良い方向への変化を起こせるようにサポートする。

公的機関の役割

- アセット重視の考え方にもとづく公的機関の役割について、これまでの研究では以下の点が指摘されています（続き）。

⑥ 相互にサポートしあうネットワークづくり、友人関係づくりをサポートする。こうしたネットワークがあることで、住民は自らの環境をよりよく理解し、自分の生活をコントロールできるようになる。
⑦ その地域でうまくいっていることの価値を認める。
⑧ 健康・福祉の向上に役立っている潜在的な要因を明らかにする。
⑨ コミュニティに権限を委譲し、コミュニティが、自らの将来を自分たちで決め、サービス、資金、建物といった具体的な資源を創出できるようにする。

期待される効果

住民	地域	施策・しくみ
● 健康につながる行動 ● 困難を乗り越える力の向上 ● 生活習慣の改善 ● 目標の自覚 ● 自信と自己効力感の向上 ● 周囲からサポートが得やすくなる ● 孤立の緩和	● ネットワークの強化 ● 親近感と帰属感の向上 ● 相互の信頼感の高まり ● まとまりの強化 ● 世代間の連帯 ● 多様な価値観の共存 ● 物的環境の改善 ● 施設と資源の充実 ● 集団同士、集団と機関の相互協力 ● （政策決定への）発言力の増大	● 健康につながる知識の普及 ● より適切な政策の形成 ● 営利を目的としないサービスのための機会の拡大 ● サービスの利用しやすさの向上と適正な利用 ● 環境資源・物的資源の利用しやすさの向上 ● 雇用の安定と機会の拡大 ● 安全で快適な住宅の確保 ● サービスの到達範囲の拡大 ● サービスの共同的な生産 ● 民主主義的な意思決定 ● 社会的公正の実現

ニーズ重視とアセット重視の背景

- ニーズ重視とアセット重視では、サービスに対する評価の仕方が異なります。背景には、知識についてのとらえ方の違いがあります（Garven, McLean and Pattoni 2016: 68）。

知識移転モデル	翻訳モデル
客観的な評価を重視	主観性を組み込んだ評価を重視
知識を、パッケージ化できるものであり、ある場所から別の場所へ動かすことができるものととらえる	知識を、多様な関係者の間でのアイデアの交換を通じて、そのつど新たに構築されるものととらえる
一つの答えが存在しており、誰もがそれを知ることができることに価値を置く	一つの答えはなく、新たな知識の構築を可能にする相互的な対話のプロセスに価値を置く

まとめ

- アセット重視のアプローチは、住民自身がすでに有益な活動を行っていることを認識し、住民が重視している価値や、住民が生きている物語を共感的に理解しようとします。

- 政治学者の宮本太郎は、コモンズについて次のように定義しています。
  - 「誰のものでもなく、オープンで、多くの人がその存続に関わるが、その分、誰かが占有してしまう場合もあるようなアセット」（宮本太郎『貧困・介護・育児の政治―ベーシックアセットの福祉国家へ』朝日新聞出版、2021年、23頁）

- 住民主体の居場所づくりとは、このようなコモンズとしてのアセットを守り育てるための活動といえるでしょう。

事例報告①
東京都稲城市向陽台

支えあうまちづくりをめざして
～つなげよう向陽台の町の声～

支え合いネットワーク向陽台 事務長
江口 浩子 氏
地域包括支援センターこうようだい向陽台地域第2層SC
谷地中 恵子 氏

活用できそうだと思ったアセット

1
- ・城山文化センター
- ・「喫茶ひだまり」

2
- ・江口さんの薬局
- ・向陽台NPO団体
- ・退職した住民
- ・自治会、地区連合会
- ・児童・民生委員
- ・みどりクラブ(向寿会)

3
- ・助成金
(稲城市、
さわやか福祉財団)
- ・社会福祉協議会

4
- ・市のパソコンクラブ
- ・近くの携帯会社

3

当初やりたかったこと

ニュータウンでの高齢化
↓
住民同士の支え合いの仕組みをつくりたい
↓
<u>まずは住民同士が顔見知りになるような機会をつくりたい！</u>

→

2

東京都稲城市向陽台

多摩ニュータウン稲城エリアの中でも最初に街びらきした地域

向陽台地区
・人口　　：3,661世帯　8,883人
・高齢化率　：28.8%
→2040年には稲城市内最高の50.6%が推計されている

東京都稲城市　生活支援体制整備事業

＜第1層生活支援コーディネーター＞
H27年度設置　稲城市　1名

＜第2層生活支援コーディネーター＞
H28年度設置　地域包括支援センター　4エリア4名が担当

＜第2層協議体＝支え合いネットワーク向陽台＞
・ＳＣ、市担当
・民生委員、社協地区担当
・ＮＰＯ、自主グループ関係者
・社会福祉協議会
・向寿会（みどりクラブ）
・市民活動サポートセンターいなぎ

ＳＣは書記、住民が進行をすることで住民中心の話し合いに。

「支えあうまちづくりをめざして」

～つなげよう　向陽台の町の声～

支えあいネットワーク向陽台

2022.1.26

組織図

支えあいネットワーク向陽台

すまいる向陽台
（集いの場）

すまいるネット
（支えあいの仕組み）

支えあいネットワーク向陽台

【規約】

第3条　目的

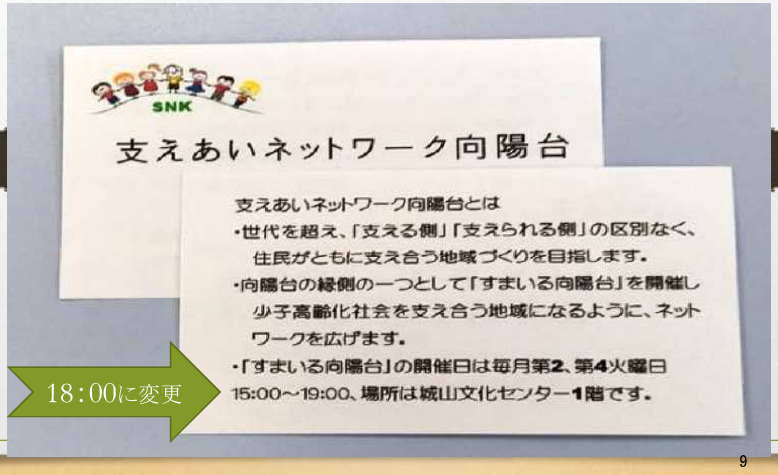
・世代を超え、「支える側」「支えられる側」の区別なく、住民がともに支え合う地域づくりをめざす

第4条　活動

1)向陽台の縁側のひとつとして「すまいる向陽台」を開催し、少子高齢化社会を支え合える地域になるように、ネットワークを広げる

2) 市民が出来ることと、行政の福祉として必要なことを区別して考え、行政と協働し、支え合いのまちづくりをする。

名刺を使って広報活動
『すまいる向陽台』



9

11

研修会参加
～他団体との交流も～

- ■よろず情報交換会
- ■民間きずな国民会議
- ■対話によるまちづくり
- ■NPO講座「メンバーの思いを組織に反映させるためには」
- ■NPO講座「自分たちの組織を育むために」
- ■東京ホームタウン大学
- ■他地域探訪（府中市・世田谷区）

10

お隣　府中市是政地区へ

12

イベントの企画
食べることで繋がり、広く･深く！

- オープニングパーティー
- 餃子を作って食べよう
- そうめんを作って食べよう
- カラオケ大会
- 稲城の映画を観る会
- 年忘れ大鍋大会
- 新年カラオケ大会
- 映画『いなぎ歳時記　2017』

13

年忘れ大鍋大会
･･･牛肉たっぷり

14

第2回　映画イベント
『いなぎ歳時記　2017』

15

第一回　一周年記念パーティ
実行委員会開催

16

新しいお仲間も出来て・・・・
笑顔がこぼれる

17

19

すまいる向陽台
自由参加の集いの三景

18

20

地域のイベント　グランドゴルフに参加
さて成績は団体6位

21

みんなの思いをこめて

一つ一つが形となり

仲間が手を取りあって

22

名刺のロゴと同じ
これで構図は決まり

23

長い歳月をかけ
ついに完成

地域のフォーラムでお披露目

24

令和1年9月

向陽台地区に

すまいるネット誕生

住民全戸アンケート実施

25

助け合い活動スタート

◆会員構成：　活動会員・利用会員・賛助会員

◆ちょっとした困りごとの相談から活動会員が訪問しサポートする

◆15分単位で利用できる　250円/15分

26

27

コロナ禍で活動を続けるとは

◆完璧にやろうと思わず出来る事から始める

◆出来ないから辞めるのではなく出来る範囲で続ける

➡ZOOMの活用

28

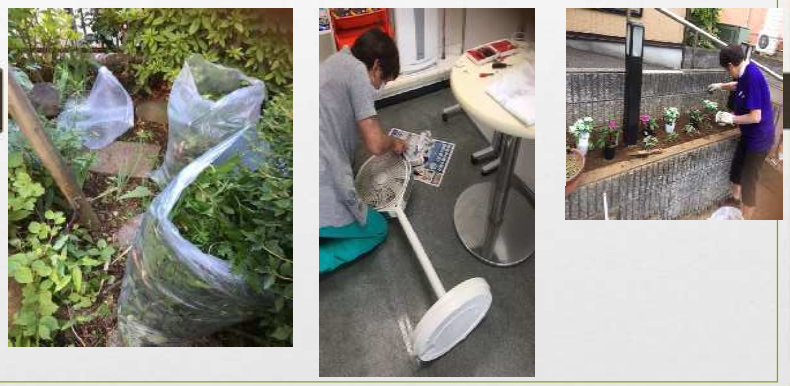
すまいる通信発行・町中に掲示

29

ご清聴ありがとうございました

31

少しづつ利用は増えて 床掃除の定期利用も



30

支え合いネットワーク向陽台へのサポート

＜事務的なサポート（包括支援センターとして）＞
・喫茶「すまいる向陽台」の名簿管理
・支え合いのしくみ「すまいるネット」の受付窓口
・「すまいる通信」の作成、発行

＜企業を巻き込む＞
・コロナ状況下で協議体のオンライン開催を実施したい
→近くのソフトバンク店舗へＺｏｏｍ講座の講師を依頼
★企業にとっても高齢者との関りは大きなメリットに

“人がまちをつくる”
実際に住民の方々に会って
対面で意見を聞く中で
キッカケとなる瞬間を
つかむことがポイント

＜居場所からつなぐ/居場所へつなぐ＞
・居場所に参加する方が認知症かもしれない、、
→包括支援センター、みどりクラブ、NPOへつなげる
・地域貢献がしたいと訪ねてきた学校の用務員さんにスマイルネットを紹介

＜情報の収集/共有＞
・社協の運営するボランティアセンターで新しく立ち上がったサロンや空いている場所等の情報を収集

生活支援コーディネーターとして意識していること

『住民主体』だけを前面に出し、住民への押し付けにならないように
ＳＣと住民が一緒に考え仕組みを作ることが大切。

住民の想いは十人十色。
様々な思いで生活している地域の『人と人をつなげていく』ためには
ＳＣの調整力、地域の横のつながりが何よりも必要。
地域の情報収集だけでなく、
住民や関係機関との“雑談”の中に新たなアセット発見のヒントがある！

事例報告②
大阪府泉南郡岬町

淡輪６区
喫茶わくわく

わくわく会「喫茶わくわく」
吉田 文代 氏
社会福祉法人岬町社会福祉協議会 生活支援コーディネーター
中家 裕美 氏

活用できそうだと思ったアセット

1 接骨院前の広場

2 道の駅

3 赤提灯
どないしたらええん会

4 岬町の助成

制定：令和３年５月２５日

多奈川地区福祉委員会

2

当初やりたかったこと

1 自分が住んでいる淡輪６区がこれからも安心して暮らせる地域であるためにどうにかしたい！

2 コロナ禍でも、「喫茶わくわく」はみんなの居場所だから開け続ける！

3 SCになったのだから、泣いても失敗してもいい、住民さんを笑顔にしたい、生きがいになることや楽しい活動、人と人をつなげたい！

→

※「喫茶わくわく」
相手に寄り添う心遣いがあたたかい居場所になる

・心がけていること

①コロナ対策を徹底的にする。

②担い手も来客者も自己責任で参加。

・当たり前にしていること

スタッフ同士や来客者に対して、やさしい言葉と心遣い。

楽しい場、生きがい。

・力を入れていること

主体的にニーズを把握し、足らない支援を創出。

3

新型コロナウイルス感染防止対策の強化

「居場所」の重要性
行くところ、行けるところがある大切さ！

4

淡輪6区わくわく会　設立

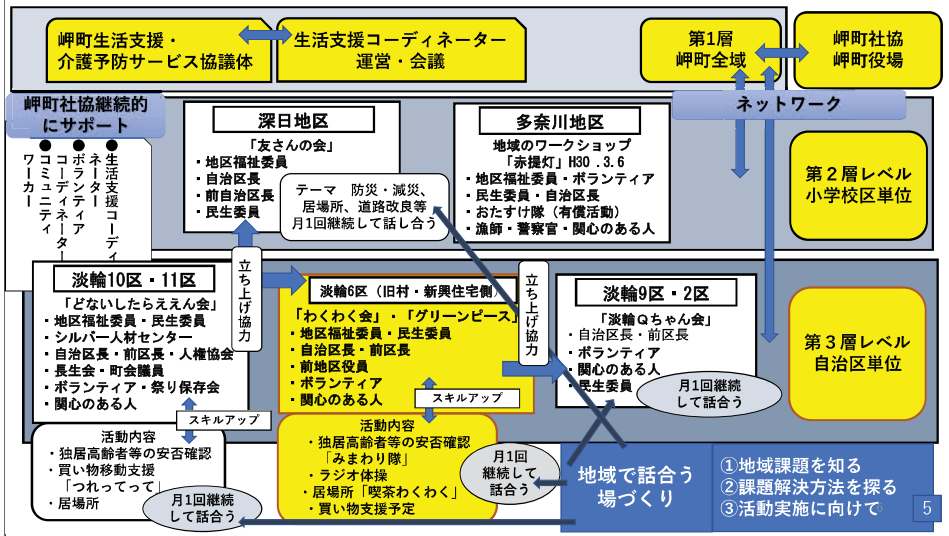
H31.1.15　地域の住民による組織化

●現在会員：14名（令和3年10月現在）会員会費：1,000円／年
●活動目的：地域福祉の向上を図ることを目的とし、高齢者等支援、地域の居場所づくり、その他必要な活動を行う

☆活動内容
① ラジオ体操
② みまわり隊（マップ作成）
※喫茶わくわく（居場所）
③一緒に行こう会（買い物支援）

淡輪６区地域マップ作成

6



5

わくわく会活動内容

①ラジオ体操

- 平成３１年４月開始～令和元年１１月（２９回延べ２９８名）
- 期　間：４月～１１月（冬季１２月～３月休み）
- 開催日：毎週月曜日午前７時３０分～
- 雨天中止

②みまわり隊

- みまわり隊について事前訪問確認（民生委員訪問）
- 第１回みまわり隊訪問（２～３名ペア）令和元年１１月開始～
- みまわり隊１班～５班（各班１０名程度みまわり訪問）１回/月
- みまわり隊訪問から困りごとなどのニーズを収集する

7

わくわく会活動内容

③一緒に行こう会（買い物支援）

◦ みまわり隊（見守り）活動から買い物や外出することに困難を感じる方々のニーズを把握
「道の駅」に新鮮な魚を買いに行きたいとの要望があり⇒わくわく会メンバー見学
⇒ドライバー６名「道の駅みさき　夢灯台」見学へ
⇒６名福祉有償運送講習会参加（R2.11.16）ドライバー育成（福祉有償運送講習修了者）
◦ 買い物支援（有償活動令和３年７月～開始）令和３年１１月現在実利用者数 １０名
◦ 一緒に行こう会のリーダーとわくわく会の会長が個人所有の車両を提供（２台で運行）
◦ 行き先は、新鮮なお魚が購入できる「道の駅みさき　夢灯台」と、
◦ なんでも揃う大型スーパー「トライアル」（淡輪地区望海坂）

道の駅みさき　夢灯台

「道の駅みさき」見学の様子

買い物支援の様子

8

他地区で立ちあがった団体と情報交換の場

10

サービスづくりではなく地域づくり

9

さいごに

- 住民の方が主役になるために、前に出すぎず、引き際を見極める
- 多様な価値観に柔軟に対応し、揺るがない柱をつくる
- わからないことは、素直に住民の方やいろんな方に支えてもらう
- 住民の方が空いている曜日、時間に合わせ出向き、話し合いの場をどんどんもつ（岬町社協本部の理解が、あってこそ動けてます。）
- 恐れず言い訳をしない、いつも謙虚に、体あたり！

ありがとうございました！

居場所の「やりたい！」をかなえよう

STEP①

Q1-1　あなたのまちにどんな居場所が欲しいですか？
「こんな居場所があったらいいな」を書き出しましょう

◇住民の立場から

高齢者の活躍の場をつくりたい。

◇SCの立場から

学習支援ができたらいいな。

左記の内容の中から、このワークで考えたい＜次にやってみたいこと＞＜課題に感じていること＞を話し合って記載してください。

子供が宿題・昔遊びのできる居場所をつくって多世代交流！！

1

居場所の「やりたい！」をかなえよう

STEP②

Q2　居場所の実現に向けて、アセットを使ったアイデアを出し合いましょう

・大学生に学習支援ボランティアを依頼
・駄菓子販売のコーナーを食堂に作る
・チラシを回覧で呼び掛ける
・庭でベイゴマ大会
・老人会経由で宣伝
・お手玉づくりワークショップを開く
・見守りの各戸訪問の時に、昔遊びの道具がないか聞いてまわる

3

居場所の「やりたい！」をかなえよう

STEP①

Q1-2　居場所実現のために、活用できそうなアセットを書き出しましょう

人

・昔遊びをしっている高齢者
・いつも食堂に来てくれる大学生

モノ・資金

・各家で眠っている遊具

場

公民館の２階和室

・町会の回覧板

情報・ネットワーク

2

居場所の「やりたい！」をかなえよう

STEP③

Q3　出たアイデアを参考に、実現のために今後取り組むことを考えましょう

・コーディネーター：昔遊びイベントのチラシを作成
　住民Aさん：町会、老人会、PTAにチラシの配布依頼

・住民Aさん：いつも食堂に来る教育学部の学生B君のゼミに、学習支援ボランティアの依頼の呼びかけをお願いする。

・コーディネーター：民生委員Cさんに、昔遊び道具のある家が無いか、訪問時に聞いてもらうよう依頼する。

4

令和３年度 老人保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業

新型コロナウイルス影響下における 生活支援体制整備事業の推進に向けた
人材育成に関する調査研究事業　　報告書

令和４（２０２２）年３月　発行

内容照会先　　一般社団法人　全国食支援活動協力会
〒158-0098　東京都世田谷区上用賀 6-19-21
TEL　03-5426-2547　　FAX　03-5426-2548
E-mail　infomow@mow.jp
URL　https://www.mow.jp